大分大学

国際教育推進センター
紀　要

第1号



大分大学国際教育推進センター

Global Education and Intercultural Advancement Center
Oita University

目　　次

巻頭言

大分大学国際教育推進センター長 …… 下田　憲雄 …… 2

報　告

I. 留学生受け入れプログラム

・「平成28～30年度 IPOUプログラム実施報告」…… 長池　一美 …… 3

・「2016-2018年度日本語短期交換留学プログラムの実施状況と課題・展望」…. 南里　敬三
坂井美恵子 …… 9

・2015年度後期～2018年度前期の日本語日本文化研修留学生プログラムの …. 南里　敬三
実施状況と今後の課題・展望　坂井美恵子 …… 13

II. 日本語日本文化研修留学生研究論文

・日本人の大学生の就職や将来に対する意識 …… ブルチョー・ブリギッタ・エミーリア …… 17

・広東語の終助詞に関する考察～システミック言語学の視点から～ …… チャン・アキオ・カ・チュン …… 27

・日本の主婦が作る理想的女性像の時代別変化 …… オランコン・チャイチョンプー …… 51

・ヨーロッパにおける最初の日本のイメージ：ポルトガルでの天正遣欧少年使節‥ ファティマ・アルヴェス・ダ・シルヴァ・レイ　80

・稲作文化と日本語の表現 …… オルガ・ウラディミロヴナ・ツァプリーナ ….120

・世界で大人気の『君の名は』は新海誠らしくない作品?…… チョイ・ア・ライ ……129

・大分方言に対する標準語の終助詞「ね」の変化 …… ローラ・キャサリン ……138

III. 海外派遣留学

・平成28～30年度大分大学海外派遣留学プログラムの実施報告 …… 長池　一美 ……170

・2018年度フィリピン短期英語研修プログラムの実施状況と課題・展望 …… 南里　敬三 ……177

IV. 留学生支援

・修学・生活支援関連報告 …… 金森　由美 ……179

・チューターおよび国際交流ボランティア会の活動…… 金森　由美 ……182

研　究

・Internationalizing Teacher Education: Sustainable Curriculum Reform …. ブルカート香織 ……184

・ファッション雑誌が売れない理由：GFL誌はそれをどう克服したか …… 南里　敬三 ……194

・研究ノート：絵情報ドミナント型テクストの分析法 …… 南里　敬三 ……220

・OTFの軌跡 …… 南里　敬三 ……224

・学生自身が組み立てる海外研修プログラム「ミニトビタテ」を企画して…… 坂井美恵子 ……227
－その意義と成果－

資　料

平成30年度国際教育推進センター関連行事

平成30年度大分大学外国人留学生数

国際交流協定校等

交流協定に基づく短期交換留学プログラムによる学生の派遣・受入れ状況（交流人数）

平成30年度国際教育推進センター開講授業科目一覧

国際教育推進センター提供授業統括（2018年度）

国際教育推進センター教員・国際交流課職員名簿

センター紀要巻頭言

国際教育研究推進機構
国際教育推進センター長
下　田　憲　雄

大分大学の国際交流関連の組織は 2018 年 4 月に改組され、大分大学国際教育研究推進機構（Institute for Global Education and Advanced Research〔InGEAR〕）が設立されました。機構には国際教育推進センター(Global Education and Intercultural Advancement Center〔GAIA〕)及び国際医療戦略研究推進センター（Global Oita Medical Advanced Research Center for Health〔 GO-MARCH〕）を設置され、国際的な学術連携支援・人材育成や地域国際化などを担っています。

これまでの国際教育研究推進センターは InGEAR のなかの一つのセンターとして位置づけられ、名称も国際教育推進センターと変更しましたが、これまでどおりの業務を担い、海外大学等との交流、留学生の受け入れ、海外大学への派遣、研究交流などを推進し、本学における国際人材の育成に尽力してまいります。このため、本センターでは、４つの業務、「留学生のための日本語・日本事情教育およびグローバル教育」、「留学生のための特別プログラム」、「学生交流協定校との短期交換留学プログラムによる受け入れと派遣」、「日本人学生のための国際フロンティア教育」を実施しています。さらに交流協定の締結も担い、2018 年度現在では、26 の国・地域、93 の大学と協定が締結され、教育研究の交流が進められています。交換留学生の受け入れプログラムでは、これまでの英語力による受け入れプログラム IPOU と日本語力による受け入れプログラム 二豊プログラムを統合し、Intercultural and Global Oita Based Education(IGLOBE)プログラムとしてスタートしています。日本人学生のための国際フロンティア教育との連携し、日本語または英語で開講される留学生と日本人学性がともに学ぶ「グローバル科目」も設定されており、今後ともその充実に努めてまいります。

海外からの学性の受け入れ、派遣や交流を通じての国際的な人材養成、海外の大学との連携による教育・研究のグローバル化はもとより、本学学生の人材養成に国際的視点がその根幹をなしているという認識のもとに当センターは業務を推進してまいります。

報　　告

I．留学生受け入れプログラム

平成28～30年度英語系短期交換留学プログラムの実施報告

長池一美

要旨

2018 年度､それまで｢二豊プログラム｣(媒介言語が日本語)と｢短期留学プログラム(IPOU)｣（媒介言語は英語）に分かれていた短期交換留学プログラムが IGLOBE という名の下に統合された。しかしながら、二豊と IPOU の区切りは IGLOBE 内でも維持されており、前者は便宜上 IGLOBE(N)、後者は IGLOBE(E)という名称で呼ばれている。本稿で IPOU（平成 28 年度～平成 29 年度）（International Program at Oita University）と平成 30 年度 IGLOBE(E)の実施状況を述べる。特に、学生の受入れ数や出身国、カリキュラムの構成、学生によるプログラム評価などについて考察する。また、現在の英語系短期交換留学プログラムの状況を検討し、より充実したプログラムの提供を目指し、今後の展望と課題を明らかにする。

1. はじめに

短期留学特別プログラム（以下、短プロ）とは、学生交流協定に基づいて協定校からの留学生を短期間（半年、あるいは１年）受入れ、英語による授業を提供するプログラムである。大分大学の短プロは国際教育研究センター（英語名Center for International Education and Research、平成19年度の留学生センターより改組）が中心となりプログラムの運営を行っている。本プログラムは12年4月に学生数を20名程度として開始したが、28年度の受入れ学生数は34名、29年度の受入れ学生数は38名、30年度の受入れ学生数は33名であるが、29年度は27年度の30名と比べると増加となっている。

英語系短期交換留学プログラムの学生の日本語力はゼロ初級から上級までに渡り、学生はレベルにあった科目を受講し、英語で行われる文化、社会、経済などの英語で提供される専門科目（を履修する。また、日本語上級レベルの学生は、日本人学生に提供されている教養・専門科目を履修することも可能である。

本稿では、以下、学生の受入れ状況や、日本語や英語で提供される専門科目の提供状況などをもとに平成28～30年度の英語系短期交換留学プログラムの実施について振り返る。

2. IPOU（H28＆H29）とIGLOBE（E)<H30>学生の受入れ数と出身国の内訳

まず、これまでの英語系短期交換留学プログラムに在籍した学生の国別内訳を表1と２に示す。

表１　英語系短期交換留学プログラム学生の国別受入れ数の推移：
平成13年度-21年度

	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年
アメリカ	2	1	6	11	8	12	10	12	11
イギリス	1	1	0	0	1	2	0	1	0
ドイツ	2	4	3	2	5	5	4	5	5
オランダ	0	1	0	0	1	1	0	0	2
スウェーデン							1	1	1
ハンガリー								4	5
中国（香港）	9	9	7	12	6	5	6	3	4
韓国	3	3	2	4	7	1	0	1	3
タイ					0	0	0	0	1
インドネシア				1	1	2	3	2	0
フィンランド									2
ノルウェー								0	2
オーストラリア							0	0	3
フランス									
ベトナム									
台湾	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	17	19	18	30	29	28	24	29	39

表２　英語系短期交換留学プログラム学生の国別受入れ数の推移：
平成22年度-30年度

	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年
アメリカ	10	10	8	6	4	2	3	4	2
イギリス	2	0	2	8	6	3	5	9	4
ドイツ	7	7	6	8	5	8	5	5	5
オランダ	0	3	3	5	2	4	4	2	4
スウェーデン	0	1	1	0	0	1	0	1	1
ハンガリー	4	3	1	1	0	1	4	3	3
中国（香港）	6	6	2	4	2	3	2	4	5
韓国	2	3	0	1	0	1	1	0	2
タイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0

インドネシア	2	1	1	0	0	1	0	3	0
フィンランド	2	2	2	2	0	1	3	2	2
ノルウェー	2	2	0	0	0	0	0	0	0
オーストラリア	3	4	2	1	2	3	2	0	0
フランス	2	2	4	3	2	0	1	1	2
ベトナム	0	1	0	0	0	0	0	1	0
シンガポール	---	---	2	0	4	2	3	1	2
イタリア	---	---	0	0	1	0	0	0	1
台湾	0	0	0	0	0	0	0	1	0
合計	42	45	34	39	28	30	34	38	33

28～30年度に英語系短期交換留学プログラムに在籍した学生の国別の内訳は、アメリカ（H28 3名/H29 4名/H30 2名）、ドイツ（H28 5名/H29 5名/H30 5名）、英国（H28 5名/H29 9名/H30 4名）、オランダ（H28 4名/H29 2名/4名）、オーストラリア（H28 2名）、中国　（H28 2名/H29 4名/H30 5名）、シンガポール　（H28 3名/H29 1名/H30 2名）、韓国　（H28 1名/H30 2名）、フィンランド（H28 3名/H29 2名/H30 2名）、インドネシア　（H29 3名）、スウェーデン（H29 1名/H30 1名）、フランス（H28 1名/H29 1名/H30 2名）、ハンガリー（H28 4名/H29 3名/H30 3名）、イタリア（H30 1名）、タイ（H28 1名）、ベトナム（H29 1名）、台湾（H29 1名）の計34名（H28）、38名（H29）、33名（H30）となっている。27年度の30名と比較し、29年度は約10名の増加と言う結果となった。増加の要因としては、イギリス、ハンガリー、インドネシア、フィンランドからの学生が増加したことが挙げられる。27年度はフランス、イタリアからの参加学生がなかったこと、また特にアメリカ、イギリスからの学生数が減少したことが検討課題となったが、アメリカの学生数は現状を維持しており、イギリスの学生数が過去最大の9名（H29）となったことは特記するべき点である。平成30年度は前述したように英語系短期交換留学プログラムがIPOUプログラムからIGLOBE(E)として新たに導入されたため、協定校での新プログラムの周知と理解に時間を要するため、英語系短期交換留学プログラムへの参加人数が減少したと思われる。なお、平成28年度、29年度、30年度はJASSOの海外留学支援制度より「ハンガリーの日本研究人材育成支援」が採択を受け、最大3名の学生に奨学金の支給ができた。ドイツの協定校は1機関であるが、毎年5名あるいはそれ以上（平成27年度は8名）の学生を派遣してくる。本学からも毎年4，5名の学生がドイツに留学し、派遣・受入の相互バランスに問題のない唯一の機関である。

本学の英語系短期交換留学プログラムの特徴として、欧米圏からの参加人数が多いことが挙げられる。本学では、特に欧米の大学に留学を希望する学生が多いので、派遣留学促進という点からも英語系短期交換留学プログラムは、本学の国際化戦略に貢献しているであろう。

因みに平成28～30年度に欧米圏に留学した学生は31名（H28）、19名（H29）、22名（H30）（アメリカ17名＜H28 12名／H29 5名/H30 4名＞、ドイツ10名＜H28 5名／H29 5名/H30 4名＞、オランダ10名＜H28 6名／H29 4名/H30 5名＞、イギリス5名＜H28 4名／H29 1名/H30 1名＞、フランス1名＜H29 1名/H30 1名＞、フィンランド2名＜H28 1名／H29 1名/H30 2名＞、ハンガリー5名＜H28 3名／H29 2名/H30 3名＞）、スウェーデン（H30 2名）であり、派遣地域にハンガリーとスウェーデンが増えたことは特質する点である。本学から協定大学への留学生が増加推進することによって、受入・派遣のバランスが取れるように努力してきた。

3. 日本語科目

センターでは、日本語コースは初級のレベル1から最上級レベル6まで開講している。日本語科目は英語系短期交換留学プログラム学生にとって必修科目である。英語系短期交換留学プログラム学生が履修するレベルは、初級・中級レベルの1から4に集中している。23年度以降、日本語１（文法/機能・会話・総合）の3科目以外に日本語１（読解）が加えられた。しかし、日本語１（文法/機能・会話・総合）の授業時間総数は週4.5時間と従来と変わりなく、一学期間で日本語教科書「げんき１」の文法・機能項目を全て学習するには十分な時間数とは言い難い。通常、１課を終えるには最低週6時間の授業時間が必要とされているからである。非漢字圏の学生の増加に伴い、近年、日本語学習はかなりのチャレンジと感じる学生が増えてきている。特に、欧州からのゼロ初級者に多くみられるため、授業開始時に補講等、特別に学習支援を行っているが、既習者と比べるとスタート時点から不利である。そのため、数年前から来日する前にゼロ初級者には「ひらがな学習」を課しており、インターネットで自習できる無料サイトのURLを協定校担当者にあらかじめ送っているが、ほとんどの学生がひらがなを習得せず来日するのが悩みである。そのような学生は学期末になってもひらがなを完全に習得できず、文法等の理解能力も低く最終的には不合格となることが往々である。

4. 英語系短期交換留学プログラム専門科目

IPOU専門科目（平成28年度＆29年度）とは、主に交換留学生を対象としており、人文、社会、経済、工学などの科目が英語で提供される科目の呼称である。IPOU専門科目は大分大学で短プロが開始された平成12年から、学部（医学部を除く3学部）とセンターがそれぞれ科目を提供してきた。平成30年度からはIGLOBEプログラムでの英語による専門科目は日本人学生との国際共生科目として「国際フロンティア教育プログラム」から提供されている。

表3は平成28～30年度に開講された英語系短期交換留学プログラム専門科目の一覧である。

表3　平成28～30年度に開講された英語系短期交換留学プログラム
専門科目一覧

開講部局	科目名と開講学期
経済学部	The Politics and Economy of the EU 前期（H28＆H29＆30）
	The Politics and Economics of Globalization 後期（H28＆H29&30）
	Introduction to Japanese Management 後期（H28＆H29&30）
	Ethnography on Rural Life 後期（H28＆H29&30）
	Modern Japanese History 後期（H28）
工学部	Introduction to Robotics 後期（H28＆H29&30）
教育福祉科学部	Contrastive Analysis between Japanese and English in terms of Cognitive Linguistics 後期（H28＆H29&30）
国際教育研究センター	Independent Research Project 1 前期（H28＆H29&30）
	Independent Research Project 2 後期（H28＆H29&30）
	Introduction to Japanese History, Culture and Society 前期・後期（H28＆H29&30）
	Intercultural Communication 前期・後期（H28＆H29&30）
	Japanese Popular Culture C: Anime and Film Studies 前期（H28＆H29&30）
	Japanese Popular Culture D: Manga Studies 後期（H28＆H29&30）
	Japanese Grammar and Discourse 前期・後期（H28＆H29&30）
	Sustainability and Global Development 前期・後期（H29&30）

当プログラムではポピュラー・カルチャー、メディア論、地域創生に関するフィールドワークを基調にしたジャパニーズ・スタディーズの内容を特徴としている。同時に、本学には経済学部、教育学部、理工学部、福祉健康科学部、医学部の5学部が設置されているが、医学部と福祉健康科学部を除く3学部より専門分野に関連する授業が留学生履修可能科目として英語で開講されている。したがって、ジャパニーズ・スタディーズ専攻以外の留学生でも、3学部に関連する専攻であれば履修が可能である。しかしながら、過去の報告書でも述べたように、センターからの専門科目提供数に比べると、経済学部を除く学部からの科目提供数が少なく、特に前期の英語系短期交換留学プログラム専門科目の内容が人文分野に偏ってしまっているのが課題である。英語系短期交換留学プログラムで提供できない専門分野については、「Independent Research Project」の履修を勧め、学生が専門教員との個別に研究できるようにしている。平成29年に着任した教員が「Sustainability and Global Development」を開講し、英語で教授される授業内容の幅が広がったが、本学のグローバル教育の拡大のためには、英語での提供科目の増加が不可欠であり、平成30年度から新たに始まったIGLOBEプログラムと留学生と日本人学生との共生授業を主体とする「国際フロンティア教育プログラム」の融合の検証が課題となるであろう。

5. おわりに

本稿では28～30年度の英語系短期交換留学プログラム実施について、学生数の推移、授業開講科目の特徴などの事項を中心に考察してきた。既述したように、多少の学生数の増減はあるが、本プログラムに参加する欧米諸国からの増加は本プログラムが協定大学から一定の評価を得ている。平成30年度からは短期交換留学プログラムの改組を行い、IPOUプログラムを廃止し新たにIGLOBEプログラムを開始した。IGLOBEプログラムではIPOUプログラムで浮き彫りになった課題に取り組み、常に専門科目と日本語全体のカリキュラム改善についても取り組まなければいけない。また、留学生の受入れと日本人学生の協定校への留学は表裏一体であり、受入・派遣学生数のバランスが取れた学生交流の実現に向けて、派遣学生数を増加させる取り組みも必要である。国際交流のキーワードの一つは地域的多様性であるが、今後、更に他の地域からの留学生の増加を期待したい。また、日本人学生をグローバル市民として育成するという点から、更に多様な地域・国から学生を受入れ、現在行っている日本人学生と留学生との混成授業の改善も視野に入れたプログラム運営をしていく必要があるだろう。

2016-2018 年度日本語短期交換留学プログラムの実施状況と課題・展望

南里敬三
坂井美恵子

1. はじめに

本学の短期交換留学プログラムは、これまで使用言語により「二豊プログラム」(媒介言語が日本語) と「短期留学プログラム (IPOU)」(媒介言語英語) という二種類の制度があった。しかしながら、本学のグローバル教育推進戦略として、受入留学生を増加させること、また英語による授業科目を増やし、留学生と日本人学生との交流のための科目を充実させる必要があることから、プログラムの見直しが課題として上がった。昨今の「グローバル時代」に適したプログラムを提供するため、2018 年度にこれら二種類のプログラムを統合し、「Intercultural and Global Oita Based Education (IGLOBE)プログラム」を新たに開始することにした。ただ、二豊と IPOU の区切りは IGLOBE 内でも維持されており、前者は便宜上 IGLOBE(N)、後者は IGLOBE(E)という名称で呼ばれている。この統合は、本学短プロの特色 (地域密着型の科目、協働学習を通してのグローバル人材の育成) を全面に打ち出すことで、優秀な留学生の獲得を目指すこと、及び、留学生相互の交流を活発化させることを目的に行われたものである。(詳細は後に報告。)

日本語系短プロで特筆すべき点は、留学生の増加と、新規科目 (2017 年度前期の『狂言で大分を学ぶ』の開講、及び、2017 年前後期の『国際理解教育：サステイナビリティ』) の開講である。以下、2016 年度から 2018 年度までの日本語短プロ留学生入れ状況を解説した後、新規開講科目と日本文化研修の報告を行い、今後の課題・展望に言及する。

2. 日本語短プロ留学生の受け入れ状況

2015 年度の日本語短プロ留学生の受け入れ者数は 33 名であったが、それが漸次増加を続け 2018 年度には 58 名に達している。(表 1 参照のこと。) 2018 年度の二豊留学生数を国別でみると、中国が 32 名で最も多く、続いて韓国の 23 名、台湾の 2 名、タイの 1 名となっている。韓国からの留学生が久しぶりに 20 代になったことは喜ばしいことだろう。

表 1. 国別受け入れ状況

国名	2015	2016	2017	2018
中国	26	24	30	32
韓国	5	11	19	23
台湾	0	0	2	2
タイ	2	1	0	1
英国	0	0	1	0
合計	33	36	52	58

表 2 にあるとおり、原籍校別にみると、同じく 2018 年度で、中南財経政法大学が 6 名で最多。これに、江漢大学、西京大学校の 5 名、深圳大学、釜山大学校、嶺南大学校、大邱大学校の 4 名、内蒙古大学、北京林業大学、黒竜江大学、の 3 名が続き、以下、河北師範大学、対外経済貿易大学、内蒙古民族大学、光州大学校、江陵原州大学校、順天代大学の 2 名、陝西

師範大学、武漢大学、東海大学、開南大学、コンケン大学の１名と続いている。

近年数は少ないながらも、タイ王国から本学に安定的に留学生が訪れてきているのは朗報であろう。

表 2. 原籍校別受け入れ状況

国名	原籍校	2015	2016	2017	2018
中国	中南	5	7	7	6
	江漢	4	3	2	5
	深圳	4	5	3	4
	内蒙古	0	3	3	3
	北京林業	3	2	3	3
	黒竜江	0	0	0	3
	河北	4	0	5	2
	対外	3	2	0	2
	内蒙古民族	1	0	1	2
	陝西師範	0	2	2	1
	武漢	0	0	0	1
	香港	1	0	2	0
	遼寧師範	1	0	2	0
韓国	西京	1	5	1	5
	釜山	1	1	4	4
	嶺南	0	1	2	4
	大邱	0	0	4	4
	光州	1	1	2	2
	江陵原州	0	1	2	2
	順天	1	1	2	2
	江南	0	1	1	0
	培材	1	0	1	0
台湾	東海	0	0	1	1
	開南	--	0	1	1
タイ	コンケン	2	1	0	1
英国	マンチェスター	0	0	1	0
合計		33	36	52	58

3. 2016-2018 年度日本語短プロ開講科目

日本語短プロ・センター開講科目は 2017 年度に一科目が閉講となり、二科目が新たに開講

された。閉講になったのは『言語と社会』(後期) で、新たに開講されたのは『国際理解教育：サステイナビリティ』(前・後期) と『狂言で大分を学ぶ』(前期) である。

『サステイナビリティ』は、人々の生活や環境に関連する身近な４つのテーマを通じて世界で起こっている環境開発問題を考えながら、学生自身が自らの価値観をと向き合い、自ら考え行動する Critical Thinking Skills を培うことを目的としてデザインされた科目である。例えば日本では馴染みの深い 100 円ショップは今や庶民の生活必需品の多くを供給しているが、消費者のほとんどはその安さの裏側にある秘密を知らない。また、日本のコンビニは趣向を凝らし、充実した品揃えと多様なサービスで有名であるが、その経営の難しさは消費者側から見えにくい。その他、牛肉の生産に関わる環境問題や、人間社会に広がる貧困問題などから、受講者は自らの行動がそれらの問題と繋がりがあることに気づかされた。１テーマを３週間でじっくり学ぶ形式で、受講者はまず講義でテーマの概要を学び、次に独自の研究調査を行い、最後にクラスで発表した。このクラスは留学生と日本人の両方に開講されているため、討論の中に日本を含めた多文化的な視点が共有される、国際理解としては有意義な講義であった。受講者の多くは、「この講義を受講して初めて、環境や社会の問題がもっと身近に突き詰められた問題として受け止めるきっかけとなった。これから自分でできる行動を取っていきたい。」と感想を述べていた。

『狂言で大分を学ぶ』は、受講者に大分を題材とした狂言を創作させ演じさせることを目的とした科目である。この科目では野村万禄先生に特別講師としてご協力いただいた。全15回の授業のうち 8 回を担当していただき、謡、狂言の舞である小舞の指導に始まり、学生が創作した台本の修正、演技指導までやっていただき、なんとか 5 つの創作狂言の誕生となった。出来上がった作品は大分平和市民公園能楽堂の檜舞台で学生によって演じられた。まさか大分に来て能楽堂の檜舞台で狂言を演じることができるとは、と参加学生の間から驚きのコメントが寄せられていたことを付け加えておく。

4. 日本文化研修

2016-2018 年度も春に狂言ワークショップを開催し、秋には「糀のチカラ―伝統の糀を知る」と称した講習会を実施した。

2016-2018 年度の狂言ワークショップも、例年通り、福岡を拠点に活躍しておられる狂言師・野村万禄氏を講師に迎え、2016 年 6 月 24 日金曜日（午後 6 時～7 時半)、2017 年 6 月 23 日金曜日（午後 6 時～7 時半)、及び、2018 年 6 月 1 日金曜日（午後 6 時～7 時半）に平和市民公園能楽堂で行った。中国の散楽の流れをくむ狂言の歴史、狂言の演じ方の特徴・決まり事などを解説していただいた後、留学生を能舞台に上げて演技指導をしていただいた。このワークショップに 2016 年は二豊・IPOU の短期留学生、日研生、及び、日本人学部生、あわせて 18 名が、2017 年の狂言ワークショップでは同 17 名が、2018 年の狂言ワークショップでは、同 15 名が参加した。狂言流の歩き方、姿勢、笑い方、泣き方を能の舞台で演じるとことができて参加者には良い思い出となったのではないだろうか。

「糀のチカラ―伝統の糀を知る」講習会は、11 月中旬に佐伯市にある糀屋本店において実施された。講習会の前に、事前研修として学内で糀について学ぶ機会を設けた。講習会当日

は糀屋本店社長浅利妙峰氏から、日本の伝統的な食文化や糀の働きなどについてのレクチャーを行っていただき、その後、浅利氏が世に広めた塩糀作りと塩糀を使った鍋料理を参加者全員で作った。講習会終了後は、佐伯市内の歴史的環境保存地区に移動し、武家屋敷が残る城下町の散策を行った。日本語上級レベルの短プロ留学生のほかに、学部生、大学院生、研究生、日研生、３+１プログラムの留学生が参加した。大分を拠点に世界で活躍されている浅利氏との出会い、伝統の糀についての学びと現代の食生活への応用など、本研修で学ぶことは多く、参加者にとって貴重な経験となり好評のうちに終えることができた。

5. 今後の課題と展望

2018 年、本学の短期交換留学プログラムは従来の「二豊プログラム」と「短期留学プログラム（IPOU)」を統合し、「Intercultural and Global Oita Based Education (IGLOBE)プログラム」として、新たなスタートを切ることになった。日本人学生と留学生が共に学び、アカデミックな交流促進をするグローバル科目の提供や、地元大分について学べる科目の必修化等により、留学生及び日本人学生共にグローバル人材として育成することに貢献し、他大学が提供する短期留学プログラムとの差別化を図り、更なる留学生の増加につなげていきたいと思っている。本学が文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業)」に採択されたこともあり、地域の活性化に貢献できる人材を育成するため、教養教育では「大分豊饒化教育プログラム」が進められている。留学生を対象とした科目においても、地域の課題に対応できる人材育成に焦点を当て、大分の町おこしや過疎の現状などを扱う授業をさらに展開していくことを予定している。

また、2016-2018 年度は「日本語上級レベルの短期留学生受入による国際理解教育推進プログラム」として、JASSO の「海外留学支援制度（協定受入)」に引き続き採択され、留学生に奨学金が支給されている。本学はアジア、中でも中国と韓国を重点国として優秀な人材の獲得と交流の拡大を謳っていることから、中国、台湾と韓国の協定校の日本語能力試験 N1 と N2 合格者をこの JASSO 奨学金支給の対象にし、日本の大学院進学を目指す留学生や、日系企業への就職を希望する留学生を育成することを目的としている。そのため、大学院進学希望者のためには、日本の大学院で研究を行うときに要求されるアカデミックレベルの日本語教育と専門知識が身に付けられるような科目を提供し、就職希望者のためには、「ビジネスジャパニーズ演習１～４」など、ビジネスリテラシーが身に付く科目を提供している。さらに、日本文化や地元大分について学べる科目の提供や日本文化研修での体験を通し、日本と大分の魅力を留学生に伝え、多くの学生が日本に戻って来るよう動機付けをしている。本奨学金の支給が留学生の増加に少なからず影響を与えていると考えられることから、今後も引き続き採択されるようプログラムの一層の充実を図り、高度な日本語能力と大分という地域に対する理解を深められるよう、留学生にとって魅力あるプログラムを提供していきたい。

2015 年度後期 - 2018 年度前期の日本語日本文化研修留学生プログラムの実施状況と今後の課題・展望

南里敬三
坂井美恵子

1. はじめに

本報告では、2016 年度後期から 2018 年度前期までの本学日本語日本文化研修留学生（以下「日研生」）による論文の内容紹介を行った後、今後の課題と展望について述べることにする。

2. 2016 年度から 2018 年度提出論文について

本学では 2015 年後期から 2016 年前期にかけて 5 名の日研生を、2016 年後期から 2017 年前期にかけて 1 名の日研生を、2017 年後期から 2018 年前期にかけて 1 名の日研生を受け入れた。2016 年前期に日研生プログラムを修了したのは、ブルーチョ・ブリジッタ・エミリアさん、アキオ・カ・チュン・チャンさん、チャイチョープー・オラコーンカンさん、ファティマ・アルヴェス・ダ・シルヴァ・レイさん、オルガ・ウラディミロヴナ・ツァプリーナさんの 5 名。初めの 3 名は大学推薦で、後の 2 名は大使館推薦であった。2017 年前期に日研生プログラムを修了したのはチョイ・ア・ライ（大学推薦）さんで、2018 年前期に日研生プログラムを終了したのはキャサリン・ローラ（大学推薦）さんだった。この 7 名が提出した論文は表 1 の通りである。

表 1. 2016-2018 年度に提出された日研生論文

氏名、原籍大学	国籍	論文のタイトル
ブルチョー・ブリギッタ・エミーリア カーロリ・ガシュパール大学	ハンガリー	日本人の大学生の就職や将来に対する意識
チャン・アキオ・カ・チュン 香港大学	香港	広東語の終助詞に関する考察：システミック言語学の視点から
オランコン・チャイチョンプー チェンマイ大学	タイ王国	日本の主婦が作る理想的女性像の時代別変化
ファティマ・アルヴェス・ダ・シルヴァ・レイ ミンホ―大学	ポルトガル	ヨーロッパにおける最初の日本のイメージ： ポルトガルでの天正遣欧少年使節
オルガ・ウラディミロヴナ・ツァプリーナ 極東国立人文大学	ロシア	稲作文化と日本語の表現

チョイ・ア・ライ 香港大学	香港	世界で大人気の『君の名は』は 新海誠らしくない作品？
キャサリン・ローラ マラナタ・クリスチャン大学	インド ネシア	大分方言に対する標準語の終助詞 「ね」の変化

簡単に論文内容の紹介をしておこう。

ブルチョー・ブリギッタ・エミーリアさんの論文は、日本の若者の就職や将来に対する意識について調査したものである。日本では大学3－4年次において、就職活動という他国に見られない独特のシステムがあり、日本人学生の多くが就職に対する不安を持っていることから、このテーマに関心を持った。日本各地の大学生89名を対象として、仕事観、就職に対する不安や将来像についてアンケート調査を行った。その結果、仕事の目的として、収入以外に社会への貢献や夢の実現、生き甲斐などを挙げた者も多く、仕事を選ぶ基準も給料より職場の雰囲気や人間関係の方が重視されていること、就職活動、適性、職場に対する不安は高い一方、将来は幸せな人生を送るという楽観的な人生観を持つことなどが窺え、現代の日本人大学生の意識が捉えられている論文である。

アキオ・カ・チュン・チャンさんの論文は広東語の終助詞をシステミック文法の対人理論を使って分類を試みた意欲作である。広東語は北京語と比べるといわゆる「正式な」言語とは認められておらず、それがために広東語の学術的で且つ実用的な文法書はいまだ出版されていない状態だ。そんな、日の当たらない広東語の終助詞を学術的に分類し、しかも、日本人にわかりやすい終助詞の機能説明をつける、そんな夢を実現したのが彼の論文「広東語の終助詞に関する考察：システミック言語学の視点から」である。

オランコン・チャイチョンプーさんの論文は「理想とされる主婦像」の時代別変化を分析した。江戸時代から現代までの主婦像に関する先行文献を丹念に読みとき、時代の社会的特徴によって理想とされる主婦の在り方が変容していることを明らかにした。また、現代社会の理想とされる主婦の在り方を探るために、大分・宮崎県内9人の30～50代主婦と11人の60～70代主婦にアンケート調査を行い、世代間比較分析を行った。両世代の主婦にとって「女性」についての意識はまだ「家庭」から離れられず、固定化されている日本社会の風潮に逆らえないが、女性個人の中には徐々に「女性」について多様化した意識を持ちつつあると結論付けている。

ファティマ・アルヴェス・ダ・シルヴァ・レイさんの論文は１６世紀末に九州のキリシタン大名によってローマに派遣された天正遣欧少年使節の歴史的背景及びその旅行経路等について丹念に調査した意欲的なものである。使節の１０代の少年達４名と欧州各地の人々との交流により日欧双方にもたらされた影響についても言及され、またこの少年達が描かれているポルトガルの教会に残されている宗教画の紹介もなされている。

稲作が日本文化に与えた影響について言語表現を中心に分析した論文である。稲作に関連する語彙を一つ一つ取り出し、その多様性を説明した上で、日本の暦や年中行事、さらに神話を紐解き「田の神」について詳しく述べている。また、現在も日常的に用いられている表現の中には稲

作由来のものが多く含まれており、その起源を解説しつつ、日本人は意識していないかもしれないが、実に多岐にわたって稲作文化の影響を受けており、日本語を理解するためには日本人の意識の背後にある稲作文化を知ることが不可欠であると結論付けている。

チョイさんが論文の題材に選んだトピックは日本のアニメ『君の名は。』。新海誠監督のこの映画、興行収入が伸びるにつれて、監督への批判が出始めた。『君の名は。』はそれ以前の新海作品、例えば、『言の葉の庭』『秒速 5 センチメートル』とは作風が大きく異なっており受け狙いの作品でしかない、と。これに真っ向から反対の論陣を張ったのが彼女の論文「世界で大人気の『君の名は』は新海誠らしくない作品？」だ。『君の名は。』と新海の前作を比較し、『君の名は。』は新海監督の成長の結果としてできたもので、彼の前作の延長線上に出て来たものだとチョイさんは力説している。

キャサリン・ローラさんの論文は、大分方言では終助詞の「ね」と「な」が両方使われていることから、この二つの終助詞の使い分けについて調べたものである。標準語の「ね」の三つの用法、(1) 相手の認識を求める用法、(2) 話し手の認識を求める用法、(3) 聞き手を意識していることを示す用法が、大分方言では「な」に置き換わるかについて調べた。調査はアンケート調査で、対象は大分県出身の男性 25 人、女性 25 人であった。その結果、三つの用法のすべてにおいて、大分方言では「な」を使用するが、最も多く「な」が使われるのは男性の「相手の認識を求める用法」であった。また、「な」には置き換わらずに「ね」が使われている中で一番多い用法は、女性の「話し手の認識を求める用法」であったことなどが判明した。

3. 日研生指導のまとめ

2016 年度は 5 名の日研生が在籍しており、お互いの存在が刺激となり意見交換などをしながら論文を完成させていたようだが、日研生が 1 名しか在籍しない年は、一人で孤独な論文執筆作業に耐えなければならない。試験やクラスのレポートの締切りが重なる学期末に論文の提出期限も重なり、論文が計画通り進んでいない場合は、この時期特に負担が増す。そのことから論文作成遂行に困難を感じる学生もいる。論文執筆を課せられている日研生は、お互い支え合うためにも、できれば複数名配置されることが望ましい。本学ではセンター教員が指導教員として各日研生を個別指導している上に、各日研生に一名ずつ学習チューターを付け、論文作成のためのサポート体制を整えているが、心理面への配慮や励ましも重要な役目であろう。

4. 課題と展望

本学では日研生に大分ならではの体験をしてもらうため、フィールドワーク型の授業の整備を進めてきている。2014 年に開講した『ソーシャルネットワークと大分からの発信 I 』、『ソーシャルネットワークと大分からの発信 II』、及び、2017 年開講の『Project planning, volunteering and internship 2』、及び、『Project planning, volunteering and internship 3』はこの一環として開講されたものである。これらの授業を履修することで、日研生は大分地域の文化に触れながら、少子高齢化で縮んでいく中山間地の経済状況を観察・記録するこ

とになる。そこで地域経済の記録が文書として蓄積していく。勿論、単なる観察にとどまることはない。少子高齢化から脱却する道がこの中山間地域に残されているのか、もし残されているとすれば、それは一体何なのかも当然考察していくことになる。しかしながら、こういった過程で見出せる過疎化対策の提案で当該地域が実際にどれほど変わったのだろうか。国東地域への観光客の増加にはもしかしたら多少貢献しているかもしれない。が、それ以外はどうなのだろうか。

フィールドワーク型の授業整備を始めたころ、念頭に置いたのは大分学の基礎作りだった。海外からの若い研究者向けの大分地域を語る書籍はないに等しかった。（今でもそうなのだが。）なので、まずは、大分学の出発点となる「書かれたもの」の蓄積が必要と考え、上記4科目では、ブログ、ホームページ、雑誌の作成を通して大分について「書かれたもの」の蓄積を行ってきた。これからは大分の中間産地に「カタチ」も残していきたいと考えている。実際に地域の方と何かを作っていく。そしてその作ったものを「書かれたもの」の蓄積の中に落とし込んでいくことで、現在のフィールドワーク型の授業に実践性を付加していければと考えている。

この様は授業体制が確立すれば、分大に来る日研生は実践的解決策の提案を通した過疎化対策法を学べるようになるだろう。

報　　告

II. 日本語日本文化研修留学生研究論文

日本人の大学生の就職や将来に対する意識

ブルチョー・ブリギッタ・エミーリア

1. はじめに

私はハンガリーにいたとき、同じ大学の学生たちと会って話をし、その人達が抱いている不安等をよく耳にした。ハンガリーには、自分の将来に希望が持てないと思う人が多いということも言われている。現代の若者は私も含め、国の将来を担っていく存在である。だから、私と同じ世代の人たちの抱える悩みや不安について興味が湧いた。そして、日本に来てから他国と違った日本独特の就職活動のシステムを知り、同世代の日本人学生と話をする中で、多くの日本人学生が就職に対して不安を持っていることを聞き、就職や自分の将来にどのような不安や理想を抱いているのか、知りたいと思うようになった。そこで、日本の若者の就職や将来に対する意識、特に就職に対する不安と生きがいに関して研究を行うことに決めた。

2. 日本の就職活動

就職活動という言葉は一般的に広く使われているとはいえ、就職活動の定義はあまりはっきりしていない。辞書によると、就職活動とは、「職を得るため、求人先に働きかけること」（『広辞苑』2008）である。意味だけを考えると確かにその通りだが、就職活動を体験したことがなく、よく知らない人には表面的な説明であろう。

実際に就職活動とはどのような活動をするのか少し調べてみた。就職活動を体験した日本人の大学生によると、就職活動の大まかなスケジュールは、①エントリー、②会社説明会、③エントリーシートの提出、④筆記試験・適性検査、⑤面接、⑥内定の六つの段階となっている。

①「エントリー」とは自分のやりたいこと､考えていることを明確にした後、就活サイトへの登録や、興味がある会社に採用情報や会社の資料を請求することである。

②会社説明会では、様々な業界の説明会に参加し、会社を知る。2015 年 11 月 18 日の朝日新聞によると、2016 年の会社説明会の開始は大学 3 年の 3 月である。

③興味のわいた企業をさらに絞り、エントリーシートや履歴書を期限までに会社に提出する。

④通過すれば、筆記試験・適性検査を受ける。

⑤④に合格すれば、複数回面接を受ける。面接などの選考開始は 2016 年は大学 4 年の 6 月であった。

⑥最後の段階として、合格すれば内定を手に入れる。つまり、就職活動が成功し、卒業後の 4 月に採用されるということだ。正式な内定解禁は 2016 年も大学 4 年の 10 月のままの予定である。

3. 先行研究

今まで行われてきた日本人大学生の就職不安や、就職意識をテーマにした詳しい研究の殆どは、女子大学生だけを対象にしたものや、もしくは、ある地域の大学生だけを対象としている。それに、就職不安や、就職活動不安が就職活動に及ぼす影響等、一つのテーマを取り上げて書かれたものが多い。以下に、いくつかの先行研究の内容、及び調査の結果を簡単に紹介したい。

子ども・若者育成支援推進点検・評価会議（2011）のアンケート調査は、全国の 15 歳から 29 歳までの男女 3000 名を対象に行ったインターネット調査である。例えば仕事観についての質問には、「収入を得るため」仕事をすると言う回答が最も多く 63.4%であった。続いて「自分の生活のため」が 51.0%、そして「自分の夢や希望を叶えるため」は 15.0%で 3 番目に位置している。また、仕事を選ぶ理由として何がどれくらい大切かという質問に対し、特に多かった回答は「安定していて長く続けられる」（94.6%）、「収入が多い」（94.3%）、「自分の好きなことができる」（92.7%）であった。他に、将来の自分の姿についての質問で、回答が最も多いのは「親を大切にしている」（77.3%）、次いで「幸せになっている」（72.5%）と「子どもを育てている」（65.3%）となっている。

藤井（1999）の研究は 465 名の女子大学生を対象に実施したアンケート調査である。藤井（1999）の目的は、就職活動に対する不安の構成を理解するための就職不安尺度を開発することであった。調査の結果を分析した結果、女子学生の就職不安は、”就職活動不安”、”就職適正不安”、”職場不安”の三つから構成されていることが明らかになった。また、就職活動に対する不安が強ければ強いほどストレスがたまったり、うつ病になったり等で、精神的健康を脅かすことが浮き彫りになった。

松田他（2010）は茨城県の国立大学と私立大学、東京都の私立大学の 3 年生 306 名を対象に、アンケート調査を行った。藤井（1999）の就職不安尺度に基づき、就職活動関連の本や就職情報サイトから情報を収集し、新たな不安尺度を作成した。その結果、不安尺度はアピール不安、サポート不安、活動継続不安、試験不安、準備不足不安の 5 因子から構成されることが指摘された。また、就職活動不安が高まると、活動量と満足感が両方とも低くなることが示された。就職活動の支援として最初にやるべきなことは、就職活動不安を減少させることであると言っている。

山下（2011）は京都市内の私立大学生 367 名を対象にし、就職不安と生きがい感の関連について研究を行い、アンケート調査を実施した。また、アンケート調査において知り得なかった就職活動不安をより深く理解することと、就職支援の現状を知り、改善点を考察するために、9 名を対象に就職課職員によるインタビュー調査も実施した。その結果、就職活動不安、職業適性不安、職場不安の全てにおいて就職不安と生きがい感に有意な負の相関が示された。職業適性不安が生きがい感に最も影響及ぼし、職場不安の影響も有意であったが、就職活動不安の生きがい感への影響には有意な相関関係が認められなかった。また、インタビュー調査において、目標を持つためには行動することが重要だということが語られた。迷ったときも何がわからないかを明確にし、それについて誰かにたずねることの重要性を指摘している。

4. リサーチ・クエスチョン

本稿の目的は、一つの地域に限らず全国で、現在大学に通学している日本人を対象とし、日本人の大学生はどのように就職に関して考えているのかを詳しく調べることである。日本人の若者は一般的に仕事に対して何を期待するのか、どのような不安を持っているのかということを明らかにしたい。また、不安やストレスが多い人は悲観的になりがちだが、日本人大学生はどのような将来像を抱いているのかについても調べたい。そこで、本研究のリサーチ・クエスチョンを以下のとおり設定した。

- 日本人の大学生は仕事に関して一般的にどのように考えているのか、そして仕事を選ぶ際にどういう基準で選び、何を大切にするのか。
- 就職や職業に関して不安なことはどれくらいあるか、そして何が不安に思われているか。
- 10~20 年後の自分についてどのような将来像を持っているか。

5. 研究の方法

5.1 調査方法

できる限り多くの回答を得るためにインターネット上のアンケート調査方法を選択した。Google ドライブの docs.google.com/forms を利用し、アンケートを作成し回答してもらった。アンケートを広げるために、なるべく多くの日本人の知人に記入してもらうように頼んだり、日本人と日本人の知人が多くいる友人に転送してもらうように頼んだり、フェースブックなどの SNS サイトにアンケートのリンクを載せたりした。

5.2　調査時期と対象

2016 年 3 月下旬から 5 月末までの期間にアンケート調査を行った。アンケート調査対象者は日本人の大学生で、回答者数は合計 89 名（男性 30 名、女性 59 名）（1 年生：37 名、2 年生：19 名、3 年生：24 名、4 年生：7 名、院生 2 年生：2 名）となった。表 1 にあるように、22 都府県から回答が集まった。

表 1　回答者の属性（居住地）

地域	人数	地域	人数
茨城県	1	兵庫県	1
群馬県	1	岡山県	1
東京都	4	広島県	2
神奈川県	2	愛媛県	2
富山県	2	福岡県	5
岐阜県	2	佐賀県	2
静岡県	3	長崎県	3
愛知県	3	熊本県	3
滋賀県	2	大分県	35
京都府	2	宮崎県	4
大阪府	5	鹿児島県	4
		合計	89

6.　調査の結果と分析

6.1 仕事観について

まず、日本人大学生の仕事観について調べるために「将来何のために仕事をしたいですか」という質問をした。回答は選択肢を用意し、三つまで選択可とした。結果は図 1 にあるとおり、「収入を得るため」という答えが最も多く 53.9%だった。その他、30%を超える回答は「人や社会に貢献するために働く」（38.2%）、「自分の夢や希望を叶えるため」（36.0%）であった。一方、「仕事を通して達成感や生きがいを得るため」（11.3%）、「多くの人の役に立つため」（5.0%）といった回答は著しく少ない結果となった。

ここで、比較のために、日本全国の 15 歳から 29 歳までの男女 3000 名を対象に実施した子ども・若者育成支援推進点検・評価会議の調査（以下、評価会議の調査とする）（2011）を用いたいと思う。「何のために仕事をするのか」という質問に対し、回答は二つまで選択可であった。そこでもやはり、「収入を得るため」（63.4%）という回答と「自分の生活のため」（51.0%）といった回答が多かった。しかし、「自分の夢や希望を叶えるため」（15.0%）、「仕事を通して達成感や生きがいを得るため」（11.3%）、「多くの人の役に立つため」（5.0%）といった回答は著しく少ない結果であった。

本調査と評価会議の調査を比較した結果わかったことは、両調査とも「収入を得るため」という回答が圧倒的に多かったことだ。それは、日本人の若者が仕事をお金を稼ぐという生きていくための手段として捉えているからではないかと思う。しかし、評価会議の調査と違い、本調査では「人や社会に貢献するために働く」、「自分の夢や希望を叶えるため」、「仕事を通して達成感や生きがいを得るため」といった回答が多く見受けられた。よって、特に大学生だけを調査の対象とした本調査では、仕事はただお金を稼ぐ手段というだけではなく、仕事をする上での充実感も求められていることがわかる。その充実感は「人や社会に役に立つ」、「自分の夢や希望を叶える」、「達成感や生きがいを得る」、「色々な人や社会とつながりを持つために働く」等、人それぞれだが、現在の日本人大学生はただお金を得るために働くのではなく、働くことそのものに喜びを見出し、生き甲斐や何らかの目標を達成するために仕事をしたいのではないかと考えられる。

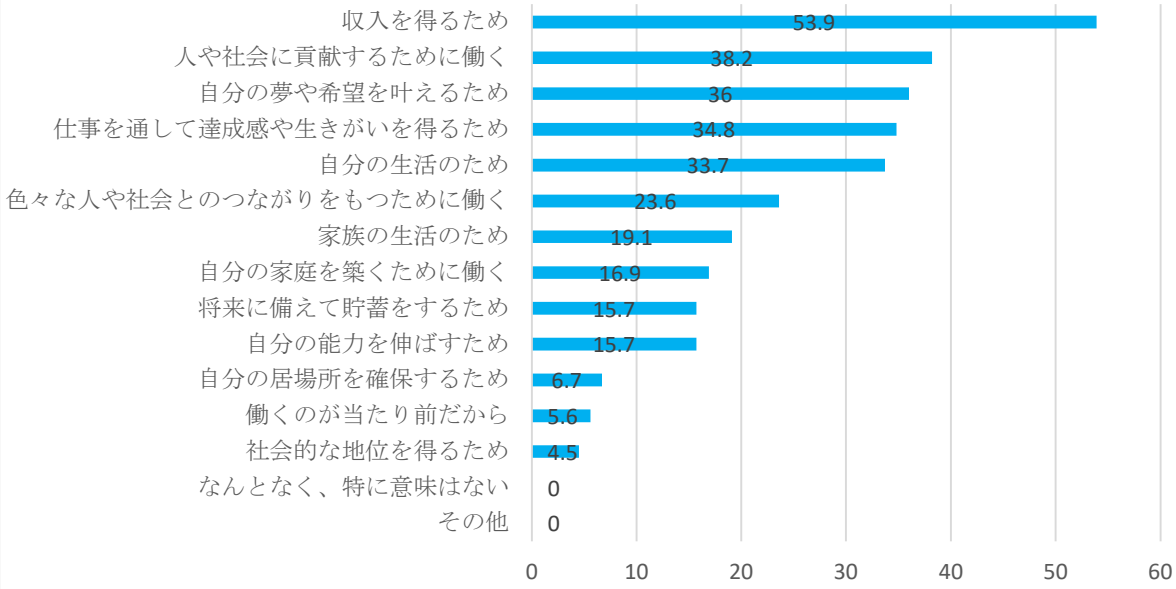


図1 何のために仕事をするのか

6.2 仕事を選ぶ基準

次に、「あなたが就職先や職業を決める際に、次のことをどれくらい大切にするか教えて下さい」という仕事を選ぶ基準について質問をした。たとえば「仕事で認められるようになる」「職場の雰囲気がよい」「創作性・独創性が必要とされる仕事である」などについて、それぞれ「とても大切だ」「少し大切だ」「どちらともいえない」「あまり大切ではない」「全然大切ではない」の 5 つの選択肢の中から一つを選んで回答してもらった（図 2 参照）。「とても大切だ」と答えた人が最も多いのは、「職場の雰囲気が良い」（86.5%）、「やりがいがある」（83.1%）であり、8 割を超えている。この結果から、現在の大学生は職場の雰囲気と仕事にやりがいがあるかどうかを一番大事にしていることがわかる。続いて、「とても大切だ」という回答が 5 割を超えていたのは、「他人の役に立つ」（64.0%）、「仕事で認められるようになる」（62.9%）、「経営が安定している」

（58.4%）、「仕事を通して社会へ貢献できる」（50.6%）と、「自分の好きなことができる」（50.6%）であった。次に、「給料がよい」（42.7%）という回答は５割に達してないという結果から、就職先や職業を決める際に、給料がよいというのはさほど大切にされていないことが分かった。一方「有名な会社である」については、「とても大切だ」と「少し大切だ」という答えを合わせても 25.0%にすぎなかった。また、「自分一人でできる仕事である」についても「とても大切だ」と「少し大切だ」という答えを合わせると 13.5%で、これもあまり大切にされていないことがわかった。日本人はグループで働くことに慣れているからこそ、あまり大切にされていないという結果になったのではないかと考えた。さらに、「有名な会社である」という点も 20.2%とかなり低く、数年前に話題になったいわゆる「大手病」（MY 就活ネット）、つまり業界の誰もが知っているネームバリューが高めの大企業にしか興味がないことはアンケートに協力してもらった大学生、主に大分大学の学生の中では示されなかった。それは大分県での地元志向の現れと考えられるのではないか。

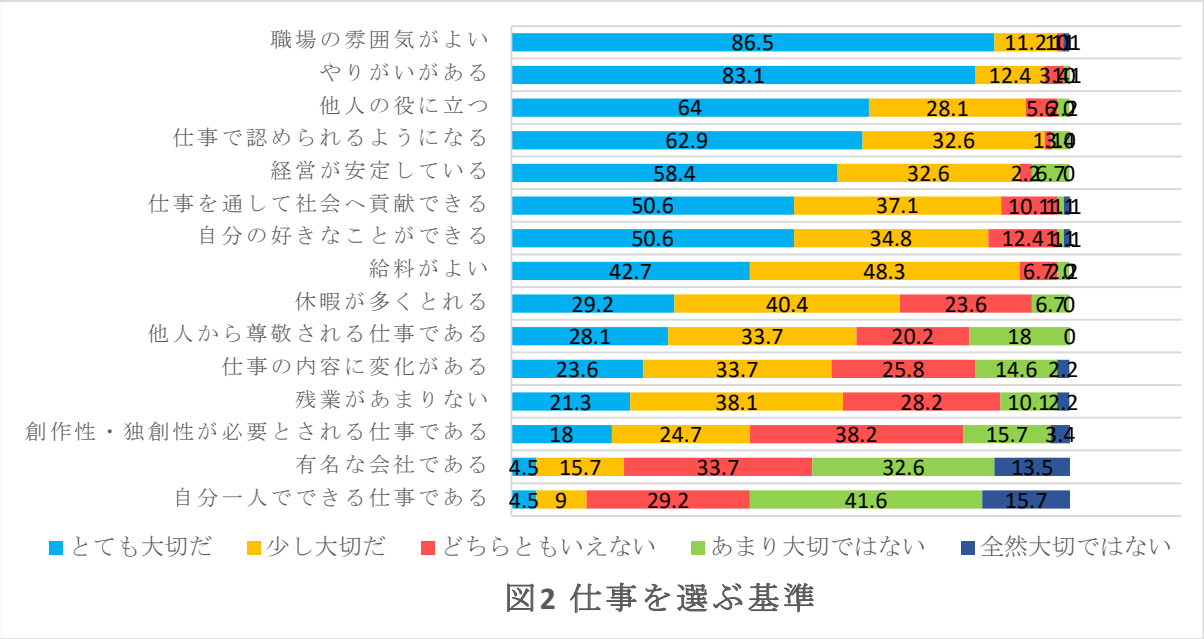


図2 仕事を選ぶ基準

6.3.1. 就職や職業に関してどれくらい不安があるか

これまで行われた調査は、不安を持っている人を対象に、どのような不安を持っているかを調べており、不安を持っているかどうかについてはあまり言及されていない。そこで、日本人の大学生のほとんどは不安を持っているように思うが、不安をあまり感じていない人もいるかもしれないと仮定し、どれぐらい不安を持っているかを調べるため、「就職や職業に関して不安がどれくらいありますか」という質問をした。それに対して「たくさんある」「いくつかある」「あまりない」「全然ない」の４つの選択肢で答えてもらった。図 3 にその結果を示す。「あまりない」（3.4%）と「全然ない」（4.5%）という答えを合わせると、不安を持っていない大学生は全体の回答者のうち、わずか 7.9%である。一方、「たくさんある」（48.3%）と「いくつかある」（43.8%）という回答を合わせると 92.1%で、不安を持っている者が不安を持っていない回答者を圧倒的に上回っている。この調査結果から、やはり日本人の大学生のほとんどは就職や、働くことについて不安を持っているということが分かる。

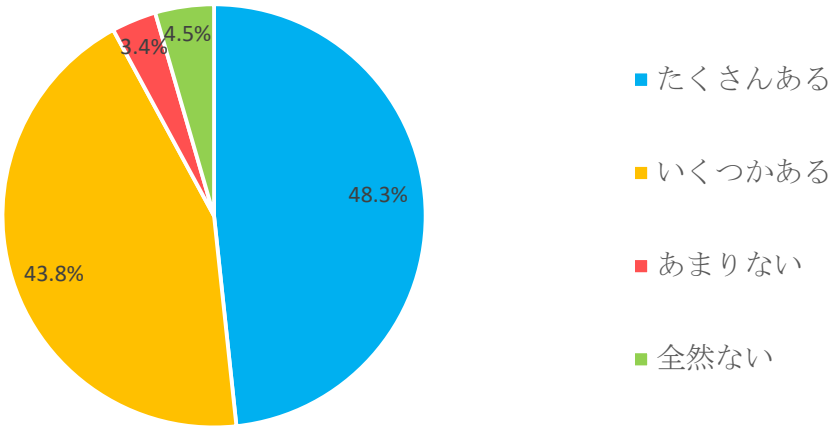


図3 就職や職業に関してどれくらい不安か

6.3.2. 不安に思うこと

次に、就職や職業に関して具体的に何をどれくらい不安に思うか調べるため、藤井（1999）と松田他（2010）の調査を参考にして、就職に関する不安について、34 項目の選択肢を作成した（資料参照）。そして当てはまるものすべてにチェック入れてもらった。次に、調査の結果を分かりやすく表すため、図 4 に示したように、34 項目の選択肢を①「就職活動不安」、②「就職適性不安」、③「職場不安」の三つのカテゴリーに分けて集計した。①「就職活動不安」の選択肢は例えば、「就職試験における筆記テストにどんな問題が出されるのか、不安である」「就職活動に対する準備があまり進んでいないのが不安である」、②「就職適性不安」は「就職する会社にうまく適応できるかどうか、不安である」「自分がどんな職業に向いているのかわからず不安である」、③「職場不安」は「不況が長引くと、会社はどうなってしまうのだろうと考えることがある」「会社の人間関係が不安である」などである。そして各カテゴリーの選択肢の数が同一ではないため、各選択肢を選んだ人数の割合の平均値を出した。結果を見ると三つのカテゴリーに大きな差はなく、どれも約 20%となった。

今回参考にした藤井（1999）の調査では、将来の職業や会社に対する不安よりも、現在の就職活動そのものに対する不安の方が強いという結果が出ていたため、この調査でもその差が浮き彫りになると予想していた筆者にとって、就職活動に対する不安と将来の職場についての不安に差がないという結果は予想外であった。しかし、藤井の調査の目的は、本調査と違って何が不安に思われているのかだけでなく、就職不安尺度を利用して何がどれくらい不安に思われているかについても調査したため、本調査は藤井の調査と異なる結果となっている。

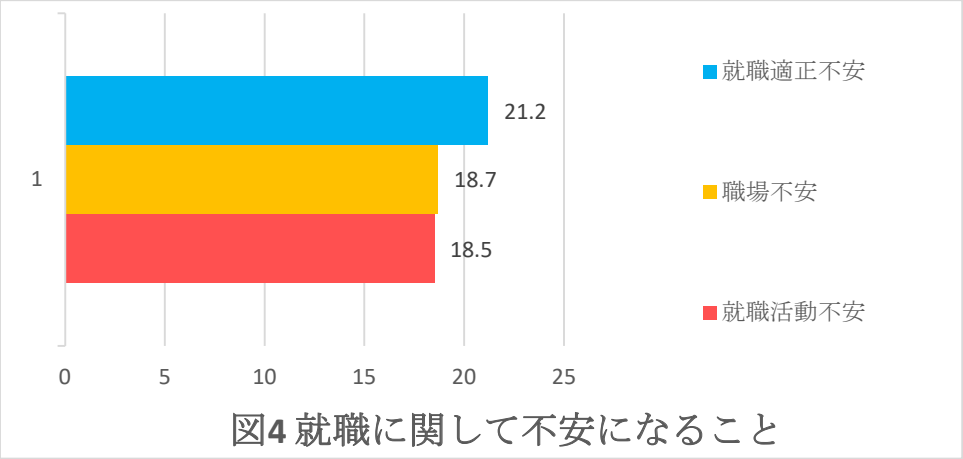


図4 就職に関して不安になること

6.3.3. 就職活動に関する不安

就職活動に関する不安について、さらに「準備不安」「アピール不安」「試験不安」「活動継続不安」「サポート不安」「就職難である現状に対する不安」の六つのサブカテゴリーに分けて分析した。しかし、「自分が希望 している会社に就職できるかどうか、不安である」という選択肢は全てのサブカテゴリーと関連しているため、どのサブカテゴリーにも入れられなかった。結果は、「自分が希望 している会社に就職できるかどうか不安である」を選択した回答者が 63.1%と圧倒的に多かった。続いて図 5 に示したように、就職活動不安の各サブカテゴリーの結果は、「アピール不安」（22.9%）、「就職難である現状に対する不安」（19.4%）、「試験不安」（16.3%）、「準備不足不安」（13.3%）、「サポート不安」（12.3%）、そして「活動継続不安」（9.0%）であった。それぞれのサブカテゴリーの中の回答者数は資料と参照のこと。

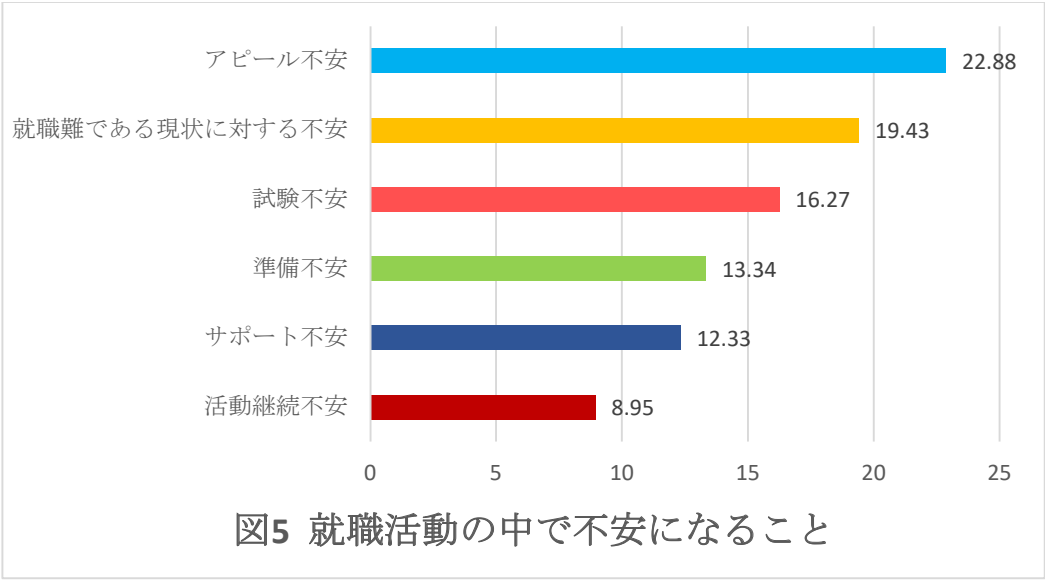


図5 就職活動の中で不安になること

6.4. 自分の将来像について

最後に、現代の大学生は10~20年後の自分を想像してどのようなイメージを持っているのか、つまりどのような将来像を持っているかを調べるため、「将来の30代～40代の自分は9項目についてどうなっていると思いますか」という質問をした。9項目は、評価会議の調査（2011）と同様に「グローバルに活躍している」「多くの人に役に立っている」「親を大切にしている」「子どもを育てている」「自由にのんびり暮らしている」「お金持ちになっている」「有名になっている」「幸せになっている」「将来の自分が想像できない」とした。回答者は、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」「まあそう思う」「とてもそう思う」の5つの選択肢で答えてもらった。図6を見ると「とてもそう思う」と「まあそう思う」という答えを合わせて5割を超えている回答は「幸せになっている」（88.3%）、「親を大切にしている」（86.5%）と「子供を育てている」（64.0%）の3つであった。このことから、現代の大学生は将来自分の家族を大切にしながら幸せな人生を送るというイメージが強いことがわかった。しかし、「将来の自分が想像できない」（40.5%）という回答も意外と多かった。逆に、「お金持ちになっている」（14.6%）といった回答は著しく少ないという結果から、就職先や職業を決める際に、給料が良いかどうかは一番重要な点の一つではないと改めて証明された。さらに「有名になっている」（10.1%）という点も少なく、将来有名になりたい大学生はわずかであることがわかった。この結果を見ると、日本人の大学生は将来何をするのかがはっきりわからなくても、親を大切にしたり、子供を育てたりしながら穏やかで、平凡な人生を送り、それに幸せを感じるという将来像が一般的だと考えられる。

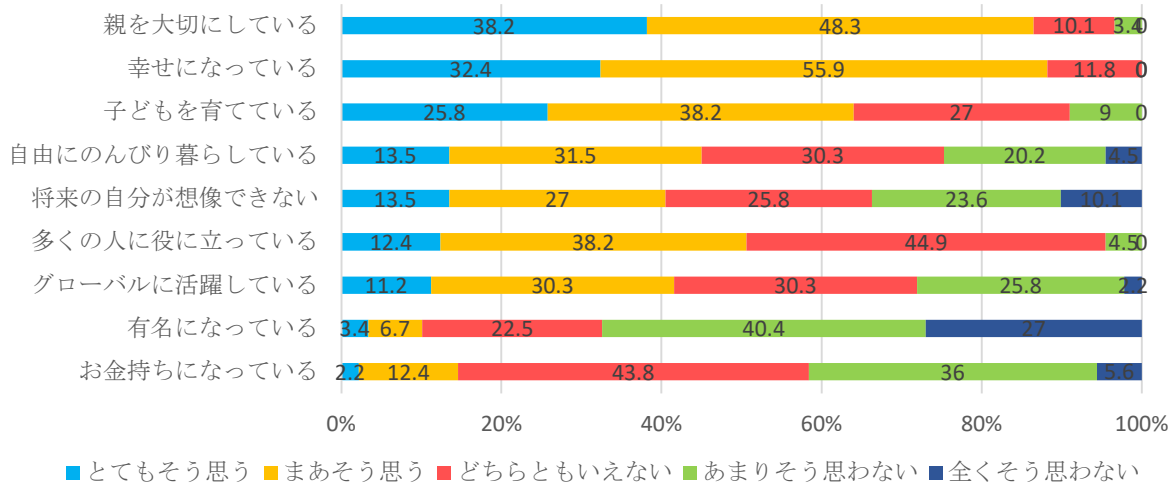


図6自分の将来像

7. まとめ

本稿では、アンケート調査を通して、現代の日本人の大学生の就職や将来に対する意識を検証し、一般的な見解を抽出した。日本全国の大学生を対象に調査を行い、89人から回答を得ることができた。

まず、何のために仕事をするのかについて質問をした。回答が一番多かったのは、収入を得るために仕事をすることだった。お金を稼ぐこと以外にも、仕事を通して、人や社会に貢献するためだという回答がそれに続いて多かった。また、自分の夢を実現させるためや、達成感や生きがいを得るため、仕事を通して色々な人や社会と大切な繋がりができるため、または自分の能力を伸ばし成長するすため等、収入を得ること以外に仕事の目的を持っていることがすべての回答者の中に共通していた点である。

次に、仕事を選ぶ際に大切にしていることは、職場の雰囲気が良いかどうか、つまり、同僚や上司との関係がうまくいくことや、やりががあることや、他人の役に立つことや、仕事で認められるようになることなどが多かった。ところが、給料がいいことはそれほど高くなく、給料より大切な基準が多くあった。仕事というのはただお金を稼ぐ手段としてだけではなく、仕事をする上で何らかの充実感を得るものとして見られていることの証拠であるのではないか。また、自分一人でできる仕事であることは大切にされず、職場の雰囲気がいいかどうかがとても大切にされていることの理由は、日本人がグループで働くことに慣れていることの現れと言えるのではないか。

次に、就職や職業に関して不安なことはどれくらいあるか、そして何が不安に思われているかについては、ほとんどの大学生がたくさん、もしくはある程度不安を抱いていることがわかった。日本人はよく、悲観主義で心配性だと言われており、また、不安に思うことを調べた結果、就職活動不安、就職適性不安と職場不安の三つのカテゴリーの間に大きな差がなかった。本調査の結果が、日本人は何でも心配に思っていることの現れではないかと考えた。ただ本調査では、不安があるかどうかだけを調べ、どれぐらい不安があるかについては調査したかったため、今後それぞれの不安についてもっと深く調査したいと思っている。

最後に、自分の将来像について調べた結果から、就職について多くの心配やストレスを持っており悲観的かと思われた日本人の若者は、将来の自分が想像できない人も少なくないが、親を大切にしたり子供を育てたりしながら、家族中心の穏やかに平凡で幸せな人生を送るという楽観的な将来像を持っている大学生が一般的であった。

日本人の大学生の就職や将来に対する一般的な意識について、より正確な概念を得るため、今後回答者の人数を増やし、さらに幅広い範囲で調査を行う必要がある。

参考文献

1) 新村 出 編 （2008）『広辞苑』第六版、岩波書店出版
2) 小林豪（2015 年 11 月 18 日）「就職活動のルール来年また変わるって？」『朝日新聞、朝刊』
3) 子ども・若者育成支援推進点検・評価会議（2011）「平成 24 年版子ども・若者白書」（内閣府）http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h24honpenpdf/pdf/tokushu_1.pdf
4) 藤井義久（1999）「女子学生における就職不安に関する研究『心理学研究』第 70 巻 第 5 号 pp.417-420
5) 松田侑子・永作稔・新井邦二郎（2010）「大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響」『心理学研究』第 80 巻 第 6 号 pp.512-519
6) 山下類（2011）「大学生の就職不安と生きがい感について」『花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要』第 5 号
7) 「MY 就活ネット」（2015 年 7 月 21 日）参照 http://www.myskc.net/ote.php

資料

「就職に関して不安になることは何ですか。」という質問の選択肢と回答者数

①就職活動不安
自分が希望 している会社に就職できるかどうか、不安である（53 人）
就職活動のことを考えると気持ちが焦る（27 人）
就職活動においてうまく自分をアピールできるか不安である（24 人）
就職活動に出遅れたらどうしようと思うことがある（23 人）
就職選考における面接のことを考えると憂鬱になる（22 人）
面接などでいい印象を与えられるか不安である（21 人）
就職試験における筆記テストにどんな問題が出されるのか、不安である（18 人）
就職活動に対する準備があまり進んでいないのが不安である（16 人）
企業側の人と上手くコミュニケーションをとれるか不安である（15 人）
試験対策があまりできていないのが不安である（15 人）
今の時期何をすればよいかわからず不安である（15 人）
自分の言いたいことを上手く企業側に伝えられるか不安である（14 人）
就職難のニュースを見ると、憂鬱になる（12 人）
就職活動をくじけずにやっていけるか不安である（11 人）
自分に向いた職業が見つかるか、不安である（11 人）
求人が全体に少ないことが気になる（10 人）
周囲の人より準備が遅れてるかもしれないと不安になる（10 人）
就職試験で自分の知らない分野の問題を出されるのが不安である（8 人）
就職活動中の悩みについて誰に相談したらよいかわからず不安である（4 人）
就職活動の悩みやつらさを共有できる人がいないのが不安である（4 人）
就職活動を途中で諦めてしまわないか不安である（4 人）
就職活動に対する準備をあまりやってこなかったのが不安である（4 人）

②就職適正不安
自分がどんな職業に向いているのかわからず不安である（27 人）
就職する会社にうまく適応できるかどうか、不安である（22 人）
就職したいと思っている会社が自分に向いているのか、不安である（20 人）
自分の能力で、会社の業績にはたして貢献できるのかと疑問に思うことがある（19 人）
どういった仕事に就けばよいか悩んでいる（16 人）
自分の興味が持てる職業が見つからず、不安である（13 人）
自分が何をしたいのかが分からない（8 人）

③職場不安
会社の人間関係が不安である（26 人）
会社の上司とうまくいかなくなったらどうしようと思うことがある（13 人）
不況が長引くと、会社はどうなってしまうのだろうと考えることがある（8 人）

その他（3 人）

広東語の終助詞に関する考察
～システミック言語学の視点から～

チャン・アキオ・カ・チェン

1. はじめに

1.1. 研究動機

広東語というのは、香港、マカオ、中国の広東地方などで話される言葉である。広東語は終助詞の数が多く、それらの多くが話者の感情や態度を表す機能を持ち、日常会話では頻繁に使われる（Leung, 2010）。広東語の終助詞は広東語を学ぶ日本人にとって習得が難しい存在である。なぜなら、広東語の終助詞の数が多くて、それぞれがどんな意味を持っているかよく解説されてこなかったためである。次の例を見ていただきたい。

［１］呢個蛋糕好味呀[aa4][1]？（このケーキおいしいの？）[2]
［２］呢個蛋糕好味咩[me1]？（このケーキおいしいの？）

［１］と［２］は二つともケーキがおいしいかどうかについて聞いている疑問文であるが、話者はケーキがおいしいという情報を得ていて、それが正しいことを確認している場合「呀[aa4]」を用い、疑いながら聞く場合「咩[me1]」を用いる。終助詞の違いによって、文の意味合いが違ってくる。よって、終助詞の使い間違いによって、意思疎通が阻害されることもあり得る。このような状況にもかかわらず、残念ながら、日本においても広東語の終助詞研究は行われているが、説明が抽象出来であったり、分析的視点が曖昧だったりしており、また広東語の終助詞に対する体系的アプローチが欠けているため、広東語を学ぶ日本人に広東語がとってわかりづらい状況が発生していると思われる。その上で、本稿では、中嶋（1981）の終助詞分析を議論の出発点として、最終的にはシステミック言語学の枠組みを Wong（2009）から借りて広東語の終助詞が具現する機能の包括的解説を行う。

2. 先行研究

従来、広東語の終助詞はともかく、日本語での広東語の文法研究はあまり盛んでなく、参考になれる資料が少ない。中嶋（1981: 133−142）は『広東語四週間』で広東語の終助詞の機能を記述しているが、明白でない。そこで本稿では次の 5 つの特徴に着目することで広東語

1 論文末の資料を参照のこと。
2 特に注釈を入れない限り、例文の翻訳は筆者が訳したものである。

の終助詞記述は明確になることを例証する。即ち、（１）感情強調型終助詞の存在、（２）アスペクト強調型終助詞の存在、（３）一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞の存在、（４）、断定、認識強調型終助詞の存在（５）強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞の存在、の５つである。『広東語四週間』では終助詞について言及しているが、体系的にまとめておらず、また説明に誤りがあると思われる個所がある。以下、上記５点を簡単に説明する。

2.1. 感情強調型終助詞に対する認識の違い

中嶋（1981: 34）は次の例文を提示し、説明をしている。

［３］呢本唔係你嘅書囉？（これはおまえの本じゃないのか？）

中嶋（1981: 34）は以上の囉[lo1]について次のように説明している。

> “囉 lo”は感情をあらわに出したい強い語気をともなう助詞。“呢本〔唔係〕你嘅書？”〈これきみの本じゃない？（“書”は高昇調の音調をとる）〉にはそのような語気はない。

しかし、中嶋（1981: 34）が述べた囉[lo1]についての説明は誤っている。まず、囉[lo1]は疑問文では使われず、陳述文のみに使える（Wong, 2009）。中嶋（1981: 135）も指摘しているように、「囉は反発や非難の語気をあらわす」という機能を持っているので、例文［３］は、「あなたの本ではない」ということを強調し、「あなたの本ではないのになぜ勝手に読むの？」など不満や非難の語気を表している。よって、例文［３］は「これはおまえの本じゃないのか？」のような一般的な疑問文ではなく、「これはおまえの本じゃないよ」と訳すべきものである。中嶋（1981: 34）は感情強調型終助詞である囉[lo1]を無感情的な疑問詞だと勘違いしたため、このような誤訳が生じたと考えられるのである。

次に、啦[laa1]についての説明を見てみよう（中嶋, 1981: 135）。

> “啦 la”は、丁寧な依頼、示唆の語気をあらわす。

確かに、啦[laa1]は親切な態度で依頼・勧誘・示唆することができるが、この感情強調型終助詞はじれったいという気持ちで命令していることを表すこともできる。しかし、中嶋（1981: 135）は後者には言及していない。後者の用法を知らないと、無礼な表現になることがあるた

め、後者に言及していないことは看過できない。

2.2. アスペクト強調型終助詞の存在の無視

中嶋（1981: 70）は喇[laa3]について以下のように述べている。

> 文末に置かれる助詞の“喇 la”は状況の変化に対する確認を示すはたらきがある。

Wong（2009: 50）は、喇[laa3]はアスペクトを表す文と一緒に使われると述べているが、中嶋はアスペクトについて触れていない。これが理解できていないと、なぜ喇[laa3]が動作の開始、継続、完了を表す文で使われるかがわからないだろう。

2.3. 一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞の存在の無視

吖（呀[aa4]）[3]について中嶋（1981: 27）はこう説明している。

> “呢”・“吖”はともに疑問をあらわす助詞である。（中略）“吖”はすでに他から情報を得ていて、その事例について念を押して問うときに用いられる。

広東語には何種類かの疑問文があり、吖（呀[aa4]）はそのうち特定の疑問文にしか用いられない。少なくとも、広東語の疑問文は一般疑問、理由疑問、確認疑問の３つに分類できることがわかっていないと、吖（呀[aa4]）の意味は説明できない。中嶋（1981）はこういった点に言及していない。

2.4. 断定、認識強調型終助詞に対する認識の違い

啊[aa3]についての説明を見てみよう（中嶋 1981: 133）。

> “呀 a”（啊[aa3]）には、基本的に、相手の注意を喚起するはたらきがあり、①疑問　②断言　③祈求　④驚き　⑤強調　⑥列挙　⑦停頓の語気をあらわす。

中嶋（1981: 133）は以下の例を挙げている。

---

3 中嶋は[aa4]と発音する終助詞を「吖」だと書いているが、Wong（2009）は「呀」だと書いている。この論文では、吖は[aa1]と発音することにしている。

［４］你殷住冷親呀。（きみ風邪ひくなよ。）（祈求）

［５］有賊呀。（どろぼうだ）（驚き）

啊[aa3]の機能は語気の和らげだけであって、祈求、驚き、強調などの語気は、終助詞の前に来る文の意味内容に含まれている。そのため、［４］や［５］などの文では終助詞がなくても祈求や驚きの語気が含まれているのである。

2.5. 強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞に対する認識の違い

吖[aa1]について中嶋（1981: 134）はこう説明している。

> 吖 a には、①幾分のぞんざいな依頼や示唆…（中略）…をあらわす。

Wong（2009）によると、吖[aa1]は穏やかで柔らかく依頼する、示唆するときに使う終助詞であるため、ぞんざいな依頼や示唆の語気はないという。

本文ではこれら 5 点について詳細に論じていくことになる。

3. 研究目的

本研究の目的は二つある。一つは、『広東語四週間』における終助詞の解釈の訂正を行い、広東語の終助詞のシステムネットワークを立て、システミック言語学に貢献することである。システミック言語学の視点から見ると、広東語の終助詞は対人機能に関わるものが非常に豊富である。ただ、Wong(2009)は、広東語の終助詞のシステムネットワークを立て、広東語には観念構成機能、対人機能、テクスト構成機能、三つに分かれていると述べているが、本稿では対人機能のみを考察していきたいと思う。

もう一つの目的は、広東語の終助詞が日本語のどういった意味と対応するのかを調べ、日本人から見た広東語の理解を深め、広東語を日本語に、あるいは、日本語を広東語に訳すときに役立つ情報を提供することである。

4. 研究方法

本稿では、システミック言語学の対人機能の観点から 30 個の広東語の終助詞の用法を分析しなおし、『広東語四週間』の終助詞の解釈を訂正する。終助詞の解釈修正に際しては Wong(2009)で提案されている広東語の終助詞のシステムネットワークをフレームワークとして採用し、更に精巧なシステムネットワークを提案する。観察対象の終助詞は『広東語四週間』及び香港のドラマ『愛回家』から選定した。『愛回家』はホームドラマで、そこで使われる終助詞は実際に家庭や職場で使うものであるため、会話が自然で、よってそこで使われ

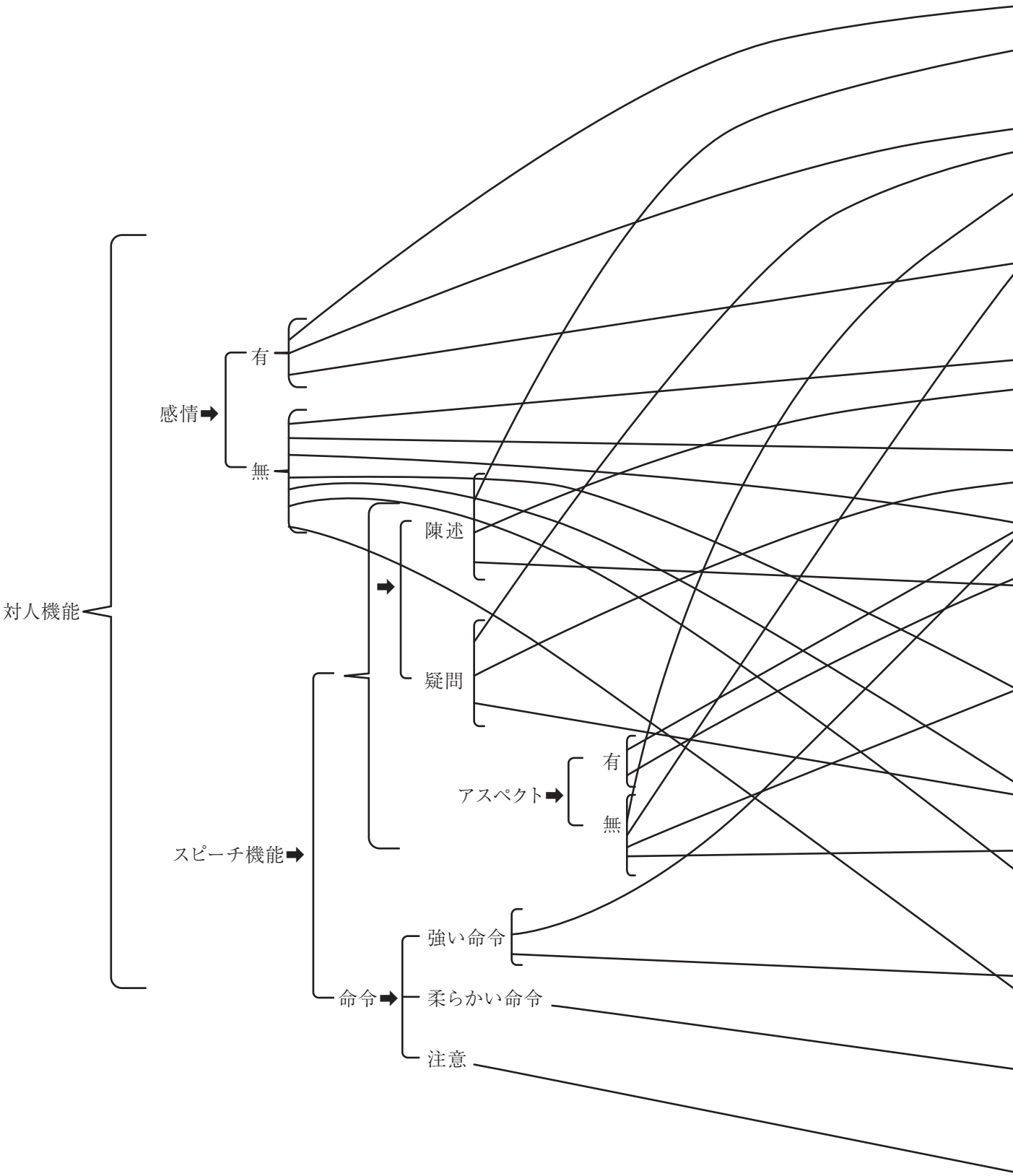
ている終助詞の用法も自然であるからである。また、本稿では、広東語終助詞の解釈に当たって Ding（2013）、Leung（2010）、Matthews & Yip（2000）も参考している。

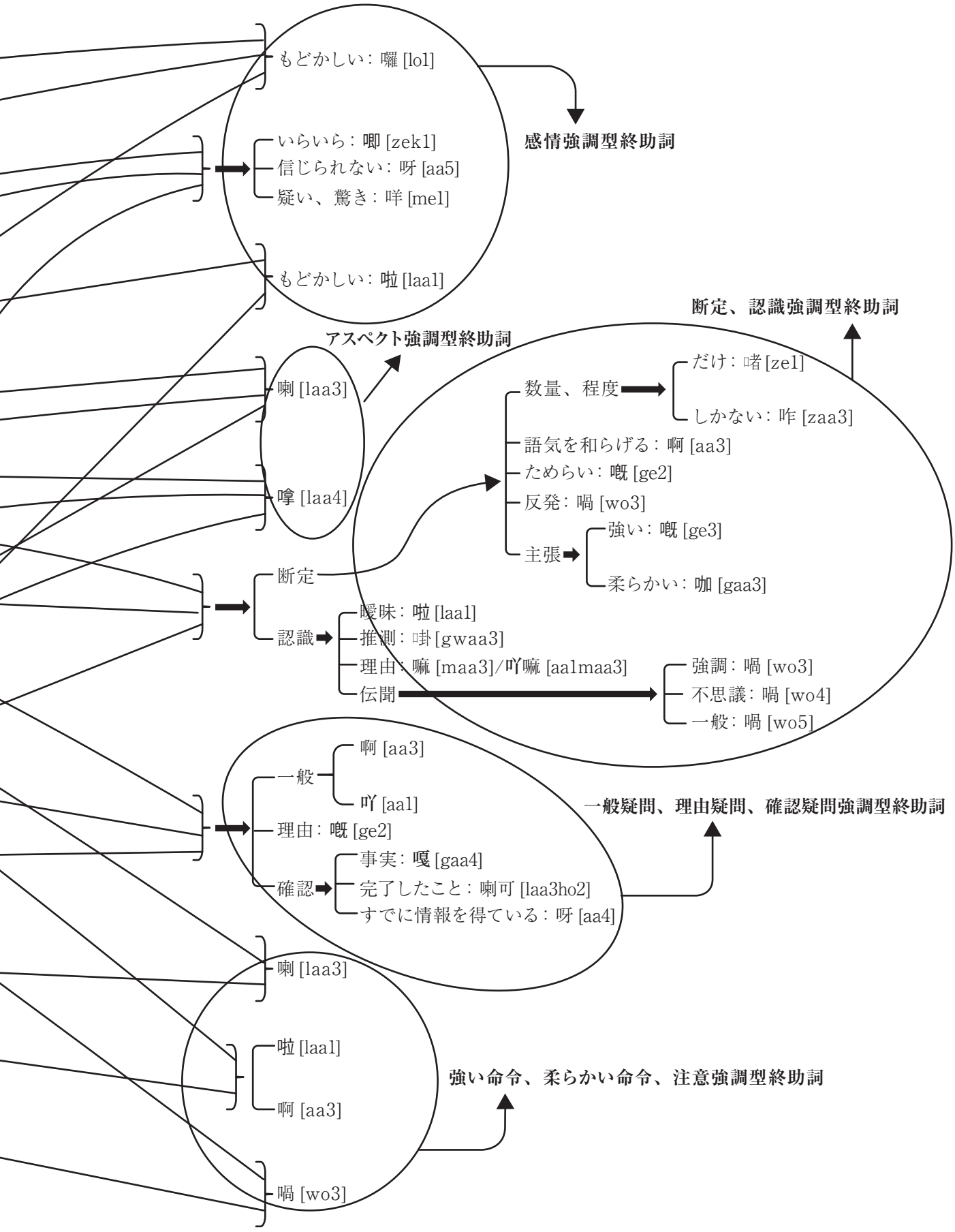
本稿で提案されるシステムネットワークは感情とスピーチ機能に焦点を置いて構築されたものであるが、前節で示唆した五つのクラスターに分かれているところに特色がある。即ち、終助詞の記述は（§2.1）感情強調型終助詞、（§2.2）アスペクト強調型終助詞、（§2.3）断定、認識強調型終助詞、（§2.4）一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞、（§2.5）強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞の五つのクラスターである。以下、ここに示されたクラスターの順番で広東語の終助詞の用法を説明していく。なお、アスペクトに関して Comrie（1976）はアスペクトを一つの出来事の内部的時間の構成要素を違った見方で見るものだと定義しているが、本稿ではアスペクトをある動作の開始、継続、完了を意味する概念として用いることにする。

5. 広東語の終助詞の機能

図１のシステムネットワークで示されている通り、広東語の終助詞はまず感情とスピーチ機能の観点から分類することができる。さらに、広東語の「陳述」は「断定」と「認識」に分けられ、疑問はさらに「一般疑問」、「理由疑問」、「確認疑問」に分けられ、「命令」はさらに「強い命令」、「柔らかい命令」、「注意」に分けられる。ここでは、5.1 感情強調型終助詞、5.2 アスペクト強調型終助詞、5.3 断定、認識強調型終助詞、5.4 一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞、5.4 断定、認識強調型終助詞、5.5 強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞という順番で説明していく。

図1. 対人機能システムネットワーク




もどかしい：囉 [lol]
いらいら：唧 [zek1]
信じられない：呀 [aa5]
疑い、驚き：咩 [mel]
もどかしい：啦 [laa1]
感情強調型終助詞
アスペクト強調型終助詞
喇 [laa3]
嗱 [laa4]
断定、認識強調型終助詞
数量、程度
だけ：𠮟 [ze1]
しかない：咋 [zaa3]
語気を和らげる：啊 [aa3]
ためらい：嘅 [ge2]
反発：喎 [wo3]
主張
強い：嘅 [ge3]
柔らかい：咖 [gaa3]
断定
認識
曖昧：啦 [laa1]
推測：𠰁 [gwaa3]
理由：嘛 [maa3]/吖嘛 [aa1maa3]
伝聞
強調：喎 [wo3]
不思議：喎 [wo4]
一般：喎 [wo5]
一般
啊 [aa3]
吖 [aa1]
理由：嘅 [ge2]
確認
事実：嗄 [gaa4]
完了したこと：喇可 [laa3ho2]
すでに情報を得ている：呀 [aa4]
一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞
喇 [laa3]
啦 [laa1]
啊 [aa3]
喎 [wo3]
強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞

5.1. 感情強調型終助詞

ここで扱う終助詞は陳述、疑問、命令に対して感情的なニュアンスを加える働きを持つ。

5.1.1. 囉[lo1]

囉[lo1]について中嶋（1981: 135）はこう説明している。

> “囉”lo は反発や非難の語気をあわらす。

Wong（2009: 65）によると、囉[lo1]は陳述文に使われ、もどかしさや歯がゆさを表し、相手を非難する意味合いを持つという。答えが明らかなこと、あるいは、理解しやすいことなのに相手が理解できないため、文句を言うときに使う。日本語の「〜よ」に対応すると考えられる。

［６］＜A が友達の B に聞く＞

A：你識游水咩？（君泳げるの？）

B：我識囉。（（もちろん）泳げるよ。）

［６］では、A は B が泳げるかどうかを疑っており、B は自分が明らかに泳げることをなぜ A が知らないのかと文句を言っているのであるが、終助詞囉[lo1]は A の言動に対するもどかしさあるいは非難の意味を表している。

5.1.2. 唧[zek1]

中嶋はこの終助詞について言及していない。唧[zek1]は疑問文に使われ、いらいらするという気持ちを表す。対応する日本語は「っていうの？」「〜んだよ？」だと考えられる。

［７］＜女性は男性に怒っているが、男性は無言で女性の手を引っ張って歩いている＞

女性：你究竟想點唧？（一体どうしたいっていうの？）

男性：我想你唔好再嚕咋。（もう怒らないでほしいだけだよ。）

女性は唧[zek1]を使うことで、自分は怒っているのに男性は無言のまま自分の手を引っ張って歩いているだけの状況に対していらいらしていることを表している。

5.1.3. 呀[aa5]

中嶋はこの終助詞について言及していない。呀[aa5]は疑問文に使われ、あることについて信じられないという気持ちを表す（Ding, 2013）。対応する日本語は「よね」だと考えられる。

［８］＜A は自分が大学に入れたことを友達の B に伝える＞

A：我入左大學呀。（僕大学に入ったよ。）

B：唔係呀？你都入到大學呀？（ウソ（だよね）？君（みたいな人）が大学に入れたの？）

「唔係」は「じゃない」という意味で命題(大学に入ったということ)は省略されている。「唔係呀」を直訳すると「じゃないよね」になるが、この状況で日本語で返事すると、「ウソ」の方が自然である。

5.1.4. 咩[me1]

咩[me1]について中嶋（1981: 136）はこう説明している。

> “咩”me は、どう考えてもその可能性がありそうには思えないというような強い疑いと驚きをあらわす語気をもつ。

咩[me1]は疑問文に使われ、疑ったり驚いたりするときに使われる（Matthews & Yip, 2000: 457）。日本語の「〜のか」に対応すると考えられる。

［９］＜A が友達の B に聞く＞

A：木村拓哉係邊個嚟咖？（木村拓哉って誰？）

B：你唔識佢咩？佢咁出名。（彼のこと知らないのか？有名なのに。）

5.1.5. 啦[laa1]

中嶋はこの終助詞について言及していない。啦[laa1]は命令文に使われ、もどかしさ、歯がゆさを表す（Wong, 2009: 49）。対応する日本語は「〜しろよ」「〜してよ」と考えられる。

［１０］＜兄と弟は出かけなければならないが、弟がまだ準備ができてなくて、兄は弟を急かしている＞

兄：冇時間喇，快啲啦！（時間ないから、速くしろよ！）

弟：知道喇。（わかったよ。）

5.2. アスペクト強調型終助詞

この節で取り扱う終助詞は陳述文と疑問文で使われる終助詞である。

5.2.1. 喇[laa3]

中嶋（1981: 70）は喇[laa3]について以下のように述べている。

> 文末に置かれる助詞の“喇 la”は状況の変化に対する確認を示すはたらきがある。

しかし、Wong（2009: 50）は、喇[laa3]は陳述文に使われ、三つの異なる機能を持つと述べている。この終助詞を使うとき、文章にアスペクトのエレメントが入っていれば、それを強調する。一方、アスペクトのエレメントがなければ、この終助詞がアスペクトを表す。

5.2.1.1. 状況の開始を強調する

喇[laa3]の一つ目の機能は、ある特定の状況の開始を強調することである。対応する日本語はコンテクストによって違う。

［１１］＜子供が母親に言う＞

子供：我　唔　　想　　食　　喇。
　　私　ない　たい　食べる　終助詞
　　（もう食べたくない。）

母親：咁就咁放喺度啦。（じゃ、そのまま残しといて。）

例文［１１］の終助詞以外の部分にはアスペクトを具現するエレメントが入っておらず、終助詞喇[laa3]がアスペクト（開始）を表しそれを強調することになる。もしこの終助詞が入っていなければ、「食べたくない」という意味になるが、喇[laa3]を入れると、ずっと食べていたが、「食べたくない」という状況が今始まったことを強調することになる。

5.2.1.2. 状況の継続を強調する

喇[laa3]の二つ目の機能は、ある特定の状況の継続を強調することである。対応する日本語は「もう～ているよ」と考えられる。

［１２］＜母親と子供が電話で話す＞

母親：你煮左飯未啊？（ごはん作った？）

子供：煮　　好　　啦。　　我　已經　食　　緊　　喇。
作る　終わる　終助詞　私　もう　食べる　ている　終助詞
（作り終わったどころか、もう食べてるよ。）

［１２］の子供の発言には喇[laa3]の前にアスペクトのエレメント「緊（ている）」（継続）が入っている。この場合、喇[laa3]はアスペクトを表すのではなく、今の状況が継続していることを強調することになるのである。

5.2.1.3. 状況の完了を強調する

喇[laa3]の三つ目の機能は、ある特定の状況の完了を強調することである。対応する日本語は「もう～たよ」だと考えられる。

［１３］＜母親と子供が電話で話す＞
母親：有冇好好食飯啊？（ごはんちゃんと食べてる？）
子供：我　食　　完　　喇。
私　食べる　終わる　終助詞
（もう食べ終わったよ。）

［１３］の子供の発言には終助詞の前にアスペクトのエレメント「完（終わる）」（完了）が入っている。このため、喇[laa3]はアスペクトを表すのではなく、「食べる」という行為が終わったことを強調することになるのである。

5.2.2. 嗱[laa4]

中嶋はこの終助詞について言及していない。嗱[laa4]は喇[laa3]と同じくある特定の状況の開始、継続、完了を表す文において使われるのであるが、これらの文を疑問文に変える時に嗱[laa4]が使われる。アスペクトを持つ文を疑問文に変える時には、この終助詞しか使えない。

［１４］＜母親が子供に聞く＞
母親：你　　唔　　想　　食　　嗱？
あなた　ない　たい　食べる　終助詞
（もう食べたくないの？）
子供：唔，我唔想食喇。（うん、もう食べたくない。）

［１４］の母親の発言には喺[laa4]以前にアスペクトのエレメントが入っていないため、喺[laa4]自体がアスペクト（この場合は開始）を表す。もしこの終助詞がなければ、「食べたくないの？」と訳せるが、喺[laa4]を入れれば、今までずっと食べていたが、今食べたくない状況が始まったのかと聞くことになる。

［１５］＜母親が子供に聞く＞

母親：你　　食　　緊　　喺？

あなた　食べる　ている　終助詞

（もう食べてるの？）

子供：唔，我已經食緊喇。（うん、もう食べてるよ。）

［１５］の母親の発言には喺[laa4]以前にアスペクトのエレメント「緊（ている）」（継続）が入っているため、喺[laa4]自体がアスペクトを表すのではなく、今起こっている状況の継続を強調して聞いていることになる。

［１６］＜母親が子供に聞く＞

母親：你　　食　　完　　喺？

あなた　食べる　終わる　終助詞

（もう食べ終わったの？）

子供：唔，我食完喇。（うん、もう食べ終わったよ。）

［１６］の母親の発言には喺[laa4]以前にアスペクトのエレメント「完（終わる）」（完了）が入っているため、喺[laa4]はアスペクトを表すのではなく、食べるという状況が終わったことを強調して聞いていることになる。

5.3. 断定、認識強調型終助詞

ここで扱う終助詞は陳述文に使われ、意見や考えを述べる機能を持つ。

5.3.1. 断定

5.3.1.1. 数量、程度

5.3.1.1.1.　だけ

中嶋（1981: 137）は啫[ze1]について以下のように述べている。

“啫”ze は、数量や程度がわずかであるという語気をあらわす。

啫[ze1]は陳述文に使われ、数量や程度がわずかであることを表す（Matthews & Yip, 2000: 467）。対応する日本語は「だけ」「ただ」だと考えられる。

［１７］唔洗咁嬲喎，問下啫。（そんなに怒らなくても…ただ聞いてみただけだよ。）

5.3.1.1.2.　しかない

中嶋（1981: 137）は咋[zaa3]について以下のように述べている。

“咋”ja は“啫”ze と軽い感嘆をあらわす“呀”a とが縮約した形式であり…

咋[zaa3]は陳述文に使われ、数量や程度がそれ以上には及ばないという意味を持っている（Wong, 2009: 57-58）。対応する日本語は「しかない」だと考えられる。

［１８］剩返５分鐘咋。（５分しか残ってないよ。）

5.3.1.2. 語気を和らげる

中嶋（1981: 133）は啊[aa3]について以下のように述べている。

“呀 a”（啊[aa3]）には、基本的に、相手の注意を喚起するはたらきがあり、①疑問　②断言　③祈求　④驚き　⑤強調　⑥列挙　⑦停頓の語気をあらわす。

啊[aa3]は陳述文に使われ、語気を和らげる機能を持っている（Wong, 2009: 62）。この終助詞は広東語の終助詞の中で最もよく使われる終助詞の一つであり、経験的機能における意味（あるいは認知的意味）は具現しないが、話し手が相手とコミュニケーションの意思があることを示す働きがあるため、使わないと不自然な文となってしまう。

［１９］＜A が友達の B に言う＞

A：呢個蛋糕好好味啊。（このケーキおいしいよ。）

B：係咩？咁等我試下先。（そうなの？じゃ、食べてみよう。）

「呢個蛋糕好好味」という文に啊[aa3]を付けないと、相手の反応を期待しない無感情の文となり、相手とコミュニケーションの意思がない文を作ってしまうことになる。啊[aa3]はそんな無感情の語気を和らげて、相手とコミュニケーションの意思があることを示すのである。尚、啊[aa3]は相手が自分のもつ情報と同質あるいは異質な情報を持っているかどうかを吟味する機能を持たないので、対応する日本語は「よ」でも「ね」でもよいことになる。

5.3.1.3. ためらい

中嶋はこの終助詞について言及していない。嘅[ge2]は陳述文に使われ、不確実さ、疑い、ためらいを表す（Matthews & Yip, 2000: 460）。日本語の「けど」と対応すると考えられる。この終助詞を使った文の後ろには何かを付け加えることが多い。

［２０］＜A が友達の B に聞く＞

A：佢唔係壞人嚟㗎可？（彼って悪い人じゃないよね？）

B：佢唔係壞人嚟嘅。不過…（悪い人じゃないけど。でも…）

B は「彼」が悪い人ではないと思ってはいるが、嘅[ge2]を使うことによって、確信を持っておらず、それ以外に何かまだ付け加えることがあることを示している。

5.3.1.4. 反発

中嶋はこの終助詞について言及していない。喎[wo3]は陳述文に使われ、相手の予想に反することを言っていることを示す（Wong, 2009: 63）。日本語の「よ」に対応する場合が多いと考えられる。

［２１］＜A が友達の B に言う＞

A：聽講你去過留學喎。（留学したことあるって聞いたんだけど。）

B：唔係啊，冇喎。（ううん、ないよ。）

A は B が留学したことがあると思っていたが、B は実際留学したことがなくて、喎[wo3]を使うことによって、A が思っていることの逆（留学したことがないのに、なぜ留学したと言うの？あるいは、誰から聞いたの？）ということを言う。

5.3.1.5. 主張

5.3.1.5.1. 強い主張

中嶋（1981: 134）は嘅[ge3]について以下のように述べている。

“嘅”ge や“嚟嘅”leih ge には事実を説明したり、確認したりする語気がある。

嘅[ge3]は陳述文に使われ、事実を説明したり、主張したりする機能を持っている（Matthews & Yip, 2000: 459）。日本語の「〜のだ」「〜んだ」に対応すると考えられる。

［２２］＜A が友達の B に聞く＞

A：呢本書係邊個送比你㗎？（この本は誰がくれたの？）

B：係朋友送比我嘅。（友達がくれたんだ。）

［２２］では、B は「この本」は友達がくれたという事実を説明しているのである。

5.3.1.5.2.　柔らかい主張

中嶋はこの終助詞について言及していない。咖[gaa3]は陳述文に使われ、嘅[ge3]と同じく事実を説明したり、主張したりする機能を持っているが、Wong（2009: 53）によると、嘅[ge3]より柔らかい感じを与えるという。日本語の「〜のだよ」「〜んだよ」に対応すると考えられる。

［２３］＜女性が男性に聞く＞

女性：點解你要講大話啊？（なんでうそをついたの？）

男性：我唔係有心去隱瞞你咖。（君を騙す気はなかったんだよ。）

［２３］では、男性は女性を騙す気はなかったということを柔らかく主張しているのである。

5.3.2. 認識

5.3.2.1. 曖昧

中嶋はこの終助詞について言及していない。啦[laa1]は陳述文に使われ、曖昧な答え方を示す（Wong, 2009: 48）。日本語の「まあ」に対応すると考えられる。この「曖昧な答え方」は謙遜と相手の言うことに対して答えたくないという２つの意味を表すことができる。

［２４］＜A が友達の B に言う＞

A：做得好好呀！　（よくできたじゃん！）

B：OK 啦！（まあね！）

啦[laa1]を使うことによって、曖昧な答え方をしていることを示しており、B は A の言ったことに対して謙遜していると解釈することもできれば、A の言ったことに対して答えたくないと思っていると解釈することもできる。

5.3.2.2. 推測

中嶋（1981: 136）は啩[gwaa3]について以下のように述べている。

> “啩”gwa は、そうではないと推量する語気をあわらす。

啩[gwaa3]は陳述文に使われ、話者の主観的な考えや不確実な推量を示す（Wong, 2009: 56）。対応する日本語は「よね」だと考えられる。

［２５］＜A が友達の B に言う＞

A：呀 C 仲唔嚟嘅。（C まだ来てないなぁ。）

B：佢唔會而家先甩底啩。（彼今更ドタキャンしないよね。）

C がまだ来てないことに対して、啩[gwaa3]を使うことによって、B はドタキャンする可能性があるかどうかを推測しているのである。

5.3.2.3. 理由

中嶋（1981: 137）は吖嘛[aa1maa3]について以下のように述べている。

> “吖嘛”a mah は理由を説明する語気をもつ。

嘛[maa3] / 吖嘛[aa1maa3]は陳述文に使われ、明白な理由を説明する機能を持っている（Wong, 2009: 56-57）。Matthews & Yip（2000: 464）によると、嘛[maa3] / 吖嘛[aa1maa3]には「知っているべき」だというニュアンスが含まれているという。対応する日本語は「だもん」「だもの」だと考えられる。

［２６］＜A が友達の B に聞く＞

A：點解啲女仔咁鍾意福山雅治嘅？（どうして女性たちは福山雅治のことが好きなの？）

B：咁佢好靚仔呀嘛。（だって、彼イケメンだもん。）

福山雅治がイケメンであることをAが知っているべきだとBは思っているのである。

5.3.2.4. 喎[wo3]

中嶋はこの終助詞について言及していない。Matthews & Yip（2000: 465）によると、喎[wo3]は陳述文に使われ、注目すべきことを強調して他人に伝えるときに使う終助詞だという。日本語の「ってよ」に対応するが、このような訳だと、喎[wo3]が何かを強調しているというニュアンスが失われてしまう。

［２７］＜Aが友達のBに言う＞

A：今晚煮呀C鍾意食嘅餸先。（今晩Cが好きな料理を作ろう。）

B：佢話今晚唔食飯喎。（彼今晩ご飯食べないってよ。）

［２７］のBの発言で、喎[wo3]は、今晩Cがご飯を食べないということを強調し、彼が好きな料理を作っても食べてくれない、無駄だというニュアンスを表している。

5.3.2.5. 喎[wo4]

中嶋はこの終助詞について言及していない。喎[wo4]は、陳述文に使われ、伝聞の内容について不思議に思う場合に用いられる（Ding, 2013）。日本語の「って」「という」に対応するが、日本語で伝聞を表すにはイントネーションで不思議な気持ちを表すのではないであろうか。

［２８］＜Aが友達のBに言う＞

A：佢話今晚唔食飯喎。（彼今晩ご飯食べないって。）

B：點解呢可？（なんでだろ？）

［２８］のBの発言で、喎[wo4]は、なぜ彼は今晩ご飯食べないのかが分からないというニュアンスを示しているのである。

5.3.2.6. 喎[wo5]

中嶋（1981: 136）は喎[wo5]について以下のように述べている。

“喎”wohには伝聞をあらわす語気がある。

喎[wo5]は陳述文に使われ、一般の伝聞を表す（Ding, 2013）。対応する日本語は「って」「という」だと考えられる。

［２９］＜A が友達の B に言う＞

A：佢話今晚唔食飯喎。（彼今晩ご飯食べないって。）

B：咁我地兩個食啦。（じゃ、僕たち二人で食べよう。）

5.4. 一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞

ここで扱う終助詞は一般的な疑問文、理由を聞く疑問文、確認する疑問文に使われるものである。

5.4.1. 一般

5.4.1.1. 啊[aa3]

啊[aa3]は疑問文に使われ、陳述文に使われるときと同じく語気を和らげるという機能を持っている。対応する日本語は「の」、「か」だと考えられる。

［３０］呢個蛋糕好唔好味啊？（このケーキおいしいの？）

終助詞を使わずに「呢個蛋糕好唔好味？」だけでも自然な疑問文になるが、啊[aa3]を使うことによって語気を和らげ、より柔らかい言い方になる。

5.4.1.2. 吖[aa1]

中嶋はこの終助詞について言及していない。吖[aa1]は疑問文に使われ、啊[aa3]と同じく語気を和らげるという機能を持っているが、（Matthews & Yip, 2000: 455）によると、啊[aa3]より少しためらいの語気があるという。対応する日本語は「の」、「か」だと考えられる。

［３１］今晚想唔想去食飯吖？（今晩ご飯食べに行きたい？）

［３１］も終助詞を使わずに「今晚想唔想去食飯？」だけでも自然な疑問文になるが、吖[aa1]を使うことによって語気を和らげ、より柔らかい言い方になる。

5.4.2. 理由

嘅[ge2]は疑問文に使われ、「どうして、なんで」など理由を表す語の疑問と共に使われる（Wong, 2009: 55）。この終助詞は驚きや意外性があったり、困惑したりする時に使われる。対応する日本語は「の」、「か」だと考えられる。

［３２］＜学生が先生に聞く＞

学生：點解個答案會變成咁嘅？（なんで答えはこうなるの？）

学生は答えがなぜそのようになったのかわからなくて、先生に聞いているのである。

5.4.3. 確認

5.4.3.1. 事実

中嶋（1981: 134-135）は嘎[gaa4]について以下のように述べている。

“㗎”gah は“嘅”ge と“吖”ah との縮約形であり、念を押して確める語気をもつ。

嘎[gaa4]は疑問文に使われ、事実を疑問にして聞いたり、ある状況を確認したりする働きを持っている（Wong, 2009: 53）。対応する日本語は「の」「か」だと考えられる。

［３３］＜この前床に落ちていた本を持っている学生に先生が聞く＞

先生：呢本書係你嘎？（この本は君のなの？）

学生：係啊。（はい、そうです。）

［３３］では、先生は「この本」は学生のものなのかに対して確認しているのである。

5.4.3.2. 完了したこと

中嶋はこの終助詞について言及していない。喇可[laa3ho2]は疑問文に使われ、完了したことを確認する機能を持っている。話者はすでに答えを知っているが、もう一度聞いて確認するときに使われる。話者の心の中にはすでに答えがあるため、もし相手の返事が話者が思っていた答えと異なる場合、驚くこともあり得る。対応する日本語は「よね」だと考えられる。

［３４］＜母親が子供に聞く＞

母親：你做完功課喇可？（宿題やったよね？）

子供：做完喇。（やったよ。）

［３４］では、母親は子供がすでに宿題を終わらせたことを前提にもう一度聞いて確認しているのである。

5.4.3.3. すでに情報を得ている

中嶋（1981: 27）は呀[aa4]について以下のように述べている。

> “吖”はすでに他から情報を得ていて、その事柄について念を押して問うときに用いられる。

呀[aa4]は疑問文に使われ、ある程度の情報を得ていて、そのことについて確かめるという働きを持っている（Wong, 2009: 61）。対応する日本語は「の」「か」だと考えられる。

［３５］＜A が友達の B に聞く＞

A：乜你都去留學呀？（君も留学するの？）

B：係啊，去留學啊。（うん、留学するよ。）

A は B が留学することについてすでに他の人から聞いていて、そのことについて B 本人に聞いて確かめているのである。

5.5. 強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞

5.5.1. 強い命令

中嶋はこの終助詞について言及していない。喇[laa3]は強く命令する機能を持っている。日本語の「～しろ」「～しなさい」に対応すると考えられる。

［３６］＜母親が子供に言う＞

母親：唔好再食零食喇！（お菓子食べるのをもうやめなさい！）

子供：食埋最後一啖！（最後のひと口！）

5.5.2. 柔らかい命令

5.5.2.1. 啦[laa1]

中嶋（1981: 135）は啦[laa1]について以下のように述べている。

“啦”la は、丁寧な依頼、示唆の語気をあらわす。

啦[laa1]は命令文に使われ、親切な態度で依頼・勧誘・示唆する機能を持っている（Wong, 2009: 49）。日本語の「～しよう」「～してね」「～ないでね」に対応すると考えられる。

［３７］＜先生が学生に言う＞

冇時間喇，快啲行啦！（時間ないから、速く歩こう！）

5.5.2.2. 啊[aa3]

中嶋はこの終助詞について言及していない。啊[aa3]は前述したように、語気を和らげる機能を持っており、穏やかで柔らかく命令する、依頼する、示唆するときに使われる。日本語の「～してね」「～ないでね」に対応すると考えられる。日本語の「～してね」「～ないでね」に対応すると考えられる。

［３８］＜すでに登校時間になっているが、子供はまだ出かけていなくて、母親は子供に言う＞

母親：快啲出門口啊。（早く出かけてね。）

子供：知道喇。（わかったよ。）

5.5.3. 注意

中嶋はこの終助詞について言及していない。喎[wo3]が命令文に使われるとき、優しく注意する機能を持っている。日本語の「～してね」「～ないでね」に対応すると考えられる。

［３９］＜姉が弟に言う＞

唔好遲到喎。（遅れないでね。）

6. 結論

本稿ではシステミック言語学の視点から広東語の終助詞について考察した。『広東語四週間』における終助詞の解釈の訂正を行いながら、広東語の終助詞が（１）感情強調型終助詞、（２）アスペクト強調型終助詞、（３）一般疑問、理由疑問、確認疑問強調型終助詞、（４）、断定、認識強調型終助詞（５）強い命令、柔らかい命令、注意強調型終助詞という 5 つのカテゴリーに再編されるとの立場から、広東語のシステムネットワークを提案した。Wong（2009）の提案している広東語の終助詞のシステムネットワークをベースとしたものだが、Wong (2009) のシステムネットワークより体系的まとめとなっているのではないだろうか。

また、中嶋（1981）の広東語の終助詞の機能解釈に訂正を加えながら、日本語でどのように訳したらいいのかも提案させていただいたが、これもまた本稿の目的の一つであった。前節で提案した広東語の終助詞と日本語との対応関係を表１にまとめたので参照願いたい。

表１．広東語終助詞と日本語との対応表

広東語の終助詞	対応する日本語
もどかしい：囉[lo1]	よ
反発：喎[wo3]	
いらいら：啲[zek1]	っていうの？、んだよ？
疑い、驚き：咩[me1]	のか
じれったい：啦[laa1]	しろよ、してよ
だけ：嗰[ze1]	ただ、だけ
しかない：咋[zaa3]	しかない
ためらい：嘅[ge2]	けど
強い主張：嘅[ge3]	のだ、んだ
柔らかい主張：伽[gaa3]	のだよ、んだよ
曖昧：啦[laa1]	まあ
信じられない：呀[aa5]	よね
推測：啩[gwaa3]	
完了したこと：喇可[laa3ho2]	
理由：嘛[maa3] / 吖嘛[aa1maa3]	だもん、だもの
強調：喎[wo3]	ってよ
不思議：喎[wo4]	って、という
一般伝聞：喎[wo5]	
一般疑問：吖[aa1]	の、か
一般疑問：啊[aa3]	
理由：嘅[ge2]	
事実：嘎[gaa4]	
すでに情報を得ている：呀[aa4]	
アスペクト疑問：喺[laa4]	
強い命令：喇[laa3]	しろ、しなさい
柔らかい命令：啦[laa1]	しよう、してね、ないでね

柔らかい命令：啊[aa3]	してね、ないでね
注意：喎[wo3]	
状況の継続を強調する：喇[laa3]	もう～ているよ
状況の完了を強調する：喇[laa3]	もう～たよ
状況の開始を強調する：喇[laa3]	（終助詞の喇[laa3]はアスペクト［開始］を表しそれを強調することに留意し対応する日本語を探す。）
語気を和らげる：啊[aa3]	（啊[aa3]が無感情の語気を和らげて相手とコミュニケーションの意思があることを示す機能を持つことに留意し対応する日本語を探す。）

なお、本研究は、対人機能の視点からの広東語の終助詞分析に限定したが、Wong（2009）によると、広東語の終助詞には観念構成機能及びテクスト構成機能を具現するものがあるという。本研究では観念構成機能及びテクスト構成機能を具現する終助詞の分析できなかった。これは今後の課題としたい。

資料

表２．広東語の声調表

声調番号	声調名	声調パターン	例字	表記法
第１声	陰平声	高平調	分	fan1
第２声	陰上声	高昇調	粉	fan 2
第３声	陰去声	中平調	訓	fan3
第４声	陽平声	低降調	焚	fan4
第５声	陽上声	低昇調	奮	fan5
第６声	陽去声	低平調	份	fan6
第７声	上陰入声	高促調	忽	fat1
第８声	下陰入声	中促調	發	faat3
第９声	陽入声	低促調	佛	fat6
*広東語には 9 つの声調がある。声調のパターンは主に高調（高い音調）、中調（平常の音調）、低調（低い音調）に分かれ、さらに、平調（伸びる）、昇調（上がる）、降調（下がる）、促調（短くつまる）4 つに分かれる。				

参考文献

Comrie, B. (1976) Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems. Cambridge University Press.

Ding, P.S. (2013) From Intonation to Tone —The Case of Utterance-Final Particles “aa” and “wo” in Cantonese. Modern Linguistics 现代语言学, 2013, 1, 36-41.

Leung,W.M. (2010) On the Identity and Uses of Cantonese Sentence-final Particles in the Late 20th Century: The Case of wo (喎) and bo (嘩). Asian Social Science.

Wong,Y.T.S. (2009) The linguistic function of Cantonese discourse particles in the English medium online chat of Cantonese speakers. University of Wollongong Thesis Collections.

中嶋幹起（1981）『広東語四週間』東京：大学書林.

Matthews, S., & Yip, V.（2000）『広東語文法』千島英一と片岡新訳. 東京：株式会社東方書店.

日本の主婦が作る理想的女性像の時代別変化

オランコン・チャイチョンプー

序論：歴史的背景を中心に

人間は皆、生まれ持った身体の性別があり、男性または女性、あるいは生まれながらに二つの中、どちらかの生殖機能を持っている[1]。この生物学的な性差（Sex）は生涯にわたって一生変更はない[2]。複雑な人間社会の中、生物学的な性差（Sex）は人の生き方や、意識、考え方、行動に影響を与えるのだ。生殖機能の違いで「男性だから・女性だから」、と区別され「こうあるべき」という固定した価値観が誕生し、それが「ジェンダー」という言葉で表現されている [与那嶺涼子, 2011]。ジェンダー（Gender）とは英語から由来した言葉で、ジェンダーは生物学的な性差（Sex）に社会的・文化的性差の意味が付加された言葉である(*Genderspectrum, Understandng Gender*, 2015)。日本の現代社会では「ジェンダー」という言葉はもう目新しいものではない[3]。ジェンダーで役割を決め付けられるといった性別役割分業の文化は日本の社会の特徴と言える。平成19年度内閣府の世論調査で、日本では、男性＝外で仕事、女性＝家庭といった性別役割意識に「賛成」寄りが48%、反対が52%と約半々の割合だったが、実は他国と比べて日本は性別役割分業の意識がだいぶ高い。また、日本では、男女は平等であるとの教育を受けているにもかかわらず、日本社会で責任ある立場にある圧倒的多数は男性である [与那嶺涼子, 2011]。

日本の歴史上、江戸時代の社会は男性を中心とした社会であった。例えば、「男の甲斐性」という考え方について。幕府は儒教を奨励し、男性は娼婦と遊ぶことが男の甲斐性であるとされていた。逆に、女性はものを言わず耐えることだけを要求された。夫がどのように狂暴であっても、もしくは家庭生活に全く責任をとらないとしても、妻は我慢するのが時代の風潮だった [中津攸子, 2015]。我慢しきれなくても、離縁する権利は男性にしかなかった。さらに、江戸時代は三徒の教え「幼きにしては父兄に従い，嫁しては夫に従い，老いては子に従う」といった女性の一生涯が男性に服従したものに限定されていた [中津攸子, 2015]。明治代になり、男女は肉体的にも精神的にも相違点があるといった「性差」に関する学問が欧米で間も無く誕生し、日本人にも影響を与えた。

明治時代に、日本は近代国家として欧米諸国に追いつくために、女性は国民として養成される必要があるとみられた [小山静子, 2009]。そのため、明治 28(1895 年)1 月、文部省令として「高等女学校規程」が出された。明治 32(1899)年 2 月勅命として「高等女学校令」が公布され、明治 36(1903)年までに全国に公立高等女学校が次々と設立されていくことになる [小山静子, 2009]。

高等女学校の内容を見ると、数学や外国語の授業以外、修身、家事、裁縫、音楽などが必修として加えられている [小山静子, 2009]。そのきっかけは、当時の社会には女子教育不要論がまだ根強く存在していたとみられ、女子を学校に通わせて家事能力を身につけていない「生意気な」女性になるような教育は社会には認めがたいものであった [小山静子, 2009]。また、江戸期の女訓書の「男尊女卑」は否定されて、男女同等とみなされた [小山静子, 2009]。しかしながら、男女の同等性はハヴ

---

[1] 生まれ持った身体の性別が生物学的に判別することが難しい人もいる。このような性質を持つ人を例えばインターセクシュアル(Intersexual) と呼称する。

[2] 現在、外科手術で変更できる場合があり、それを性別適合手術と呼称する(Sex Reassignment Surgery)。

[3] ci.nii.ac.jp という論文や図書・雑誌などの世界中の学術情報を検索できるデータベース・サービスで「ジェンダー」と検索してみると、約 1 万 4 千のジェンダーに関する日本語の論文や図書・雑誌が出てくる。

エロック・エリスの影響を受け、科学的に説明された男女の相違論を用いて、説得力のある理論として「男女同等」が作られた[4]。これにより、男女は生殖能力、また生理的、心理的にも異なっており、性差によって「自然な分業」、「天職」があるという「性差」が存在する理論的根拠が表された [小山静子, 2009]。この性差心理学を用いた結果、「男尊女卑」の代わりに、男は仕事、女は家庭といった性別役割分業が認識され始めた。近代国家として日本の女性は女子を教育することが必要不可欠だったが [小山静子, 2009]、それは女性は一人の国民として将来家庭教育を担う、中人[5]以上の「家に嫁し、賢母良妻」になるために「良妻賢母教育」を受けることになった。男は仕事、女は家庭という近代的な性別役割分業に即応した形であった。しかしながら、明治時代から大正時代にかけて、女性の政権参加や労働権利（8 時間労働をまもる）等を要求する運動が起き、夫の絶対的な支配権、また性による差別を撤廃するなどの改善が見られた。その結果、女性も自分の人生、個人的な幸福を求めるようになり、徐々に社会進出ができるようになったが [中津攸子, 2015]。しかしながら、本当の意味での女性の権利が確約されるのは、日本の敗戦後となり、男女同権が実現することにより主婦がある程度解放された。しかしながら、第二次世界大戦後も依然として、女性の労働条件は男性より低いままであった。働く女性の数は急増し、働かない女性の数とほぼ同じとなったが、多くの女性は結婚後、育児に従事するため、就職年限が短くなり、女性の労働は敬遠されがちだと言われていた [中津攸子, 2015]。女性たちはこのような状況を問題視し、託児所の増設や女性の低賃金の改善を呼びかけるなど、女性運動による改革が始った。1976 年に政府も婦人問題企画推進本部を設置した [中津攸子, 2015]。さらに、女性の地位向上と女性差別撤廃を目的として世界女子会議 1975 年第一回、1980 年第二回、及び 1985 年第三回に参加し、託児所の増設や女性の低賃金改善などの実現に向けて動いた [中津攸子, 2015]。平成時代に入っても、日本の女性の労働条件、男女賃金不平等などの問題はまだ解決されていない状況である。

1999 年に江原由美子は「男子高校生の性差意識」という研究テーマで男女平等教育を受けている若い世代の男子校、女子校、共学校男子、共学校女子を対象とした調査を発表した。その結果は若い世代おいて「性別分業意識」などの固定的な男女の性別役割意識に否定する者の比率が高くなっていることを明らかにした [江原由美子, 2009]。特に、若い女性の意識が「女性は家庭を守る」という役割だけではないという傾向にどんどん変化しているのに対し、男性の方はあまり変化していない。さらに注目したい点は男子校だ。対象の中で最も固定的な男女役割を意識している彼らはどの対象よりも家族から「男なら女に負けるわけにはいけない」という「男らしさ」を期待されている。また、男子校では、当たり前であるが学生は男子のみで、女性と接する機会が少ない。そのような環境の中、男女平等教育を受けても「空白域」ができてしまうことは否めない [江原由美子, 2009]。それに対して、女子校では「進学・職業参加・社会参加」を鼓舞するような教育を行っているため、対象の中で固定的な男女役割について最も革新的な意識がみられた。

日本は戦前、農業を中心した社会であったが、戦後には一変されて工業化社会となった。以前は、農業家庭は家族が経営単位であり、家族従業が必要だったため、家族と同居することが多かった [木田淳子, 1994]。しかし、工業化した社会であると、会社や工場に雇用され、働く人口が増加しつつ、親と同居することは必要なくなる。それをきっかけに、若い人達がどんどん都市に移動し、雇用労働者になることによって大家族であった日本人の家族の形が変化していった。あるいは、それ

[4] 小山静子は「明治時代に国民として男女は同等とみだされたが、この男女の同等の実質的には全く同等といえるようなものではなかった。男性が携わる職業などの社会的な役割つまり生産労働は、女性のになう家庭内役割つまり再生労働に対して、明らかに経済的に優越しているからである。」と述べている [小山静子, 2009]。

[5] 「中人」とは、才能や能力などが中くらいの人、並の人、普通の人と定義される。

らの若い人たちが実家を出て都市で新しい小さな核家族をつくるようになったと言える [木田淳子, 1994] 。1955 年以降、日本は「高度成長期」に入る。この高度成長期から核家族が増加した。とくに、1960 年には核家族化が急速に増加し、1955 年～1965 年の十年かけて日本の家族の平均人数が 5 人から 4 人に減った [木田淳子, 1994]。こうなった日本では女性も家族従業から雇用労働へ変化するほかなかった。雇用労働になると、これまでのように母親が子供を世話しながら働くことがむずかしくなった。しかし、日本の女性は昔ながらの性差別役割観を持ち、子育てや家庭生活を支える独自の責任を持つ。それによって女性は子育てのために一定期間、労働から撤退しがら、家族生活を支える。また働くという形が一般化したのは高度成長期である [木田淳子, 1994]。日本は企業主義的な社会、職場での激しい競争がある社会になってしまったことが家族の形に大きな影響を与えた。要するに、女性が家事や育児などの家庭を支える役をし、男性は外で働くといった家族と職場を分ける考え方、「性別役割分業」である。

日本では男女平等の問題についての研究は豊富であるが、主婦、あるいは結婚した、ある意味「結婚できた」女性達は理想的な女性像をどのように意識しているのであろうか。その在り方は「性別役割分業」の影響をどのようにうけているかといった研究はあまりない。さらに、年齢によって性別役割分業意識は異なり、または大きく変容していると考えられる。現代のグローバリゼーション社会の中、人々は世界的な水準の男女同権を要求するようになってきた。このような社会的なジェンダーについての意識の革命が日本でも起りつつある。この研究では、高度成長期の最中もしくはその後に生まれ、高度成長期に幼い頃、青春の頃を送った 30～50 代主婦と高度成長期の前もしくはその前半に生まれ、高度成長期に青春の頃、成人生活を送った 60～70 代主婦、2 代の異なった時代の主婦の女性像に関する意識調査を行う。また、主婦にとって女性像がどのように変容しているのか、いまだに、「性別役割分業」の影響がみられるのか、もしそうならばそのような意識の起因はどこにあるのかを分析する。

本論

- 調査方法

この調査においては、大分・宮崎県内 9 人の 30～50 代主婦と 11 人の 60～70 代主婦の間で比較を行うために共通質問を設けている。アンケートでは性別役割分業意識について女性としての能力や役割に関して 12 項目をあげる。また、女性の人格とイメージに関する質問を 15 項目あげる。これらの 27 項目に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらでもない」「どちらかといえば そう 思わない」「そう思うわない」という選択肢から選択してもらった。さらに、自由記述形式として、「あなたにとって女として成功するというのはどんなことですか」「あなたが育ちが良いと思うのはどんな女性ですか」「あなたの理想的な主婦」といった 3 項目の質問に回答してもらった。

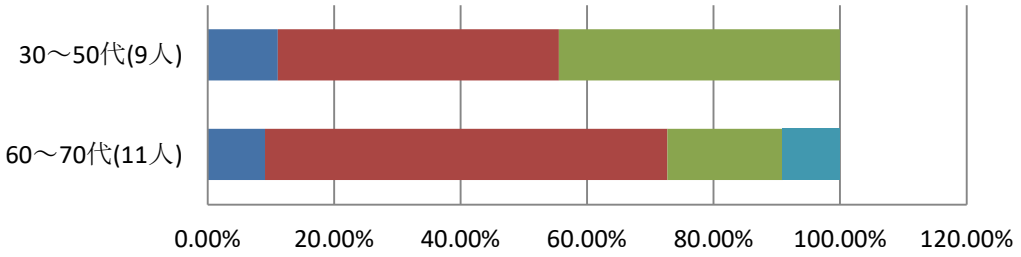
- 項目選択方式のアンケート調査結果の分析

本調査の選択肢アンケートの結果からわかったことは、60～70 代主婦は 30～50 代主婦より「男性＝外で仕事、女性＝家庭」といった性別役割分業意識を持つ人の割合がやや多いことである。しかしながら、自由記述のアンケート結果を見ると両世代とも家庭を守ることは女性の義務であるような回答が多いが、30～50 代主婦は 60～70 代主婦より、個人のこと、例えば、自由な時間、独自の生き方を尊重していることは明らかである。一方、自由記述の 3 項目の質問に対して 60～70 代

主婦は無回答の割合が 7 割だったため、両世代の大きな意識の違いを結論付けるまでには至らなかった。

以下の図 1～5 は女性としての能力についての質問の統計結果である。まず、「女性は料理ができるべきだと思う」という質問に対する賛否をみてみよう(図 1 参照)。

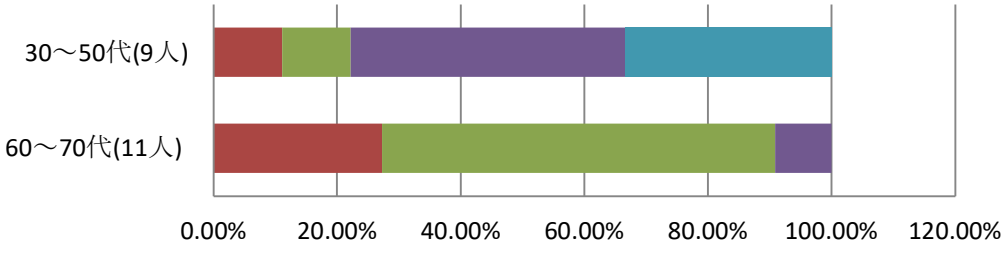
図1 女性は料理ができるべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	9.09%	11.11%
どちらかといえばそう思う	63.63%	44.44%
どちらでもない	18.18%	44.44%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	0.00%
そう思うわない	9.09%	0.00%
無回答	0.00%	0.00%

60～70 代主婦は 9.09%が「そう思う」63.63%が「どちらかといえばそう思う」といった「賛成」寄りの割合が多いという結果になった。30～50 代主婦は「賛成」寄りに相当する「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が 55.55%で前者より若干少ない。

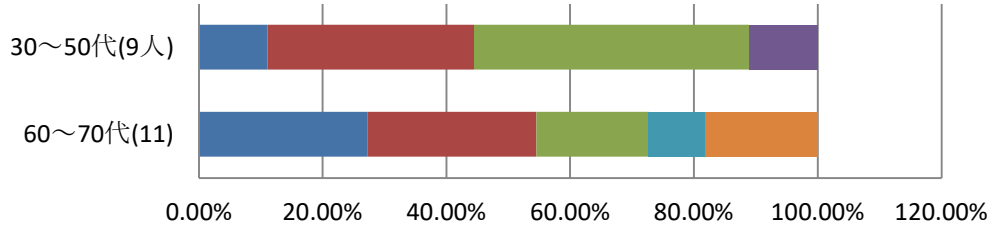
図2　市販の合わせ調味料やインスタント調味料を使った際、抵抗を感じる (クックドゥやインスタントだしなど)



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	0.00%	0.00%
どちらかといえばそう思う	27.27%	11.11%
どちらでもない	63.63%	11.11%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	44.44%
そう思うわない	0.00%	33.33%
無回答	0.00%	0.00%

さらに、「市販の合わせ調味料やインスタント調味料を使った際、抵抗を感じる」という質問に対する(図 2 参照) 60～70 代主婦は 27.27%が「どちらかといえばそう思う」、63.63%が「どちらでもない」、9.09%が「どちらかといえばそう思うわない」との結果となっているが、30～50 代主婦は 44.44%が「どちらかといえば そう 思わない」、33.33%が「そう思うわない」となっている。30 代～50 代主婦の回答を見れば、明らかに「反対」といった答えが多いが、60～70 代主婦の半数以上が、「どちらでもない」と回答した。この結果から、30～50 代主婦は 60～70 代主婦ほど市販の合わせ調味料やインスタント調味料を使用することに対して抵抗を感じていないと推測できる。

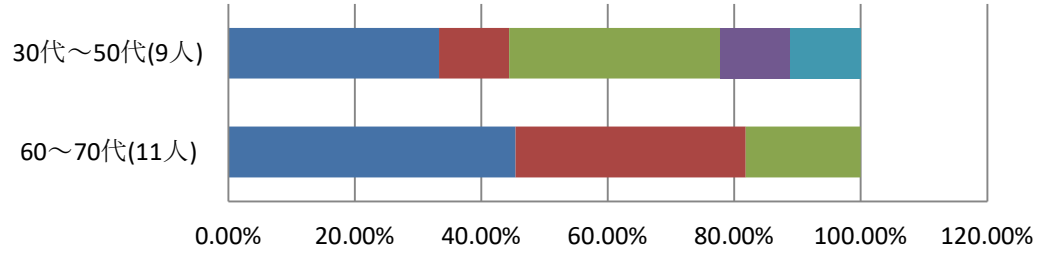
図3　女性は家事ができるべきだと思う



	60～70代(11)	30～50代(9人)
そう思う	27.27%	11.11%
どちらかといえばそう思う	27.27%	33.33%
どちらでもない	18.18%	44.44%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	11.11%
そう思うわない	9.09%	0.00%
無回答	18.18%	0.00%

家庭管理能力、「料理ができる」以外にも「家事」と「家計管理」についての質問を行った(図 3、4 参照)。結果的には、大きな違いが見られなかった。30～50 代主婦は「女性は家事ができるべきだ」という質問に対して、「賛成」寄りの回答と「どちらでもない」が半々の割合であり、60～70 代主婦の半分が、54.54%と「賛成」寄りだった。しかしながら、後者の「賛成」寄りの中には「そう思う」と答えた人の割合が前者より 16%多い。60～70 代主婦は女性なら「家事」という家庭内の役割を担う能力を持つべきだと強く思う人の割合が 30～50 代主婦より若干多いことがわかった。

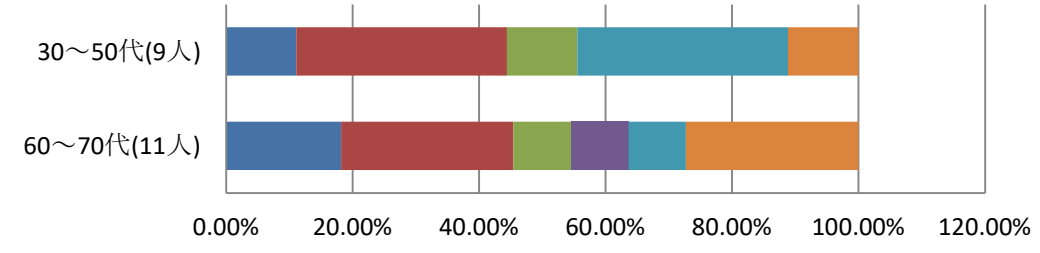
図4　女性は家計を管理する方法を知っておくべきだと思う



	60～70代(11人)	30代～50代(9人)
そう思う	45.45%	33.33%
どちらかといえばそう思う	36.36%	11.11%
どちらでもない	18.18%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	11.11%
そう思うわない	0.00%	11.11%
無回答	0.00%	0.00%

家計管理（図４参照）についての質問では 60～70 代主婦の 45.45％が「そう思う」、36.36％が「どちらかといえばそう思う」というように「賛成」寄りの割合が 8 割に達する。一方、30～50 代主婦は、33.33％が「そう思う」、11.11％が「どちらかといえばそう思う」と「賛成」寄りの回答がおよそ 4 割という結果である。また、33.33%が「どちらでもない」となり、「反対」の回答となる「どちらかといえばそう思うわない」が 11.11％、「そう思わない」が 11.11％であった。「家計管理」という家庭内の家計を管理する方法を「女性」は知っておくべきものだと考えている 30～50 代主婦の割合が 60～70 代主婦のより 37％少ないという結果である。すなわち、60～70 代主婦の多くは女性は家計を管理する方を知っておくべきだと考えていることがわかる。

図5　女性は裁縫ができるべきだと思う



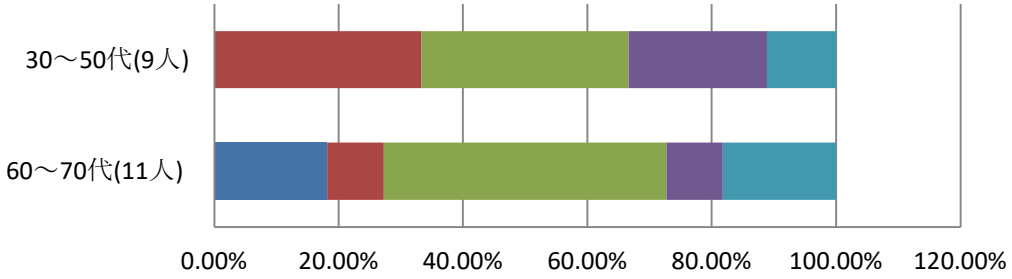
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	11.11%
どちらかといえばそう思う	27.27%	33.33%
どちらでもない	9.09%	11.11%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	0.00%
そう思うわない	9.09%	33.33%
無回答	27.27%	11.11%

これまで、家庭を管理する能力である「料理」、「家事」、「家計」についての全ての質問に関して、60～70 代主婦は 30～50 代主婦より「女性ならこのような能力と役割をもつべきだ」といった考え方を持つ割合がやや大きいという結果であった。しかしながら、「女性は裁縫ができるべきだと思う」という質問の結果を見ると(図 5 参照)、両世代「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と「どちらでもない」の回答の割合がほぼ同じとなっている。だが、30～50 代主婦は「そう思わない」の割合が 60～70 代主婦のより 20%多い。さらに、60～70 代主婦の無回答の割合は 27.27%もある。

「裁縫」という能力は「女性ならこれができるべき」というような「料理」や「家事」の能力の範囲に入っていないと見られる可能性がある。すなわち、裁縫は家庭内を管理するために、欠かせない能力だと思われていないため、このような結果となったと考えられる。

次に、図 6～9 は女性としての役割に関する質問の結果である。

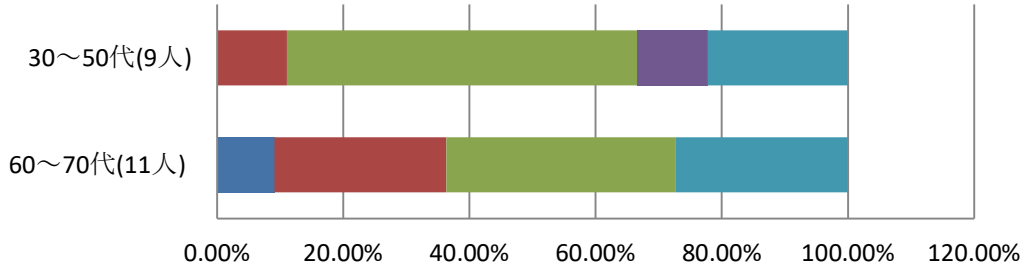
図6　女性は結婚して家庭を築くべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	9.09%	33.33%
どちらでもない	45.45%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	22.22%
そう思うわない	18.18%	11.11%
無回答	0.00%	0.00%

「女性は結婚して家庭を築くべきだと思う」(図 6 参照)という質問に対して、60～70 代主婦の回答の中でもっとも大きな割合を占めたのは「どちらでもない」であるが、結果的に両世代とも「反対」、「賛成」寄りの割合はほぼ同じである。それでも、60～70 代主婦の中では「そう思う」と答えた人がいることに対して、30～50 代主婦の中では全くいない点、そして 60～70 代の「そう思わない」と答えた人が 30～50 代より多いという点も見逃せない。

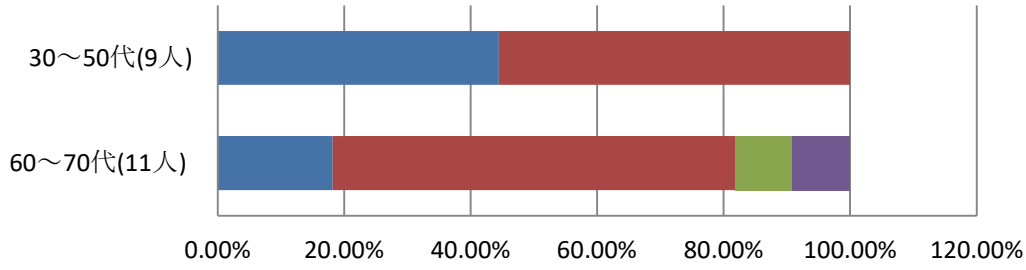
図7　家事や育児は男性より、女性の仕事だと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	9.09%	0.00%
どちらかといえばそう思う	27.27%	11.11%
どちらでもない	36.36%	55.55%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	11.11%
そう思うわない	27.27%	22.22%
無回答	0.00%	0.00%

「家事や育児は男性より、女性の仕事だと思う」(図 7 参照)という質問に対し、30～50 代主婦の 11.11％が「どちらかといえばそう思う」、55.55％が「どちらでもない」、11.11％が「どちらかといえばそう思わない」、22.22％が「そう思わない」と回答した。60～70 代主婦は 9.09％が「そう思う」、27.27％が「どちらかといえばそう思う」、36.36％が「どちらでもない」、27.27％が「そう思わない」との結果となっている。60～70 代主婦は家事や育児という役割は男性の役割というより女性の役割だという考え方を持つ人が 30～50 代主婦より多いことがわかった。

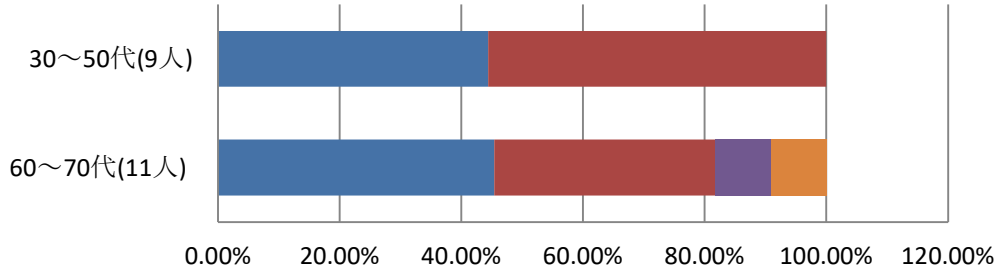
図8　女性も社会進出をするべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	44.44%
どちらかといえばそう思う	63.63%	55.55%
どちらでもない	9.09%	0.00%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	0.00%
そう思うわない	0.00%	0.00%
無回答	0.00%	0.00%

「女性も社会進出をするべきだと思う」(図 8 参照)という質問の結果は 30～50 代主婦は 100％「賛成」寄りであり、44.44％が「そう思う」、55.55％が「どちらかといえばそう思う」という結果となった。一方、60～70 代主婦の結果を見ると、8 割は「賛成」寄りだが、「どちらでもない」もしくは「どちらかといえばそう思わない」と答えた人もいる。

図9　女性も働ける能力を高める努力が必要だと思う



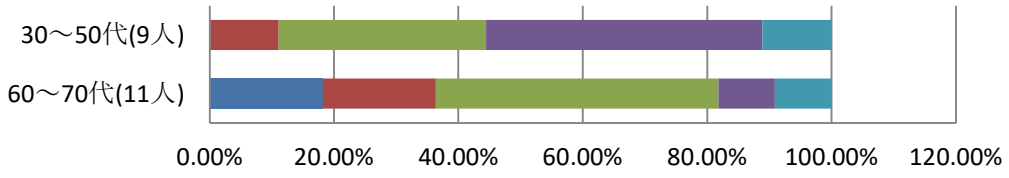
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	45.45%	44.44%
どちらかといえばそう思う	36.36%	55.55%
どちらでもない	0.00%	0.00%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	0.00%
そう思うわない	0.00%	0.00%
無回答	9.09%	0.00%

「女性も働ける能力を高める努力が必要だと思う」(図 9 参照)という質問に対して、30～50 代主婦は 100%が「賛成」寄りであり、44.44%が「そう思う」、55.55%が「どちらかといえばそう思う」と回答している。60～70 代主婦の 8 割も「賛成」寄りだが、「どちらかといえばそう思わない」と答えた人もいる。

「女性の役割」についての全質問の結果をみると、30～50 代主婦の多くは「家事」や「育児」の役割は「男性より女性の役割」と見なさない考え方を持っているのに対し、60～70 代主婦の中には「男性より女性の役割」であるという考え方を持つ人がより多いことが見られる。また、60～70 代主婦と 30～50 代主婦にとって女性は「家族」、「結婚」だけではなく、社会進出、働く能力も必要とされているが、60～70 代主婦の中には女性の役割はやはり「家庭の中」というような考え方を持つ人も存在する。

図 10～11 は趣味と習いごとの能力についての質問の結果である。

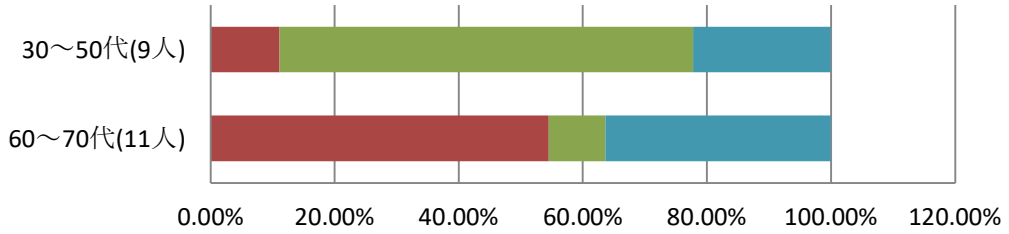
図10　女性は女性らしい趣味を持ったほうがいいと思う (手芸など)



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	18.18%	11.11%
どちらでもない	45.45%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	44.44%
そう思うわない	9.09%	11.11%
無回答	0.00%	0.00%

まず「女性は女性らしい趣味を持ったほうがいいと思う (手芸など)」(図 10 参照)という質問については、60～70 代主婦の方が「賛成」寄りの回答をしている割合が多い。18.18%が「そう思う」、18.18%が「どちらかいえばそう思う」という結果である。一方、30～50 代主婦は、「賛成」寄りの答えの割合が「どちらかいえばそう思う」の 11.11%に留まった。

図11　女性は日本の伝統的な文化や習い事を学んで身につけるべきだと思う(華道、茶道、着付など)



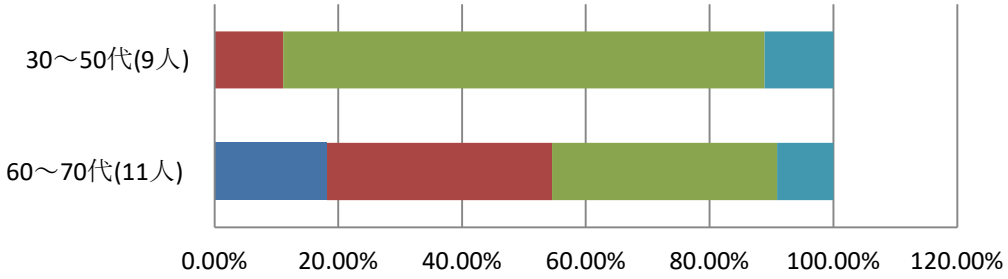
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	0.00%	0.00%
どちらかといえばそう思う	54.54%	11.11%
どちらでもない	9.09%	66.66%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	0.00%
そう思うわない	36.36%	22.22%
無回答	0.00%	0.00%

「女性は日本の伝統的な文化や習い事を学んで身につけるべきだと思う(華道、茶道、着付など)」(図 11 参照)という質問に対して、60～70 代主婦が 30～50 代より「賛成」寄りの割合が多い。60～70 代では 54.54%が「どちらかいえばそう思う」と回答しているのに対して、30～50 代では 11.11%が「どちらかいえばそう思う」という結果だった。

図 10～11 によれば、両世代の主婦の半数以上が女性は「女性らしい趣味」を持つべきだということにこだわらないことがわかった。さらに「女性」に「女性らしい趣味、日本の伝統的な習い事」を求めるのは 30～50 代主婦より 60～70 代主婦のほうが多いことが明らかになった。

図 12～14 は主婦にとって特定の「語彙」が「女性」を連想させるか、どうかの質問の結果である。

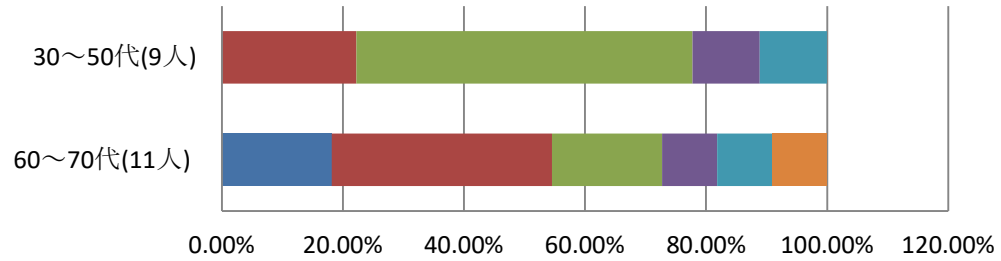
図12　女性というと「やさしさ」や「丁寧さ」という言葉が思い浮かぶ



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	36.36%	11.11%
どちらでもない	36.36%	77.77%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	0.00%
そう思うわない	9.09%	11.11%
無回答	0.00%	0.00%

まずは、「やさしさ」や「丁寧さ」という語彙である(図 12 参照)。この質問の回答結果には大きい差が見られる。60～70 代主婦は「賛成」寄りの割合が多く、18.18%が「そう思う」、36.36%が「どちらかといえばそう思う」という結果だが、30～50 代主婦は 7 割強が「どちらでもない」と答えた。「賛成」寄りの回答は、「どちらかといえばそう思う」の 11.11%に留まった。

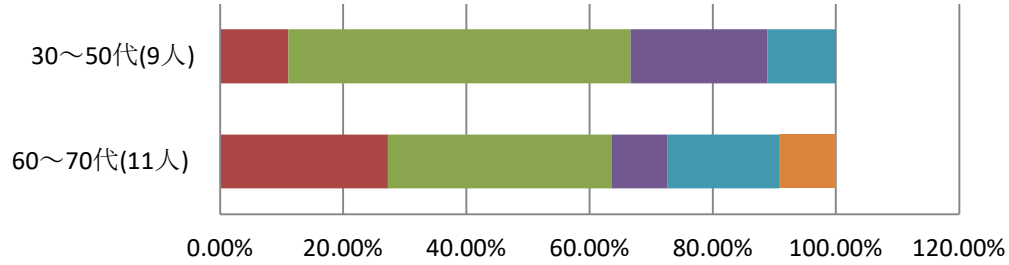
図13　女性というと「細やかな」や「心配り」という言葉が思い浮かぶ



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	36.36%	22.22%
どちらでもない	18.18%	55.55%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	11.11%
そう思うわない	9.09%	11.11%
無回答	9.09%	0.00%

次に、「細やかな」や「心配り」という語彙についての質問である(図 13 参照)。60～70 代主婦では「賛成」寄りの割合が「そう思う」の 18.18%、「どちらかといえばそう思う」の 36.36%となっている。一方で、30～50 代主婦の約半数は「どちらでもない」と答えた。「賛成」寄りの割合は図 12 の割合より少し増加し、「どちらかといえばそう思う」の 22%という結果となっている。

図14　女性というと「おとなしい」や「穏やか」という言葉が思い浮かぶ



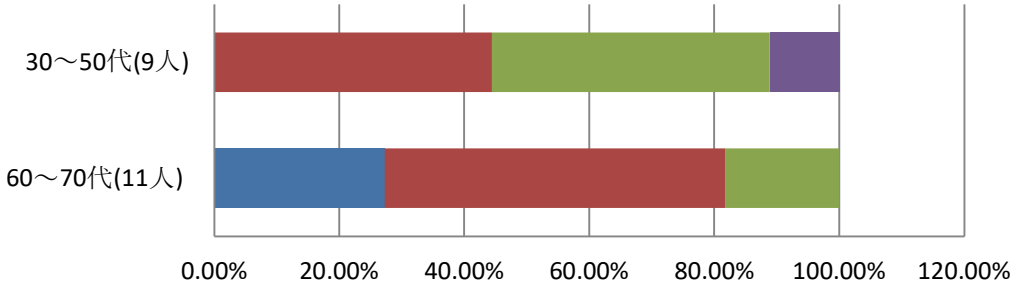
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	0.00%	0.00%
どちらかといえばそう思う	27.27%	11.11%
どちらでもない	36.36%	55.55%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	22.22%
そう思うわない	18.18%	11.11%
無回答	9.09%	0.00%

図 14 は、「おとなしい」や「穏やか」という語彙に関する結果である。こちらは上記の語彙ほど大きい違いが見られないが、60～70 代主婦の「賛成」寄りの割合は 30～50 代主婦のより少し多い。

「やさしさ」や「丁寧さ」、「細やかな」や「心配り」、「おとなしい」や「穏やか」、これらの語彙で「女性」を連想するということは、「このようになってからこそ女性だ」との考えに起因していると思われる。60～70 代主婦の約半数がこれらの語彙で「女性」を連想している。それに対し、30～50 代主婦にとってこれらの語彙で「女性」を連想する人の割合が少ない。つまり、60～70 代主婦の半数にとって女性はやさしく、丁寧であるべきだとのイメージがある。また、女性は細やで、心配りが必要だとも思っているようだ。しかしながら、多くの 30～50 代主婦にとって「女性」のイメージは、このような語彙だけに限られていないという結果が見られた。

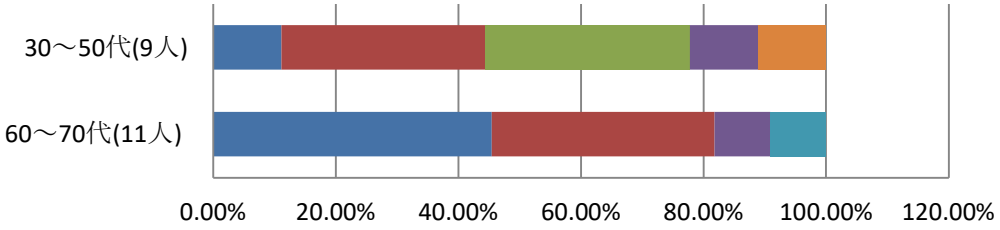
図 15～20 は女性としての振る舞い方についての質問の結果である。

図15　女性は細やかな気遣いができるべきだと思う



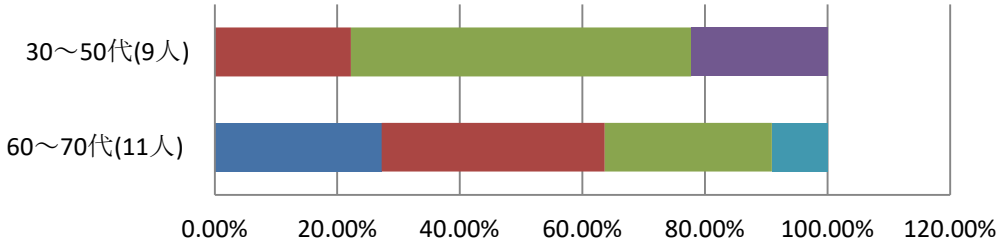
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	27.27%	0.00%
どちらかといえばそう思う	54.54%	44.44%
どちらでもない	18.18%	44.44%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	11.11%
そう思うわない	0.00%	0.00%
無回答	0.00%	0.00%

図16　女性は言葉づかいに気をつけるべきだと思う、話し方がきれいな女性のほうがいいと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	45.45%	11.11%
どちらかといえばそう思う	36.36%	33.33%
どちらでもない	0.00%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	11.11%
そう思うわない	9.09%	0.00%
無回答	0.00%	11.11%

図17　気が利く女性のほうが女性らしいと 思う



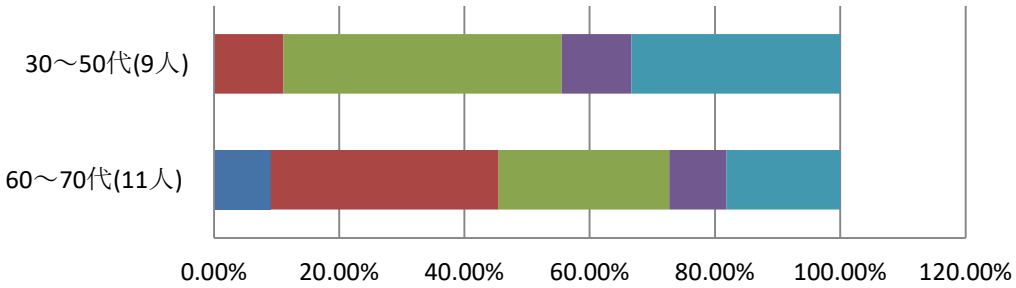
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	27.27%	0.00%
どちらかといえばそう思う	36.36%	22.22%
どちらでもない	27.27%	55.55%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	22.22%
そう思うわない	9.09%	0.00%
無回答	0.00%	0.00%

図 15 と 16 は 60～70 代主婦の「賛成」寄りの割合が約 8 割まで達する。それに対して 30～50 代主婦の「賛成」寄りの人の割合は 4 割弱しかいない。

「気が利く女性のほうが女性らしいと 思う」(図 17 参照)という質問に対して、60～70 代主婦の「賛成」寄りの割合は 8 割に達しているのに対し、30～50 代主婦の「賛成」寄りの割合は 2 割弱しかいない。

図 15～17 の結果は 60～70 代主婦の「賛成」寄りの割合が 30～50 代主婦より大きいことが明確となっている。

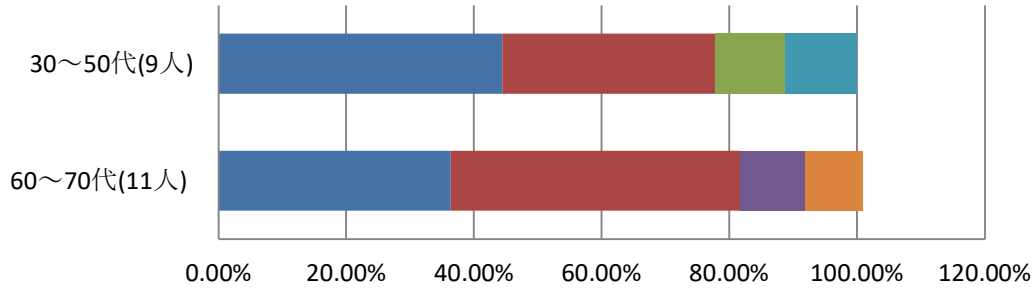
図18　女性は辛い時でも明るく振る舞うべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	9.09%	0.00%
どちらかといえばそう思う	36.36%	11.11%
どちらでもない	27.27%	44.44%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	11.11%
そう思うわない	18.18%	33.33%
無回答	0.00%	0.00%

「女性は辛い時でも明るく振る舞うべきだと思う」(図 18 参照)という質問に対して 60～70 代主婦では「賛成」寄りの割合は 4 割弱であるが、30～50 代主婦の「賛成」寄りは 1 割弱に過ぎないと言う結果を得た。

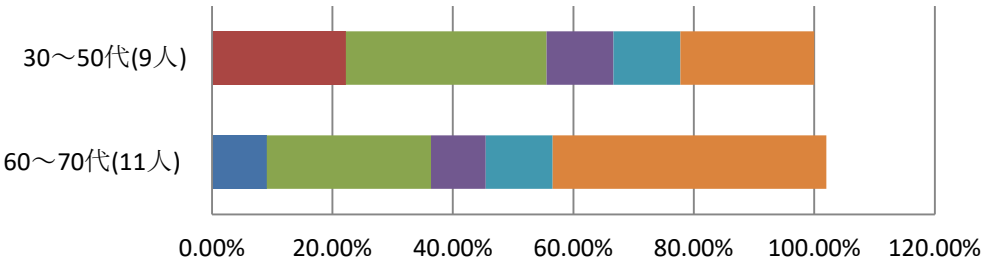
図19　女性は周りに流されずしっかりと自分の意見を持っているべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	36.36%	44.44%
どちらかといえばそう思う	45.45%	33.33%
どちらでもない	0.00%	11.11%
どちらかといえばそう思わない	10.00%	0.00%
そう思うわない	0.00%	11.11%
無回答	9.09%	

図 19 の「女性は周りに流されずしっかりと自分の意見を持っているべきだと思う」という質問に対する、両世代の「賛成」寄りの割合は 6 割以上である。60～70 代主婦の「賛成」寄りの割合は 30～50 代主婦より 4%ほど多いが、「そう思う」の割合は 30～50 代主婦の方が 8%多い。

図20　女性は男性を立てるべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	9.09%	0.00%
どちらかといえばそう思う	0.00%	22.22%
どちらでもない	27.27%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	11.11%
そう思うわない	11.11%	11.11%
無回答	45.45%	22.22%

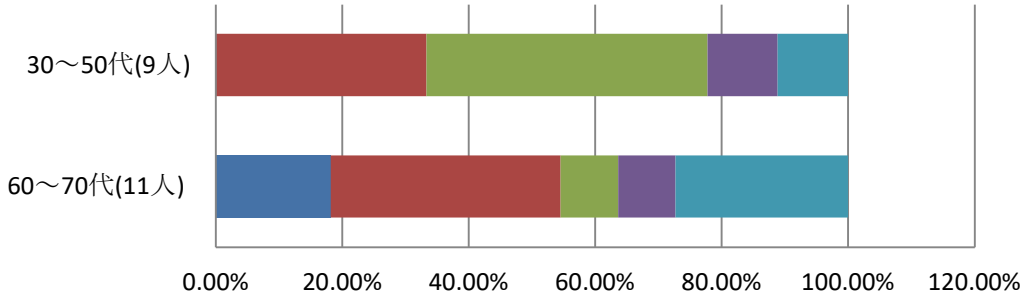
図 20 の「女性は男性を立てるべきだと思う」という質問に関しては、30～50 代主婦の「賛成」寄りの割合は「どちらかといえばそう思う」の 22.22%となっている。一方で、60～70 代主婦の場

合は「そう思う」の 9.09%という結果だった。60～70 代主婦の回答では、無回答の割合が多く、4 割以上となっている。この問題に関して、無回答の割合が多い原因として、故意に回答を控えたことも考えられる。

女性としての振る舞い方の質問に対して両世代の反応は異なっている。60～70 代主婦にとって「女性」は「世話役」、「受け身」のイメージがある。そのため、女性は「辛い時でも明るく振る舞うべき」、「気が利く」、「女性は言葉づかいに気をつけるべき」、「細やかな気遣いができる」という周囲の世話役を期待される。相手がどうやって振舞ってきても受けいれるべきだというように考える人の割合が多いことがわかった。それに対して、30～50 代主婦にとってはもはや女性は「世話する方」、「受け身」の役割だけに限られていないと考える人の割合が前者より明らかに多い。しかしながら、「女性は周りに流されずしっかりと自分の意見を持っているべきだと思う」という質問に対する反応は両世代とも賛成寄りの割合が大きい。これは女性が「世話役」、「受身」であっても自分の意見は周りに流されてはいけない、「しっかりしなくてはいけない」と言う意識も女性に欠かせないものだと考える主婦も多い。「女性は男性を立てるべきだと思う」に対して 30～50 代主婦のほうが賛成寄りの割合が 10%ほど多い。だが、この質問に対して 60～70 代主婦では、無回答の割合が多く、故意に回答を控えたことも考えられるため、30～50 代主婦のほうが女性は男性を立てるべきだと思う人が多いと結論付けるには至らなかった。

図 21～27 は女性の「外見」に関する主婦のイメージについてのアンケート結果である。

図21　おしゃれが好きな女性のほうが女性らしいと思う

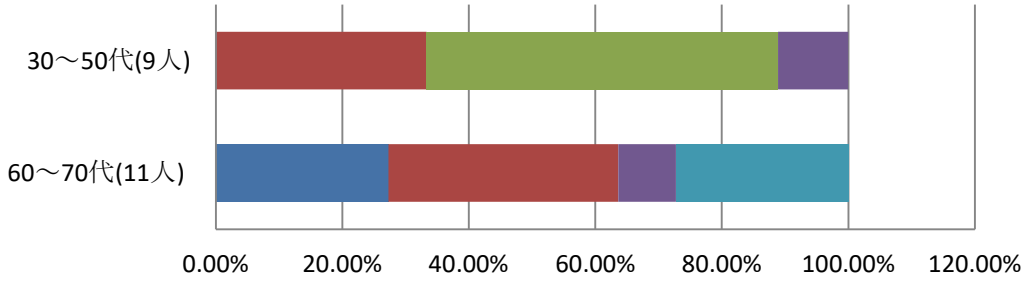


	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	36.36%	33.33%
どちらでもない	9.09%	44.44%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	11.11%
そう思うわない	27.27%	11.11%
無回答	0.00%	0.00%

図 21 は両世代の主婦が女性として欠かせないと思っているのは外見づくりである。それが「女性らしさ」を感じさせるのかという質問の結果を表示している。「きれい好きな女性のほうが女性らしいと思う」(図 21 参照)という質問に対して、60～70 代主婦は 27.27%が「そう思う」、36.36%が「どちらかといえばそう思う」と回答し、つまり 6 割弱の 60～70 代主婦が「賛成」寄りであることが分かった。30～50 代主婦では 33.33%が「どちらかといえばそう思う」と回答しているため、3 割弱が「賛成」寄りだという結果である。

図 22～24 は図 21 の結果のように 60～70 代主婦の賛成寄りの割合が明らかに 30～50 代主婦より多い。ここで各結果の詳細を見てみよう。

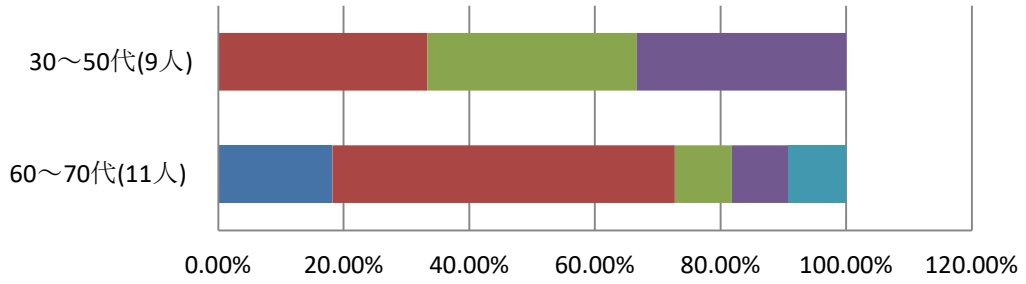
図22　きれい好きな女性のほうが女性らしいと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	27.27%	0.00%
どちらかといえばそう思う	36.36%	33.33%
どちらでもない	0.00%	55.55%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	11.11%
そう思うわない	27.27%	0.00%
無回答	0.00%	0.00%

「きれい好きな女性のほうが女性らしいと思う」(図 22 参照)に対して 60～70 代主婦は 27.27%が「そう思う」、36.36%が「どちらかといえばそう思う」と答えた。つまり、6 割弱が「賛成」寄りだと言える。一方で、30～50 代主婦の「賛成」寄りの回答は 3 割弱となっている。しかしながら、60～70 代主婦の中では「そう思わない」と答えた人もいる。

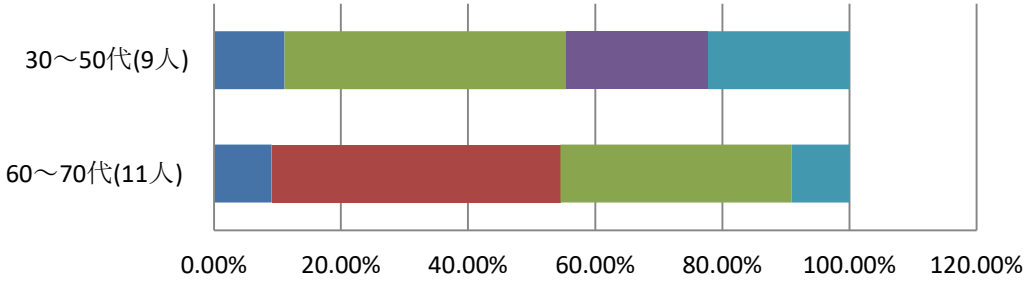
図23　女性はいつもきれいにしているべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	54.54%	33.33%
どちらでもない	9.09%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	9.09%	33.33%
そう思うわない	9.09%	0.00%
無回答	0.00%	0.00%

「女性はいつもきれいにしているべき」(図 23 参照)に対して 60～70 代主婦の 7 割弱が「賛成」寄りの回答をした。30～50 代主婦では、「賛成」寄りの回答は 33.33%に留まる。

図24　女性は運動やダイエットをして体型をよくすべきだと思う

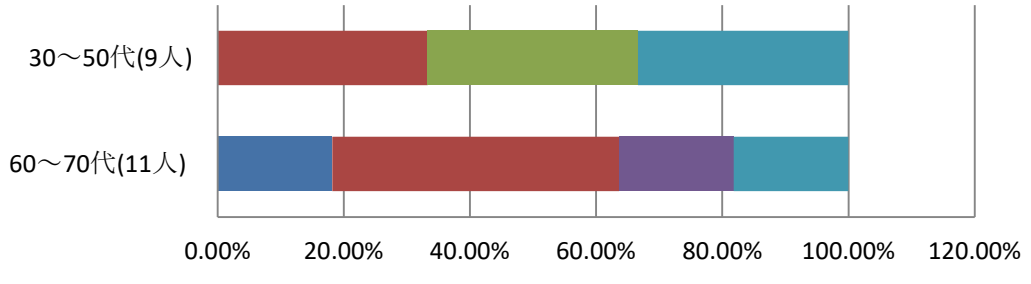


	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	9.09%	11.11%
どちらかといえばそう思う	45.45%	0.00%
どちらでもない	36.36%	44.44%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	22.22%
そう思うわない	9.09%	22.22%
無回答	0.00%	0.00%

「女性は運動やダイエットをして体型をよくすべきだと思う」(図 24 参照)に対して、60～70 代主婦の約 5 割が「賛成」寄りだったのに対して、30～50 代主婦では 2 割にも達しないという結果となった。

図 22～24 が表す結果によると、60～70 代主婦は女性の外見的な「きれいさ」、「おしゃれさ」を女性らしさと連想する人の割合が多い。

図25　肌を露出し過ぎない服を着ている女性のほうが好ましいと思う



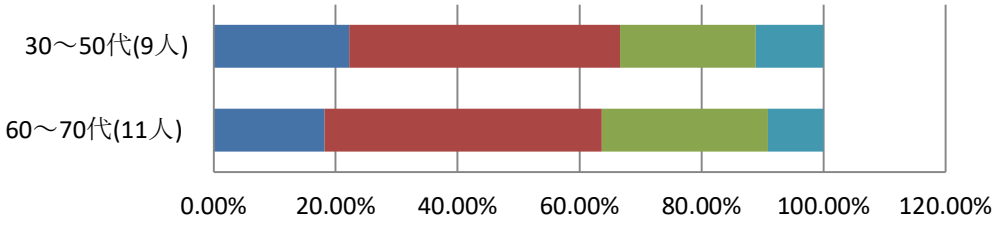
	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	0.00%
どちらかといえばそう思う	45.45%	33.33%
どちらでもない	0.00%	33.33%
どちらかといえばそう思わない	18.18%	0.00%
そう思うわない	18.18%	33.33%
無回答	0.00%	0.00%

図 25 は主婦達が「女性」の装いをどのように解釈するかについてのアンケート結果である。「肌を露出し過ぎない服を着ている女性のほうが好ましい」という質問に対して 60～70 代主婦は

18.18%が「そう思う」、45.45%が「どちらかといえばそう思う」、30～50 代主婦では 33.33%が「どちらかといえばそう思う」と回答した。60～70 代主婦は「肌を露出し過ぎない服を着ている」女性のほうが好ましいと思う人の割合が 30～50 代主婦より 30%多いことが分かった。

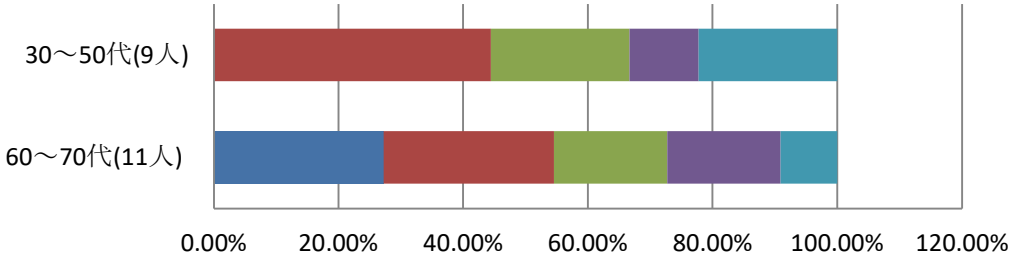
図 26～27 は「化粧」について質問をした結果である。

図26　女性はお化粧/メイクができるようになるべきだと思う



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	18.18%	22.22%
どちらかといえばそう思う	45.45%	44.44%
どちらでもない	27.27%	22.22%
どちらかといえばそう思わない	0.00%	0.00%
そう思うわない	9.09%	11.11%
無回答	0.00%	0.00%

図27　外に出るとき、女性はお化粧/メイクをするべきだと思う
(会社や旅行やスーパーマーケットなど)



	60～70代(11人)	30～50代(9人)
そう思う	27.27%	0.00%
どちらかといえばそう思う	27.27%	44.44%
どちらでもない	18.18%	22.22%
どちらかといえばそう思わない	18.18%	11.11%
そう思うわない	9.09%	22.22%
無回答	0.00%	0.00%

「女性はお化粧/メイクができるようになるべきだと思う」(図 26 参照)という質問の結果は 60～70 代主婦と 30～50 代主婦の「賛成」寄りの割合がほぼ同じである。しかしながら、「外に出るとき、女性はお化粧/メイクをするべきだと思う (会社や旅行やスーパーマーケットなど)」(図 27 参照)という質問の結果は 60～70 代主婦の「賛成」寄りの割合が 30～50 代主婦より 10%多く、さらに、60

～70 代主婦の回答で「そう思う」の割合が 27%を占めている。一方で、後者の「賛成」寄りの中に「そう思う」と答えた人はいない。

両世代とも約 6 割の主婦にとってお化粧及びメイクをする能力は「女性」として必要だとみられているが、お化粧、メイクを必要とする機会は世代によって違いが見られる。女性は「外」に出ればお化粧、メイク「するべき」と 5 割以上の 60～70 代主婦が思っている。しかしながら、それに「賛成」寄りの 30～50 代主婦の割合は約 4 割である。後者はお化粧、メイクをすべき機会の範囲は前者より狭いとみられる。つまり、後者にとってお化粧、メイクをするタイミングは前者より個人的な意思によって決定されていると考えられる。

- 自由記述項目に関する分析とその結果

図 28～30 は「女性」に関する質問に 500 字以内の自由記述で回答を得た結果を表している。「あなたにとって女として成功するというのはどんなことですか」という質問に対して回答をまとめ、6 つのパターンを見出した(図 28 参照)。

第一に、結婚し、家族をサポートしながらも、仕事や個人の人生を諦めないこと。

> 43 歳の共働き主婦：「女性人生というのは、その選択によって男性以上様々な形があるので、ひとくくりにはできない。自分の人生にとっての「女性にとして成功する」こととは、に限定すると、家族が心身ともに健康で毎日過ごせるようサポートしつつ、仕事や家事や子育てに追われながらも、自分の人生を諦めず、充実感やそれに向かう思いを常に持ち続けられるような人生を送ること。それができたら、自分にとっては、女に生まれてきてよかったなと子声おから言える「女として成功した」人生になるのではないかと思う。」

> 56 歳の共働き主婦：「「成功する」の定義が難しいですが、「女として」ということになると、「出産」を思い浮かべました。子育てをしながら、家族のサポートも受けながらキャリアを積んで、仕事をしている人(家庭と仕事を両立している人)をイメージしました。仕事を続ける上では、パートナーのサポートは不可欠なので、よいパートナーや家族に恵まれることも成功と言えるのかもしれません。」

> 57 歳の共働き主婦：「女として成功することなどことさら、「女」にこだわって考えたことないが、あえて、女性にこだわり理想を述べるならば、配偶者を得て、子供も持って、育てて、経済的にも自立して家庭も民主的な雰囲気であるというと、うらやましい。」

第二に、充実した仕事をした後で、結婚し、家族を作ること。

> 37 歳の共働き主婦：「女だからと差別しているわけではないが、女として生まれ、育ち、大人になり、仕事をし、一人で生計をたてることができる。その後、結婚をし、子供を生み、育て、子供がひとりで生活をし、幸せな老後をむかえる。」

第三に、自分が生きたいように生きること (結婚して家族を作りたい、仕事に励みなど)。

> 36 歳の共働き主婦：「自分がこうありたいと思う道で生活を送ることができる(結婚したい、子供が欲しい、結婚せず自由に生きたい、専業主婦としてゆったり過ごしたい等)」

47 歳の共働き主婦：「何を基準に女としての成功なのかは分からないが、自分が思うように生ることだと思う。結婚して子供を生み、育てる女性もいれば、キャリアを上げる女性、もいて、自分で選択した道を進んでいくことができることが大切だと思う。」

52 歳の共働き主婦：「成功する価値は人それぞれであって、今幸福と感じるときにその個人が成功したと言えるのではないでしょうか?」

66 歳のアルバイトで働く主婦：「自分が幸せに感じられた人生だったら過程がどうであれ成功だと思います。家族を持ち子育てをし、仕事を充実していいと全てがうまくいくとは限りませんが、一つの幸で女性は生きていけます。成功という言葉が今の人の言い方のようで少し難しいです。」

67 歳の専業主婦：「夢に何かって自分の思いを叶う。」

第四に、仕事に励む女性の生き方。

42 歳の共働き主婦：「・キャリアウーマン、バリバリ仕事をして自由人」

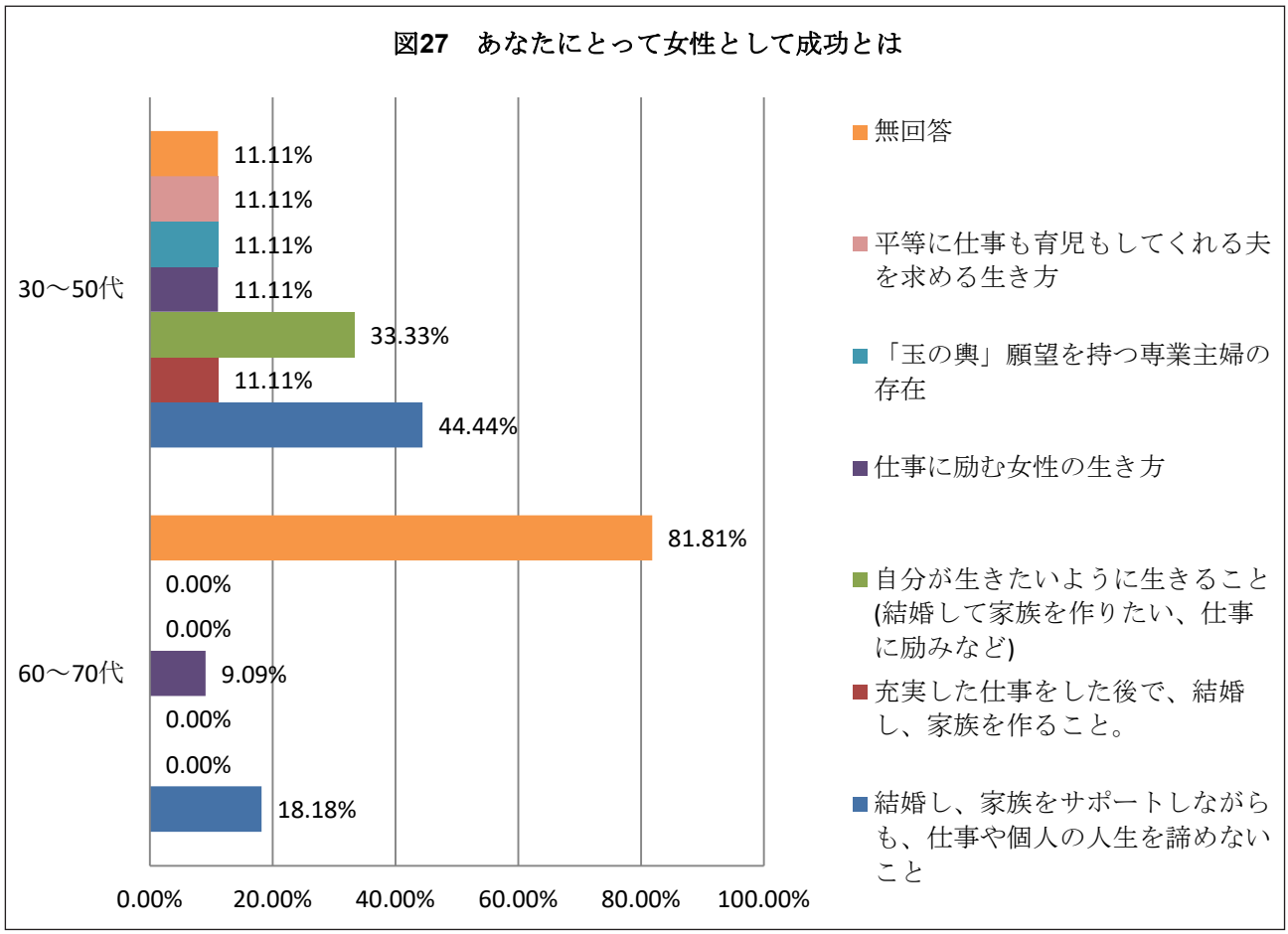
67 歳の専業主婦：「男性にも負けず自身を持って役職にも男性におとらず堂々と仕事をなしとげている姿を自分の仕事に自信と誇りをもってさっそうと働いて輝いている姿です。」

第五に、「玉の輿」願望を持つ専業主婦の存在。

42 歳の共働き主婦: ：「・玉の輿の専業主婦」

最後に、 平等に仕事も育児もしてくれる夫を求める生き方。

42 歳の共働き主婦: ：「・家族がいても、旦那さんが平等に仕事も育児もすべてしてくれる人。」



30～50 代主婦の結果で、もっとも多いのは「自分が生きたいように生きる」で、44.44%を占めている。30～50 代主婦の約 4 割は「女性としての成功」とは、結婚・出産に限らず、女性が自分の思うように生きること、自分がこうでありたいという願望の実現こそが、女性としての成功だと思っており、また、仕事に励むことなども成功の一つの在り方と考えている。しかしながら、約 3 割の 30～50 代主婦は結婚しても家族をサポートすることも自分の仕事や人生を諦めない女性こそが女性としての成功だと回答した。加えて、仕事をし、満足できるところまでやった後に結婚し、仕事をやめ、家庭に本腰を入れることができたら、「女性として成功た」と定義できる割合が 1 割ある。30～50 代主婦の約 4 割の女性にとっての成功は「結婚し、家庭を守る」ことに限らず、自分がしたいがまま自由に生きていけることが女性としてので成功だという。

一方、60～70 代主婦はこの項目の回答数が少なく、全体の 18.18%に限られた。18.18%が「自分が生きたいように生きる」というパターンの答えを記述した。しかも、書き方を見てみると、66 歳のパートで働く主婦の「「家族を持ち子育てをし、仕事を充実していいと全てがうまくいくとは限りませんが、一つの幸せで女性は生きていけます」　や　67 歳の専業主婦の「夢に何かって自分の思いを叶う。男性にも負けず自身を持って役職にも男性におとらず堂々と仕事をなしとげている姿を自分の仕事に自信と誇りをもってさっそうと働いて輝いている姿です」などの記述から、女性の強さ・女性としての誇りに関連した記述の特徴がみられる。

また、「あなたが「育ちが良い」と思うのはどんな女性ですか」という質問に対しての記述内容をまとめ、以下、９つのパターンに分類した(図 28 参照)。

一つ目は、謙虚であること。

66 歳のアルバイトで働く主婦：「日頃でしゃばらず、いざという時には自分お考えをしっかり言える女性」

67 歳の専業主婦：「貰い物があってこれを持って帰って良いと言われた時、我先にいいものばかり自分に選ぶのではなく、最後に残っていれば頂く謙虚な姿」

二つ目は、外見的な要因。

56 歳の共働き主婦：「外見的には化粧や洋服等も控えめで、スタイルも良く(体調管理ができているという意味)、趣味や習い事等の経験も豊富。」

三つめは、 趣味や習い事等の経験が豊富であること。

56 歳の共働き主婦：56 歳の共働き主婦：「外見的には化粧や洋服等も控えめで、スタイルも良く(体調管理ができているという意味)、趣味や習い事等の経験も豊富。」

四つ目は、一般常識の必要さ。

42 歳の共働き主婦：「・一般常識がある人。」

52 歳の共働き主婦：「一般な教養を持ち、平穏に過ごせる人。」

五つ目は、学歴に対する意識。

42 歳の共働き主婦：「・学歴がある女性」

六つ目は、経済的に余裕があること。

42 歳の共働き主婦：「・お金と心の余裕がある人」

56 歳の共働き主婦：「経済的に裕福な環境で育ち、趣味や習い事等の経験も豊富。」

57 歳の共働き主婦：「もともと生まれた家がお金持ちの「良家の女子」でも人を陥れたり、妬んだり、他人の痛み分からず、理想力のない人もいるようだが、人をさげすまず、差別をしないフェア精神のある人が「育ちが良い」と言いたい。」

七つ目は、心の余裕があること。

36 歳の共働き主婦・人に何か(自分に対する悪いことを)言われても動じない、心の余裕がある人。

42 歳の共働き主婦：「・お金と心の余裕がある人」

43 歳の共働き主婦普段、なかなか人からは見られないようなところにも、きちんと気が回っている余裕のようなものがある女性。

57 歳の共働き主婦：「もともと生まれた家がお金持ちの「良家の女子」でも人を陥れたり、妬んだり、他人の痛み分からず、理想力のない人もいるようだが、人をさげすまず、差別をしないフェア精神のある人が「育ちが良い」と言いたい。」

八つ目は、礼儀作法について。

36 歳の共働き主婦：「・言葉遣いがきれいな人。・挨拶ができる人。」

37 歳の共働き主婦：「挨拶が出来、礼儀作法のいい人。」

43 歳の共働き主婦：「考え方や言葉の端々に、育ちの良さというものはでると思う。」

47 歳の共働き主婦：「高学歴や裕福な家の育ちでなくても、必要最低限のマナーや常識を身につけている。」

56 歳の共働き主婦：「話をするのも聞くのも上手で、周囲に対してさりげない配慮ができる女性。」

66 歳のアルバイトで働く主婦：「言葉使いと所作し(両方とも人を気持ちよくできる人。)」

67 歳の専業主婦：「貰い物があってこれを持って帰って良いと言われた時、我先にいいものばかり自分に選ぶのではなく、最後に残っていれば頂く謙虚な姿」

九つ目は、コミュニケーション能力があること。

36 歳の共働き主婦：「・思うことがあれば、直接相手に意見を言える人。

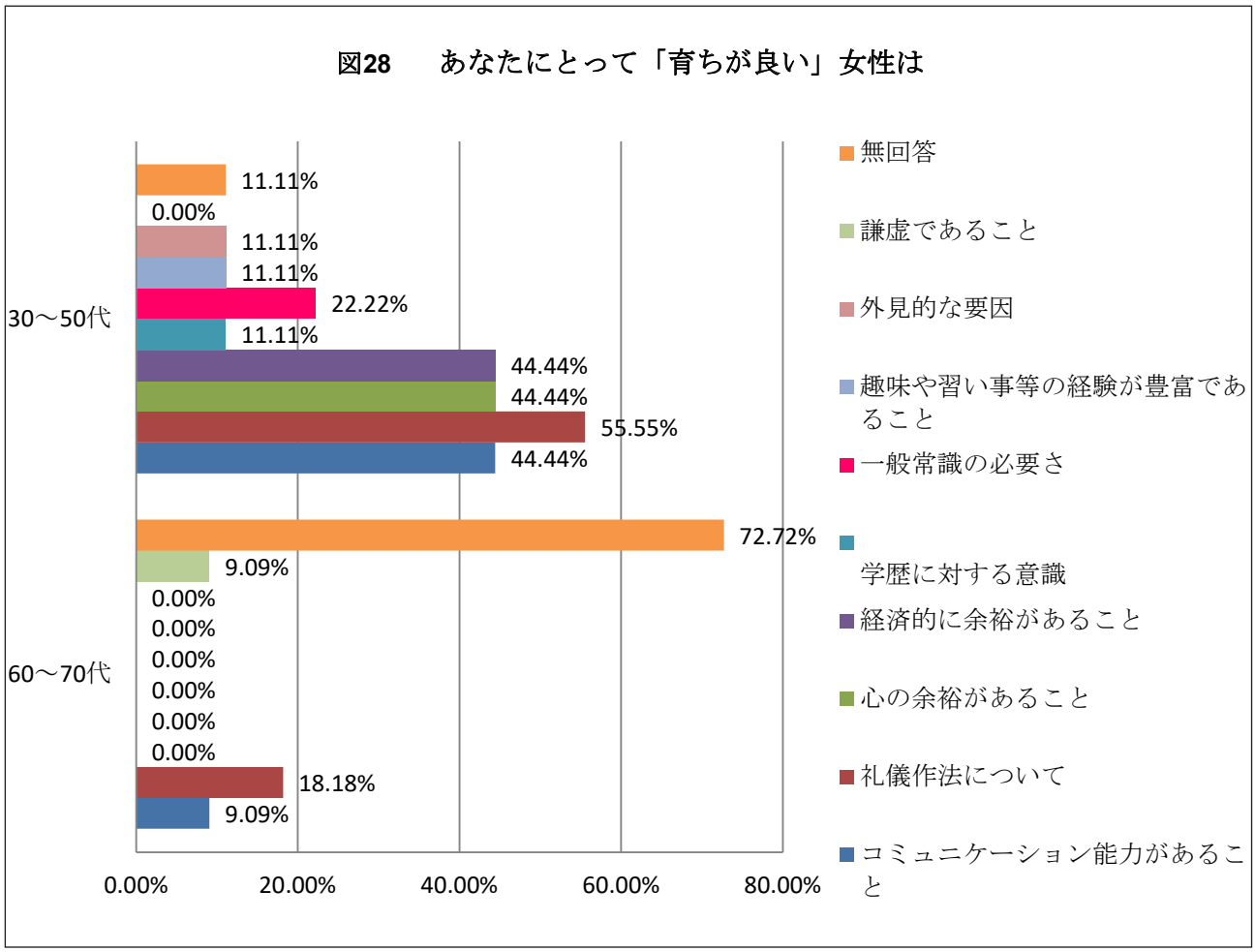
・相手の気持ちや状況を慮ることができる人。」

37 歳の共働き主婦：「周りとコミュニケーションもきちんととれる人。」

47 歳の共働き主婦：「また、気遣いができ、周りに自然に人が集まるようなやわらかい人だと思う。」

56 歳の共働き主婦：「TPO をわきまえた行動が出来る女性、聞くのも上手で、周囲に対してさりげない配慮ができる女性。」

66 歳のアルバイトで働く主婦：「日頃でしゃばらず、いざという時には自分お考えをしっかり言える女性」



「礼儀正しさ」が 30～50 代主婦では 55.55%、60～70 代主婦では 27.27%を占めている。「コミュニケーション能力」を見ると、30～50 代主婦では 44.44%、60～70 代主婦では 18.18%を占めている。両世代の主婦にとって礼儀正しさやコミュニケーション能力が育ちが良い女性の定義として欠かせないようだ。30～50 代主婦の回答を見ると、60～70 代主婦の回答に挙げられない項目が見られる。学歴や経済的、また心の余裕さなどが挙げられた。さらに、30～50 代主婦の回答に見られない項目だが、60～70 代主婦の回答には登場した、「謙虚」という項目など見られた。これは、60～70 代主婦と 30～50 代主婦の育ちの良い女性の特徴が見られた。

最後に、「あなたの理想的な主婦像を 500 文字以内で答えてください」という質問に対する記述内容をまとめた結果、７つのパターンに分かれることが分かった(図 29 参照)。

一つ目は、専業主婦の在り方。

> 67 歳の専業主婦：「仕事も退職し、今まで出来なかった自分のしゅみや又パートナーである夫も元気で自分の好きなことができ(たとえばゴルフ) お互いに充実していること経済的には特別豊でなくてもよいそこそこ普通で人に迷惑をかけない暮しです。まさに今の私達です。それには(文字が崩しぎて読み取れなかった)に健康でなければの話です。」

二つ目は、夫との平等な立場を保つこと。

> 52 歳の共働き主婦：「また、夫と対等な立場(収入や仕事ではなく人として)を持つことができる人。」

三つめは、 平穏に過ごしたいと言う願望。

> 52 歳の共働き主婦：「一般的な教養を持ち、ご近所とのトラブルも無く平穏に過ごせる人。」

四つ目は、 一般常識についての考え方。

> 52 歳の共働き主婦：「一般的な教養を持ち、ご近所とのトラブルも無く平穏に過ごせる人。」

五つ目は、経済的余裕がある家庭の専業主婦の在り方。

> 42 歳の共働き主婦：「・専業主婦で、旦那さんお給料で家族(子供たち)　がよりいい教育が受けられて時間とお金に余裕がある人。」
>
> 57 歳の共働き主婦：「理想の主婦像とは、持っていない。たぶん、最近の若い人は、労働法制の改悪によって深夜労働も許されるようになり、仕事が厳しくなり、仕事と家事・育児の両立は大変厳しくなっていると思う。また、家庭のこと(家族の健康管理・病院の送迎・食事作り)や他域への協力、子育てをするには、フルタイムの仕事を持っているとやはり不十分なことしかできないと思うので、家庭には主婦も必要だろうと思うので、経済的に可能ならば年金が出るころに専業主婦をしたい。」

六つ目は、 家族を優先する姿勢。

> 37 歳の共働き主婦：「家事を毎日こなして、家族が快適に過ごせるようにしていること。
>
> 食事も栄養バランスを考え献立をつくり、掃除・選択も難なくこなし、自分の時間も確保しつつ家族の事が優先で、毎日有意義に過ごしているような主婦が理想的です。」
>
> 66 歳のアルバイトで働く主婦：「今の世界の中夫の収入だけで生活するのが難しいでしょうけど。やはり主婦は家庭に居て。夫と子供達を「お帰りなさい」とむかえてあげられるのが一番だと思います。掃除や料理が少々下手でも精神的に安定しますから。」

七つ目は、 仕事・家事・育児分担のバランスを取り、自分のための時間を確保すること。

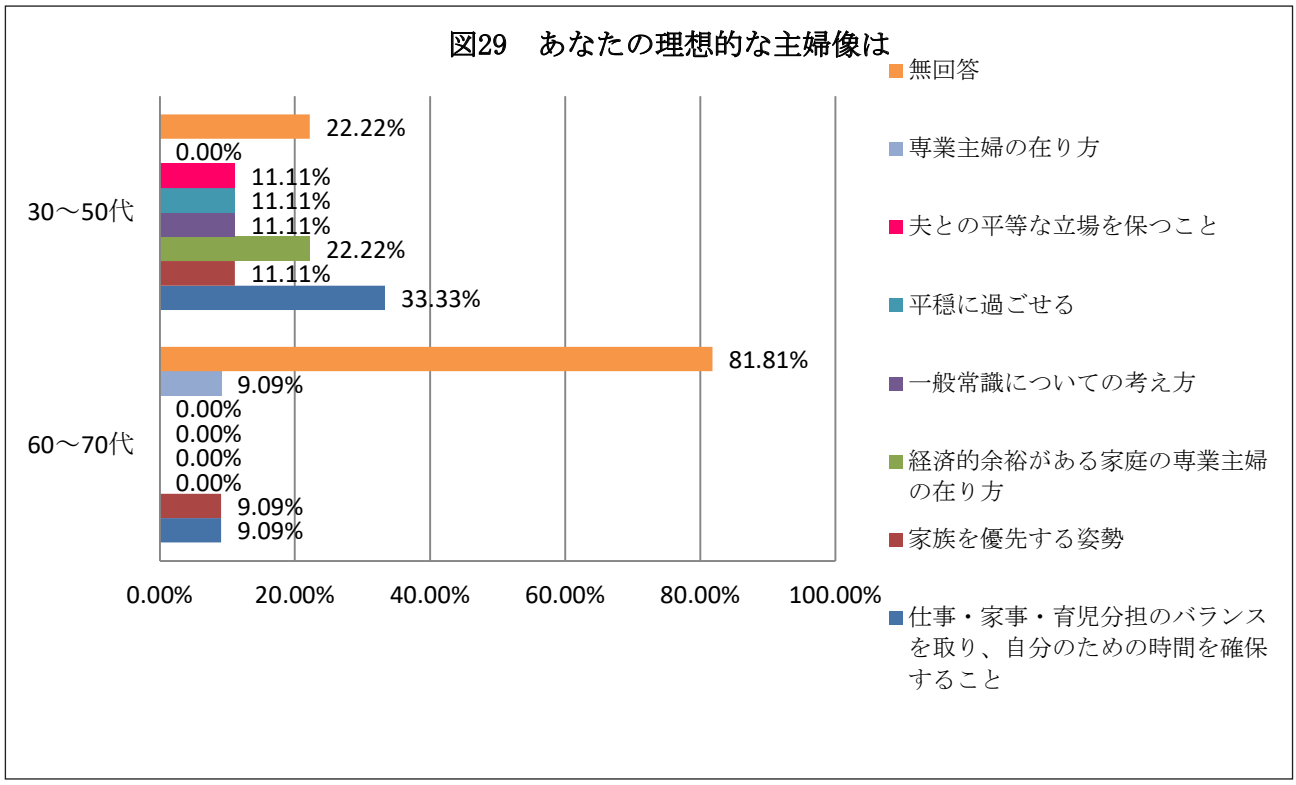
> 36 歳の共働き主婦：「ただ、育った家庭環境の近いから家事分担について現在のちょうど良い状況に至るまでに数年かかったように思う。(自分とも働き家庭に育ち両親は料理・掃除・選択もほぼ完全負担・協力していた。夫-共働き家庭ではあるが、祖父母も同意していた為家事はほぼ女性がしていた。)
>
> 理想としては、子育てを共有し、協力して家事(いわゆる主婦に仕事)をするのが一番だと考える。今の家事の割合は 7(私)：3(夫)くらい。私の勤務時間ほうが短いのでちょうど良い割合。子育てについては、最近はイクメンという言葉があるが、要は子供に感心があれば勝手に夫も子育てをするはずであり、夫は子供に十分に関わっているので特に不満に思ったことはない。
>
> また話がそれるが、少子高齢化が進む以上、今後、これまで専業主婦であった女性も働かないと日本は衰退すると思う。同時に、男女ともに介護・育児・自身の病気・怪我があっても

大丈夫ように、社員の状況に応じて共働きを恪気応変に変えることできるような社会にもっとしていかなければならないと思う」

43 歳の共働き主婦：「適度に快適な生活を家族にあたえつつも、自分の時間や人生をしっかり守って、経済的なことに限らず、精神的に目立つしていることが理想ではある。」

56 歳の共働き主婦：「社会にでてしごとをしていたいので、理想は働きで、家事や育児(子育て)担がきちんとできていて、週末は家族や友人とゆっくり過ごしたり、趣味や好きなことをして過ごし、長期の休みには旅行等でリフレッシュして、また仕事に励むことができる環境が整っていること。」

68 歳の専業主婦：「仕事よ家事を両立させる。又、かぞくのそれぞれの個性を尊重し、自由に物言える家庭となるよう努力すること」



30～50 代の回答の中で、最も多いのは「仕事・家事・育児分担のバランスを取り、自分ための時間を確保すること」で、44.44%を占めている。今回の研究の対象とした 30～50 代主婦は全員が共働きであるため、このような結果になったと考える。配偶者との家事・育児のバランスの良い分担、または、女性、あるいは主婦が家庭と仕事を両立できるような環境がほしいという記述が多かった。両世代の理想的な主婦像の中には「専業主婦」も入っている。しかしながら、30～50 代主婦にとって専業主婦は経済的に余裕がある家庭を基本とした専業主婦に限られている。他にも、家族を優先する主婦が理想的だと思う人が両世代ともいる。しかしながら、「家族を優先する主婦」という考え方について、世代別の比較を行いたい。以下の記述に注目してみよう。

37 歳の共働き主婦：「家事を毎日こなして、家族が快適に過ごせるようにしていること。食事も栄養バランスを考え献立をつくり、掃除・選択も難なくこなし、自分の時間も確保しつつ家族の事が優先で、毎日有意義に過ごしているような主婦が理想的です。」

66 歳のアルバイトで働く主婦：「今の世界の中夫の収入だけで生活するのが難しいでしょうけど。やはり主婦は家庭に居て。夫と子供達を「お帰りなさい」とむかえてあげられるのが一番だと思います。掃除や料理が少々下手でも精神的に安定しますから。」

30～50 代主婦は主婦として家族のことを優先するとしても、個人としての時間の確保の大切さを実感している。それに対して、60～70 代主婦は「主婦」とは全面的に家庭の世話をするべきだという記述が見られた。

結論：主婦が理想とする女性像の変化とその起因

本研究の結果として、江戸時代から高度成長期かけて代々伝わった強制的に女性に家庭を守らせる、男性を中心とした日本社会の風潮、男尊女卑や良妻賢母、そして、性別役割分業の考え方が 21 世紀になった現在でも女性の心理に強い影響を与えていることがわかった。

選択肢アンケートの結果から、60～70 代主婦の理想的な女性像に関しては、世話役であるといった女性像、更に江戸時代の女性と同様に、女性らしく伝統的な習い事を身に付けることが望ましいとされていることがわかった。さらに、見栄えを整え、きれいにしていること、おしゃれをすることなどの外見的な要因も理想的な女性像に欠かせないことがわかった。また、序論でも述べたように江戸時代の女性は男性に服従するものであった。さらに、近代に入っても、性別役割分業の強い影響により、60～70 代主婦は、積極的に世話役をすること、控えめな態度をとることによってより女性らしさを感じると考えられる。

しかしながら、「女性として成功する」に関する結果は、30～50 代主婦の性別役割分業の「女性は家庭を守る」といった認識の具体的な違いが明らかになった。30～50 代主婦家庭を守るといった女性像には特徴があった。家事や育児を主に分担するといっても、自分ための時間もきちんと確保したいと言う。子育てや仕事をやり遂げるためには、趣味やリラックスする為の時間が欲しいということである。30～50 代主婦にとっては家事・育児は「女性」の役割だけではなく、配偶者にも分担、協力してもらいたいと言う願望がある。これは図 7 の結果「家事や育児は男性より、女性の仕事だと思う」と同様な結果の傾向である(「賛成」寄りのの割合は 60～70 代より 25％少ない)。さらに、そのような主婦を支える国や会社での補助システムの整備が少しでも早く整うことを切望している。「男性＝外で仕事、女性＝家庭」といった意識の面で 30～50 代主婦の女性像は家庭を守りながらも、個人の人生を楽しむことが理想的な主婦像であることがわかった。

こうした結果が見られたのは、約 400 年以上続く男性中心主義の社会形態が未だ残っているまま、主婦たちは女性が「世話役」、「女性は家庭にあるべき」であることを依然として意識しているが理解できる。しかしながら、その中でも女性の意識の変化があり、若い女性の中には、自分自身の人生や個人としての幸福などを追求する願望も見られた。

今回の研究の総括として注目したい点は、本研究を行う以前は、30～50 代の方が 60～70 代より「女性は家庭」といった考えを否定する人の割合が明らかに少ないと予想したが、結果は序論で述べた、昔ながらの性差別役割観を持つ女性に年代別の違いがさほど見られなかったことである。しかしながら、世代別で変化が見られたのは、若い世代の女性には個人として幸福の追求が求められている点である。両世代の主婦にとって「女性」についての意識はまだ「家庭」から離れられず、固定化されている日本社会の風潮に逆らえないが、女性個人の中には徐々に「女性」について多様化した意識を持ちつつあることが言える。本研究は今後更なる分析を必要とする課題であるが、分

析で明らかになった点を踏まえ、国際化のなかで日本社会が女性の「家庭」からの解放、社会進出の促進、そして新しいジェンダー観の可能性を打ち出すことができるのかを今後の研究テーマとしたい。

参考文献

Website

・Genderspectrum （2015） 「Understanding Gender」 2015 年発表 Genderspectrum (https://www.genderspectrum.org/quick-links/understanding-gender/) (2016年3月現在)

・与那嶺涼子（2011）「第70回 性差：ジェンダーとセックスの違い」2011年発表 内閣府 Homepage
(http://www.pko.go.jp/pko_j/organization/researcher/atpkonow/article070.html) (2016年3月現在)

書籍

・小山静子（2009）「良妻賢母という規範・近代的「天職」の誕生」『新偏日本のフェミニズム10女性史・ジェンダー史』株式会社岩波書店 pp. 237-249

・江原由美子（2009）「男子高校生の性差意識・男女平等教育の空白域」『新偏日本のフェミニズム8ジェンダーと教育』株式会社岩波書店 pp. 81-86

・木田淳子（1994）『家族論の地平を拓く』株式会社あゆみ出版

・中津攸子（2015）『やさしい日本の女性史入門ー古代から現代まで実話による女性の生き方ー』合資会社歴研

ヨーロッパにおける最初の日本のイメージ
－ ポルトガルでの天正遣欧少年使節 －

ファティマ・レイ

1. はじめに

本研究の対象は、「天正遣欧少年使節」（以下、「天正少年使節」或いは「天正使節」と呼ぶ[1]）である。「天正使節」とは、日本とポルトガルの関係及び日本におけるキリスト教の布教活動に務めていたイエズス会[2]宣教師の活動の成果により、１６世紀末にヨーロッパに派遣された使節のことである。この天正使節は１６世紀半ばに始まった日葡関係に直接関係していると同時に、１６世紀から１７世紀にかけてポルトガルとキリスト教の影響を最も大きく受けた九州の歴史的な一大イベントでもある。

この天正使節については様々な先行研究（例　松田2001; 結城1990など）があるが、本稿では日葡関係にとって重要なこのエピソードについて改めて見直す。また、５００年あまりにわたるポルトガルと日本の絆が再び強化されることを願い、日本では未だ知られていない新たな情報を提供するため、主にポルトガルでのこの天正少年使節の行動及び旅について調べる。また、この使節が残した社会的・文化的な影響とともに、日本人と思われる人物が描かれているヨーロッパにおける最初の宗教画がポルトガルに現存することについても言及する。

2. 日葡関係の始まりと当時の日本の政治状況

１５４３年にポルトガル船が種子島に入港したことが、ポルトガル人によって確立された、東アジアにおける最も古い国際関係の一つである日葡関係の始まりとなった。また、それは日本と欧州諸国の最初の接触でもあった。ポルトガル人は日本人が接触した最初のヨーロッパ人であったため、両国民の間に自然に生じた友情や全く異なる文化への日本人の好奇心や感心などは、日本におけるポルトガル人の初期の成功の要因となったと考えられる。

当時日本は戦国時代であったため、国内でのポルトガル人の動きは限られていた。従って、ポルトガル商人に続き、日本に渡来したイエズス会宣教師[3]（以下、イエズス会士と呼ぶ）は主に九州内で活動を行っていた。１６世紀のポルトガル人との遭遇は、日本の統一とその時代の日本人のアイデンティティの構造にも重要な影響を与えた[4]（Carvalho 2000）。

１５４９年にイエズス会士のフランシスコ・ザビエル[5]が日本で布教活動を始め、彼を含む宣教師の活動により何千人もの日本人がキリスト教へ改宗した。フランシスコ・ザビエルは日本で歓迎され、イエズス会の布教の使命を果たしたが、その後キリスト教が快く受け入れられたり、キリスト教への改宗の全てが真に宗教的感情に触発されたものであったりしたとは言えない状況であった[6]。

ポルトガル人の商人は歓迎されて貿易も成功した[7]が、イエズス会士の場合は異なっていた。

貿易の状況と影響を理解していた宣教師はキリスト教を広め、人々を改宗させるため、貿易の必要性を利用することにした。商人と宣教師はお互いの活動を補足し合った。 宗教に関係なく、多くの大名の南蛮貿易の仲介としてイエズス会士が動いたことも知られている[8]。

2.1. 日葡関係へのイエズス会宣教師の影響

イエズス会士はポルトガル商人と共に日本に渡来し、日葡関係にとって重要な役割を果たした。彼らは農民から大名までの様々な階級の人々と接触したため、その活動は宗教に限らず、文化的・言語的交流[9]と政治的・社会的な環境などにも影響力を持っていた（Jaca 2005)。また、日本とヨーロッパの間で伝えられていた情報も、ほとんどのものが彼らから発信されたものであった。

3. 大名のキリスト教への改宗とその利益

3.1. 日本側

１５世紀末から１６世紀末にかけて日本は戦国時代であったため、内乱の時代を生きていた諸大名は自身の政治的及び社会的立場を強化しようとしていた。ポルトガルの商人が新しい軍事技術やそれまで日本に存在しなかった鉄砲を導入したり、富をもたらす海外との貿易を盛んにしたりしたので、これが大名の勢力を拡大するのに大変役立ったのである。

宗教的には、日本全体の統治者がいなかったため、ある土地で布教活動に失敗しても、隣の土地で成功するといったケースが多くあった。改宗した人々の情熱はそれまで育ってきた伝統文化への思い入れよりも強く、他の宗教と対立するようになった場合もあった[10]。

3.2. ポルトガル側

イエズス会士の日本における布教活動は、イエズス会のヨーロッパ向けの一大宣伝としての役割も担っていた。この時期、ポルトガル王国の布教権、東洋のパドロアード[11]にとって日本での布教活動がもっとも緊要なものとされていた。

また、日本にいたポルトガル人にとって、特定の大名に肩入れすることは重要なことであった。大名が内乱で勝利を収めればポルトガルの影響力も増加し、そこに関係しているポルトガル商人にも富をもたらすからである。

4. 九州の大名のキリスト教への改宗 – 大村純忠・大友宗麟・有馬晴信[12]

九州においては、顕著な布教活動を通じてキリスト教へ改宗した者が被支配者階級だけでなく、支配者階級であった大名の中にも数名いた。この章では、これらの改宗に関わる事実のうち、キリスト教に対する大名の視点に影響を与えた大名とイエズス会士との関係について述べる。

イエズス会士アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父[13]と協力してポルトガル国王と教皇に使節団を送ったのは、大村純忠(１５６３年受洗・洗礼名バルトロメウ・デ・オオムラ)、大友宗麟(１５７８年受洗・洗礼名フランシスコ・デ・ブンゴ)、及び 有馬晴信（１５８０年受洗・洗礼名プロタジオ・デ・アリマ)の３人のキリシタン大名であった。キリスト教へ改宗した大名

は他にもいたが、本稿では、天正遣欧少年使節に直接関係しているこの３人の改宗についてのみ述べる。

4.1. 大村純忠（ドン・バルトロメウ）

１５６１年、ポルトガルの船が大村純忠（１５３３～１５８７）[14]の領内の横瀬浦[15]に寄港した。この地でポルトガル人は歓迎され、純忠に教会の建設を許された。更に、１０年間税も免除された(Carvalho 2000)。１５６３年に純忠は家臣と共にコスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け、ポルトガル人に横瀬浦の提供を申し出た。横瀬浦はポルトガル人にとって重要な港となった[16]。

大村領内での統治力・軍事力の弱体化とイエズス会士が南蛮商人に対して大きな影響力を持っていることを知った純忠は、宣教師への接近に利点を見いだした。純忠はこの関係がいずれ武器の供給と自領の商業的繁栄に繋がることを信じていた。

イエズス会の視点からは、大村純忠の弱点と武器の必要性が大村領内での活動の保証となっていた。ポルトガル商人がもたらした製品や武器などを手に入れることができると、純忠は宣教師に保護と支援を保証した。

ポルトガル人が渡来した当初は、大村純忠のキリスト教への関心は非常に薄かったと考えられている。ところが、１５６３年にはこの大名の洗礼に繋がるイエズス会との二度目の接触があったのである[17]。同年６月初め、純忠は宣教責任者コスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け[18]、洗礼名を「ドン・バルトロメウ」と名乗った。しかし、キリスト教に改宗はしたが、大村領内の仏教寺院の破壊は禁止した。この命令に従わなければ、イエズス会士とその活動への援助は停止されたであろう。

１５６３年の夏、隣国の後藤貴明[19]との戦争が始まり[20]、大村全領土に広がったため、大村の町と横瀬浦は破壊され、純忠は多良岳に逃れた。この戦争のため、大村純忠は２年間イエズス会士と接触しなかったのだが、商人との関係や貿易はこの間も続けていた(Ribeiro 2006)。

１５６５年、横瀬浦の破壊の２年後、大村純忠は福田港を開港してポルトガルに提供したが、不便な港であったために６０年代末に長崎港が開港された。１５７１年から長崎は大抵の商船が寄港できる港となった。

１５６０年代の大村領内における宣教師の活動は、最初に横瀬浦、その後福田と長崎、そして純忠が住んでいた大村の町に限られていた。港で商人を援助すると同時に宣教師はその地の人々の改宗も行っていた。特に大村の町は、１５６８年１２月に宣教師とそこを訪れた宣教責任者コスメ・デ・トーレスが大きな関心を示した。大村純忠の許可を得たトーレス神父は、大村家の屋敷の近くに教会を建て、そこで領民の改宗を行った。

大村純忠の改宗から７年後、１５７０年に純忠の母親や妻、子供及びその他の親族の洗礼も行われた。この時期、大村内の長崎や他の町でも日本初の大勢の同時改宗が行われた(Ribeiro 2006)。

4.2. 大友宗麟（ドン・フランシスコ）

常に商人と行動を共にしていたイエズス会士との接触後、豊後の大名大友宗麟(１５３０～１５８７)はインドの知事及びポルトガルの君主たちとの外交を開始した。宗麟にとっては、外国の文明・文化への関心とポルトガル人の影響を受けていた外国の地への関心が相まって、この外交関係は商業的な意味を持っていた。宗麟自身もこの商業による利害関係を否定しなかった。

府内[21]におけるポルトガル商船の寄港は１５４４年に遡る。しかし、この町の港の位置は、中国から来航した船にとって九州の海岸の大部分を周らなければならなかったので不便であった。それにもかかわらず、５０年代において豊後領内で停泊するポルトガル船は少なくなかった。

１５５１年１０月、フランシスコ・ザビエルが府内を訪れ、大友宗麟に謁見する。しかし、ザビエルがほとんどの人的資源を山口に集中したため、府内でイエズス会士を定住させるという宗麟の望みはすぐには叶わなかった。

１５５３年の初め、府内でイエズス会の使命である布教活動が公式に認められ、１５５６年に宣教責任者コスメ・デ・トーレスがこの地に住むようになったため、府内は布教活動の中心となった。１５６５年、大友宗麟の住む臼杵を含む豊後領内でイエズス会の最後の布教活動が行われた。しかし、それ以前の１５６２年に宗麟のキリスト教への関心の欠如に失望し、その洗礼の実現性を疑ったトーレス神父は豊後を去っていた。

大友宗麟自身の洗礼は１５７８年８月に宣教師フランシスコ・カブラルによって行われ、洗礼名を「ドン・フランシスコ」とされた。この大名は正式にキリスト教徒となったのである。しかし、宗麟の洗礼は九州の他の地域の場合と異なり、その家族や豊後領内の何千人もの人々の改宗にはほとんど影響を与えなかったのである。

宗麟の洗礼の後、豊後におけるキリスト教の普及は新たな勢いを得た。特に、１５８５年から１５８７年７月にかけては、武家や一部の領民を対象としたイエズス会の活動にとって有益な期間であった。

4.3. 有馬晴信（ドン・プロタジオ）

有馬領内におけるイエズス会士の入領は大名有馬義貞[22]と島原の領主[23]の要請で行われた。有馬義貞の宣教師との最初の接触は１５６１年以降であり、隣の大村領土におけるイエズス会の活動とほぼ同時期であった。しかし、大村純忠が直に１５６３年に洗礼を受けたのに対し、有馬義貞は１５７６年になってようやく洗礼を受けた。

大村と同様に、島原と口之津におけるイエズス会士の入領と布教活動の許可は、有馬領内で貿易の利益を得るという義貞の欲望が動機であった。

横瀬浦が破壊された１５６３年から長崎が貿易と布教活動の中心地となった１５７１年にかけて、口之津はイエズス会士にとって重要な役割を果たした。有馬義貞の後継者有馬晴信(１５６７～１６１２)が洗礼を受けた１５８０年まで、布教活動が領内の島原と口之津の二か所でしか許可されていなかったからである。

イエズス会士は１０年以上もの間有馬義貞の洗礼を行うことを希望していたにもかかわらず、それは１５７６年４月になって初めて実現した。義貞の洗礼後、その妻と有馬家の数名

も洗礼を受けた。その中には千々石直員[24]という人物もいた。洗礼は、有馬家に続き、家臣に対しても行われた。

しかしながら、有馬義貞の跡継ぎ有馬晴信が洗礼を受けなかったことは否定できない事実であった。これは遠からず有馬領内における布教活動にとって脅威となるものであった。義貞の死後、キリスト教へ改宗した人々の大部分がキリスト教を棄教したが、これは同時に大勢の改宗が行われたことに無理があったということを示していると思われる[25]。また、大名となった有馬晴信の指示でその領内における布教活動も禁止された[26]。

その後、アレサンドロ・ヴァリニャーノの介入により有馬領内の布教活動は再開され、１５７８年に有馬晴信はキリスト教徒への迫害をやめ、晴信自身を含む多くの人々が改宗した。その後はイエズス会士は妨害を受けず、それどころか、晴信から多少の援助も受けて布教活動が続けられた[27]。

この時期、有馬晴信が叔父の大村純忠と政治的・軍事的な同盟[28]を確立するために、有馬領内から追放した人々を仲介として利用したと考えると、当初キリスト教徒を迫害していたこの大名のキリスト教に対しての行動の変化を理解することができるであろう (Ribeiro 2006)。

大村との同盟は失敗したが、１５７９年に肥前の大名であった竜造寺孝信と戦うため、晴信は宣教師とヴァリニャーノを仲介として南蛮人を味方にし、彼らに軍事支援を求める。 １５８０年に大名有馬晴信は洗礼を受け、洗礼名を「ドン・プロタジオ」と名乗りはじめる。

5. 天正遣欧少年使節

5.1. 着想と目的

日本におけるキリスト教の布教活動は、初期においてはある程度の成功を収めており、日本国外へ届けられた宣教師の手紙によると、数年のうちに日本全土で改宗が成功裏に進むものと思われていた。しかし、宣教師の説く質素や謙虚というキリスト教の価値観は、当時の日本の身分の高い人々にとって魅力あるものではなかったのであろう。そのため、最初に教えが広まったのは、そのような身分の高い人々ではなく、人間としての尊厳や身分の貴賤を問わない新たな考え方を受け入れた人々、イエズス会の運営する病院や仁慈堂[29]などの恩恵を受けた身分の低い人々の間であった。

また、日本から遠く離れたヨーロッパの現実を知らない日本人にとって、その地に自国の文化とは異なるが、別の豊かで社会的に公平で、より進んだ文化が存在するということは理解しがたいことだったであろう。この社会的公平さは、身分の低い人々を援助したキリスト教の活動により実現していたものであるが、更にヨーロッパではカトリックとその教会が重要な役割を果たしているということなども全く思いもよらないことであったと思われる。

この時期、アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父がイエズス会の巡察師として初めて来日した。ヴァリニャーノ神父がその前に読んでいた手紙によると日本での布教活動は成果を上げているとのことであり、彼もそれを信じていた。しかし、実際に日本を訪れたとき、現実は手紙通りではないということが分かった。

ヴァリニャーノの考えでは、イエズス会の布教活動の障害の原因はカトリック信仰を伝え

ることにあるのではなく、宣教師と日本人の文化的・社会的背景が異なることによる相互理解の困難さにあると思われた。この不利な状況に対して、ヴァリニャーノは新たな布教戦略を考える[30]。この戦略によると、宣教師が住んでいる地域の文化的・社会的な要素、すなわち日本人の伝統や習慣及び人々の生活様式そのものを学んだり、それらを自身の日常生活に取り入れて自己の中でキリスト教文化と日本文化を統合したりする必要があったのである。つまり、日本の社会と文化に対しての寛容な態度が必要であった。

> 「日本の文化に敬意を払う行動は、ヴァリニャーノによって１５８０年に設立され、４人の使節団メンバーも籍を置いていた有馬 (現 南島原市)の神学校での活動でさらに顕著に現れます。」 (サルゲイロ 2014 p.56-57)。

しかしながら、この寛容な態度が必要であると信じる一方、ヴァリニャーノ神父は有馬の神学校の生徒はキリスト教の教えの唯心と日本文化の基本的考え方に対する優位性を受け入れるように教示するべきだと主張したのである。つまり、アレサンドロ・ヴァリニャーノは矛盾した立場に立っていたことになる。

従って、ヴァリニャーノが考えた天正使節の目的の一つはその矛盾した状況を解決することであった。キリスト教に改宗した日本人のローマ訪問を通じて、アジアにおける布教活動の成果を教皇に印象づけると共に、日本のキリスト教信者の代表者にもローマの重要性と勢力を理解させることであった。二つ目の目的は、日本における布教活動のための支援を得ることであり、大村純忠、大友宗麟、有馬晴信の３人のキリシタン大名と協力してポルトガルの国王とローマ教皇に使節を送ることにしたのである。

Figueiredo(1862) によると、ドゥアルテ・デ・サンデ神父の１５９０年の「De missione legatorum iaponensium ad romanam curiam」に記されている天正使節の主な目的は次の３つとされている:

第一: ヨーロッパ諸国の政治・経済・文化について、それまで日本人がポルトガル人と宣教師から得ていた間接的な情報ではなく、使節自身でその素晴らしさを直接体験し、日本で広まっているヨーロッパのものについての間違った考えや嘘偽を正すために帰国後確実な証言をすること。

第二: 神道や仏教は本物の宗教ではなく、キリスト教こそが本物の宗教であると日本人を説得するのは宣教師にとって非常に難しいことであった。そのため、日本人がキリスト教を受け入れやすくなるように、使節がキリスト教の本場ヨーロッパから持ち帰る知識や経験を通して、キリスト教は本物で素晴らしい宗教であり、キリスト教徒も素晴らしい人々であることを伝えること。

第三: 日本の王侯貴族、つまり大名は自身で教皇のもとへ行くことが出来なかったため、代わりに教皇への敬意と尊敬を払う使節を送り、ローマを始めヨーロッパ各地で日本の名声を高めること。

これは、つまり日本における布教活動の成功には、使節たち自身のヨーロッパとの接触がその文明・文化の素晴らしさや各国の勢力について日本人に理解させるのに重要だということである。ヴァリニャーノの考えでは、それまで商人と宣教師が伝えてきた情報より使節た

ちが直接得られるヨーロッパの情報や知識の方が発信される情報の信憑性に必要であった。

5.2. 天正使節の重要性

戦国時代にあって各地で戦いが続いており、政治的・経済的に不安定であった日本においてイエズス会の宣教師は重要な役割を果たしていた。彼らは、日本とポルトガル及びポルトガルが影響力を持っていた様々な地域で日本の大名を含む様々な人々とポルトガルの君主や商人などの間の仲介を務めていた。他方、日本の戦国大名は、自身の政治権力と軍事力を強化して戦いで勝利するために西洋人と接触して彼らを味方につけ、また、ポルトガルとの貿易によって必要な武器、弾薬を含む富を得ることを望んでいたのである。従って、この天正使節の派遣を通じて、西洋と東洋の間の政治的・経済的な関係が強化されたのである。

一方、ヨーロッパにおいて一大センセーションを巻き起こした日本からの使節団の渡航は、大いなる宗教的性格とともに政治的、外交的及び経済的要素をも帯びていたことがわかる。当時、ヨーロッパにとって、この少人数の使節団は日本を知りうる唯一の存在であるとともにヨーロッパ各国の習慣であった教皇への服従を表す使命をも担っていたのである （サルゲイロ 2014)。

5.3. 天正使節の構成員と準備

5.3.1. 天正使節団の主な構成員

– イエズス会の巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノ

イエズス会東インド管区の巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父は１５３９年２月１５日にイタリアのキエーティに生まれ、１６０６年１月２０日にマカオで没した。ヴァリニャーノは、東洋におけるポルトガルのカトリックの布教保護権[31]の歴史上、最も重要な人物の一人であった。

> 「この分野の研究者の多くは、１５００年代の東アジアにおいて聖フランシスコ・ザビエルに次ぐキリスト教活動の最重要人物と見なしています。」（サルゲイロ 2014 p. 52)。

ヴァリニャーノ神父の残した文章から、それまでのイエズス会の神父が出会った人々と全く異なる道徳的・政治的・文化的な背景を持った日本社会に対する彼の特段の理解と敬意が読み取れる[32]。



1 アレサンドロ・ヴァリニャーノ

－ 天正使節の４人の少年達



2 少年達の像、大村市

３人のキリシタン大名によって使節に選ばれた４人の少年達は、１５８０年にヴァリニャーノが創立したキリスト教徒のための有馬神学校[33]の生徒で、日本の武士階級の出身であった。この４人とは伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ及び中浦ジュリアンである[34]。

伊東マンショ（ドン・マンショ）　（１２歳）:

豊後の大名大友宗麟の甥で、天正使節の正使の一人であった。マンショ（満所）は洗礼名であり、本名は伊東祐益(いとうすけます)である。

千々石ミゲル（ドン・ミゲル）　（１４歳）:

大名有馬晴信の従兄弟にして大名大村純忠の甥でもあった。伊東マンショと同じく天正使節の正使の一人であった。ミゲル（弥解留）は洗礼名であり、本名は千々石紀員(ちじわのりかず)[35]、通称千々石清左衛門(ちじわせいざえもん)。

原マルチノ（ドン・マルチノ）　（１３歳）:

マルチノはジュリアンと同じく大村家家臣の家系であったといわれ、天正使節の副使の一人であった。マルチノ(丸知野)は洗礼名であり、本名は未だ不明である[36]。ローマに残されている資料によると肥前[37] 出身とされており、大村領の名士、原中務の子息。両親共にキリスト教徒であり、司祭を志して有馬神学校に入ったのである。

中浦ジュリアン（ドン・ジュリアン）　（１２歳）:

ジュリアンはマルチノと同じく大村家家臣の家系であって、天正使節の副使の一人であった。ジュリアン(寿理安) は洗礼名であり、本名は小佐々甚吾(こささ じんご) (サルゲイロ 2014)。

－ ディオゴ・デ・メスキータ

ディオゴ・デ・メスキータはポルトガルのメザオン・フリオ出身で、安土神学校の講師であった。メスキータはその優れた日本語能力により、天正使節の参加者として少年達の指導役兼通訳を任された。(サルゲイロ 2014)

－ ヌノ・ロドリゲス

イエズス会インド前管区長のヌノ・ロドリゲスは、ヴァリニャーノ神父が使節団のインド滞在の際にインド管区長に任命され、使節団を離れることになったため、この使節団のリーダーに任命される。

－ その他

日本人ジョルジェ・デ・ロヨラ修道士[38]と諫早出身のカテキスタ[39]のコンスタンティノ・ドラードという日本人が天正使節の随員として選ばれた。

「この二人は、グラフィックス・アートを専攻し、活版印刷の技術をポルトガルで学び、日本人初の印刷職人としてキリシタン版などのポルトガルミッションに関する出版物を

世に送り出しました。」（サルゲイロ 2014 p.60）

さらに、オリヴェリオ・トスカネーリ修道士とアゴスティーニョと呼ばれる使用人も天正使節に同行した(サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862)。

5.3.2. 天正使節の準備

正副使の選択:

九州各地から集まった有馬神学校の生徒の中から選ばれたマンショ、ミゲル、マルチノ及びジュリアンの４人は、さらにキリシタン大名の親戚でもあった。このため、彼等はヨーロッパへ派遣される天正使節の代表として選ばれたのである。

しかし、ヴァリニャーノ神父が４人の少年達を使節として選んだ理由は、若者の方がヨーロッパへの過酷な旅に耐えうるであろうという判断によるものであった（サルゲイロ 2014; Moura 1968-69）。また、サルゲイロ（2014）によると、ヴァリニャーノ神父は感受性の鋭い若者なら統率しやすいと思っていたのではないかと推察される。

天正使節の旅の構想:

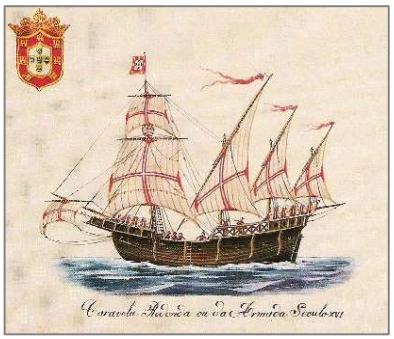
イエズス会及びアレサンドロ・ヴァリニャーノ巡察師はヨーロッパ訪問に先立ち、訪問先を厳しく精査し、使節たちに伝えるべき情報を考えていた。

少年達一行にヨーロッパが文化的・社会的のみならず経済的・宗教的にも優れていることを感じさせるため、ディオゴ・デ・メスキータ神父もヴァリニャーノ巡察師から使節たちがヨーロッパ各国の宮廷で歓迎されるべき方法について厳しく指示されていたのである。

6. 天正少年使節の旅（１５８２年～１５９０年）

6.1. 長崎からリスボンへ[40]

使節団は１５８２年２月２０日にポルトガル人イナシオ・デ・リマの商船で長崎港から出帆し、ヨーロッパへの長い旅を始めた。第一の区間はマカオまでであった。マカオまでの旅は短いものであったが、非常に厳しく、少年達も船酔いに悩まされた。



3 南蛮船

３月９日マカオに到着し、レオナルド・デ・サ司教やジョアオン・デ・アルメイダ総司令官、その他のイエズス会士などに迎えられた。この地で風待ちのため約１０か月滞在した。その間、少年達は音楽を勉強し、ディオゴ・デ・メスキータ神父は彼らが日本で始めた有馬神学校の授業を引き続き行った。なお、少年達はヨーロッパまでの旅でポルトガル語[41]、ラテン語、スペイン語も勉強したようである(サルゲイロ 2014)。

数か月後、使節団はマカオを出発してインドへ向かった。マラッカからインドまでの間にメスキータ神父と伊東マンショが重い病気になり、また、長旅であったため食料と水も少なくなった。しかし、使節団が乗った船は先へ進み、セイロン島[42]のコロンボ港を経てインドのコモリン岬へ向かった。

その後使節団はインド東海岸のコスタ・ダ・ペスカリーア[43]に数日間滞在した。メスキータと他の病人が治療のためにトゥティコリンにいる間、使節たちはトリンシャドゥラとマナパルを訪れた。次に使節団は陸路でインド西海岸のクーランに至った。クーランではコチンまでの船に乗り、翌日１５８３年４月７日コチンに到着した。コチンで約６か月間滞在し、その後ゴアへ向かった。

使節団はゴアではインド総督に迎えられ、豊後、有馬、大村の各大名からの書簡を彼に渡した。ゴア滞在中、ヴァリニャーノ神父がインド管区長に任命されたため、ヌノ・ロドリゲスが代わりに使節団とローマまで行くことになった。数日後、使節団はゴアでヴァリニャーノと別れてコチンへ戻り、１５８４年２月２０日ヨーロッパ行きの船に乗った。

５月１０日喜望峰を通過し[44]、１６日後サンタ・エレナ島に到着した。この島で１１日間休息し、旅の最終段階の準備をした。８月初め、テージョ川を遡ってポルトガル王国の首都リスボンに到着し、ヨーロッパまでの旅はここで終了した。

7. ポルトガルにおける天正遣欧少年使節[45]

7.1. リスボンとシントラ[46]

使節団はポルトガルのテージョ川河口にあって、リスボンに近いカスカイスに投錨し、一泊した[47]。翌日、有名なポルトガル王国の首都リスボンの港へ移動した。少年達はこの港の規模とそこに停泊していた船の数に大変驚いたようである。



4 サオン・ロケ教会

リスボンではイエズス会本部のサオン・ロケ教会[48] に宿泊した。この時期、ヌノ・ロドリゲスが短期間使節団から離れてマドリッドへ行ったため、少年達はディオゴ・デ・メスキータとセバスティアオン・デ・モラエス神父と一緒にリスボンに滞在することになった。そこでは枢機卿アルベルト・デ・アウストリア[49]に迎えられ、リスボン大司教ジョルジェ・デ・アルメイダやイタリアの高名な神学者フレイ・ルイス・デ・グラナダといった要人にも紹介された。どこへ行っても少年達は実の息子であるかのような大歓迎を受けた。

翌日[50]、使節団は枢機卿アルベルトの馬車でリスボンの町を見物して回った。現在の観光客のように、ベレン塔や他の有名な観光地なども訪れた。

次の日はリスボン郊外のシントラの近くにあるペニャ・ロンガ修道院を訪問した。その後、枢機卿アルベルトに招かれ、使節はシントラ王宮を訪れた。そこでは食事に驚かされたが、それは、使節のために特別に用意された豪華な肉料理であったからだ。少年達はこのような食事に慣れていなかったため、あまり食べることができなかったと思われる（志岐 2010)。この会食に出席するにあたり、４人は日本の伝統衣装である着物を着た。食事後はペニャ・ロンガ修道院に戻り、そこで宿泊した。

シントラからはリスボンに戻り、１５８４年９月５日徒歩でリスボンのサオン・ロケ教会からマドリッドに向けて出発した。リスボンから直接マドリッドへ行く予定であったのだが、

使節団がリスボンにいることを知ったエヴォラの大司教テオトニオ・デ・ブラガンサに招かれて使節たちはエヴォラとヴィラ・ヴィソーザに立ち寄った。

7.2. モンテモール・オ・ノヴォ

使節団はリスボンを出てテージョ川を渡り、アレンテージョ地方を数日間旅してモンテモール・オ・ノヴォという町に到着した。この町に入る少し手前でエヴォラの大司教の執事に迎えられた。執事は大司教の命により馬車で迎えに来ていたのである。(Sande 2009)

モンテモールでは宿舎が用意されていたので、使節団はそこで食事し、一泊した。食事の際に一人の僧侶がエヴォラの大司教の代わりに使節達を歓迎し、大司教からのメッセージを伝えた。それに応えて伊東マンショが使節団の代表として感謝の言葉を述べた。翌朝少年達はミサに出席するために午前３時前に起床した。ミサの後で朝食を取り、すぐにエヴォラへ向かった。

7.3. エヴォラ[51]

使節団はモンテモールを出発した日[52]の午前１０時頃エヴォラに到着した。イエズス会のエスピリト・サント学院[53]の神父と修道士達に迎えられ、その学院で宿泊した。使節団の到着を知ったテオトニオ大司教は、彼らに食事を振る舞うように指示し、その後も彼らのエヴォラ滞在の間、毎日食事の用意を指示したのである。



5 エヴォラ、16 世紀

使節団が到着した日、テオトニオ・デ・ブラガンサ大司教は少年達を迎え、４人を抱擁し、祝福した。大司教はその後少年達と一緒にエスピリト・サント学院でその日の午後を過ごした。そこで使節は学生と総長にも歓迎され、大学の授業も参観した。また、町の修道院の訪問の際は、常に大司教が使節団のために自身の馬車を提供した(Sande 2009)。



6 エスピリト・サント学院

使節団はこの町で７日或いは８日間滞在した。この間、少年達は様々な楽器を弾き、ヨーロッパで最も大規模なオルガンの一つと言われていたエヴォラ大聖堂のオルガンを弾く機会もあった（サルゲイロ 2014)。



7 エヴォラの大聖堂

９月１４日が十字架挙栄祭[54]であったため、使節団はテオトニオ大司教の願いでその日までエヴォラに滞在した。当日少年達はエヴォラ大聖堂のミサに行き、その後大司教と共に聖体行列[55]に参加した。日本の少年達が行列に混じって歩いているのを見て、町の多くの人々は彼らを祝福し、中には大変感動して涙まで流す者もいたようだ。 聖体行列が終わると、大司教は４人を自身の礼拝堂[56]に招き、タペストリー[57]や祭壇の装飾品、高価な品々と共に旅費として１０００クルザード[58]を贈った。また、大司教個人の書庫では少年達に数々の地図や書物なども見せた[59]（サルゲイロ2014）。

サルゲイロ（2014）によると、使節は大司教の家で最後の食事をしたが、その際貧民１２人も招待されて同席していた。使節達はこれに大変感動し、そのような慈悲と思いやりの行為を目撃したことを喜んだ。その後エヴォラ大聖堂まで行き、伊東マンショと千々石ミゲルが大聖堂のオルガンを演奏した。


8 エヴォラ大聖堂のオルガン

エヴォラ出発の前に使節団はテオトニオ大司教を招待し、日本の着物や日本式の挨拶などを披露した。また、日本で記された書物や織田信長(１５３４～１５８２年)の書簡なども見せたが、中でも大司教が最も感動したのは、少年達が旅の間に覚えたラテン語で記したノートなどであった。日本から持参した品物もいくつかテオトニオ大司教に贈り物として渡そうとしたが、大司教は彼らがまだ多くの人物を訪問しなければならないという理由で、小さな箱一つしか受け取らなかったようである （Moura 1968-69)。

天正使節と日本におけるイエズス会の布教活動の成果に感動したテオトニオ大司教は、日本に新しい学校或いは神学校を作るための経済的援助を申し出た。さらに、ミサで使われる葡萄酒をインドからの輸入品に頼らず日本で製造できるように、修道士やブドウ栽培農家を日本へ派遣することを約束した（サルゲイロ 2014; Moura 1968-69; Sande 2009)。

９月１４日、使節団はテオトニオ大司教に別れを告げ、馬車でヴィラ・ヴィソーザへ向けてエヴォラを出発した。

7.4. ヴィラ・ヴィソーザ

– ヴィラ・ヴィソーザとブラガンサ公爵

ヴィラ・ヴィソーザは中世の古い町であったが、１５世紀末からブラガンサ公の支配下で生まれ変わり、この時期のポルトガルにおける政治、経済、文化、軍事面の要所となっていた。ここは、実にポルトガルのヒューマニズム文化普及の中心地となっていたのである。

ブラガンサ家は、スペイン・ポルトガルが同君連合であった[60]１６世紀後半からイベリア半島全土において最も重要な公爵家で、ヨーロッパの主要な公爵家の一つでもあった。国王の宮廷から離れた場所に位置していたにもかかわらず、宮廷の政治に少なからぬ影響力を持っていた（サルゲイロ 2014）。

ヴィラ・ヴィソーザはこのようなブラガンサ公爵の存在により社会的、文化的及び経済的に大きく発展していた。宮殿や教会、修道院などの建築物が訪問者の目を見張らせるほど豪

華な外観をこの町に与えていた。また、ブラガンサ家の住まいがあったので、数多くの使用人とその家族や貴族、騎士なども移住してきたため、人口構成も以前とはすっかり変わり、町は大きく発展したのである。

こうした背景の上に第７代ブラガンサ公テオドジオ２世とドナ・カタリーナ公爵夫人の存在があり、１５８４年に日本からの訪問者をこのような町で受け入れることになったのである。

－ 第７代ブラガンサ公ドン・テオドジオ２世とブラガンサ公爵夫人ドナ・カタリーナ

ドン・テオドジオ２世は天正少年使節の訪問の１年前、１５歳で第７代ブラガンサ公に即位した。従って、使節団がヴィラ・ヴィソーザを訪問した際には、彼は４人の使節達とほぼ同年齢[61]であった。父公爵が病気であったため、テオドジオ２世はわずか１０歳の時、ブラガンサ家の８００人の兵士と従者を率いてアルカセル･キビールの戦い[62]に出征する経験もしていた。

芸術を愛したテオドジオ２世の影響で、１６世紀末にヴィラ・ヴィソーザは音楽、文学、人文科学の中心地となった。 また、ポルトガルがスペイン統治下にあっても、彼は公爵家の権威を持ってポルトガルらしさを守り抜き、スペイン国王フェリペ２世との関係にも実に巧みな政治手腕を発揮した。

テオドジオ２世の母親であるドナ・カタリーナ公爵夫人は、エヴォラの大司教ドン・テオトニオの親族であり、スペイン国王フェリペ２世の従妹でもあった[63]。この時期、ドナ・カタリーナ公爵夫人はポルトガル王国における政治面で最も重要な人物の一人であり、息子テオドジオが幼少であったので、後見人も務めていた。

7.4.1. 天正少年使節のヴィラ・ヴィソーザ訪問

１５８４年９月１４日の夜、使節団はおそらくエヴォラとヴィラ・ヴィソーザの間の地で宿泊したと考えられるが、これについては未だ資料が発見されていない。しかし彼らが９月１５日の午後ヴィラ・ヴィソーザに到着したことは確かな史実である。このヴィラ・ヴィソーザへの訪問はエヴォラのテオトニオ大司教とドナ・カタリーナ・デ・ブラガンサ公爵夫人の要請で行われたものである。その目的については、先ずイエズス会側はブラガンサ公爵家への訪問を通じてヨーロッパ文化におけるカトリックの重要性を日本人に示したかったのである。一方、ブラガンサ家側は使節団の受け入れによってイベリア半島における威信と権力を示すことを望んだのであろう。つまり、この訪問はただの偶然の表敬訪問ではなかったと考えられる（サルゲイロ 2014）。

使節団はローマへ行く途中、この町で１５８４年９月１５日から１８日まで４日間滞在したが、天正使節のポルトガルにおける旅で最も重要な訪問だったと見られている。使節はローマからの帰途、再びこの町に立ち寄り、その際も４日間滞在している。(サルゲイロ 2014; Moura 1968-69)



9 サント・アゴスティーニョ修道院

往路、使節団が立ち寄った際、ブラガンサ公爵は使節団の到着を知らされていた。ドナ・カタリーナは彼らがヴィラ・ヴィソーザに着く前に公爵の馬車を彼らの迎えに遣わした。テオトニオ２世は兄弟達と共に町のサント(聖)・アゴスティーニョ修道院の入り口で使節団を迎えた。両者はそこでポルトガル語と日本語で挨拶を交わした。その後、使節団は公爵に主礼拝堂へ案内され、そこで行われた聖体ミサに出席した。ミサの終了後、使節団と公爵は公爵宮殿に向かった。この宮殿の建築とその規模は日本の少年達を大変驚かせたと考えられる。公爵は中央階段のところで使節団を待ち、ドナ・カタリ―ナの控える部屋へ彼らを案内した。少年達はカタリ―ナの実の息子であるかのように大歓迎された。(サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862)

また、使節団のために用意されていた宿泊場所も金糸のタペストリーや絹でふんだんに飾られており、寝室にも少年達と二人の神父用の豪華に飾られたベッドが置かれていた(Moura 1968-69)。

礼拝堂で行われた式典の後、使節団は公爵とその兄弟や神父達との会食に招かれた。テオドジオ２世は伊東マンショが洋式の正餐の様子を観察できるように、彼には常に最も良い席を与えた。食事の際に使われていたのは豪華な銀食器であった。

> 「あまりにもゴージャスで素晴らしいご馳走だったため、食べるよりも驚きのほうが先に立ちました。」(サルゲイロ 2014 p.112)

食堂も多くの金や銀の装飾で飾られており[64]、ブラガンサ家の使用人も食事の際には銀食器を使用していた。

使節団の随員の一人、日本人のコンスタンティノ・ドラードは好奇心が強くてポルトガル語の筆記に優れていたので、ヴィラ・ヴィソーザで目にした様々なことを記録した。宮殿では特に厨房が印象的であったようだ。礼拝堂や素晴らしい宮殿の建築についてもドラードによる詳細な記録が残されている。(サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862)



10 公爵宮殿

ブラガンサ公爵は少年達の日本の伝統衣装である着物について聞きおよぶと、彼らがその着物を着て日本の正式な挨拶の仕方を披露することを望んだ。こうして、４人の少年達は着物姿で宮殿内を歩いた。その美しさに感心したドナ・カタリ―ナは大変褒め、特に帷子が一番気に入ったようである。これが私的な儀式であったにもかかわらず、少年達が自室に戻る際には物見高い従者達が部屋の前に集まっていたので、その人々にも少年達の姿が見えるようにドナ・カタリーナは松明を灯すように指示したのであった(Sande 2009)。

更に次のようなエピソードも残されている。ドナ・カタリーナはディオゴ・デ・メスキー

タ神父に依頼して少年達の着物一式を見る機会を得、次男のドン・ドゥアルテが祝祭などで着用できるよう使用人に同じような着物を仕立てさせた。翌朝、ドン・ドゥアルテにその着物を着せて、メスキータ神父に宮殿内に日本人がもう１人いると少年達に伝えさせた。着物を着たドン･ドゥアルテの姿を見て日本人はいささか驚いた。彼の着こなしは妙な個所が少々あったが、それは日本人の少年２人によって直された。ドナ・カタリ―ナは、息子が自身で着物を着られるように、日本人から正しい着付けの教えを受けた(サルゲイロ 2014; Moura 1968-69; Sande 2009)。

他にもヴィラ・ヴィソーザで目されるところは、使節団が狩りの際に訪れた狩猟施設であった[65]。

> 「後日おこなわれた馬上槍試合は、日本では珍しいものだったので使節団の興味を大いに引いたそうです。」（サルゲイロ 2014 p.123）

このヴィラ・ヴィソーザ訪問の成功は、日本人とポルトガル人が様々な交流を通した体験の共有からお互いに文化的変容を遂げていくプロセスの上に成り立ったことがわかる。また、ポルトガル人、特に子供達と日本の少年達の交流を通じて西洋と東洋が結ばれたのである。

この町で滞在した４日間、少年達はドナ・カタリ―ナに何度も招待されたが、それは彼女が４人を自分の息子のように思い、彼らとの会話を楽しんだからである。４人は楽器も得意であったので、公爵はチェンバロとヴィオラを自室に持ってこさせ、そこで彼らが演奏を披露した。この演奏は全員が大変感心するほどであった(サルゲイロ 2014)。

ヴィラ・ヴィソーザからの出発は１０月１８日となった。ドナ・カタリーナとテオドジオ２世に別れの挨拶と感謝の言葉を述べ、贈り物や旅費の援助を受けて、公爵の馬車でスペイン領近くのポルトガルの最後の町エルヴァスへ向かった。

次に、本稿の目的であるポルトガルにおける天正使節の旅の詳細についての記述から少々逸れるが、この旅路の重要な構成要素であるスペインとイタリアにおける天正使節の主な行動等について述べる。

8. スペインとイタリアにおける天正少年使節[66]

8.1. スペイン

使節団はエルヴァスからスペイン王国のバダホスの町に入り、その後いくつか町や村を経てトレドに至った。千々石ミゲルの急病によりこの町に２０日間滞在したが、ミゲルの病状回復後マドリッドを目指した。

使節団がマドリッドに近づいたとき、貴族数人が馬車で迎えに来ていた[67]。使節たちは古くからの知人であるかのようにこの人々に歓迎され、１人ずつ馬車でマドリッドのイエズス会学院まで案内された。これは１０月２０日のことであった。ここでも多くの歓迎を受け、約３６日間この地に滞在した。

マドリッドでは、この時期ヨーロッパ及び全世界における最大最強の人物であったといわれる国王フェリペ２世（Sande 2009）に謁見した。フェリペ２世は訪問者を抱擁し、歓迎した。この謁見の席上、使節の派遣者である大名たちからの書簡が日本語とスペイン語で朗読され、フェリペ２世は笑顔でそのメッセージに応えた。フェリペ２世はメスキータ神父によ

る通訳を介し、日本の着物を着ている少年達にその服装について尋ねた。フェリペ２世が自分達の履物、草履に興味を抱いているのに気づいた原マルチノは、国王が近くでそれを見られるように自身の草履を手に持って国王に示した。最後に少年達はフェリペ２世に贈り物を献上した。国王はその贈り物の装飾と優雅さを賞賛し、喜んで受け取った。フェリペ２世は使節団の旅が順調に進むようにスペインのローマ大使と使節団が訪れる町の知事に書簡を送った(サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862)。

マドリッドには約３６日間滞在したが、その間の１１月に近くのエスコリアールに立ち寄り、サン・ロレンソ修道院に宿泊した。ここでは少年達の優美な衣装と珍しい顔立ちが多くの人々の注目を集めた(Moura 1968-69; Figueiredo 1862)。

マドリッドでの最終日、１５８４年１１月２５日にフェリペ２世が使節の宿舎イエズス会学院を訪れ、贈り物と旅費としての金銭を贈った。この日使節団は馬車でマドリッドを出発した。

マドリッドでフェリペ２世に大歓迎されたため、ヴァリニャーノが望んでいたこととは異なり[68]、使節たちはその後様々な町で同様に歓迎されることになった。

１５８５年1月５日、使節は地中海の港町アリカンテに至る。この町で１４日間滞在し、船でイタリアへ向かった。同月の１８日に出発する予定だったが、逆風のため２度港へ引き返さなければならなかった。２月７日になって、ようやく出発可能となった。数日後マヨルカ島のアルクーディアに到着し、３日間宿泊した。使節団の訪問の情報を受けた町長が彼らの船を訪れた。日曜日に使節団がミサのため町へ出かけた際、町長は４００人の兵士と共に迎えに来て、町で少年達を盛大に歓迎した。

そして、3月１日、ついにイタリアのリヴォルノの港に到着し、イタリアに入った。

8.2. イタリア

使節団はリヴォルノで一泊し、翌日陸路でローマへ向かった。途中多くの町を通ったが、スペインのときと同様に行く先々で大歓迎された。

サン・クイリコという町を訪れたとき、教皇グレゴリオ１３世からの伝言を受け取った。教皇は少年達との面会を切望しており、また、自身の余命が幾ばくも無かったため、使節団に先を急ぎ２３日には到着するようにとのことであった。中浦ジュリアンが病気であったのだが、使節団は急遽ローマへ向かった。

１５８５年3月２２日の午後、使節団は多くの迎えの人々と共にローマに入った。着物を着て腰に刀を差し、華やかに着飾った馬に乗り、街路をパレードした。日本からの訪問者を歓迎するため市内の教会の鐘が鳴らされ、サンタンジェロ城から礼砲が撃たれた。ローマでは約７０日間滞在した。

３月２３日の朝、使節団は教皇グレゴリオ１３世と枢機卿２５人が集まっている教皇枢密会議室を訪問し、大歓迎された。しかし、中浦ジュリアンは高熱のため同行できなかった。会議室では伊東マンショが日本語でスピーチを行い、それをメスキータ神父がイタリア語とラテン語に同時通訳した。キリシタン大名からの書簡もイタリア語に訳されて披露された。

中浦ジュリアンの病状を知った教皇は急ぎ彼の所に医者を差し向ける。謁見の後、少年達

は教皇に旅と日本のキリスト教の状況について報告した。

３月２５日、前回と異なる着物を着て、受胎告知の祝いのため少年達は教皇に伴われてサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会を訪れた。 その後、４月４日に教皇グレゴリオ１３世と私的に面会し、その際に琵琶湖や安土城及びその城下町が描かれている屏風[69]を教皇に献上した。この屏風は、戦国大名織田信長の命令により描かれた屏風絵で、ヴァリニャーノに与えられたものである（サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862)。

しかしながら、以前から病気であった教皇は病状が悪化し、４月１０日に没した。この日使節は町を訪れた際に教皇の訃報を知り、宿舎に戻って喪に伏した。

４月２１日、新教皇の選挙のため枢機卿が集まり、後継者選びのコンクラーヴェを行った。コンクラーヴェの５日目、４月２５日にフェリーチェ・ペレッティ枢機卿が新教皇として選ばれ、シクストゥス５世と名乗った。こうして、ローマ滞在の間、使節たちは新教皇の戴冠式を目撃することができたのである。

４月２７日使節は 新教皇シクストゥス５世に拝謁し、名代を務めていた３人のキリシタン大名の代わりに教皇への敬意を述べた。新教皇は喜んで彼らの言葉を受け、グレゴリオ１３世と同様に日本での布教活動に貢献することを約束した。

５月１日、病状が快復していなかった中浦ジュリアンを除く３人の少年達はサン・ピエトロ大聖堂で行われた教皇シクストゥス５世の戴冠式に出席した。少年達への情愛と尊重の証として、教皇は彼らをサン・ピエトロの騎士に任命した。さらに、旅費としての金銭や日本の神学校への援助などの特権を授与し、３人のキリシタン大名への手紙や贈り物を託した[70]。ヨーロッパでの道中の便宜を図るため推薦状も与えた。

１５８５年６月3日、使節団はローマを出発し、長い帰国の旅に就いた。以前と異なるルートから帰国したため、途中ヴェネツィアやボローニャ、ミラーノ、ジェノヴァなど、イタリアの主な町に立ち寄った。どこへ行っても大変注目を浴び、熱狂的な歓迎を受けた。特にヴェネツィア共和国での歓迎と歓待はスペイン国王や教皇にも負けないくらい立派なものであった。町のサン・マルコの祝祭の日は使節団の訪問の日に合わせて３日間延期され、有名な画家ティントレットも許可を得て日本の少年達の肖像画を描いた[71]。

この時期イタリアにおいて最も人口が多かったミラーノでもウルバーノ・モンテという市民によって使節団のやや型にはまった感のスケッチが描かれ、現在まで伝わる肖像画となっている。

１５８５年８月３日使節団はミラーノを出発し、ジェノヴァへ向かった。８月８日ジェノヴァで船に乗り、翌日スペイン王国へ向けてイタリアを出発した。８月１６日スペインのバルセロナに到着した。

8.3. スペイン - 帰路

バルセロナでは、再び発病していた中浦ジュリアンが必要な治療を受けられるよう２５日間滞在した。バルセロナを出発した後、モンソンへ行き、ここでフェリペ２世に別れの挨拶をした。サラゴサとアルカラを経てマドリッドに至る。マドリッドで短期間滞在し、ポルトガルへ向う。

9. ポルトガルにおける天正少年使節 - 帰路

9.1. ヴィラ・ヴィソーザ

１５８６年２月８日使節団は再びブラガンサ公爵の町ヴィラ・ヴィソーザに至る。以前と同様に公爵のもてなしを受け、４日間滞在した。ヴィラ・ヴィソーザの後、以前も訪れた町エヴォラに向かった。

9.2. エヴォラ

エヴォラでは、使節団はイエズス会士と大司教テオトニオ・デ・ブラガンサに大歓迎され、９日間滞在した。大司教は毎日豪華な食事を提供し、また、使節団が持ち帰れるように自身の礼拝堂の絵画や聖遺物、その他の貴重な物のほとんどを贈り物として渡した。

使節団がこの町を訪問した折、彼らが以前インドで会ったインド総督フランシスコ・デ・マスカレニャスもそこにいた。マスカレニャスは使節団と会い、個人的にも、また、彼らの必要なものについても援助すると宣言した。

使節団の訪問はエスピリト・サント学院の学生たちに祈りや頌歌で祝われたので少年達は非常に喜んだ。

この町からリスボンに向けて出発し、アルカセル・ド・サルという町にあったイエズス会の家[72]に数日間滞在した。その後、アルベルト枢機卿からの迎えの舟でテージョ川を渡り、リスボンに戻った。

9.3. リスボン

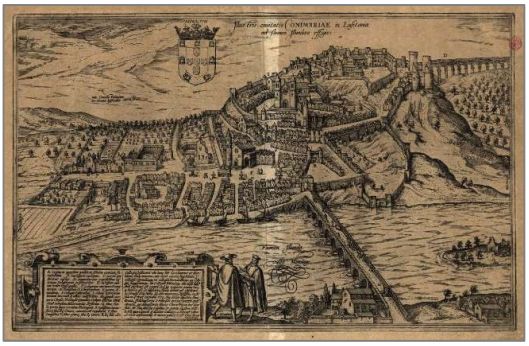
使節団はリスボンに到着後、枢機卿アルベルトを訪問し、再びイエズス会士に盛大に迎えられ、サオン・ロケ修道院に宿泊した。

アジアへの航行が翌年三月に延期され、時間があったため、使節団はリスボンで何度も枢機卿アルベルトを訪問した。また、サント・アンタオン学院も訪れて学生たちに様々な歓迎を受けた。

ポルトガルに滞在中、コインブラの学院のイエズス会士の要請でコインブラも訪れた。コインブラの神父が少年達と面会することを望んでおり、また、一方、少年達も日本で多くを聞いていた有名なコインブラ学院を自分の目で見ることを望んでいたのである(Figueiredo 1862; Moura 1968-69; Sande 2009)。

9.4. コインブラ

少年達はコインブラに向け、舟でテージョ川を上り、リスボンからサンタレンに至った。サンタレンで数日間滞在した後、陸路でトマール[73]に至る。そこでキリスト騎士団の修道院と教会を訪れ、その芸術や多くの高価な作品に非常に感銘を受けた。その後コインブラに向かい、１５８５年１２月２３日に到着した。使節団の到着は、イエズス会の学院では



11 コインブラ、16 世紀

天正使節を派遣したキリシタン大名たちを称賛する素晴らしいスピーチによって祝われた(Sande 2009)。

少年達はこの町では２０日間滞在し、イエズス会の学院や有名なコインブラ大学[74]を訪問した。大学では授業に参加したが、彼らを迎えるために生徒たちは礼装していた。コインブラ司教アフォンソも彼らを大喜びで迎え、様々な贈り物を贈った上、この２０日間にわたり、町内の様々な場所を案内して回った。



12 コインブラ大学

使節団は１５８５年のクリスマスもこの町で過ごした。司祭たちはキリスト降誕場面を実演した。コインブラ司教アフォンソは大聖堂で行われるミサに使節を招待し、主礼拝堂内で少年達に特別席を用意した。また、王子だけが受けられる名誉も与え、儀式を執り行った。

使節団はコインブラからリスボンへの帰途、バタリャとアルコバサを訪れて有名な修道院にも立ち寄り、大変感銘を受けたようである。



13 バタリャ修道院



14 アルコバサ修道院

9.5. リスボンからの出発[75]

使節団はアルコバサを出発し、リスボンに戻り、そこで帰国の旅の準備を始めた。枢機卿アルベルトからは、旅費としての４０００クルザードと旅のための差し入れや衣服、食料などを与えられた。多くの荷物やヨーロッパ各地で贈られた品々などを荷造りし、準備しなければならなかった。その後、枢機卿とイエズス会士に別れを告げ、１５８６年４月１２日、リスボンで大型船[76] に乗船し、日本へ向けて出帆した。

10. 日本への帰国と天正遣欧少年使節の影響

赤道を通過した１５８６年５月６日まで航行は順調に進んだ。その後いくつかの危険な状況に遭遇したが、１５８６年７月７日無事に南アフリカの喜望峰を通過した。その後、大嵐に遭ったにもかかわらず、１５８６年８月３１日無事にモサンビークに入港した。しかし、この最初の経路を予定日数内に終了できなかったため、モサンビークに到着したときには、すでにインドへの出帆の時期は終わっていた。従って、翌年３月までモサンビークで待機しなければならなかった。

当時ゴアにいたヴァリニャーノ神父は、使節の船が大船団と共にインドに入港していないことを不思議に思った。彼らがまだモサンビークに留まっている可能性を考え、神父は使節団をゴアまで導くために、小型の速度の速い船をモサンビークまで向かわせた。また、その地の知事に書簡を送り、使節団がモサンビークに留まっていたら、彼らの旅に必要な差し入れをして早めにその船でインドへ向かわせるように依頼した。このようにして、１５８７年３月１５日使節団はゴアに向け、モサンビークを出帆した。

使節は同年５月２９日ゴアに到着した。そこでアレサンドロ・ヴァリニャーノ神父に再会し、１１か月間滞在した。町ではインド総督と様々な人々の歓迎を受けた。

ヴァリニャーノと使節たちは日本へ行くイエズス会士と共に１５８８年４月２２日にゴアを出帆し、７０日後の１５８８年７月１日マラッカに到着した。マラッカで１２日間滞在した後マカオに向けて出帆し、８月１１日マカオへ入港した。

マカオまでの旅は予想以上に時間を費したので、航行に適した風向きの良い時季を待たなければならなかった。少なくとも１０か月の滞在が必要だったのだが、その当時の日本における政治の混乱やイエズス会士の追放[77]により、日本への入国は禁止され、使節団はマカオで約２年間滞在しなければならなかった。その間、中国船がもたらした手紙から日本の深刻な事態が伝えられた。ヴァリニャーノ神父も様々な手段によって日本への渡航を試みたが、日本入国の許可を得るまで待たなければならなかった。

長期交渉の末、豊臣秀吉が使節団の帰国を許可したので、１５９０年６月２３日使節達は日本に向かってマカオを出帆した。１５９０年７月２１日、ヨーロッパへの出発から８年半後、使節団はついに長崎へ帰り着き、この長い旅を終了した。

４人の少年達が下船したとき、それぞれの家族は４人の見分けがつかなかったと言われている（サルゲイロ　2014)。８年半前にこの壮大な旅に出発した幼い１０代の４人の少年達が外国を体験し、様々な影響を受けた青年に成長していたからである。

10.1. 日本における天正使節の影響

使節団の日本への帰国後、多くの大名とその側近たちが使節団が西洋諸国で見聞した経験を聞き、学ぶために集まってきた[78]。しかし、帰国後の最も重要な出来事は、１５９１年３月３日京都の聚楽第で行われた豊臣秀吉への謁見であった。街道には多くの人々が少年達を見ようと集まった。この謁見後、ヨーロッパからの贈呈品の献上を受けた秀吉は使節団にヨーロッパ諸国に関して尋ねた。また、伊東マンショに仕官を勧めたが、彼は丁重に辞退した。最後に、４人は持ち帰った楽器で西洋の音楽を披露した。秀吉はたいそう満足して再演奏を所望し、楽器を注意深く手に取って眺めた（サルゲイロ 2014)。

10.2. 帰国後の使節たちの人生

帰国の際に行われた公式の歓迎式終了後、４人は布教活動に専念するためイエズス会に入会した。伊東マンショと原マルチノ、中浦ジュリアンの３人は司祭に叙階された。４人は８年間のヨーロッパへの長い旅を共にしたにもかかわらず、日本での生活はそれぞれ異なるものとなった(サルゲイロ 2014)。

伊東マンショは小倉で働き、九州各地を訪れた後、１６１２年１１月１３日、４３歳で長崎において没した(松田 2001)。千々石ミゲルはキリスト教の信仰を放棄し、１６０６年に大名大村喜前に仕えることになった（Ribeiro 2006）。彼の死亡日は不明である。１６１４年徳川幕府により宣教師が日本から追放されたとき、説教者となっていた原マルチノもマカオに追放された。彼は１５年間イエズス会学院の教授として生き、日本から逃げて来たキリスト教徒を迎えて日本のキリスト教の歴史に貢献した。１６２９年１０月２３日彼はマカオにおいて没した（松田 2001）。中浦ジュリアンは徳川幕府の退去命令に背き、口之津で長年にわたって迫害されていた日本のキリスト教徒を勇気づけ、支援し続けた。しかしながら、その後は捕われ、禁止されていたキリスト教を信仰し続けていたという理由で１６３２年に死刑を宣告された(サルゲイロ 2014)。彼は他の宣教師と共に長崎で３日間の拷問に耐えたが、１６３３年１０月２１日殉教した（松田 2001）。

10.3. 17世紀初頭におけるキリスト教の状況

１５８７年から悪化しはじめた日本におけるキリスト教の状況は、使節団の帰国後しばらくは改善した。しかし、１６世紀末から１７世紀初頭にかけて日本が再統一へ向かって動きはじめたとき、日本に渡来した新たな修道会[79]との争いが起こり、キリスト教徒にとっても困難な日々が続いた。

また、１６０６年には日本はスペインのフェリペ２世の政敵で宗教上の対立もあったオランダとも交易を始めるようになった。オランダは日本との貿易の権利をポルトガルから奪い、日本とポルトガルの関係を寸断しようと画策した。このため、１６３５年将軍徳川家光はポルトガルとの接触を禁止した。これにより、日本におけるポルトガルとイエズス会の影響力は急速に弱まった。両国の交易再開を嘆願するために１６４０年に日本に派遣された使節団は虐殺され[80]、日葡関係はその時から２世紀以上の間途絶えることになった[81]。

東洋におけるイエズス会の布教活動と発展はポルトガルにとって有益であった。しかし、ポルトガルと日本の間の政治的・経済的関係の終焉に繋がったことも確かな事実であると思われる。

11. 日本人らしき人物が描かれた最初の宗教画 – 「ペンテコステ」[82]

ヨーロッパにおける天正少年使節の訪問は各地に様々な影響を与えた。ポルトガルも例外ではなかった。ポルトガルにおいては、使節団が訪れたことが芸術的な表現、すなわち、アジア人のような人物が描かれている１６世紀末の宗教画の出現につながっていると考えられている。

以下、上記絵画の作者及びヴィラ・ヴィソーザにおいて使節団を迎えたブラガンサ家と作者との関係、また、フレイショ・デ・エスパダ・ア・シンタ[83]のサント・アントニオ礼拝堂に現存する、この不思議な宗教画について紹介する。

11.1. 画家アントニオ・レイタオンの紹介

アントニオ・レイタオンは１６世紀のポルトガル人画家で１５３０年頃カステロ・ボン[84]の

貴族の家系に生まれた。思春期、ドミンゴス・レイタオンという叔父[85]の支援で首都リスボンへ行き、ドナ・マリア王女[86]の侍従となる(Serrão 2010)。

アントニオ・レイタオンはドナ・マリアにその才能を認められ、ローマで美術を学ぶための奨学金を与えられた(Pinto 1996; Veiga 2011)。 ローマの後、レイタオンは叔父のドミンゴス・レイタオンと共にフランドルへ行き、そこでスペイン軍に加わった[87]。フランドルで知り合ったルジア・ドス・レイスというアントワープ出身の画家と結婚した後、二人はポルトガルに定住し、１５６４から１５８０年にかけてポルトガルのブラガンサとラメゴに住む。彼らは１５９５年以後にブラガンサで没したと言われている[88] (Serrão 2010)。子孫は息子２人とマリア・レイタオンという娘１人であった。娘はブラガンサ家の薬剤師でキリスト騎士団の騎士でもあったグレゴリオ・ロドリゲスと結婚した(Machado 1752; Pinto 1996)。



15 アントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」

アントニオ・レイタオンは、また、１５８０年から１５８１年にかけてポルトガル王位の候補者であるクラトの修道院長ドン・アントニオ[89]を支持したため、家族と共にブラガンサで自主亡命した[90]。そのような状況にもかかわらず、レイタオンは慎重に画家としての活動を続け名声を得た。晩年彼は特にブラガンサ周辺の土地で宗教画を描いた[91]。

レイタオンの主人であったドナ・マリアの宮廷の周りには多くの学者と芸術家がいた。宗教闘争があったこの時期、彼らの間では精神の深化や新世界[92]の発見などのようなテーマについて、人文主義やネオプラトニズム主義の議論が行われた。このことから、レイタオンの絵のテーマや描き方などが理解できる(Serrão 2010)。

ドナ・マリアとその取り巻きの人々は東洋に憧れ、非常に興味を持っていた。そのため、アジアの様々な領土からの品々を集めただけでなく、社会やその習慣などを研究するという意味で新世界の知識を発展させ吸収した[93]。このような背景から、「ドナ・マリアの侍従」であり、「スペイン軍の兵士」、また、「ポルトガル王位の候補者ドン・アントニオの支持者」であり、「優秀な画家」でもあったこの男アントニオ・レイタオンの多面性を想像することができる。

11.2. 宗教画「ペンテコステ」について

アントニオ・レイタオンによって描かれた絵と鑑定された絵画[94]は少数だが、彼が１５８０年頃に前述のフレイショ・デ・エスパダ・ア・シンタの礼拝堂にある「ペンテコステ」の場面を描いたことは史実である(Serrão 2010) 。この「ペンテコステ」は、レイタオンがローマとアントワープでの修業で触発された芸術的才能を示しており、この絵画の人物の描き方から[95]、詳細な構図の創造力が推察される。

現在まで注目を浴びることのなかったこの絵画は、その構図に特徴がある。聖母マリアの左右に使徒ヨハネ[96]と使徒ペドロ[97]が描かれており、その周りには、ローマのパンテオン[98]に影響を受けたかのような構図で２８人の人物が様々な平面内に配置されて描かれている(Serrão 2010)。この２８人は、キリストの使徒や貴族の夫婦、フランシスコ会の修道士、商人、ベルベル人[99]、そして、日本のもののように思われる帽子(笠[100])を被り、着物[101]を着ている２人の若いアジア人のような人物などの様々な当時の人物である。



16 アントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」の一部

これらの人々一人一人の上に天から分かれて降っている炎のような舌[102]、つまり聖霊の印の下に聖母マリアの像があり、
その後ろに着物を着た日本人の若者のような人物を抱いているキリスト教徒の女性が描かれており、絵画の世界宗教的な特性が強調されている。

この絵画上の日本人と思われる人物の描写は、東洋におけるカトリック諸国の発見をキリスト教の下に共有するという意志を示しているものと考えられる。また、描かれている人物たちについては、１６世紀におけるポルトガルの社会を定義するために各階級の人々のステレオタイプを宗教的な画像を通して識別して表しており、芸術研究の歴史の中で非常に重要なものである (Serrão 2010)。

１６世紀後半のこの素晴らしい絵画の大事な点の一つは、それがその当時のポルトガル社会の階層構造の変化の始まりを、少なくとも絵画の面で表現しているものだということである。つまり、当時変わり始めた社会の肖像画であるということである。社会が新世界の知識を持ち始めたこの時代は、社会の変化及び社会における人間の個々の重要性の再定式化の原点として考えなければならないのである。

基本的にアントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」は他の一般的な「ペンテコステ」に比べ、より人間主義的な意味を持つ以上のことを意味している。それはこの絵に他の画家による「ペンテコステ」に描かれている宮廷や貴族、軍人、騎士の代わりに、キリスト教の世界宗

教的な雰囲気を持つ商人やフランシスコ修道士、イエズス会の司祭、またポルトガルが訪れた国々の人々など、当時は身分の低い階層の人々として扱われていた人物[103]が描かれていることから考えられる(Serrão 2010)。

クラトの修道院長ドン・アントニオの支持者であり、また、ポルトガルにおけるスペインの支配に反対するレイタオンにとって、この身分の低い人々はポルトガル王国の真の代表者であったと考えられる（Serrão 2010)。

– 「ペンテコステ」と天正少年使節との接点

この「ペンテコステ」は、日本人と思われる人物を描写したヨーロッパの芸術における最も古い絵の一つであり、また実に最古の絵画である可能性もある。また、この絵は天正少年使節の１５８４年のポルトガル宮廷への訪問と同年代に描かれたものでもある。

レイタオンの「ペンテコステ」に描かれている日本人らしき人物が伝統的な衣装である着物[104]のようなものを着ていることは、当時ヨーロッパの他の画家によって描かれた使節団が洋服を着ている絵[105]とは異なる。

もし、アントニオ・レイタオンがヨーロッパの他の画家と同様に、このアジア人と思われる人物を洋服姿で描写していたら、この絵画は世界宗教的な意味を失い、ヨーロッパにおける日本人らしき人物の最初の絵と見なすことはできないであろう。それまでキリスト教が伝導されていた様々な地域や国の人々を描写しなければならなかった画家は、その日本人らしき人物の出身地が目に付くように、他の人物と区別して描かなければならなかったものと推測できる。



17 アントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」の一部

しかし、日本の着物のように見えても、その詳細が不足していることから、画家自身が日本人使節団を自分の目で見たのではなく、他の人間を通じてその訪問と衣装の情報を得たと考えられる[106]。

ポルトガルにおける少年使節団の訪問と「ペンテコステ」上の日本人らしき人物の描写との繋がりは、おそらく画家とその義理の息子でブラガンサ家の薬剤師であったグレゴリオ・ロドリゲスとの関係によるものと考えられる可能性が高い。ロドリゲスがブラガンサ家の他の従者と同様に、ヴィラ・ヴィソーザで伝統衣装を着た日本人の姿を見て[107]、後にアントニオ・レイタオンにその情報を伝えたと考えるのは無理なことではないと思われる。

この予想外のアジア人の像は、聖霊の下に集まった様々な人々や文化の混入と緩い解釈を通して、この宗教画をキリスト教の世界宗教的側面の希少な証言としていると考えられる(Serrão 2010)。

12. まとめ

上述のとおり、１６世紀後半から１７世紀にかけてイエズス会士の活動は日葡関係に深い

影響を与え、宗教面だけでなく教育や科学、また、交易及び政治面でも重要な役割を果たした。また、１７世紀における日本とポルトガルの関係は非常に残念な終わり方をしたにもかかわらず、約一世紀の間続いた日本人とポルトガル人の間の交流は、日本とヨーロッパの歴史上重要な意味を持っており、双方に大きな影響が残されることになったのである。

日葡関係の歴史上、最も重要な出来事の一つは天正遣欧少年使節の渡航であったと言える。ヨーロッパで一大センセーションを巻き起こした使節団の訪問は、日本にヨーロッパに関する新しい情報や日本における布教活動のための援助をもたらした一方、それ以前は日本人が訪れたことのないヨーロッパ各地で大きな影響を与え、ポルトガルでは最初の日本人らしき人物を描写した絵が残された。

最近まで注目を浴びることのなかったレイタオンの「ペンテコステ」については、今後研究されるべきことが多く残っていると思われる。この絵画は世界各地におけるカトリック教会の影響の証拠であると考えられる。しかし、もし天正遣欧少年使節のポルトガル訪問が実現されなかったら、この絵画はその世界宗教的な意味を失い、他の一般的な「ペンテコステ」と同等の価値しか持たない宗教画として扱われることになったであろう。

画家がこの「ペンテコステ」で様々な国の人々を描いたことにより、この絵画は独特で他に例を見ない世界宗教的な特徴を与えられた。もし、キリスト教がすでにアジアの遠く離れた地まで伝えられていたこの時代において、これらの日本人らしき人物の描写が含まれていなかったら、この絵画は全てのキリスト教徒を描写しているとは言えない。このような絵画は、天正使節のヨーロッパ訪問があったからこそ可能になったと考えられる。また、日本人と思われる人物の一人がキリスト教徒の女性に抱擁されていることで、西洋と東洋のカトリックの人々の間に生まれた友情が表現されており、それが見る者に伝わってくる。この友情は、使節団が訪れたヨーロッパ各地で大歓迎されたことに関係しており、またヴィラ・ヴィソーザにおいて日本人とテオドジオ２世との間に生まれた若者同士の交流も西洋と東洋を結んだと言える。

上述のとおり、この「ペンテコステ」はその時代のキリスト教の普遍的な像だけでなく、キリスト教を通じて結ばれた世界各国の人々の間に生まれた友情をも表していると言っても過言ではないであろう。

注

1 本稿では,「天正少年使節」は人間的な面に、また「天正使節」は使節という役割に注目している場合に使う。
2 イエズス会とは、1534 年、フランシスコ・ザビエルやイグナチオ・デ・ロヨラによって創設され、キリスト教の布教を目的として日本を含む世界各地にローマカトリックの教えを伝導した男子修道会のことである。
3 宣教師とは、ある思想を伝えたり、宗教を教え広めたりするために、外国へ派遣され活動する者のことである。英語で「missionary」と言う。
4 領民には特に布教活動を通じてキリスト教の影響を与え、大名にはキリスト教と共に貿易の影響も与えた。
5 フランシスコ・ザビエルの名前について、スペイン語で「Javier」(ハビエル)、ポルトガル語で「Xavier」(シャヴィエル)と言う。しかし、彼の本名は「フランシスコ・ザビエル」ではない。スペインのナバラ王国(現ナバラ州)の「Javier」という土地で生まれたため、彼は「Francisco de Javier」(フランシスコ・デ・ハビエル、ハビエルのフランシスコの意味)と名乗りはじめた。
6 例えば、多くのキリシタン大名のキリスト教への改宗の動機など。
7 交易は「ポルトガルを日本と結びつける第一の媒体であり、非常に重要な役割を担っていた」(コスタ 1993 p. 8)。
8 イエズス会宣教師は「南蛮人と日本人とが日常的に共存するためのかけ橋の役割を果たした」(コスタ 1993 p. 8)。
9 外国語で記された最初の日本語辞書として記録に残っているのは、イエズス会のジョアン・ロドリゲスによるもので、この二つの文化の交流の第一歩でもあった(Jaca 2005)。
10「日本初のキリシタン大名大村純忠がいい例です。… 洗礼を受けた後に領地内の仏教寺院を排除するように指示しました」(サルゲイロ 2014 p. 47)。
11 布教保護権。30 ページの注 31 参照。
12 天正遣欧少年使節をローマへ派遣した 3 人のキリシタン大名。
13 アレサンドロを「アレッサンドロ」或いは「アレシャンドゥロ」また、ヴァリニャーノを「バリニャーノ」と「ヴァリニャーニ」と記しているものもある。アレサンドロ・ヴァリニャーノに関しては、9 ページ参照。
14 有馬の大名有馬晴純(1483〜1566)の次男で母が大村純伊の娘。これら二つの家の間での同盟があったため、大村純前(?〜1551)の養嗣子となった(Ribeiro 2006)。
15 大村に位置していた横瀬浦は外国貿易のためには地理的に優れた港であった。また、希少な天然資源を持った所でもあった。現在の長崎県西海市。
16 1562 年、大村純忠の招きでポルトガル船が横瀬浦に入港し、イルマン・ルイス・デ・アルメイダが教会を建て、純忠と契約を結んだ。
17 Ribeiro (2006) によると、大村純忠は、弟で有馬領主の有馬義貞と島原の領主との経済競争に動機づけられて洗礼を受けることに決定した可能性が高い。
18 大村純忠は横瀬浦の港の教会で受洗した。
19 大村純前の子で大村純忠の兄弟であったが、1545 年、肥前の後藤氏の養子となった。
20 1563 年 11 月、ポルトガル船がマカオに帰るとき、後藤貴明の軍の攻撃により、横瀬浦の港は完全に破壊され、そこにいたイエズス会士は散り散りに逃れた。
21 現在の大分市。ポルトガルのアヴェイロの姉妹都市でもある (1978 年 10 月 10 日に提携した)。
22 有馬晴信の父親。
23 島原の領主は洗礼を受けていないが、娘一人のための洗礼を求めた(Ribeiro 2006)。
24 千々石直員は有馬晴純の子で、千々石氏の養子。大村純忠は千々石直員の兄で、有馬晴信は甥に当たる。洗礼名は「ジョアオン」であった。千々石直員は天正少年使節の千々石ミゲルの父でもあった。
25 Ribeiro (2006) によると、1580 年にアレサンドロ・ヴァリニャーノが記した手紙から、彼がすでにこのような状況になる可能性を考えていたことがわかる。大名の命令によって洗礼を受けた人々も多かったが、その大名がキリスト教を放棄すると人々もその後に続いた。
26 イエズス会士は追放され、教会などは以前の所有者に戻された。
27 しかしながら、イエズス会の布教活動はこの地域における政治的及び軍事的な状況や混乱に影響を受けている(Ribeiro 2006)。
28 この同盟は実行されなかった。

29 ミゼリコルディアとも呼ばれる。ミゼリコルディアとは「慈悲」という意味で、ここにはキリスト教の精神に基づく病院や孤児・老人施設があった。ポルトガル語では “Santa casa da Misericórdia”（サンタ・カザ・ダ・ミゼリコルディア)。
30 特に、ヨーロッパへ知らされていた情報や新しい知識については、現実の豊富な経験に基づく情報が送られることとなった(サルゲイロ 2014)。
31 パドロアードともいわれる（ポルトガル語で Padroado、英語で Patronage)。ポルトガルの東洋におけるカトリックの布教保護権とは、大航海時代の 15 世紀後半、ローマ教皇とポルトガル王国の間に確立された協定のことである。布教保護権によって、ローマ教皇は、ポルトガル人が発見した地での全ての宗教活動の組織や資金をポルトガル国王に委任したのである。布教保護権は 20 世紀に入り、海外の領土がなくなると共に消滅した。
32 「日本人の倫理原則と習慣を受け入れようとする彼の姿勢は、異質なものにたいして並外れた理解力を示しています」(サルゲイロ 2014 p. 54)。
33 有馬のセミナリヨ。
34 サルゲイロ(2014)の『戦国の少年外交団秘話』に記されている名前である。４人の洗礼名及び名前の正しい発音に関しては、不明な点がある。ラテン語、ポルトガル語、イタリア語とスペイン語で、この４つの名前があり、研究者によって、使われている名前が異なることもある。キリスト教の洗礼の際に付けられた名前なので、正しい発音はラテン語であったと考えられるが、少年達の名前の漢字も残っているので、その漢字の発音に近い名前を使うこともある。本稿では、『戦国の少年外交団秘話』に使われている名前を使う。 洗礼名の発音に関しては、付録 1 参照。
35 サルゲイロ(2014)、志岐(2010)、松田(2001)が使っている名前である。
「千々石直員」（ちじわ なおかず）と記されている場合があるが、志岐(2010)、松田(2001)によると、直員は千々石ミゲルの父親であったと考えられる。
36「原中務」（はら ナカズカサ / なかつかさ）と記されている場合があるが、原中務という人物は、おそらく、原マルチノの父親であったと思われる(松田 2001)。
37 現在の長崎県東彼杵郡波佐見町。
38「後にエヴォラ司教区で司祭に任命されることになる（とフロイスが記述している）」(サルゲイロ 2014 p. 60)。
39 カテキスタとは要理教師（カテキズムを教える人）という意味で、教会では洗礼志願者に対しキリスト教教理の指導と信仰生活の心構えを教える教師たちのことである。現代でも、子供の宗教教育にたずさわるほか、特に宣教地において宣教師の司祭を助け、キリスト教教理を教える職務がある。
40 旅のルートは、付録 2 参照。
41 船はポルトガル船で乗組員や乗客もほとんどポルトガル人だったので、船旅の間の会話もポルトガル語の学習を促進したと考えられる。
42 この時期、セイロン島はポルトガルの領土であった。
43 聖フランシスコ・ザビエルの最初の使命である布教活動の場所。
44 ポルトガル語では「ボア・エスペランサ峰」(Cabo da Boa Esperança)と言う。
45 旅のルートは、付録 3 参照。
46 大村市の姉妹都市（1997 年 8 月 21 日に提携した)。
47 8 月 10 日から 11 日の夜と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
48 サオン・ロケ教会は、16 世紀末に建てられ、ポルトガルにおいてイエズス会の第二の教会でもあった。最初のイエズス会の教会は、使節団が訪れた、エヴォラのエスピリト・サント教会であった。
49 ポルトガルの総督でスペイン王国のフェリペ２世の甥でもあった。
50 8 月 12 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
51 この時代の主要な町三つの中で、リスボンに次ぐ町(Moura 1968-69)。
52 9 月 8 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
53 Sande（2009）によると、これはただのイエズス会の学院ではなかった。ここは、当時のポルトガルの二つの公立大学の一つで、イエズス会士が様々な土地から来る生徒たちに芸術や文化、哲学、ラテン語を教えていた大学でもあった。

54 十字架挙栄祭とは、正教会と東方諸教会において祝われる祭の一つである。イエス・キリストが掛けられた聖十字架が発見されたことと、十字架にまつわる諸事を記念する祭であり、9 月 27 日に祝われる（修正ユリウス暦使用教会では 9 月 14 日に祝われる）。ポルトガル語では「Exaltação da Santa Cruz」と言う。

55 カトリック教会の聖体に対する信心業の一つ。通常，ミサ後、屋外で行われる。十字架を先頭に侍者，白衣の少年少女が続き，次に移動天蓋の中央に司祭が聖体顕示台を捧持し，その後に修道士，信徒らが従う。

56 パソ礼拝堂(Capela do Paço)。

57 「(…)金糸の施されたアラス織りのタペストリー４枚 … このタペストリーは一行の帰国に先んじて１５８５年に日本へ送られましたが、その船は同年８月１９日に東アフリカのモサンビークの南沖合で難破したため失われてしまったといいます」(サルゲイロ 2014 p. 65)。

58 クルザードはその当時の通貨。

59 1601 年にアルカラで出版されたルイス・デ・グスマンの『東方伝道史(História de Las Missiones)』によれば、使節団は高名なフェルナン・ヴァス・ドラードの地図を閲覧する機会に恵まれたことが記述されている(サルゲイロ 2014)。

60 スペイン・ポルトガル同君連合（1580 年～1640 年)。1578 年、ポルトガル国王セバスティアオンの死後，ポルトガル王家の親戚でもあったスペインの国王フェリペ 2 世は 1580 年にポルトガル王位を継承し、その後 60 年間スペインはポルトガルを支配する。

61 ヴィラ・ヴィソーザ訪問の際に、使節たちは 14 歳から 16 歳ぐらいであった。

62 1578 年 8 月、モロッコのアルカセル・キビールという町の付近で開催された戦いのことである。テオドジオ 2 世は、その時のポルトガル国王セバスティアオンと共に戦いに出征したが、捕虜として囚われ、2 年後スペインのフェリペ 2 世によって解放された。

63 ドナ・カタリーナはポルトガルの国王マヌエル 1 世の孫娘であったため、フェリペ 2 世がポルトガルの王になる前は、彼女も他の人物と同様にポルトガル王位への候補者の一人であった。

64 Sande(2009)によると、この邸宅は公爵宮殿というよりも、王宮と言ってもよいようであった。

65 狩猟地には、イノシシ、ウサギ、シカなどが多数おり、釣りもできる小川が２本流れており、湖、泉や庭園などもあった。また、二つのエルミタージュ*とカントリーハウス*もあった(サルゲイロ 2014)。

*エルミタージュとは、教会の役割を果たす小さな建物のこと。

*カントリーハウスとは、アレンテージョ地方でよく見られる石造りの小さな家のことであると思われる。

66 旅のルートは、付録 3 参照。

67「ヴァリニャーノの意向とは逆に、日本の使節団は国賓として華やかな歓迎でさまざまな場所に招かれました」(サルゲイロ 2014 p. 71)。

68 ヴァリニャーノの考えでは、少年達は日本の貴族というより有馬神学校の生徒として迎えられるべきであった。

69 教皇の死後、この屏風を探したにもかかわらず、その所在はいまだに不明である。狩野永徳が描いた屏風絵である可能性が高い(サルゲイロ 2014)。

70 使節団が日本に帰国したとき、大村と大友の大名は既に死亡していたため、有馬の大名のみ教皇の手紙と贈り物を受け取った。

71 使節団の洋服姿が描かれており、画家はこの絵を完成させたが、長い間行方不明となっていた。長崎歴史文化博物館によると、2013 年伊東マンショの肖像画は発見された。しかし他の 3 人の肖像画はいまだに行方不明となっている。

72 ヴァル・ド・ロザル(Vale do Rosal)と言う名前の家。

73 天正使節の訪問の時、この町の名前は「ナバンシア」 (Nabância)であった。Sande (2009)では、Nabância と言う名前が使われている。

74 この大学はポルトガル最古の大学で、ヨーロッパの最も古い大学の一つでもある。ユネスコの世界遺産でもある。

75 旅のルートは、付録 3 参照。

76 この船は、インドやブラジル、アフリカなどに向けて次々とリスボンを出帆した 28 隻の大船団の１つであった。

77 1578年、豊臣秀吉がイエズス会士の国外追放を命令したため、アレサンドロ・ヴァリニャーノの日本入国は禁止された。
78 「使節団はポルトガル、スペイン、イタリア３か国で６０におよぶ都市を訪れ、数々の地図や絵画を持ち帰りましたが、それらは後に日本の画家たちによって東洋風に模写されることになります。さらに文字を自由に組み替えることのできる活版印刷機をヴァリニャーノの命によって持ち帰っており、それがこのミッションの大きな成果のひとつに数えられています」（サルゲイロ 2014 p. 81）。
79 「１５９２年までは日本に存在しているのは、ポルトガル王室の布教保護下にあるイエズス会のみでした。しかし、フランシスコ会、ドミニコ会、聖アウグスチノ修道会の来日により緊張状態がつづいた結果、日本人からの不信感は決定的なものとなりました」（サルゲイロ 2014 p. 48）。
80 マカオからポルトガルの使節が派遣され、1640年に長崎に到着したが、そのメンバーはほとんどが出島に監禁され、処刑された（松竹、1989）。使節のうち、13人がマカオに返され、残りの61人は全員が斬首されたという。
81 「…両国の交流が復活したのは1860年のこ年のことでした」（サルゲイロ 2014 p. 49）。
82 「ペンテコステ」、ラテン語でPentecostes（ペンテコステス）、とは聖霊降臨と呼ばれる新約聖書にあるエピソードの 1 つであり、イエスの復活及び昇天後、集まって祈っていた信徒たちの上に、神からの聖霊が降ったという出来事のこと。本稿で示している「ペンテコステ」とはその場面が描かれている宗教画のことである。
83 ポルトガル北東のスペインとの国境に近い所に位置している。
84 ポルトガル北東のグアルダの地区に位置している歴史的な町。
85 ドミンゴス・レイタオンは父方の叔父でポルトガル外交における著名人であった。1571年からキリスト騎士団の騎士で、海外においてドナ・マリア王女の外交使節でもあった。
86 ポルトガルの王女ドナ・マリア（1521～1577）はヴィゼウの公爵夫人であり、ヴィラ・ヴィソーザで天正少年使節を迎えたブラガンサ公爵夫人ドナ・カタリーナの叔母でもあった。ドナ・マリアの生涯は文学や芸術の後援や慈善活動、修道院や教会の建設などが中心となっていた。
87 アントニオ・レイタオンは、叔父のドミンゴス・レイタオンと共にフランドルへ行き、ドナ・マリアの財政支援を受けると同時に、兵士としてスペイン軍に入隊していた。スペイン・ポルトガル同君連合のため、ポルトガルはスペインの三十年戦争（1618年～1648年）やカタルニアの反乱（1640年～1652年）に巻き込まれ、スペインの敵であったオランダ・イギリスに通商路を絶えず脅かされていた。
88 二人はブラガンサのサオン・ジョアオン・バティスタ（S. João Baptista）教会で埋葬された。
89 ドン・アントニオは、 ブラガンサ公爵夫人ドナ・カタリーナと同様に、国王マヌエル１世の孫であったため、彼もポルトガル王位への候補者の一人であった。しかし、他の候補者との争いに負けたのである。
90 この時期、レイタオンの講演者はドナ・マリア王女であったが、彼女の死後、レイタオンはブラガンサ公爵によって庇護される。
91 スペインの支配に反対していても、生活のため、おそらくスペインの近隣でも働くようになったと考えられる。
92 大航海時代、東洋を含むポルトガル人によって発見された土地のことである。
93 ドナ・マリアが手に日本の扇子をもった姿が描かれている絵画もある。
94 他の作品は、ラメゴにあるサンタ・アナ・デ・セポンイス (Santa Ana de Cepões)の礼拝堂やヴィラ・ノヴァ・デ・フォス・コアの教区教会に所蔵されている。
95 ポルトガルで描かれたペンテコステの中で、このように多くの人物や複雑なポースが描かれている絵画は他にないと言われている。
96 英語で「St. John the Evangelist」或いは「John the Evangelist」。ヨハネによる福音書の記者であるヨハネを指し、キリスト教では伝統的に使徒ヨハネと同一視される。
97 英語で「St. Peter」。ペドロはイエス・キリストに従った使徒の一人。
98 ローマ市内のマルス広場に建造された神殿。元々は、様々なローマ神を祭る万神殿であった。
99 ベルベル人とは、北アフリカの地域に古くから住む、ベルベル族の人々のことである。ベルベル族はイスラム教徒であるが、ローマ帝国によりキリスト教へ改宗させられた者もいる。
100 笠というのは、戦国時代の武士の笠のことである。少年使節の4人が武家の出であるということは、旅の時に「陣笠（じんがさ）」を被っていた可能性が非常に大きいと思われる。

101 襟元が日本の着物のように見えるからである。
102 英語で「tongues of fire」。聖霊の印。
103 確実ではないが、これら人物の中に画家とその妻が描かれているとも言われている。絵の右後方に描かれている中年夫婦がアントニオ・レイタオンとルジア・ドス・レイスの肖像であると考えられる(Serrão 2010)。
104 天正使節の４人の少年達はヴィラ・ヴィソーザの公爵や他の重要な人物への訪問の時に日本の伝統的な衣装である着物を着た。
105 イタリアのヴェネツィアで画家ティントレットによって描かれた少年達の肖像画とミラーノでウルバーノ・モンテによって描かれた使節団のスケッチでは、少年達の洋服姿が描写されている。
106 使節団がヴィラ・ヴィソーザを訪れたとき、アントニオ・レイタオンがブラガンサで亡命したため、その町を出るのは彼自身にとっても彼の後援者であったブラガンサ公とスペイン国王の間でも問題になる可能性はあった。
107 14 ページ参照（7. 4. 1. 天正少年使節のヴィラ・ヴィソーザ訪問）。

〈参考文献〉

泉井 久之助（1969）『デ・サンデ － 天正遣欧使節記』新異国叢書 5 雄松堂出版.
志岐隆重（2010）『ドキュメント・天正少年使節』 長崎文献社.
コスタ、ジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ（1993）『ポルトガルと日本 － 南蛮の世紀』 ポルトガル国立造幣局.
瀬野精一郎『長崎県の歴史』 山川出版社.
高瀬弘一郎（1993）「イエズス会日本管区」『日本通史 -第 11 巻、近代 1』 岩波書店.
サルゲイロ、ティアゴ（2014）『戦国の少年外交団秘話』 長崎文献社.
松田毅一（2001）『天正遣欧使節』新装版、朝文社.
松竹秀雄（1989）「寛永 17 年（1640）ポルトガル使節団長崎受難事件（2)」 長崎大学経済学会［編].
結城了悟（1990）『新史料 － 天正少年使節』南窓社.
若桑 みどり（2003）『クアトロ・ラガッツィ － 天正少年使節と世界帝国』 集英社.
ANTT Livro 4º de D. João I. *Fólio* 35.
Carvalho, Daniela de (2000) Nambanjin: Sobre os Portuguese no Japão. Universidade Fernando Pessoa, *ANTROPOlógicas*, No.4.
Figueiredo, António José (1862) A Primeira Embaixada do Japão à Europa. *Archivo Pittoresco*. No. 32, 33, 35, 36, 38, 39, 40, 42, 43, 44, 47, 50, 51, 52.
Jaca, Carlos (2005) Relações Luso-Nipónicas nos sécs. XVI e XVII – (1). *DIÁRIO DO MINHO*.
Jaca, Carlos (2005) Relações Luso-Nipónicas nos sécs. XVI e XVII – (2). *DIÁRIO DO MINHO.*
Machado, Diogo Barbosa (1752) *Bibliotheca Lusitana histórica, critic a e cronológica*, Tomo 3, Lisboa.
Moura, Arq.º Carlos Francisco (1968-69) Notícias da visita feita a algumas terras do Alentejo pela primeira Embaixada Japonesa à Europa (1584-1585). *A Cidade de Évora – Boletim da Comissão Municipal de Turismo*, No. 51-52.
Pinto, Carla Alferes (1996) O Mecenato da Infanta D. Maria de Portugal (1521-1577). Universidade Nova de Lisboa, Lisboa.
Ribeiro, Madalena Teotónio Pereira Bourbon (2006) A Nobreza Cristã de Kyushu. Redes de Parentesco e Acção Jesuítica, Lisboa.
Salgueiro, Tiago (2012) *Do Japão para o Alentejo – A Embaixada Tensho em Vila-Viçosa*. Chiado Editora.
Sande, Duarte de (2009) *Diálogo sobre a missão dos embaixadores japoneses à Cúria Romana*: *Tomo I* (*Colóquios I-XVIII*). Imprensa da Universidade de Coimbra, Centro Científico e Cultural de Macau.
Sande, Duarte de (2009) *Diálogo sobre a missão dos embaixadores japoneses à Cúria Romana*: *Tomo II* (*Colóquios XIX-XXXIV*). Imprensa da Universidade de Coimbra, Centro Científico e Cultural de Macau.
Serrão, Vítor (2010) ECUMENISM IN IMAGES AND TRANS-CONTEXTUALITY IN PORTUGUESE 16TH CENTURY. ART: Asian Representations in Pentecostes by the Painter António Leitão in Freixo De Espada À Cinta, *Bulletin of*

Portuguese-Japanese Studies, vol.20, p.125-165. Universidade Nova de Lisboa, Lisboa.
Serrão, Vitor (2011) UMA VISÃO ECUMÉNICA DO ORIENTE NA PINTURA PORTUGUESA DO SÉC. XVI – O 'Pentecostes' de António Leitão em Freixo de Espada-à-Cinta. *Cadernos Terras Quentes*. Câmara Municipal de Macedo de Cavaleiros.
Veiga, Carlos Margaça (2011) *D. Maria - Uma mulher de cultur*a. Academia Portuguesa da História.

〈ウェブサイト〉

http://algunsdiasdosmouras.blogspot.pt/2010/01/origem-dos-de-moura.html
http://bushoojapan.com/wp-content/uploads/2014/03/201403171itoumassyo.jpg
http://historia-portugal.blogspot.jp/search?q=As+primeiras+relações+com+a+China+
http://menosemais.com/portfolio/centro-interpretativo-do-mosteiro-da-batalha/
http://worldheritage.uc.pt/pt/
http://www.cham.fcsh.unl.pt/ext/pages/glossario_visconde_lagoa.htm#Q
http://www.fcsh.unl.pt/cham/eve/content.php?printconceito=1219
http://www.nagasaki-tabinet.com/guide/966/
http://www.panoramio.com/photo/71537847
http://www.patrimoniocultural.pt/pt/patrimonio/patrimonio-mundial/portugal/universidade-de-coimbra-alta-e-sofia/
http://www.pauline.or.jp/kirishitanland/20100601_misericordia.php
http://www.pauline.or.jp/kirishitanstory/kirishitanstory06.php
http://www.portugalmapas.com/vila-vicosa_evora.html#fotografias
http://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/index.php/view/35
https://pt.wikipedia.org/wiki/Castelo_de_Coimbra#/media/File:Illustris_civitatis_Comimbriae_in_Lusitania_1600_Georg_Braun.jpg
https://www.unescoportugal.mne.pt/pt/temas/proteger-o-nosso-patrimonio-e-promover-a-criatividade/ patrimonio-mundial-em-portugal/mosteiro-de-alcobaca
http://www.vision-grafica.net/monumentos-de-évora.html

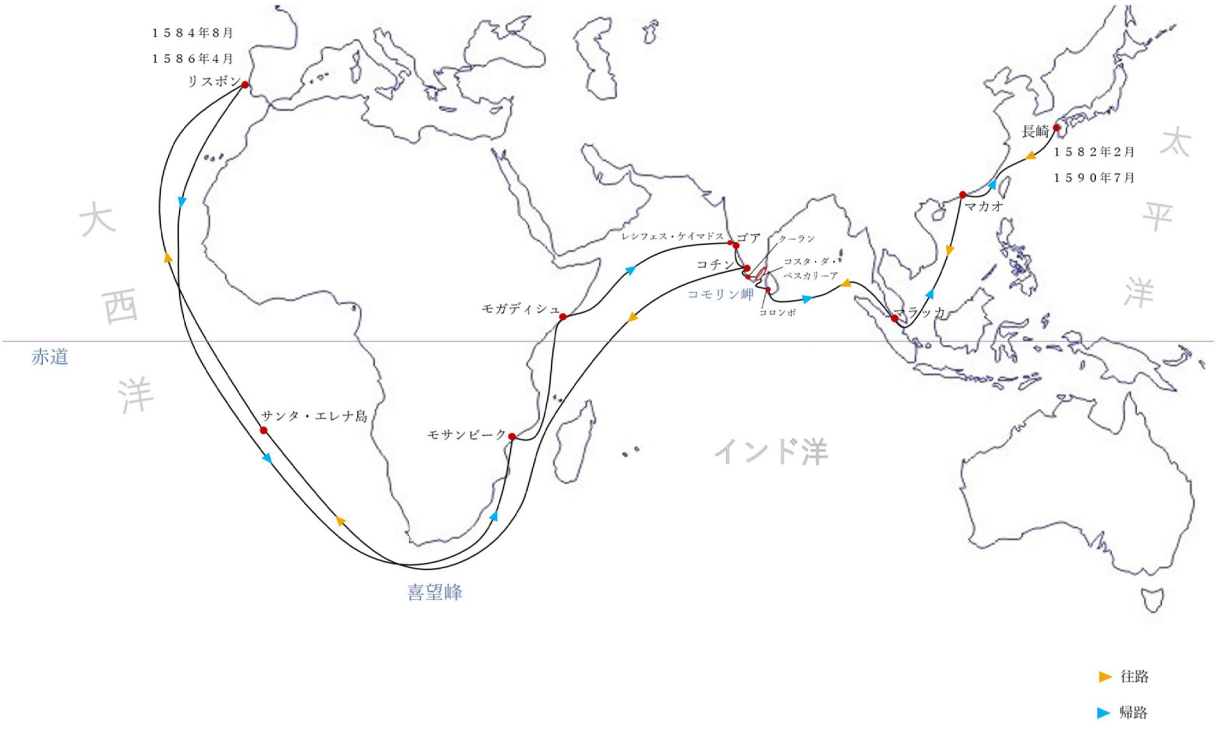
〈挿入画〉

1. 作者不明 「アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノの肖像」， 松田毅一（2001）『天正遣欧使節』新装版 p. 47 朝文社
2. 作者不明 『天正遣欧少年使節顕彰之像』 http://www.nagasaki-tabinet.com/guide/966/
3. 作者不明 Caravela Redonda ou da Armada Seculo XVI. http://algunsdiasdosmouras.blogspot.pt/2010/01/origem-dos-de-moura.html
4. SCML (2012) Santa Casa da Misericórdia de Lisboa - complexo de São Roque. http://www.panoramio.com/photo/71537847
5. 作者不明（16 世紀） 無題，*Foral de Évora* 1501
6. Concierge.2C (2013) Colégio do Espírito Santo. http://www.historiadeportugal.info/edificio-do-colegio-do-espirito-santo/
7. 作者不明 Sé de Évora. http://www.vision-grafica.net/monumentos-de-évora.html
8. António Rei （2015） Órgão da Sé.
9. Mário "Paço Ducal , Vila Viçosa". http://www.portugalmapas.com/vila-vicosa_evora.html# fotografias
10. António Rei （2014） "Palácio Ducal de Vila-Viçosa"
11. Frans Hogenberg 'Ilustris civitatis Conimbriae in Lusitania' in Georg Braum (1598), *Civitates orbis terrarum*, vol. 5 https://pt.wikipedia.org/wiki/Castelo_de_Coimbra#/media/File:Illustris_civitatis_Comimbriae_in_Lusitania_1600_Georg_Braun.jpg

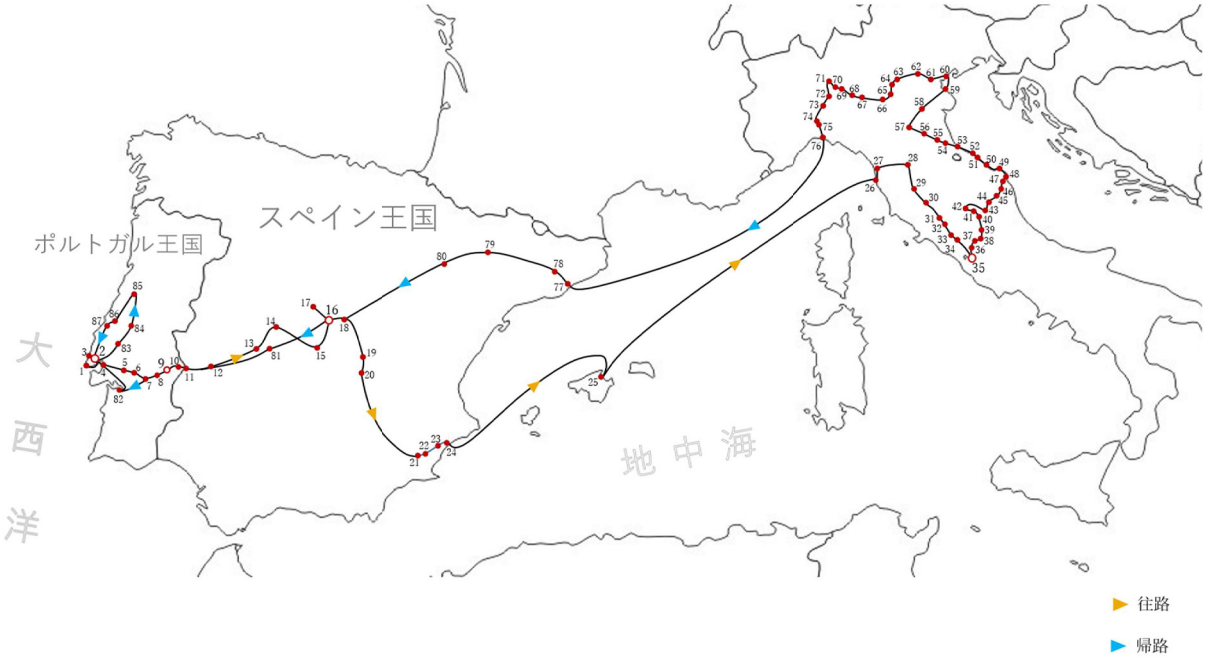
12. 作者不明 (2013)　Universidade de Coimbra Alta e Sofia　http://www.patrimoniocultural.pt/pt/patrimonio/patrimonio-mundial/portugal/universidade-de-coimbra-alta-e-sofia/
13. Luís Ferrreira Alves, Mosteiro da Batalha.　http://menosemais.com/portfolio/centro-interpretativo-do-mosteiro-da-batalha/
14. Direção Geral do Património Cultural, Mosteiro de Alcobaça.　https://www.unescoportugal.mne.pt/pt/temas/proteger-o-nosso-patrimonio-e-promover-a-criatividade/patrimonio-mundial-em-portugal/mosteiro-de-alcobaca
15. António Leitão　(1580 年ごろ)　Pentecostes, UMA VISÃO ECUMÉNICA DO ORIENTE NA PINTURA PORTUGUESA DO SÉC. XVI – O'Pentecostes' de António Leitão em Freixo de Espada-à-Cinta *Cadernos Terras Quentes*, p.63
16. António Leitão　(1580 年ごろ)　Pentecostes (detail), UMA VISÃO ECUMÉNICA DO ORIENTE NA PINTURA PORTUGUESA DO SÉC. XVI – O'Pentecostes' de António Leitão em Freixo de Espada-à-Cinta　*Cadernos Terras Quentes*,　p.65
17. António Leitão　(1580 年ごろ) Pentecostes (detail), ECUMENISM IN IMAGES AND TRANS-CONTEXTUALITY IN PORTUGUESE 16TH CENTURY ART:　Asian Representations in Pentecostes by the Painter António Leitão in Freixo De Espada À Cinta, Bulletin of Portuguese-Japanese Studies, p.153

付録 1. 使節たちの洗礼名の発音					
	ラテン語	**ポルトガル語**	**イタリア語**	**スペイン語**	**漢字**
伊東マンショ	Mancius （マンシウス）	Mâncio（マンシウ） 一般的な形式：Manços （マンスシュ）	Mancio （マンチョ）	Máncio （マーンシオ）	満所 （まんしょ）
千々石ミゲル	Michael （ミカエル）	Miguel （ミゲル）	Michelle （ミケレ）	Miguel （ミゲル）	弥解留 （みかいる、 みげる）
原マルチノ	Martinus （マルティヌス）	Martinho（マルティーニョ） 一般的な形式：Martim （マルティン）	Martino （マルティノ）	Martin （マルティーン）	丸知野 （まるちの）
中浦ジュリアン	Julianus （ジュリアヌス）	Julião （ジュリアオン）	Giuliano （ジウリアノ）	Julián （フリアン）	寿理安 （じゅりあん）

付録2. 天正遣欧少年使節の旅 - 長崎・リスボン - リスボン・長崎



付録3.　1-天正遣欧少年使節の旅 -ヨーロッパ巡路



2 - 地図上の地名

ポルトガル:

1. カスカイス
2. リスボン
3. シントラ
4. アルデイア・ガレガ
5. ヴェンダス・ノヴァス
6. モンテモール
7. エヴォラ
8. レドンド
9. ヴィラ・ヴィソーザ
10. エルヴァス
82. アルカセル・ド・サル
83. サンタレン
85. トマール
85. コインブラ
86. バタリャ
87. アルコバサ

スペイン:

11. バダホス
12. メリダ
13. グアダルペ
14 タラベラ
15. トレド
16. マドリード
17. エスコリアール
18. アルカラ
19. ヴィラレージョ
20. ベルモンテ
21. ムルシア
22. オリウエラ
23. エルチェ
24. アリカンテ
25. アルクーディァ
77. バルセロナ
78. モンセラート
79. モンソン
80. サラゴサ
81. オロペサ

イタリア:

26. リヴォルノ
27. ピサ
28. フィレンツェ
29. シエナ
30. サン・クイリコ
31. アクアペンデンテ
32. ボルセナ
33. ヴィテルボ
34. カプラローラ
35. ローマ
36. チヴィタ・カステラナ
37. ナルニ
38. テルニ
39. スポレト
40. フォリニョ
41. アッシージ
42. ペルージャ
43. コルフョリート
44. カメリーノ
45. トレンチノ
46. マチェラタ
47. レカナティ
48. ロレート
49. アンコナ
50. セニガッリア
51. ファーノ
52. ペザロ
53. リミニ
54. チェゼナ
55. フォルリ
56. イモラ
57. ボローニャ
58. フェッラーラ
59. キオッジャ
60. ヴェネツィア
61. パードヴァ
62. ヴィチェンツァ
63. ヴェローナ
64. ヴィラ・フランカ・ディ・ヴェローナ
65. マントヴァ
66. ガッツオーロ
67. クレモナ
68. ピッツィゲットーネ
69. ロディ
70. メレニャーノ
71. ミラーノ
72. パビア
73. ボゲーラ
74. ガーヴィ
75. オタッジョ
76. ジェノヴァ

付録 4. 天正遣欧少年使節 - 年表

１５８２年２月２０日 - 長崎出帆。
１５８２年３月９日 - マカオ到着（約１０か月滞在)。
１５８２年１０月５日 – 新暦(グレゴリオ暦)。教皇グレゴリオ１３世、新暦を公布し、この日を新暦の１０月１５日と定む。１０月４日(木曜日)の翌日は１０月１５日(金曜日)となる 。
(旧) １５８２年１２月３１日 - マカオ出帆。
(旧) １５８３年1月２７日 - マラッカ到着（８日間滞在)。
(旧) １５８３年2月４日 - マラッカ出帆。
(旧) １５８３年 - セイロン島コロンボに到着。
(旧) １５８３年3月２７日 - コモリン岬を通り、コスタ・ダ・ペスカリーア（インドの東南の海岸)に至る。この地に数日間滞在。この間、トリンシャドゥラ、マナパル及びトゥティコリンを訪問。
(旧) １５８３年 - 陸路、インド西海岸のクーランに至る。
(旧) １５８３年4月６日 - クーラン出帆。コチンに向かう。
(旧) １５８３年4月７日 - コチン到着。１０月まで順風を待つ(約６か月滞在)。この地でアレサンドロ・ヴァリニャーノ、インド管区長としてインドに留まるべしとの指令に接す。
(旧) １５８３年１０月３０日 - コチン出帆。ゴアへ向かう。
(旧) １５８３年１１月１０日 - 数日後ゴアに到着（数日間滞在)。
(旧) １５８３年１１月１４日 - ゴアにおいて新暦採用を決す。
(新) １５８３年１２月１２日（旧 - 12月２日）- ヴァリニャーノ、ヌノ・ロドリゲスに訓令を発す。ヌノ・ロドリゲス、使節の担当者となる。
(新) １５８３年１２月２０日（旧 - １２月１０日）- ヴァリニャーノと別れ、コチンに向け、ゴアを出帆。
(新) 15８４年1月１日 - コチン到着。
(新) 15８４年2月２０日 - コチンを出帆し、ポルトガルへ向かう。
１５８４年3月９日 - 赤道通過。
１５８４年5月１０日 - 喜望峰通過。
１５８４年5月２７日 - サンタ・エレナ島到着（１１日間滞在)。
１５８４年6月６日 - サンタ・エレナ島出帆。
１５８４年8月[1] - **ポルトガル王国到着**。テージョ川に入ってリスボン近くのカスカイスに投錨し、一泊する。翌日[2]リスボンの港へ移動する（リスボンで２５日間滞在)。
１５８４年8月１３日 - 枢機卿アルベルト・デ・アウストリアに謁見。
１５８４年8月 - リスボン郊外のシントラに招かれる。シントラ近くのアルメイリンとペニャ ・ロンガ修道院を訪問。
１５８４年9月５日 - 陸路、リスボンのサオン・ロケを出発。
１５８４年9月[3] - アルデイア・ガレガ[4]とヴェンダス・ノヴァスを通り、モンテモールに到着。同地で一泊。

[1] 8 月 10 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
[2] 8 月 11 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
[3] 9 月 7 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
[4] 現在モンティージョ市 (Montijo)。1930 年まで、アルデイア・ガレガ(Aldeia Galega)と呼ばれていた。

１５８４年９月[5] - 早朝モンテモール出発。午前１０時にエヴォラに到着（約７日間滞在)。
１５８４年９月１４日 - 午後遅くエヴォラ出発。
１５８４年９月１５日 - レドンドを通り[6]、午後ヴィラ・ヴィソーザ到着（４日間滞在)。
１５８４年９月１８日 - ヴィラ・ヴィソーザを出発し、スペインに向かう。
１５８４年９月 - ポルトガル王国のエルヴァスを通り、スペインのバダホスより**スペイン王国**に入る。
１５８４年９月 - スペインのメリダを通過。
１５８４年９月２３日 - グアダルペに到着。
１５８４年９月２５日 - グアダルペ出発。
１５８４年９月 - タラベラ通過。
１５８４年９月２９日 - トレド到着(約２０日間滞在)。
１５８４年１０月１９日 - トレドを出発し、マドリードに向かう。
１５８４年１０月２０日 - マドリッド到着（約３６日間滞在）
１５８４年１１月１１日 - 国王フェリペ２世と共に、サン・ヘロニモ修道院で行われるスペイン皇太子宣誓式に参列。
１５８４年１１月[7] - フェリペ２世に謁見。
１５８４年１１月１６日 - エスコリアールへ向かう。翌日サン・ロレンソ修道院に滞在。
１５８４年１１月２５日 - マドリッドでフェリペ２世、使節の宿舎イエズス会学院を来訪。
１５８４年１１月２５日 - マドリッド出発。アルカラ到着 （約３日間滞在)。
１５８４年１１月２９日 - アルカラ出発。
１５８４年１２月１日 - ヴィラレージョ到着。同地で一泊する。
１５８４年１２月２日 - ベルモンテ到着（約２日間滞在)。
１５８４年１２月５日 - ベルモンテ出発。
１５８４年１２月１０日 - ムルシア到着（２３日間滞在)。ムルシアで１５８４年のクリスマスを過ごす。
１５８５年１月３日 - ムルシアを出発し、オリウエラを通る。
１５８５年１月４日 - エルチェ到着。
１５８５年１月５日 - 地中海側のアリカンテに到着 （１４日間滞在)。
１５８５年１月１８日 - アリカンテでイタリア行きの船に乗船したが、逆風のため２度港に戻る。
１５８５年２月７日 - イタリアに向け、アリカンテの港を出帆。
１５８５年２月 - マヨルカ島のアルクーディアに到着（３日間滞在)。
１５８５年２月１９日 -アルクーディア出帆。
１５８５年３月１日 - イタリアのリヴォルノに到着し、イタリアに入る。
１５８５年３月２日 - リヴォルノを出発し、午後ピサに到着 （約５日間滞在)。
１５８５年３月７日 - ピサを出発し、フィレンツェに至る（５日間滞在)。
１５８５年３月１３日 - シエナ到着 （約５日間滞在)。
１５８５年３月１７日 - シエナを出発し、サン・クイリコに至る。

[5] ９月８日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
[6]『Livro 4o. de D. João I 』に記されている情報よると、1418 年より、国王ジョアオン１世の命令によって、エヴォラからヴィラ・ヴィソーザまでの道を通る場合、このレドンド村を経なければならなかったため、天正遣欧少年使節がこの村を通った可能性は非常に高いと考えられる。
[7] 11 月 12 日か 14 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

１５８５年３月２０日 - アクアペンデンテとボルセナを経てヴィテルボに到着し、一泊。
１５８５年３月２１日 - ヴィテルボを出発し、カプラローラに至る。
１５８５年３月２２日 - 午後遅くローマに到着 （約７０日間滞在)。
１５８５年３月２３日 - 朝、ローマ教皇グレゴリウス１３世に謁見。
１５８５年３月２５日 - 受胎告知の祝いのため、教皇と共にサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会を訪問。
１５８５年４月４日 - 教皇とのプライベートな謁見。
１５８５年４月７日 - 教皇グレゴリウス１３世と共に「聖なる犠牲」[8]に出席。
１５８５年４月１０日 - ローマ教皇グレゴリウス１３世没す。
１５８５年４月２１日 - 枢機卿による後継者選びのコンクラーヴェが行われる。
１５８５年４月２５日 - フェリーチェ・ペレッティ枢機卿、シクストゥス５世として選ばれる。
１５８５年４月２７日 - 使節団、 新教皇シクストゥス５世に謁見。
１５８５年５月１日 - 使節団、サン・ペドロ大聖堂で行われた教皇の戴冠式に出席。
１５８５年５月２９日 - ローマ市民会に招かる。
１５８５年６月２日 - 教皇シクストゥス５世に帰国の挨拶をする。
１５８５年６月３日 - ローマ出発。同日チヴィタ・カステラナで宿泊。
１５８５年６月４日 - チヴィタ・カステラナを出発し、ボルゲット[9]を通る。
１５８５年６月５日 - ナルニを通り、テルニに至る。
１５８５年６月７日 - スポレト、フォリニョ、アッシージを通り、ペルージャに至る。
１５８５年６月１０日 - ペルージャ出発。その後、コルフョリート、カメリーノ、トレンチノ、マチェラタ、レカナティを通る。
１５８５年６月１２日 - ロレートに至る。
１５８５年６月14日 - ロレート出発。
１５８５年６月15日 - アンコナで宿泊。
１５８５年６月16日 - セニガッリア、ファーノを経て、ペザロに至る。ペザロで宿泊。
１５８５年６月17日 - リミニ、チェゼナを経て、フォルリに至る。フォルリで宿泊。
１５８５年６月18日 - イモラに至る。
１５８５年６月19日 - ボローニャ到着。
１５８５年６月２２日 - ボローニャ出発。同日フェッラーラに至る （３日間滞在)。
１５８５年６月２５日 - フェッラーラを出帆し、ポー川からキオッジャに至る。
１５８５年６月２６日 - キオッジャを出帆し、ヴェネツィアに至る。
１５８５年７月６日 - ヴェネツィア出帆。バキリョーネ川を上り、パードヴァに至る。
１５８５年７月９日 - パードヴァを出発し、ヴィチェンツァに至る。
１５８５年７月１０日 - ヴィチェンツァを出発し、ヴェローナに至る。
１５８５年７月１４日 - ヴェローナ出発。ヴィラ・フランカ・ディ・ヴェローナを経て、マントヴァに至る。
１５８５年７月１８日 - マントヴァ出発。ガッツオーロを通ってクレモナに至る。
１５８５年７月１９日 - クレモナ出発。ピッツィゲットーネを経てロディに至る。
１５８５年７月２５日 - ロディ出発。メレニャーノを通ってミラーノに到着（８日間滞在)。

[8] 英語で「Holy Sacrifice」。
[9] 1585 年 6 月 5 日、ナルニで記された手紙に出てくる名前。現在の位置は決定的でない。

１５８５年８月３日 - ミラーノ出発。パビアの近くのカルトジオ修道院で宿泊。
１５８５年８月４日 - パビアで宿泊。
１５８５年８月５日 - パビアを出発し、ボゲーラに至る。
１５８５年８月６日 - ガーヴィとオタッジョ[10]を通り、ジェノヴァに到着。
１５８５年８月８日 - ジェノヴァで乗船し、翌日出帆。スペイン王国へ向かう。
１５８５年８月１６日 - **スペイン王国のバルセロナに到着**（２５日間滞在)。
１５８５年９月９日 - バルセロナを出発し、モンセラートに到着。
１５８５年９月１１日 - モンセラート出発。
１５８５年９月１４日 - モンソンに至り、国王フェリペ２世に謁見。フェリペ２世に帰国の挨拶をする。
１５８５年９月 - モンソン出発。
１５８５年９月 - サラゴサとアルカラを経て,マドリッドに至る。
１５８５年９月 - マドリッドを出発し、オロペサを経て**ポルトガル王国に入る。**
１５８５年１０月 - ポルトガルのヴィラ・ヴィソーザに到着（４日間滞在)。
１５８５年１０月[11] - エヴォラ到着 （９日間滞在)。
１５８５年[12] - エヴォラ出発。アルカセル・ド・サルで宿泊。
１５８５年１１月 - アルカセル・ド・サルを出発。テージョ川を渡り、リスボンに戻る。
１５８５年１２月 - リスボンを出発し、コインブラに向かう。テージョ川から船でサンタレンに至る （数日間滞在)。
１５８５年１２月 - サンタレンを出発し、トマール[13]に至る。
１５８５年１２月２３日 - コインブラ到着（２０日間滞在)。１５８６年のクリスマスはコインブラで過ごす。
１５８６年1月９日 - コインブラ出発。バタリャとアルコバサを訪れ、リスボンに向かう。
１５８６年４月１２日 - リスボンを出帆し、日本へ向かう。
１５８６年５月６日 - 赤道通過。
１５８６年５月２６日 - 台風に遭遇。
１５８６年７月７日 - 喜望峰通過。
１５８６年８月１８日 - アンゴシャ島[14]に至る。
１５８６年８月３１日 - モサンビーク入港。翌年３月までモサンビークで順風を待つ。
１５８７年３月１５日 - ゴアに向け、モサンビークを出帆。
１５８７年 - ソマリアのモガディシュに至る（１２日間滞在)。
１５８７年５月２８日 - ゴア近くのレシフェス・ケイマドスに至る[15]。
１５87 年５月２９日 - ゴア到着（１１か月滞在)。
１５８８年４月２２日 - アレサンドロ・ヴァリニャーノと使節団、ゴアを出帆。
１５８８年７月１日 - マラッカ到着（１２日間滞在)。
１５８８年７月１３日 - マラッカ出帆。
１５８８年８月１１日 - マカオ到着（約２年間滞在)。

[10] オタッジョ(Otaggio)はリグリア語。イタリア語で ヴォルタッジョ(Voltaggio)と言う。
[11] 10 月 11 日或いは 12 日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
[12] 10 月或いは 11 月と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
[13] 天正少年使節の訪問の時、この町はナバンシア(Nabância)と呼ばれていた。
[14] Angoxá 或いは Angoche。位置は決定的でない。
[15] Recifes Queimados 或いは Ilhéus Queimados（ポルトガル語)、通称 Vengurla Rocks 或いは Burnt Islets（英語)。

１５９０年6月２３日 - マカオ出帆。
１５９０年7月２１日 - 長崎に帰着。

稲作文化と日本語の表現

ツァプリナ・オルガ

1. はじめに

世界の様々な国では文化の起点の一つとして農耕社会の構築が挙げられる。人が生産する食物の種類は多く、その地域の地理的特性によって農産物も異なる。主な農産物がジャガイモであるヨーロッパの国々に対してアジア諸国ではそれが稲となる。但しジャガイモを単なる野菜の一種としてしか認めないヨーロッパにひきかえ、アジアでは稲作に基づく完全な文化が生まれたのだった。その稲作文化の担い手の国の一つが日本である。水田稲作といえば、全体にわたって手間がかかる作業であり、共同作業を要する。また、まだ分水施設が発明されていなかった時代、稲の栽培において村落の間で平等な用水の配分が重要であり農民の相互協力が必要だった。さらに、収穫された米は古代の日本では食糧として利用されたのにとどまらず政治、経済においても決定的な役目を果たしていた。

では、主な事業であった稲作、そしてそれが求める特別な状況が日本の民族的な意識の形成にどのような影響を与えたのだろう。

本稿は農業から生まれた言葉、すなわち稲作を基礎とする表現、例えば慣用句やことわざなどを取り上げ、本来の意味から発生した新たな用法が加わることにより日本語の表現が豊かになっていく過程を考察すると同時にその用語に含まれる意味を明確にし、日本の文化および日本人の意識の形成に稲作が与えた影響を明らかにするということを目的として設定するものである。

2. 稲作文化とモノの認知

人間が他の生き物とは異なり外界にあるものをとらえたり自分の考えを表したりするために言葉を手段の一つとして使うのは一般的に知られている。それは人間としての脳活動、すなわち心理活動の特性と言えるだろう。その面から言語を研究しているのは認知言語学であり、言語というものは、人の世界の認め方、また、その言語で話す民族の文化を反映するものであるという説を展開している。また、心理言語学によると、ある言語ではたった一つの言葉で表現されているモノに対し他の言語ではたくさんの言い方があるというケースも見られ、それはその現象が話し手にとって重要な役割を果たすモノであるからだと考えられており、そのような場合モノが細分化されるというふうに説明できるという。

古代から確かに田植えは日本人の生活の基礎をなしていたため、それに関する様々な表現が発生したり、広がったりしてきている。その例として、田植えの代表といえる「米」という言葉が挙げられる。稲作文化が発展していないロシアでは稲作の生産物を意味するものは

「ｒｉｃ(リス)」という一つの言葉で表現されるのに対して、日本では主なものだけでも「稲(いね)」「米(こめ)」「ご飯(ごはん)」といった 3 つの言葉で表現されている。つまり、いわゆる米には様々な状態があると認識されており、それを表す表現がそれぞれあるのだ。また、米にとどまらず、稲を植え、その実を収穫する場所、すなわち田の呼び方も季節、状態により異なることが言語によって明示されているのである。それぞれの場合について具体的な説明を以下にする。

2.1 田んぼ

稲を植えてある場所は「**田んぼ**(たんぼ)」としてよく知られているが、その他に「**稲田**(いねだ)」という表現も使われている。 田植えをするのにはまだ整っていない田には「**墾田**(はるた)」、「**乾田**」(かんでん)」、「**更田**(さらた)」という名がある。一方、準備ができたものは「**代田**(しろた)」と呼ばれている。田植えには水が欠かせないため、稲の早苗を植え始めるのに先立って田んぼに水を引く。そのあと、更田は「**水田**(みずた・すいでん)」になる。稲を植えつける前の田は「**黒田**(くろた)」であり、植えつけた後は「**植田**(うえた)」と称されている。7 月の末の稲には実がまだなく、そんな状態である田には「**青田**(あおた)」という呼び方がある。秋に入ると田に稲穂が出始め、青田の名は最初に「**穂田**(ほだ)」、そして稲刈りの後は「**刈田**(かりた)」に変わる。「**幸田**(さきだ)」とは豊かな収穫が得られた田のことを指す。また、刈り取った稲には株が残っており、そこから再び生まれた稲の田は「**櫓田/稲=孫田**(ひつじ)」と呼ばれる。冬の季節には田植えが行われていないにもかかわらず、その時期の田の状態を表す表現もある。それは「**冬田**(ふゆた)」と「**雪田**(ゆきた)」であり、そして一面に凍結した田は「**氷田**(ひょうでん)」という。

2.2 米

「**米**(こめ)」は稲の実の一般的な名であるが、さらに具体的な状態を表す表現もある。

まず、刈った後の皮がまだついている稲の実の様子は「**籾**(もみ)」とされている。もみ殻が取り除かれた実は「**玄米**(げんまい)」になる。また、玄米は適した温度の水に浸すと発芽することから「**発芽米**(はつがまい)」 ともいい。最後は玄米の外皮が取り除かれ、白くなった米は「**精米**(せいまい)」と呼ばれる。

3. 稲作文化と季節の言葉

昔の日本では現在使われている新暦、すなわちグレゴリオ暦の代わりに陰暦が用いられており、そこにある季節の名はその時期に特徴的なことに基づきつけられたものである。田植えは日本人の生活を基礎としていたため、稲の成長は季節の移り変わりを表してくれるものとして意識されるようになった。それ故、陰暦のいくつかの月の名前には稲作との関係が見られるのである。

一月、すなわち正月のことは陰暦では「**睦月**(むつき)」と呼ばれ、親しい人々が互いに睦まじく訪れることからその名がつけられたという説もあるが、その他にも稲の実をはじめて水に浸す月を意味する「実月(むつき)」から転じたとも言われている。

四月は旧暦では「**卯月**(うずき)」である。その起源は、その時期に咲く「ウツギの花」のことであるという説明がある一方、陰暦四月は稲を植える季節でもあることから「卯月」は「植月(うえつき)」から発生したという説もある。

稲の苗を植え始める時期は新暦の四月であり、旧暦では「**五月/皐月**」(さつき)と呼ばれている。「さつき」の「さ」は「白く輝く」の意味を表す他、「神にささげる稲」という解説もある。このことから、早苗を植える月は「皐月」と呼ばれるようになり、「田の神の月」を意味することとなった。さらにまた、五月(さつき)のように晴れている天候に対して「**五月晴れ**(さつきばれ)」という名称がつけられているが、それは梅雨の前の期間を指すのである。現在は主に五月の晴天をいう。

六月は「**水無月**(みなずき)」と称され、その「無(な)」は 「の」に当たる連体助詞であり、「水の月」 という意味を与える。旧暦の六月は田植えの田に水を引く季節であったことからそういう名前がつけられたのである。

「**文月**(ふづき)」は七月のことを指し、その時期には多数の文章が書かれ、書道技術の向上を願うことを意味する「文披月(ふみひらきづき)」から転じた名前であるという説がある。他には旧暦七月に稲穂が膨らむことから、「穂含月(ほふみづき)」の転じた言葉であるというのもある。また、稲穂の膨らみが見られる月であるため、「穂見月(ほみづき)」から発生したという説もある。

現在では九月と呼ばれる時期が旧暦では「**葉月**(はづき)」と言われ、八月のことを表していた。「葉落ち月 (はおちづき)」から転じ、「葉月」になったという。また、新暦の九月頃は稲穂が張るため、それを意味する「稲張り月」あるいは「張り月」から「葉月」が現れたという説もある。

夜が徐々に長くなっている十月の頃は陰暦では九月を意味する「**長月**(ながつき)」である。雨がよく降る時期になるためそれを表す「長雨月(ながあめつき)」から発生したという。また、その「長」は長年にわたる稲の実りを意味し、「稲刈月 (いなかりづき)」「稲塾月(いなあがりつき)」、「穂長月(ほながつき)」の略された形であるという説もある。

「**神無月**(かんなづき)」は陰暦で十月のことであり、その「無(な)」は「水無月」と同様に、連体助詞の「の」に当たり、「神の月」を意味する。しかし、ある説によると、その頃は新穀の出荷が始まり、新米で酒を醸すことを表す「醸成月(かみなしづき)」の表現が転じ、「神無月」になったという。

以上、日本の暦について、その由来が稲作と関連付けられるものをまとめた。

様々な言語にはいわゆる忌み言葉、すなわち常識によりある場面では使うのを避けられている言葉が存在する。日本語にもそういう忌み言葉がいくつかあり、寝るという動詞はその

一例として挙げられる。

日本の文化では年神という精霊があり、豊作を守る役を果たしていると信じられている。新年に入ることが年神の交替と関連していると考えられ、大晦日はその神を迎えるための重要な期日である。そのため、正月の夜に寝るということをしてはいけないと言われ、寝るという言葉も避けたほうがいいという常識が生まれた。その結果、大晦日には寝るという表現の代わりに古語の「寝ね(いね)」と音が似ていることから「**稲積む**（いねつむ)」という表現が使われるようになった。ただし、実際には寝てしまっても年神が気づかないこともあると言う。なお、寝た後の行動である起きるという言葉も「**稲挙ぐ**（いねあぐ)」という表現に変わった。夢に稲を積んでから、それを挙げるというのである。

日本のお節料理の一つとして知られている「**田作**（ごまめ)」はもともとは干したカタクチイワシの幼魚を指し、食べ物とは関係がなかったのである。昔は田植えで肥料として用いられていた鰯はよい収穫をもたらしたことから、豊作の象徴となった。そして「田作り（たづくり/たつくり)」とも呼ばれ始めた。「ごまめ」は「五万米」と「御健在」の意味とを当てて正月に豊富な収穫と丈夫な体を願うために食べられるようになった。

4. 稲作文化と呼称

周知のとおり、物や人の名前には一般的に決まった意味があり、その意味がその物や人の性質、特徴等を表しているという。最も古い日本の文学である『古事記』と『日本書紀』には、「**豊葦原千五百秋瑞穂国**(とよあしわらのちいおあきのいずほのくに)」という言葉が見られ、「豊かな葦原で秋になると稲穂がたくさん実る国」を意味する。そこに含まれている「瑞穂の国」は日本のことであり、古代では日本の美称だった。現在はその「瑞穂(みずほ)」は場所の名前とは限らず、女性の名としても使われている。

日本神話には「田の神」という神が出て来るが、この神は稲作の豊作と不作を見守っているものと信じられている。古く田の神のことは「さ」の接頭語で表され、稲に関する言葉によく付けられていた。ただし、音の当たりで、ある言葉では「早」の漢字として書かれるようになった。例えば、田植えの始まりに祝う祭りは「**早降り**」(さおり)あるいは「**早開**」(さびら)と呼ばれ、田の神に豊作を願うために行われている。「さおり」の「さ」は田の神のことであり、「降り」との組み合わせで「田の神が降りる」ということを意味する。つまり、田植えの作業の前に田の神を迎える必要があり、そのために農民は祭りをする。田植えが終わると田の神や働いた人たちへの感謝として「**早上り**」(さのぼり)という祭りが行われ、「田の神が上る」ことを表す。

稲作では「**早少女/早乙女(さおとめ)**」という表現があり、田植えに従事している若い女性のことを言う。「さおとめ」の「さ」は上述の「田の神」を表す接頭語であり、早苗を植えていた女性の豊作への影響を表しているという。昔は、女性が持っている生殖能力が稲の豊かさをもたらすと信じられており、水田で働く女性の役割が重要だった。その信念から「早少

女/早乙女」の呼称が生まれたのである。

田植えの時期に入ると日本の象徴である「**桜**(さくら)」が咲き始める。実は桜の木も、稲作に関係している植物だという説がある。その説に基づき「さくら」を解説すると、「サ」と「クラ」、二つのそれぞれの言葉から構成されるという。「サ」とは、上述の田の神のことであり、そして「クラ」は「座」とも書き、宿るところを指す。すなわち、「さくら」は穀霊が寄りつくものを意味するという。なお、桜の花を見る「お花見」は昔から桜に宿る田の神様に豊かな収穫を願う儀礼だという説もある。

現在、一人称代名詞として用いられる「**私**」は、最初、名詞であった。「私」の漢字には稲を指す「禾」が組み込まれており、「私有の稲」を意味する。昔は自分の有する田は「私田（わたくしだ)」と言われ、その「私」は平安時代にかけては「公（おおやけ)」に対して個人的なことを指した。室町時代において宮廷で書かれた公式日記上では宮中に仕えた女房のことを「ワタクシ」と言っている。つまり、これは江戸時代初期にかけて使われ続けていたということになる。このように「私」は元々女性の言葉であった。

５．人間と人間の関係を表す稲作文化の言葉

「**新米**」とは、その年に新しく収穫された米のことであるが、他方、新しく何かを始めたばかりで慣れていない「新入社員」のような人を指す言葉としても用いられる。このような「新入社員」を意味するものとして「新前」と表記されることもあるが、この「新前」の「前」は「米」の音に当たる。その変化の背景を説明する説は様々あるが最も普及しているのは三つである。一つ目は江戸時代に商家の奉公人が前掛けをし、そして商家に新しく入った人が新しい前掛けをしたことから生まれたという説である。新しい前掛けから「新前」の言葉が生まれ、そしてあとは音変化で「新前」「新米」となったそうだ。二つ目の説は、江戸時代に仕事を探し集まった多くの人々に食事を提供するため米もたくさん集まったことに関連があるそうだ。そして三つ目は、会社などに入ったばかりの人は経験がなく真っ白いお米と比較されるという説もある。

田分け者の「たわけ」は「**戯け者**」の言い換えであり、昔から漫才と落語で人に悪口を言う際によく使われている言葉として出てくるそうだ。元は「田分け」は、江戸時代に農民が田畑を分割して相続することだった。田畑は子供の人数で分けられてそして相続財産として分与されていき、そうすると耕地は零細化し収穫は減っていくため農民は貧農となる可能性が非常に高かった。農夫はそんな可能性があるにもかかわらず田を分けたりしたことからそんな者は戯け者だと呼ばれるようになった。

「**晩稲**(おくて)」は元々生長、成熟が遅い稲類のたとえである。生長の様相を表す言葉であることから、その後、植物だけでなく人間に対しても使われるようになった。ただし字を変えて、奥手となった。奥に手を持つというもじりの様子を持ち、元々落語のネタであったそうだ。現在は、奥手はほぼ恋愛に対して臆病でそのような経験をするのも遅いという意味

となり、恋愛をよく知らない、恋愛に淡白な男女を表現する奥手男子・奥手女子という言葉が生まれた。それに対し、成熟の早い稲の品種を指す早稲(わせ)から早熟が派生し、発育が早い人のことを称するようになった。早稲田大学の名称は早稲の言葉が含まれているためその卒業女子学生に対して早生女という俗語が使われるようになった。そして早稲と晩稲の中間期に成熟する中稲の品種の言葉は一般に、普通の人のことを意味する。

「**我田引水**」は「我が田に水を引く」の意であり、農民間に起こった水争いが表現の背景となった。古代では雨が降らない日々が続くと稲が枯れる可能性が高かったため農家は自分の田を心配しそれを乾燥させないようにするために水泥棒を使って自分の田に水を引き入れようとしていた。そんな農民達の行為がお互いに対しては利己的な行為となるため、我田水引という表現は他人のことを考えず自分の都合のいいように行動する、得手勝手な行為の意味で使われるようになった。他にも、水争いを綴る水掛婿という狂言に基づく水掛け論という表現が生まれた。その狂言では隣り合う田の舅と婿が水争いをし、お互いの顔に水を掛け合ったという話から両者が自分の観点を主張し、水の掛け合いのように議論が終わらないことを水掛け論と呼ぶようになった。

「実るほど頭の下がる稲穂かな」というこのことわざでは人は実がたくさん付いている稲の穂に準えられ、そして実の重さで稲穂が頭を下げるのと同じように、知恵と徳行を重ねている人は他人に対して謙虚になるという意味を表す。

６．人の行動に関係する稲作文化の言葉

米は食物としてだけでなく賃金または代金を支払う手段としても利用されていた。何世紀にもわたってお金の役割を果たしていた米、そしてその栽培が人々の生計の基盤となり、日本人の意識の底では収入源の象徴としても定着した。例えば手に入った金、または利益のことを普段使用される「収入」という言葉の代わりに、よく実った稲に関する表現である「実入り」が用いられる。そのように元々は農耕に関する事象を表すものであった言葉が、それ以外の、農耕に直接関係はないものの、何らかの連想を呼ぶものへと定義が広がり他の活動範囲にも浸透した。

現在では仕事や売買によって得られる賃金や代金などの一部は**上前**（うわまえ）、または手数料のようなものが江戸時代にかけて**上米**（うわまい）と呼ばれていた。室町時代では上米とは寺社へ寄進した年貢米（ねんぐまい）の一部であり、上米（じょうまい）、口米（こうまい、またはくちまい）とも言われていた。音が似ていたため米が前に交換された。江戸時代に上米は様々な国が日本の神社の所有地を通る時に支払う通過税となった穀類のことを意味し音変化で上前と称されるようになった。そしてその時代に、他人に取り次ぐ賃金や代金の一部を自分のものとすることに対し、「上前を撥ねる」という言い方が生まれた。

現在では企業の人材確保活動を意味する「**青田買い**」または「青田を買う」という表現は最初は農業用語として使われていた。「青田買い」というのは以前、お金の問題に直面した農

家の人達が金銭を手に入れるためにまだ青い状態の田を前もって売りに出していたことから「青田売り」という表現が登場し、その後、労働力が不足した時代に「青田売り」から「早苗買い」や「籾買い」という表現が派生し、そして現在の「青田買い」の形になった。今、この表現は卒業予定の学生を青田に準え、その学生に早々に内定を出す企業の行動として使われるようになった。なお青田買い以外の類義表現として「青田刈り」という言葉が使われているが、人材確保活動に対してそれを用いるのは正しくない。一方、「青田売り」も元々の意味を変え、現代は完成されていない建物の販売を意味する。

政治の用語として「**票田**（ひょうでん)」という表現がある。　選挙で候補者が多くの人からのサポートを得ること、　つまり多数の票の獲得が見込まれている地域を指す。この表現は選挙に参加する有権者の票が稲刈りの田に例えられることから作られたものである。ある候補者にとって得票数が集中する地域がその候補者の票田と呼ばれる。また、候補者を支持している人口が多い地域に対しても使う場合がある。

「筆耕(ひっこう)」とは文章を書くことで暮らしを立てることを意味し、江戸時代に生まれた筆耕硯田(ひっこうけんでん)という言い方が略された言葉である。そこに含まれている「耕」の字は田を返すことから派生した「耕す」という意味のことを指し、他の三つの漢字、筆と硯と田の字の組合わせには「鍬で畑を耕すことで生活している農夫のように文書家が筆で硯の田を耕すことで報酬を得る」ということを表す。また、筆耕の耕の音に「工」や「功」を当てて、昔は人が文書家への謝礼として「筆工（あるいは筆功)」と書くように頼んだそうだ。

「**舌耕**（ぜっこう)」は筆耕と同じように、ある活動によって生計を立てることであり、ある辞典によるとそれは落語のような楽しく話す芸術であると記されているが、実際には講義、講演、講談なども、「舌耕」と言い換えることができ、総じて弁舌によって生活の道を成すもの全てが舌耕を構成すると思われる。

他にも、「**目耕**（もっこう)」というものがあり、田の代わりに耕すのは紙となり、そして目が農夫の鍬を指す。つまり読書を通じて博識に磨きをかけることを意味する。

一見したところ小さく見えるものでも粗末にしてはいけないことを教える「**一粒万倍**（いちりゅうまんばい)」ということわざがあり、一粒の籾が万倍に実る稲穂になるように僅かなものでも成長して非常に大きくなるということを意味する。また、そのことから事業だけに限らず物事を始めるのには運が良いが、もしそれが借金を伴うのであれば縁起が悪いという日が一粒万倍日と称されるようになった。

「**連れ穂選んで種を取れ**」ということわざには、ものを選ぶ際に大事なのが深く注意することだという意味がある。この「連れ穂」は実がたくさん付いている稲穂のことであり、そんな稲穂を他の稲穂の中から選んで、翌年の種籾にせよとの知恵から生まれたのである。

７．勤勉を表す稲作文化の言葉

日本は農業の国であり、しかも何より稲作が代表的なものであるだろう。既に先史時代から日本人の祖先は土地を耕したり、一つずつ稲の苗を田に植えたり、それを育てたり、刈ったりして、どの栽培より手間がかかる稲作を始めた。日本人の主食である米の生産はそれまでの作物より人の努力と時間を必要とするためそれを題材にした様々な表現やことわざなどが生まれ、そして時代とともに農業だけでなく、手間がかかる仕事全般に対して使われるようになった。

「**粒々辛苦**」という表現は最初、米一粒でもそれを作るため農民が苦しんでいたことを意味した。転じて職業を問わず物事を仕上げるためには、たとえ粒くらいの大きさであっても努力を重ねてコツコツ行動することが必要であることを表すようになった。

「**粟一粒汗一粒**」の言い方は農民が粟を育てる際に流した汗の滴の量が育った粟の粒の数と比較され、「粒々辛苦」と同じように農民の苦しさを表し、その結果、人の努力を要する仕事全般に対して用いられるようになった。

８．稲作文化と自然現象

元々「**稲妻**」は「稲夫」と言う形状だった。この「稲夫」は古代、稲の結実期に雷がよく落ちていたことによって雷光が稲を実らせる力があると言う信仰から生まれた言葉であった。そのため他にも「稲妻」、「稲光」（いなびかり）、「稲魂」（いなだま）、「稲交接」（いなつるび）の語頭に「稲」が置かれている。雷の「夫」が「妻」に変わった説は 昔は恋人や夫婦が男女にかかわらずお互い、相手に対して「つま」という言葉を使っていたことによる。その変化した形が江戸時代から現在に残っている。

９．稲作文化と日本の伝統的なスポーツ

現在は日本の代表的な伝統的スポーツとして知られる相撲であるが、元々弥生時代には稲作に伴う農作儀礼であった。相撲には競争を明示しているものとして力士と呼ばれる選手の地位番付制度がある。その階級の中で横綱に続く高位にある者を指す言葉として現在用いられている大関の代わりに室町時代までは最手また秀手（ほって、はて）と称されていた。秀手の秀には付き出した稲穂を意味する「禾」とのびた弓を表す「乃」が組み合わさっており、長く伸び、秀でる者を指すという。

結論

以上、様々な農業関連の表現の中から稲作文化と関係のあるものを取り上げ、その意味を分析した上で稲作が日本人の意識の形成に果たした役割について論じてきた。その結果、大昔から行われていた米の栽培が日本人の民族的な意識に重要な影響を与えたことが示唆されていると結論付けられた。

まず、日本語には米や田のことを指す言葉が複数あることが明らかとなり、それは、認知

言語学の観点から見ると、日本で主な食である米が日本人にとって重要なモノとして区別されていることの証左であるという。

また、外来文化として日本に伝わった稲作が日本人の生活において重要なものとなっていくとともに，それに関連する表現も豊かになっていった。そして、時間の流れの中でそのもともとの意味が広がったり変わったりし、他の物事も表すようになった。

なお、現在ではその表現の中の多くが日常的に使われているにもかかわらず、その起源が日本人には十分に意識されていないものもあることが分かった。しかし、外国語として日本語を学習する者にとって、日本人の意識の背後にあるものを把握するために稲作文化に基づく表現のもともとの意味を分析することは必要であり、そういった地道な努力を重ねていくことこそが日本語への深い理解につながるものであると確信している。

参考文献

1.『日本国語大辞典』（第二版），講談社、1995 年.
2.『広辞林』（第五版）　三省堂編修所編　1973 年.
3．語源由来辞典　http://gogen-allguide.com．
4．くぼたの田んぼ　http://www.tanbo-kubota.co.jp.

世界で大人気の『君の名は』は新海誠らしくない作品？

蔡雅麗 チョイ・ア・ライ

1. 初めに

新海誠が監督を担当するアニメーション映画というと、『秒速 5 センチメートル』や『言の葉の庭』のような現代男女の切ない恋愛物語を思いつく。こういった典型的新海アニメのイメージに対して、最新作の『君の名は。』は、悲しい詩的恋愛物語と言うより、ポップなエンターテインメントというイメージが強く新海作品らしくない感じもする。作品のイメージはなぜか明るくなり、それ以前の新海アニメと全く異なった作品となっているのではないのかといった意見があり、『君の名は。』の評価をめぐる議論は白熱している（エムディエヌ(MdN), 2016)。でも、実際のところはどうなのだろう。

2. 先行研究

『君の名は。』には、客層を広げるため、それ以前の新海アニメにはなかったエンタメ要素が入れられたという批判がある（君はブログの才能がない, 2016)。いつもの新海アニメのターゲット層は十代から二十代前半の若者だ。確かに、新海監督自ら、『君の名は。』においてはターゲット層をファミリー層（十歳以下の子供から五十代の男女）にまで広げたと語っている（中田, 2016)。このような背景があって、新海は観客客層を広げるため、それまでテーマとしてきた「切なさ」や「泣ける」要素を薄め、消費者のニーズに合った大衆的なエンターテインメント要素が入った『君の名は。』を制作した、とする批判が出てくることとなるわけだ（中溝, 2017)。しかし、このような批判に対して新海自身は、『君の名は。』を大衆に迎合した映画として作ったつもりはなく、『君の名は。』は以前の作品と同じように思春期の若者をターゲット層として作った作品だと語っている（新海, 2016)。

本稿は、『君の名は。』が以前の新海作品と本質的には同じであることを論じる。データ分析のセクションで明らかにされるように、新海作品には次の三つの特徴がある。

1. 若い男女の成長をテーマとしている。
2. 主人公（二人）が距離的に離れていて、二人の間の通信がうまくいかない。
3. 遠く離れた相手に向けた主人公の執着を表す心像風景が見られる。

この三つの特徴は『君の名は。』にも見出すことができる。本稿では『君の名は。』をそれ以前の三作品（『ほしのこえ』『秒速 5 センチメートル』『言の葉の庭』）と比較することで、『君の名は。』が以前の新海作品と本質的には同じであることを論じるものである。

以下、分析の便宜上、四作品を『星』、『秒速』、『庭』、『君』で言及することにする。

3. 分析方法と分析手順

本稿で分析する新海四作品を簡単に紹介する。（表 1 参照のこと。）まず『星』は新海監督が注目されるきっかけとなった短編アニメ映画である。この 5 年後に作られたのが『秒速』で、純粋に現代の男女の切なくて泣ける恋愛関係を描いた作品である。『庭』はその 6 年後に作られ、細やかな感情の描写と写真よりきれいな雨の映像で注目された作品である。そして最後の作品が、思春期の男女の間に起こった不思議な出来事中心に展開する、神道要素を絡めたファンタジー系ラブコメディーの『君』である。作品の興行収入で見ると、『星』は明らかにされていないが、『秒速』と『庭』もファンの反応はよく、それぞれ一億円及び 1 億 5 千万円という収入を記録しており、『君』では２４０億円を記録し、日本における邦画の興行収入ランキング２位となっている。

表 1. 分析対象の作品

上映年	タイトル	上映時間	興行収入
2002	ほしのこえ	25 分	不明(ミニシアターで公開される自主制作である)
2007	秒速 5 センチメートル	63 分	1 億円
2013	言の葉の庭	46 分	1 億 5000 万円
2016	君の名は	120 分	240 億円（2017.2.17 現在）

それでは、先述の通り、新海作品の三つの特徴の観点から新海四作品を、先の四つの新海作品の特徴、「男女の成長」、「通信での障害」、「心象的映像表現技法」の順に分析していく。各作品がどういうふうにこの三つの特徴を有するのかを説明しながら、『君』を含めた三つ新海作品は本質的に同じであることを論述する。

4. データ分析

4.1. 若者が成長する物語

主人公は学生か若い教師で、好きな人と実は両想いだが、二人は結果的に遠く離れてしまう。二人は相手と遠距離にいることに苦しみ、実現できない恋愛だと分かっていても、それを実現するため自分なりに努力する。そして、その結果主人公の二人は精神的に成長するのである。それでは『星』から分析していこう。

4.1.1.『星』

主人公は、宇宙開発のため地球から段々離れていく少女（ミカコ）と地球に取り残された少年(ノボル)の二人。

二人は中学生時代から互いにほのかな恋心を抱いていた。が、中学三年生の時、少女は国連宇宙軍に選抜され、人型機動兵器トレーサーに乗って宇宙に旅立つことになる。しかし、

彼女はずっと中学時代の思い出を引きずっており、地球にいる少年にメール送り続ける。少年から遠く離れた宇宙空間に一人取り残された少女は、少年との恋が実現できなくても、せめて自分の気持ちを分からせるようと「私は今でもノボル君のことすごくすごく好きだよ」というメッセージを数光年のかなたの少年に送るのである。一方、地球にいる少年の方は少女からのメールを待つだけしかできない。彼女が地球から遠ざかっていくにつれて、メールが届く時間も長くなっていく。二人の間の短くできない距離の前に、少年は「一人でも大人になる」決心するのである。これに対して、少女は、少年を想い続け、「私たちは遠く遠くすごく遠く離れているけど、でも思いが距離や時間を超えることがあるかもしれない」ということを信じ、捨て身の攻撃で宇宙人を撃退し、自分の任務を果す。最後に、戦闘不能になって宇宙空間に浮かび涙する少女は、地球にいて大人になった少年と「私はここにいるよ」というセリフを重ねる。二人は遠く離れても思いがちゃんと相手に届いたことを確信するようなエンディングである。

4.1.2.『秒速』

主人公は、小学校の卒業と同時に栃木へ引っ越しする少女と東京に取り残されて一年後に鹿児島へ転校する少年の二人。

小学校の時、二人は互いに「精神的にどこかよく似ていた」というソールメートのような関係で、このままずっと毎年一緒に桜が見られるだろうと思っていたのだが、それが少女の転校で叶わぬ夢となってしまう。

少女は転校してからも東京の天気予報までみるほど少年の生活に関心を持っていて、新生活に馴染めず、一人ぼっちの苦しい生活を送っている。少年は一度電車を乗り継いで遠路はるばる少女と一年ぶりの再会を果たすが、その後、少年は鹿児島へ転校することになる。栃木と鹿児島に離れ離れとなった二人はその後手紙のやり取りをするが、いつの間にかそのやり取りもなくなってしまう。

少年は大人になっても彼女との新しい関係を構築できず、迷い続けて仕事も辞める。対照的に、大人になった少女は過去に閉じこもることもなく、婚約者もできる。それから何年かして、二人は偶然同時に思い出の踏切を訪れる。踏切中央ですれ違う二人。踏切を渡り切った二人の間に走る電車。そして電車が通り過ぎた時、若者の視界から少女は消えていた。少女との再会ができなった若者はやっと二人の距離は永遠に縮まらないことが分かり、それまで若者を苦しめてきた思い出の鎖から放たれ満足そうに笑って踏切を後にする。

4.1.3.『庭』

主人公は、靴作り職人を目指す早く大人になりたがっている 15 歳の少年・孝雄と、いじめにあって学校に行けなくなった 27 歳の教師・雪野の二人。

孝雄は靴職人を目指す高校生。靴のデザインのことだけ考えていたくて、雨の日の午前中は授業をさぼることにしている。それがきっかけで孝雄は謎の女性・雪野と庭園で出逢うことになる。二人はいつしか話を交わし合い心を通わせ合う仲になるが、会える時間は雨の日の午前だけ。そのため、梅雨があけると、二人は二人だけで会う機会を失ってしまう。

夏休みが終わり、学校に戻ってみると、孝雄は、雪野が自分が学ぶ高校の国語教師であり、生徒の嫌がらせによって退職に追い込まれていることを知る。孝雄は国語教師である雪野との距離をどうとっていいのか戸惑っていた。

そして、ある晴れた日に二人は庭園で出会うこととなる。天気はすぐに悪くなり、土砂降りとなる。二人は庭園を出て雪野のアパートに行くことにする。雪野のアパートで二人は二人でいる時間に幸せ感じる。そこで少年は愛を告白する。しかし、その告白に雪野は応じてない。そこで雪野は故郷に帰るつもりであることを少年に告げると、孝雄はアパートを出ていく。孝雄が自分の部屋を出ていった直後、雪野は孝雄と過ごした大切な時間を思い出し、急いで孝雄を追う。アパートの階段で転んでは立ち上がりして孝雄の後を追いかけ、階段の踊り場で孝雄を見つける。雪野と目が合うと、孝雄は雪野に怒りをぶつける。そしてその時、雪野は心を開き、生徒からのいじめで受けたトラウマから孝雄が救ってくれたと告白し、そこで大泣きする。孝雄の怒りが涙に溶けて、二人は泣きながら抱き合う。

それからまた時がたち、トラウマが消えた雪野は故郷に戻ってまた教師となり、孝雄に手紙を書く。孝雄は雪野からの手紙を読むと、完成した手作り靴を庭園におき、いつか雪野に会いに行こうと心に決める。

4.1.4.『君』

主人公は、一人暮らしで毎日アルバイトがある東京の少年・瀧と、家業の神社の巫女を務める田舎に住む少女・三葉の二人。

ある日、瀧と三葉は自分の体に異変が起こっていることに驚く。瀧は自分の体が女性の体に、三葉は自分の体が男性の体になっているのである。やがて二人は、瀧の心が三葉の体に、三葉の心が瀧の体に宿っていることを知る。この何度となく起こるこの心の入れ替わりに、二人は相手の生活を経験し、次第に相手に対して恋心を芽生えさせていく。

だが、ある時を境に心の入れ替わりが起きなくなってしまう。ここで映画は瀧を中心に進行していく。入れ替わりが起こらないだけではなく、三葉との交信記録が瀧のスマホから消えているのである。瀧は三葉の居所を必死に調べ、この少女は数年前に隕石の衝突が原因で死んでいたことを知る。しかし、不思議な神（宮水神社）の導きで、瀧は三葉がまだ生きている三年前に戻る。そこでまた三葉の体に宿っていた瀧は三葉が救えることに泣くほど嬉しさを感じる。

さて、町（糸守町）の人を隕石の落下地点から避難させるようと、瀧は三葉の友達と避難計画を立てるが、糸守町長である父親を説得できず、避難計画は失敗に終わろうとする。瀧は本物の三葉が説得しなければならないと気づく。そのとき三葉が宮水神社にいることを感じ、瀧は三葉に会いに行く。3 年の時を隔てた二人は「カタワレ時」についに再会を果たし、二人はそれぞれ自分の体に戻る。自分の体に戻った三葉は町へ向かうが、三葉は瀧の名前を聞くことなく分かれてしまう。ここにテーマの「君の名は」を三葉は発する。街に戻った三葉は父親の説得を試み、そして、自分と町の人の命を救うのである。

5 年後の東京。大人になった二人は過去に出会ったことをおぼろげにしか覚えていない。その二人が並走する電車の車窓にお互いを見つける。二人は急いで電車を降り互いを探し合う。

そしてとある遊歩階段で再会する。相手の記憶が薄い。それでも歩み寄っていく。すれ違ったところで瀧が勇気を出して話しかける。互いに探し合っていた相手だと分かった三葉は涙を流す。そして、二人は同時に相手の名前を聞く。

『秒速』の結末と似たラストシーンであるが、『秒速』のように相手を探すのをあきらめるという終わり方はしない。主人公は最後の最後まで相手を探し続け、すれ違っても振り向くことができたから再会できた。離されていく運命に服従するのを拒み、互いを探し続けてきた努力の結果、二人は感動の再会ができたのだ。

4.1.5. まとめ

新海作品では、二人の若い主人公が、ある機会で自分が好意を寄せる人に出逢う。が、恋する相手とは物理的または身分的に相当距離があるのである。相手に近づこうとしても、必ず挫折して苦しんで悩むことになる。でも、そこでまた立ち上がり、相手と恋人同士になることより、精神的に成熟の道を選ぶ。これが新海四作人に共通する最も大事な特徴なのである。

4.2. 主人公が距離的に離れていて、二人の間の通信はうまくいかない

主人公の男女には物理的または身分的な距離があって、コミュニケーションがうまくいかない。メールや手紙が届かなくなったり、本音を告げなかったりする。

4.2.1.『星』

『星』の主人公の間には数光年の距離があって、通信のためメール連絡を取り合っている。二人の繋がりはメールの電波だけで、少女が地球から離れて行くにつれてメールが地球に到達する時間も長くなり、二人のコミュニケーションは制限され、意思の疎通がうまくいかなくなる。そのせいで、少年はメールを待つのを諦めるときもあった。

そして少女は地球から八光年も離れたところで、少年が好きであることを告白したメールを少年に送る。が、そのメールが届いたとき、少年はすでに 23 歳の大人。しかもメールの始まりの二行以外、全部ノイズとなって読めない。少年は少女の愛の告白を知ることなく、少女は宇宙人との戦いで命を失って、二人は永遠に離れることになるのである。

4.2.2.『秒速』

『秒速』の主人公の間には新幹線に長時間乗るしかない距離があって、通信のため手紙のやり取りをしている。だが、二人はこの結びつきでは意思の疎通がうまく行えない。手紙を書いてはみたが、少年も少女も互いに正直に気持ちを書いた手紙を相手に渡すことはできない。二人は恋人同士の関係になれず、曖昧な幼馴染の関係でいる。そして、少年が鹿児島に転校すると、手紙のやり取りはなくなってしまう。その後、大人になった二人はまた東京に戻り、偶然に思い出の踏切ですれ違っても、二人はそれぞれ人生を歩んでいく。

4.2.3.『庭』

『庭』の主人公（孝雄と雪野）の間には（生徒と教師の間の）倫理的な距離がある。二人は雨が降ると庭園で会い、夢や悩みが話し合えるようになるが、梅雨があけたら会えなくなってしまう。更に、学校が始まると、学生と先生の距離に戻ってしまう。先述の通り、この作品の終わりの方で、二人は雪野のアパートに行き、そこで二人の間の心理的距離が最も近くなるが、雪野は孝雄に心を開くことができず、孝雄を自分のアパートから追い出してしまう。その直後、雪野は孝雄を追いかけ、本音を告げるが、二人の間の倫理的距離に結局雪野は故郷に戻ることを選ぶ。孝雄は遠い場所いる雪野に会いに行くことを決めるが、雪野に渡そうと思っていた靴を庭園に置き、そこで物語は終わってしまう。

4.2.4.『君』

『君』の主人公（瀧と三葉）は、『秒速』のように、新幹線に長時間乗る必要があるところに別々に住んでいる。但し、三葉と瀧は異なる場所にいるだけではなく、時間的にも三年離れた世界にいたのである。しかし、それにもかかわらず、瀧と三葉はノートパソコンやスマホのメモでメッセージを交わして通信ができていた。だが、心の入れ替わりが起きなくなったことに伴い、お互いに交信ができなくなってしまう。電話で連絡しようとしても電波が届かなく、さらに交わしたノートやスマホでのメッセージも消えていた。瀧は糸守町（この時は瀧はその街の名を知らない）と三葉の記憶を段々失いつつあり、薄い印象を頼りに糸守町の風景を描き、飛騨方面を目指して、三葉を探す旅に出る。ところが、糸守町に着いてみると、糸守町は隕石の直撃にあい、三葉は隕石衝突で亡くなっていると知る。が、先述の通り、瀧は不思議の神の導きで、隕石衝突直前の糸守町に戻り、瀧はカタワレ時に三葉と会い、コミュニケーションを一時的に取り戻すが、カタワレ時が終わると、二人の間の交信は絶たれてしまう。最後に過去を変えることで三葉は救われたが、不思議な力がなくなり二人は入れ替わりの記憶を失って見知らぬ人になってしまう。

4.2.5. まとめ

主人公の二人は遠く離れていて、意思の疎通は簡単にできない。コミュニケーションは障害を受け、通信が途絶えたり、復旧したりする。通信が途絶えて、二人は互いの気持ちが伝えられなくなるか、あるいは、遠回りにしか気持ちが伝えられなくなるのである。

4.3. 遠く離れた相手に向けた主人公の執着を表す心像風景

新海作品の 3 番目の特徴は、遠く離れた相手に向けた主人公の執着を表す心象風景が現れることである。主人公にはうまくいかない恋愛関係か親子関係による執着があって、壮大な大自然や宇宙の風景を見て、遠く離れた相手との長距離を目の当たりにして無力感や喪失感を味わう。その無力感や喪失感から生まれた心象風景は、現実からの逃げの表現でもある。映された風景は、壮大な宇宙や大自然の風景と違って、日常生活でよく見かける平凡な風景だが、その風景には遠く離れた相手が一緒にいることもあり、きわめて繊細に表現されているのである。

4.3.1. 『星』

『星』における執着を表す心象風景とは少女が夢で見ていた中学校の教室である。

映画の冒頭で学校の校舎、そして、教室のシーンが出てくるが、これらのシーンは、はるか地球から離れ、無限大の宇宙空間にいる少女が見た幻影だ。特に教室は少女と少年の中学時代の思い出の場所で、少女が寂しいと思うとき、この幻影を見るのである。たとえば、地球からはるか離れた惑星で敵と戦うトレーサーの中で、少女は地球で少年とコンビニによってアイスを食べたりしたことを思い出し教室の幻を見影見る。そして、少年に会いたい気持ちを口にして泣き出す。

4.3.2. 『秒速』

『秒速』における執着を表す心象風景とは満開の桜、そして、その花びらが舞い散る映像である。桜は少年と少女の心の中を表し、小学校時代への追憶、またこれからの先はどうなるかという不安を描いている。

映画の冒頭、少年は桜満開のきれいな通学路を少女と歩いている。そして少女が急に走り始め、踏切を渡り、線路を挟んで踏切の反対側に立つ少年と来年も一緒に桜を見る約束をする。一年後、その約束を果たそうと、少年は猛烈な吹雪の日に新幹線に乗って少女に会いに、果てのない雪に包まれた栃木にやってくる。そこで二人は、冬枯れの桜の木の下で、昔の満開の桜の映像を見るのである。映像を見せたあと、少年にも心の声を言わせる。「その瞬間、永遠とか、心とか、魂とかいうものがどこにあるのか分かった気がした。13 年間生きてきたことすべてを分かち合えたように僕は思い、それから次の瞬間、たまらなく悲しくなった」と。桜の映像は、転校で離れ離れになった二人が精神的に小学校時代の近距離の関係に戻ったことを示唆している。たが今の近距離の関係は桜の花みたいに一瞬で消えるものだと二人は知っている。桜の映像は、そんな二人の不安な気持ちも表現しているのである。

4.3.3. 『庭』

『庭』における執着を表す心象風景とは孝雄が庭園でみた母親に靴をプレゼントする夢である。その夢で孝雄の家出した母への未練を表している。

雪野と出会った緑に囲まれた鏡のようにきれいな湖がある庭園で、孝雄はベンチで寝て昔の夢を見る。舞い散る枯れ葉を背景に、孝雄が公園のベンチで母親にプレゼントの靴をあげる。その映像は家族全員で公園を散歩する仲がいい家族のそれに見えるが、現実には孝雄の両親は離婚し母親は家を出ているのだ。

また、現実と比べて、孝雄と一緒にいる人はもう母親ではなく雪野である。同じベンチがあって自然に囲まれた場所でも、季節によって風景が結構違っている。現実は緑にあふれた夏の庭園だが、夢の中では紅葉の季節での公園である。こういう現実と夢を季節で区別させるのは、自然と季節は人がコントロールできないものであることを見せるためなのではないだろうか。夢の中で舞い散る紅葉は思い出の秋に限られたように、現実にある夏の風景もいつも見えるわけじゃない。しかも夏が終わったら、雨が少なくなって雪野と今のように頻繁に会うことができないだろうという不安が孝雄の心に生じたことを表しているとも考えられ

るのである。

4.3.4. 『君』

『君』における執着を表す心象風景とは、瀧が口噛み酒を飲んでから見た三葉の生い立ちの映像である。この心象風景は瀧が見たものではあるが、三葉の視点を取って描かれた映像で、隕石が落ちる前までの三葉が見た映像であり彼女の心の中（両親への未練、瀧への恋心）を描き出している。

映画の冒頭で二人は別々のところに立って、空を見上げ流れる綺麗な彗星を眺めている。だが、その彗星はきれいではあるが、三葉の命を奪った隕石でもある。彼女を救うため、瀧は彼女の口噛み酒を飲み、時間を遡る。そして、彗星の映像を見て、隕石に殺される前の三葉が見た映像が瀧の目に映る。

三葉の見た幻は彼女の両親と瀧への執着の映像だ。三葉の記憶に残されたのは、母親が三葉を生んだときや病気で入院したときなど、若くして亡くなった母を想う気持ちが伝わってくる場面である。その映像には、家出した父親が母親の隣にいる。三葉は父親に対し愛憎の入り交じった感情を表す。そして隕石落下の直前に至って、三葉の瀧との出会いとそのあとのエピソード、髪を切って祭りに行った時のシーンが表れる。そのあと、三葉の視点に移り、巨大な彗星に直面することで、大自然や宇宙の巨大さに面する三葉の無力感が巻き起こり瀧への未練へと画面が切り替わっていく。

4.3.5. まとめ

現実の中で恋愛や家族関係に挫折した主人公はその遠く離れた相手に執着を抱き、壮大な宇宙や大自然に向けて無力を感じていく、そして、自己喪失した経験を思い出すことを通して幻や夢を見てしまうのである。主人公が見た幻や夢は今の現実では到底ない。遠く離れた相手の思い出は膨れ上がり、その人への切ない執着が繊細に描かれた情景表現となっていくのである。

5. 結論

『君の名は。』は作品の中で一番新海誠らしくないものだと批判されているが、実際に以前の三作品と比べると、その中の類似点の方が多いことを本稿では説明した。確かにエンタメ要素は前三作品より増えているが、新海ワールドの切なさや泣ける要素は『君の名は。』にもしっかりと受け継がれている。実現できない恋愛で苦しみ成長する若者たちは、恋の相手とハッピーエンドになれるかどうかにかかわらず、いろいろな困難を乗り越え、時を超え生き続けるのである。『君の名は。』はエンタメ要素によりかなり明るい作品になってはいるが、新海の以前の作品と本質的に変わってないのだ。

参考文献

月刊エムディエヌ(MdN)（2016 年 10 月）「キャラクターが紡ぐ物語」エムディエヌコーポレ

ーション『〔特集〕君の名は。彼と彼女と、そして風景が紡ぐ物語』東京：エムディエヌコーポレーション.
中田健太郎（2016）「“かたわれ時”に出逢うもの」『ユリイカ：新海誠―「ほしのこえ」から「君の名は。」へ』東京：青土社，pp.最初のページ-最後のページ.
新海誠（2016）「“かたわれ時”に出逢うもの」『ユリイカ：新海誠―「ほしのこえ」から「君の名は。」へ』東京：青土社，pp.最初のページ-最後のページ.
君にブログの才能はない（2016年8月28日）「君の名は-みんなの新海誠はみんなが望んだものだったのか」2017年2月2日
http://blog.livedoor.jp/waruiko6/archives/52284499.html.
中溝雪未（2017年2月26日）「『君の名は。』とマーケティングの話」2017年8月8日
http://topseller.style/archives/2214.

大分方言に対する標準語の終助詞「ね」の変化

ローラ・キャサリン

1. はじめに

日本は島国で47都道府県にわかれており、標準語はあるが、各地域でそれぞれの言語が日常的に使われている。徳川（1991:30）は「同じ一つの言葉であっても、地域差により様々なバリエーションがある」と言っている。その言語のバリエーションを方言という。

方言は社会言語学の一つの分野である。岩田(2013:1)は、社会言語学というのは、「データを拠り所として、それまでの狭義の言語学とは異なる分析的パラダイムを用いて人間集団と言語の使用（language use）を探る学問分野である」と言っている。この「人間集団」の中で、特に筆者は大分県民に注目したいと思っている。大分方言について研究をする理由は、現在筆者は大分大学に留学中で、よく大分方言を教わったり、聞いたりしているからである。また、大分方言は大分県でしか使われていない方言であるため、留学中に大分方言についてよりよく知りたいと思ったからである。

方言は県民の誇りとも言う。方言は無意識に社会の中で重要な役割を持っている。岩田(2013:64)は、「民族固有の言語的特徴は、言語生活の中で仲間意識を強める役割を持つ」と説明した。つまり、標準語より方言で話すほうが親しみが感じられるとも言える。

秋山（1991:307）によると、例（１）のように標準語の「ね」は大分方言で言うと、「な」に変化する。

（１） a. いい天気だね。（標準語）
　　 b. いい天気やなぁ。（大分方言）

しかし、「ね」が「な」に変化することは確実なことではない。例（２）b.のように、「ね」がそのまま使われる場合もたまにある。

（２） a. 田中はきっと自信があるんだろうね。（標準語）
　　 b. 田中はきっと自信があるんやろうね。（大分方言）

大分方言でいつ「ね」が「な」に変化し、いつ変化しないのかは非常に興味深いため、大分方言の「な」の機能や「ね」と「な」の違いについて調べることにした。

2. 先行研究

2.1. 標準語の「ね」

日本語で「ね」という助詞は日常会話で多く使われている。日本語の品詞分類の中で「ね」は助詞であり、特に終助詞という役割を持っている。水谷（2005：147）は「『ね』は話し手と聞き手の知識や認識に矛盾がないことを表すものである」と言っている。村田（2007：97）は「『ね』の使い方には一種の親しみを表すものがある」と言っている。「ね」の用法について分類したいと思う。

2.1.1.　相手の認識を求める用法

相手の認識を求める用法とは水谷（2005：147）が「聞き手に同意を求める『いい天気だね』のような用法」と言っているものである。そして、仁田（2003：256）は「文が表す内容を心内で確認しながら、話し手の認識として聞き手に示すものである」と述べている。評価や感情を表す述語に「ね」が付加される例が多い。この用法では、話し手と聞き手という役割があり、平叙文ではなく、会話の形で用法を表す。一般性の高い認識ではなく、個人的な意見や確認を求めることが一つの特徴である。以下、仁田（2003）から例文を引用する。

（３）A「君は、相変わらず強情だね。」
　　B「あいにく生まれつきそうなんだ。」

話し手にも聞き手にも同様に成立する認識については、応答文にも「ね」や「ねえ」が付加することもある。

（４）A「今日は暑いねえ。」
　　B「そうだね。」

また、認識のモダリティにも「ね」付加するケースが多い。認識のモダリティというのは、「かもしれない」や「だろう」のような可能性や蓋然性を表す表現である。認識のモダリティの形式によってその判断が話し手の認識として表わされる。

（５）A「何かわかりましたか？」
　　B「犯人はここには立ち寄らなかったみたいだね。」

否定的な態度表明を表す述語に「ね」が付加した場合には、反抗的で、突き放したようなニュアンスが感じられることがある。

（６）A「ねえ、田中さんどこにいるか知らない？」
　　B「知らないね。」

仁田（2003：257）は「話し手が調べたり考えたりしたことを心の中で確認しながら聞き手に述べるということを表したり、記憶を思い起こしているということを表したりする」と言っているが、自分の名前や生年月日などの単純な知識には「ね」を付加しない。

2.1.2.　話し手の認識を確認する用法

聞き手に確認を求める用法について、水谷（2005：147）は「話し手の認識を聞き手に確認する『これでいいね』のような用法」だと言っている。聞き手が行動を間違わないように、確認が必要となる場合もよくあり、この「ね」の用法は聞き手が行動することを確認すると表現する。仁田（2005：258）は水谷の理論に加え、「聞き手の方がより確かな知識や認識を持っていると見込まれる事柄について、話し手の認識を聞き手に示すところから派生する」と説明している。事実や他人から得た情報に「ね」が付加されると、聞き手に確認するニュアンスがより強く感じられる。強いニュアンスだけでなく、渡辺（1959：234）は、「『命令』、『希望』、『感動』」などを表すとしている。

（７）A「君、3 日前の夜 7 時に駅前の喫茶店で山本さんと会っていたね。」
　　B「そうですけど、何か問題がありますか？」
（８）A「君、会社、辞めるんだってね」

B「もう耳に入りましたか。家業を継ぐことになったんです。」

2.1.3. 聞き手を意識していることを示す用法

聞き手を意識していることを示す用法について、仁田（2003：259）は「話し手が発話を続ける際に、聞き手を意識しているということを示すものである」と言っている。複数の文を続けて発話するときに、重要な情報を伝える文を前提として、相対的に軽い情報を表す文に「ね」を付加する。この用法では「ね」があってもなくても、大きな違いを与えない。仁田（2013：260）の例文を引用する。

（9）昨日、デパートに買い物に行ったんですね。そうしたら、中学校時代の先生とばったり会って、少し立ち話をしたんですよ。

2.2. 大分方言の終助詞

標準語の次に大分方言の終助詞について調べてみた。渡部（1982：43）は、「ね」の大分方言にそれぞれの形があり、「『なーえ』、『ねや』、『…たなー…』や『ぞな』、『ない』などがあると言っている。高田（1980：212）は、「ナア…」という文末があり，「『ナア』は親しみのこもった語だがなれなれしすぎていると腹を立てられる恐れあり」と言っている。

しかし、注目したいのは、「な」または「なあ」という文末の使い方に関して、秋山（1991：307）は「相手に呼びかけて、その同意・共鳴を期待しようとする、話し手の姿勢が認められる」としており、「共鳴というのは，話し手が言ったことは聞き手に受け取り、同じ反応や考え方を求めるということである」と説明している。以下、秋山の例文で説明する。

（１１）a. 涼しいね（標準語）
b. 涼しいな（大分方言）

「なあ」というのは「長呼の形で発話したら、より強い、話し手の詠嘆が読み取れる」と秋山が言っている。詠嘆というのは、話し手の感情が入っていることが読み取ることである。渡辺（1982：）は「念を押して話しかけることを示し、詠嘆の気持ちを含む」と言っており、「な」は個人的な意見や感情を含め、聞き手に言うときに使われる。

（１２）a. 暑いことだねえ（標準語）
b. アティー　コッチャー　ナー（大分方言）

（１２）a. そうだねえ（標準語）
b. ソージャ　ナー（大分方言）

それだけでなく、秋山は（1991：307）は「な」には、「問い」、「依頼」、「勧誘」、「勧奨」という使い方があることを説明している。これらの使い方を見ると、秋山が説明した大分方言の「な」の使い方は標準語の「ね」に最も近いことがわかる。

3. リサーチクエスチョン

- 大分方言の終助詞の「な」はどのような意味で使われているのか
- 大分方言では、標準語の「ね」が「な」に変化するのか
- どのような場合に「ね」から「な」への変化が起こらないのか

- 男性と女性の「な」の使用はどのぐらい違うのか

4. 方法

2018 年３月から４月中旬までの期間、大分県出身の学生 50 人（男性 25 人、女性 25 人）を対象として、インターネット上のグーグルフォームで作成したアンケートを配布し調査を行った。女性の回答者の年齢層は 17～23 歳で、女性の回答者の年齢層は 16～23 歳である。アンケート調査では、終助詞の「ね」を含む日本語の標準語で書かれた会話の文を、通常友達同士で使っている大分方言の話し言葉に直してもらった。標準語の文は２章で取り上げた仁田（2003）の用例を使った。終助詞に着目し、回答を集計し、分析した。

5. 結果

2.1.で説明した「ね」の三つの用法、(1) 相手の認識を求める用法、(2) 話し手の認識を求める用法、(3) 聞き手を意識していることを示す用法に分け、回答者が答えた数と割合を出した。一般的に男性と女性は終助詞の使い方が異なる。そのため、調査結果も男性と女性に分けた。以下、男性と女性別に (1)、(2)、(3) の用法について詳しく述べる。

5.1. 男性

アンケート調査の結果を用法別に以下にまとめ、詳しく述べる。

5.1.1. 相手の認識を求める用法

まず、(1)「相手の認識を求める用法」について、男性の結果を表１にまとめる。表１の合計を見ると、標準語の「ね」は半数以上の回答がから大分方言の終助詞「な」に変化するという結果になった。まず、例１では、「ね」から「な」に変化した割合は 52.0%に達し、次に、伸びている「な」、すなわち、「なぁ」の割合は 12.0%である。この二つの結果を足すと、割合は 72.0%である。その他、「そうなんよね」と答えた人は１人で、「ね」、つまり「変化が起こらない」という答えは 16.0%であった。

次に、例２でも、「な」という回答が最も多く、52.0%に達した。「なぁ」の回答は 8.0%で両方含めると 60.00%を占めている。そして、その他の回答として、「なぇ；のう」という回答があり、8.00%で二番目に多い割合である。だが、「ね」という回答は 16.0%しかない。

例３は「な」の割合は６割に達し、「なぁ」を含めると、64%を占めている。その次に、変化がないと答えた人、すなわち、「ね」はわずか 12.0%である。その他「来とらんわ」という回答が１人いた。

例４はこれまでの結果と異なっている。「な」と答えた割合はこれまでと同じく最も多いが、36%しかない。二番目に多い回答は「その他」であり、28%の割合である。その他の回答の中で、次のような答えが出てきた。例えば「知らん、知らんよ、知らない、知らんわ、知らんの～、たいぎいのう」である。三番目に多い回答は「なぁ」という答えで、「な」と合わせ、48%だった。最後に「ね」の割合は 4%しかなかった。

表１　相手の認識を求める用法

標準語	大分方言（人）		割合
1.「君は相変わらず強情だね。」 「あいにく生まれつきそうなんだ。」	な	15	60.0%
	なぁ	3	12.0%
	ね	4	16.0%
	その他（そうなんよね）	1	4.0%
	回答なし	2	8.0%
2.「今日は暑いね。」 「そうだね。」	な	13	52.0%
	なぁ	2	8.0%
	ね	4	16.0%
	その他（なぇ；のう）	2	8.0%
	回答なし	4	16.0%
3.「何かわかりましたか？」 「犯人はここには立ち寄らなかったみたいだね。」	な	15	60.0%
	なぁ	1	4.0%
	ね	3	12.0%
	その他（来とらんわ）	1	4.0%
	回答なし	5	20.0%
4.「ねぇ、田中さんどこにいるか知らない？」 「知らないね。」	な	9	36.0%
	なぁ	3	12.0%
	ね	1	4.0%
	その他 （知らん、知らんよ、知らない、知らんわ、の～、だいぎいのう、嫌だ）	7	28.0%
	回答なし	5	20.0%
合計	な	52	平均 52.0%
	なぁ	9	9.0%
	ね	12	12.0%
	その他	11	11.0
	回答なし	16	16.0%

5.1.2. 話し手の認識を求める用法

次に (2)「話し手の認識を求める用法」についてのアンケート調査の結果を表 2 にまとめ、詳しく説明する。

表２　話し手の認識を確認する用法

標準語	大分方言（人）		割合
5.「B 、３日前の夜７時に駅前の喫茶店で山本さんと会ったね。」 「そうだけど、何か問題がある？」	な	11	44.0%
	なぁ	1	4.0%
	ね	6	24.0%
	その他(やろ？、おうとったのう)	2	8.0%
	回答なし	5	20.0%
6.「B、会社、辞めるんだってね。」 「もう耳に入りましたか。家業を継ぐことになったんです。」	な	16	64.0%
	なぁ	1	4.0%
	ね	4	16.0%
	その他（やとのう）	1	4.0%
	回答なし	3	12.0%
合計	な	27	平均　54.0%
	なぁ	2	4.0%
	ね	10	20.0%
	その他	3	6.0%
	回答なし	8	16.0%

表 2 の合計を見ると、この用法でも半数以上が「な」に変化した回答が最も多く、54.0%であった。しかし、個別にみていくと、例 5.a. では、「な」と「なぁ」という答えは 50.0%

に達していない。次に多い答えは「ね」であり、24.0%の人が変わらないと答えた。「その他」と回答をした人は8.0%で、「やろ？」、「おうとったのう」と回答した。

例6は、「な」と回答した人は50.0%を超え、「なぁ」を足すと70.0%を超える。また標準語の「ね」が変化しないという回答は16.0%である。「ね」と「な」以外の回答は4.0%しかなく、「やとのう」と回答した。「ね」が「な」に変化しない割合は(1)「相手の認識を求める用法」より高い。

5.1.3. 聞き手を意識していることを示す用法

次に(3)「聞き手を意識していることを示す用法」について男性のアンケートの調査結果を表3にまとめ詳しく説明する。表3の「聞き手を意識していることを示す用法」では、回答の割合にあまり大きい差はなかった。(1)と(2)と同じく、「な」と回答した人が最も多いが、半分にも達していない。次に多い回答は「ね」で、20.0%の割合を占めている。最後に、「その他」と回答をした人は36.0%で「出てな」、「出たんよ」、「出たんじゃわ」と答えた。

表3　聞き手を意識していることを示す用法（男性）

標準語	大分方言(人)		割合
7.それでね、この間ね、みんなに会ったときね、○○さんの話が出てね。最近○○さんのことを聞かないけど、今どうしているんだろうって言ってたよ。	な	9	36.0%
	なぁ	0	0.0%
	ね	5	20.0%
	その他（出てな、出たんよ、出たんじゃわ）	3	12.0%
	回答なし	8	32.0%

5.2. 女性

女性に対してのアンケート調査の結果を以下の表4～6にまとめた。

5.2.1. 相手の認識を求める用法

まず、(1)「相手の認識を求める用法」についてのアンケート調査の結果を表4にまとめ、詳しく説明する。表4の例1.b.では、「ね」が「な」に変化するという回答は、「なぁ」を含めると、全体の 80.0%の割合を占めている。一方、「ね」が変化しないという答えは全体の12.0%しか占めていない。その他の回答として「よな」と答えた人が1人いた。

次の例2.b.において、「な」と「なぁ」の回答を足すと、76%を占めている。「ね」と答えた割合は24.0%で、「その他」の回答は0.0%である。

さらに、例3.b.では、「ね」が「な」と「なぁ」に変化する回答は両方を合わせると、56.0%であった。次に、「ね」を使うと答えた割合は全体の 24%で、「その他」と回答した人は 12%である。

例4.b.で最も多い答えは「な」で、「なぁ」と合わせると、全体の56.0%に達した。次に「その他」の「知らん」、「知らんよ」は全体の割合の32%を占めている。「ね」は12.0%であった。

表４　相手の認識を求める用法（女性）

標準語	大分方言（人）		割合
1.「君は相変わらず頑固だね。」 「あいにく生まれつきそうなんだ」	な	17	68.0%
	なぁ	3	12.0%
	ね	3	12.0%
	その他 （よな）	1	4.0%
	回答なし	1	4.0%
2.「今日は暑いね」 「そうだね」	な	16	64.0%
	なぁ	4	16.0%
	ね	4	16.0%
	その他	0	0.0%
	回答なし	1	4.0%
3.「何かわかりましたか？」 「犯人はここには立ち寄らなかったみたいだね。」	な	13	52.0%
	なぁ	1	4.0%
	ね	6	24.0%
	その他 （らしい、わぁ）	3	12.0%
	回答なし	2	8.0%
4.「ねぇ、田中さんどこにいるか知らない？」 「知らないね」	な	9	36.0%
	なぁ	5	20.0%
	ね	3	12.0%
	その他 （知らん、知らんよ）	8	32.0%
	回答なし	0	0.0%
合計	な	54	平均　55.0%
	なぁ	13	13.0%
	ね	14	16.0%
	その他	12	12.0%
	回答なし	4	4.0%

5.2.2.　話し手の認識を求める用法

次に、(2)「話し手の認識を求める用法」について女性のアンケートの調査結果を以下の表５にまとめる。表５の例 5.b. では、「な」と「なぁ」を合わせても、48.0%しかない。「ね」と回答した割合は全体の 16.0%であった。その他の「やろ？」割合は 8.0%である。次の例 6.b. では、「な」と「なぁ」両方を合わせると合計 36.0%で、「変化がない」、つまり「ね」と回答した割合は 36.0%であった。その他の回答（「よな」「やろ」「やめるんっち？」）は 12.0%であった。

表５　話し手の認識を確認する用法（女性）

標準語	大分方言（人）		割合
5.「B、３日前の夜７時に駅前の喫茶店で山本さんと会っていたね。」 「そうだけど、何か問題がある？」	な	11	44.0%
	なぁ	1	4.0%
	ね	8	32.0%
	その他（やろ？）	2	8.0%
	回答なし	3	12.0%
6.「B、会社、辞めるんだってね。」 「もう耳に入りましたか。家業を継ぐことになったんです。」	な	8	32.0%
	なぁ	2	8.0%
	ね	9	36.0%
	その他（よな、やろ、やめるんっち？）	3	12.0%
	回答なし	3	12.0%
合計	な	19	平均　38.0%
	なぁ	3	6.0%
	ね	17	34.0%
	その他	5	10.0%
	回答なし	6	12.0%

5.2.3. 聞き手を意識していることを示す用法

次に、(3)「聞き手を意識していることを示す用法」について女性アンケートの調査結果を表６にまとめ、詳しく説明する。

表６ 聞き手を意識していることを示す用法（女性）

標準語	大分方言（人）		割合
7.それでね、この間ね、みんなに会ったときね、○○さんの話が出てね。最近○○さんのことを聞かないけど、今どうしているんだろうって言ってたよ。	な	17	68.0%
	なぁ	0	0.0%
	ね	5	20.0%
	その他（さ）	1	4.0%
	回答なし	2	8.0%

表６において、「な」の回答の割合は最も多く、「な」だけで約 70%を占めている。次に、標準語の「ね」の回答の割合は 20%である。最後に、その他(「さ」)の答えは最も少なく、4%しかない。

6. 分析

次に、「な」と「ね」を比較するために、それぞれの用法別の平均値をに男女割に表 7 にまとめる。なお、ここでは「な」は「なぁ」を含めた割合である。

表７ 調査結果の回答や割合のまとめ

用法	終助詞	割合の平均	
		男性（%）	女性（%）
(1)相手の認識を求める用法	な	61.0	68.0
	ね	12.0	16.0
(2)話し手の認識を確認する用法	な	58.0	44.0
	ね	20.0	34.0
(3)聞き手を意識していることを示す用法	な	36.0	68.0
	ね	20.0	20.0

表 7 の男性の調査結果では、用法 (1)、「な」と答えた割合は 61.0%で、「ね」の割合は 12.0%である。その次、(2) の用法は、「な」の割合は 58.0%、「ね」は 20.0%を占めている。さらに、用法 (3) では、「な」の回答は 36.0%で、「ね」は 20.0%である。一方、女性の調査結果は、用法 (1) では、「な」の割合は 68.0%、「ね」の答えは 16.0%である。そして、用法 (2) では、「な」の割合は 44.0%で、「ね」の割合は 34.0%である。次に、用法 (3) で、「な」の割合は 68.0%で、「ね」の回答の割合は 20.0%である。「な」の回答は全体的に最も多い。

まず、以上に述べた調査結果では、どの用法でも「ね」が「な」に変化する方が変化しない場合より多く、少なくとも 4 割を超えている。つまり、「ね」から「な」に変化する可能性がかなり高い。特に用法 (1)「相手の認識を求める用法」は男女両方 6 割を超えている。

三つの用法の中で、(1) の用法が最も男女の差がなく、男女とも「な」がよく使われることが分かった。つまり、大分方言の「な」は標準語の「ね」の「相手の認識を求める用法」と同じ意味で使うことができると考えられる。次に、用法 (2)「話し手の認識を求める用法」の調査結果について、用法 (1) の結果ほど「な」の回答は多くないが、「ね」の回答より多

く、大分方言の「な」は標準語の「ね」の「話し手の認識を求める用法」と同じ意味で使うことができる。用法（3）の調査結果でも、「な」の答えが一番多く、標準語の「ね」の「聞き手を意識していることを示す用法」として使われる。要するに、「ね」が大分方言で「な」に変化しても、意味的に違いがないと判断できるであろう。

次は「ね」が「な」に変化が起こらない場合についての分析を述べる。全ての調査結果の中で、最も「ね」が高いのは、女性の用法（2）「話し手の認識を求める」用法であり、3 割を占めている。「ね」は一般的に女性によく使われている。黒須（2007:193）は「ね」が男性でも女子でも使われている終助詞だが、「『な』は『非常に男性的』」と言っている。そのため、大分方言で話しても、女性は男っぽい終助詞の「な」を使う者が多いが、「ね」を使う女性もいる。5.2.2.の例文 5 は友達同士の会話である。しかし、内容はかなり深刻なニュアンスがある。徳川（1991）によると、「話題の種類」によっては方言の使用頻度が異なるそうである。例 5 は自分が知っていることを相手に確認しようとし、「はい」か「いいえ」の答え、または「すぐに答えて欲しい」という要求のニュアンスがある。例 6 も、自分が他人から聞いた「B が会社を辞めること」の真実を知りたいため、B にそれは本当かどうかを確認しようとしている。その確認しようとする言葉にすぐ答えて欲しいという強い要求が感じられ、そのようなニュアンスが入っていると、話がより一般的になり、方言が出にくいようだ。さらに、5.1 と 5.2 の例１と例２の内容と比べると、例 1 と２の方はあまり深刻ではない内容の会話のため、深刻な内容より方言が出にくいと考えられる。そのため、「ね」の割合が低いのであろう。

用法（3）「聞き手を意識していることを示す用法」で、男性の「な」の回答が 36.0%と少ない理由は、調査で「回答ない」の回答者が 32.0%もいたためである、もし回答があれば、異なる結果が出たかもしれない。

男性と女性を比べたとき、「な」への変化については、わずかだが違いが見える。用法（1）の「な」の調査結果では、男女両方共 6 割を超えたが、「ね」の答えは女性の方が 4.0%多い。そして、用法（2）も、「な」の回答の割合は最も多いが、女性の「ね」の回答が男性より 14.0%多く、34.0%いた。さらに、用法（3）では、用法（2）と同じく、「な」の回答は最も多いが、「ね」の回答の割合は男女同じで 20.0%である。用法（1）は「ね」の回答の違いが 4.00%しかなかったため、男女とも違いがないと判断できる。

大分方言で「ね」の代わりに使われるのは「な」だけではなく、「な」以外のバリエーションがあることも分かった。例えば、「のう」「なえ」「けん」などである。しかし、それらについてはより詳しい分析が必要になる。また、「知らないね」は、「知らん」「知らんよ」「知らんわ」「知らないのー」等の回答があり、「な」が「ね」以外にも様々な言い方があることが分かった。

7. おわりに

標準語の終助詞「ね」は大分方言の「な」に変化することがよくあるが、変化しないときもある。どの場合が変化が起こらないのかを調べてみるために、大分出身の若者を対象にアンケート調査を行った。その結果、標準語の「ね」が持つ三つの用法のすべてにおいて、大分方言では「な」に変化することが分かった。最も高い変化が起こるのは男性の「相手の認

識を求める用法」で、68.0%を占めた。一方、最も標準語の「ね」が「な」に変わらず、「ね」のまま使われている用法は、女性の「話し手の認識を求める用法」であった。変化が起こらない理由は徳川（1991）によると、「話題の種類」が原因であり、話の内容によって、「ね」を使う頻度が異なっている。この調査でも、内容がかなり深刻で要求のニュアンスが入っており、話が一般的になる場合は、方言が出にくいと考えられ、「な」の変化が起こらない場合があった。さらに、黒須（2007）が述べているように「ね」は「な」より女らしいため、方言で話しても、「ね」をそのまま使う場合も多いことが分かった。さらに、男女の「な」への変化の割合の差がわずかしかなく、大分方言の「な」は男性、女性ともに使われていることがわかった。

大分方言で「ね」の代わりに使われるのは「な」だけではなく、「な」以外のバリエーションがあることも分かった。例えば、「のう」「なえ」「けん」などである。しかし、それらについてはより詳しい分析が必要になる。

参考文献

秋山正次（1991）『九州方言の基礎的研究　改正版』風間書房

岩田裕子（2013）『社会言語学 An Introduction to Sociolinguistics』ひつじ書房

黒須理紗子（2007）「女ことば・男ことばの研究：差異と変遷」
http://opac.library.twcu.ac.jp/opac/repository/1/5285/RisakoKUROSU20080315.pdf
（2018年7月4日閲覧）

高田一彦（1980）『大分方言』日の丸印刷

徳川宗賢（1991）『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社

仁田義雄（2003）『現代日本語文法４第８部モダリティ』

水谷修（2005）『新版日本語教育辞典』大修館書店

村田水恵（2007）『入門　日本語の文法』アルク

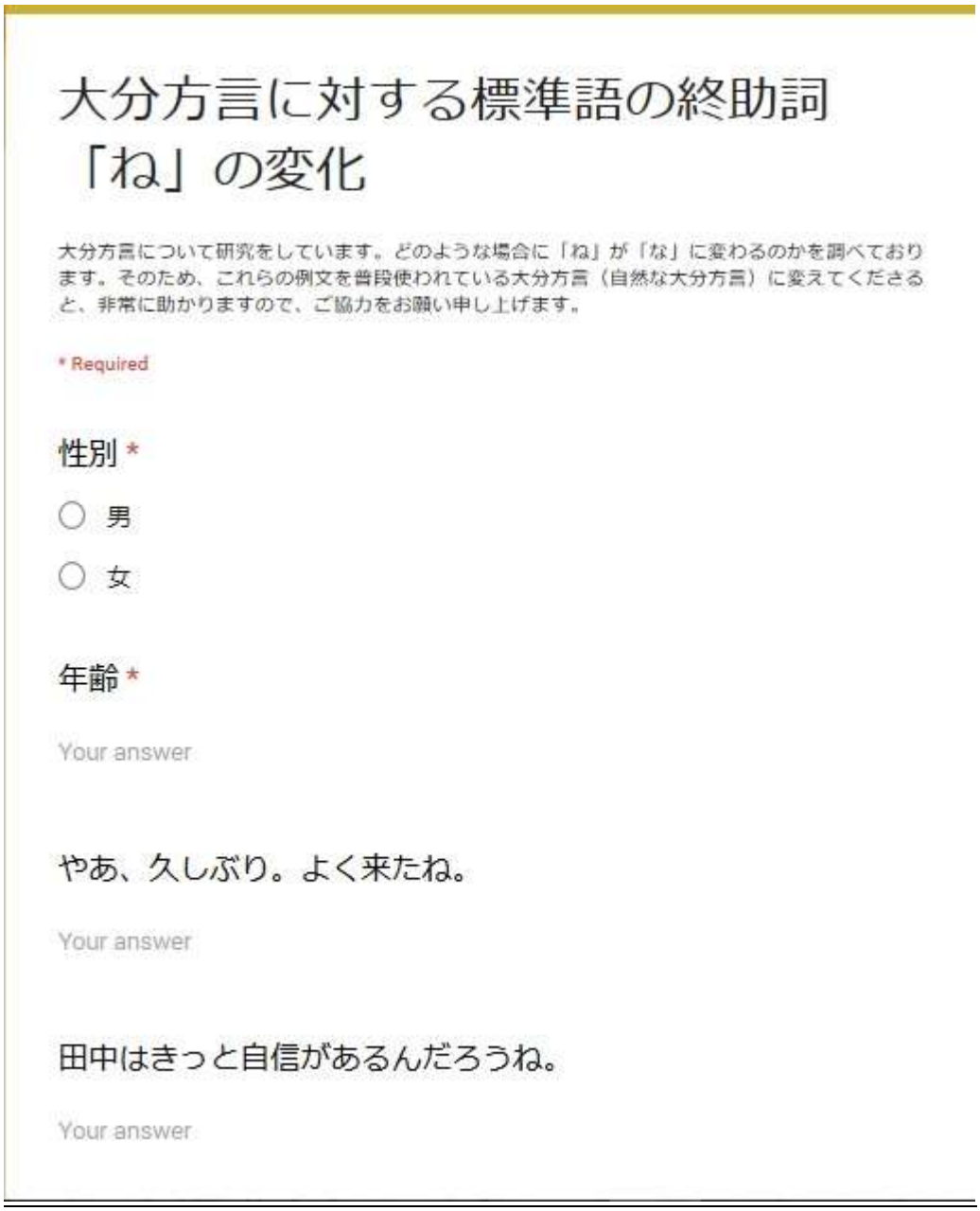
渡部之夫（1982）『大分県方言集成補遺』宮田製本所

付録

アンケートのリンク

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf-AfJStuWKDK65yks3Pk71bMo63xh3wtmw-dHvuCYP2gzR7Q/viewform?usp=sf_link

アンケート



大分方言に対する標準語の終助詞「ね」の変化

大分方言について研究をしています。どのような場合に「ね」が「な」に変わるのかを調べております。そのため、これらの例文を普段使われている大分方言（自然な大分方言）に変えてくださると、非常に助かりますので、ご協力をお願い申し上げます。

* Required

性別 *

○ 男

○ 女

年齢 *

Your answer

やあ、久しぶり。よく来たね。

Your answer

田中はきっと自信があるんだろうね。

Your answer

田中はきっと自信があるんだろうね。

Your answer

佐藤さんが言う通りかもしれないね。

Your answer

すぐもどってくるから、ここで待ってて。

Your answer

明日は絶対に来てね。

Your answer

今度の日曜日に一緒に映画でも見に行こうね。

Your answer

NEXT

Never submit passwords through Google Forms.

大分方言に対する標準語の終助詞「ね」の変化

会話の中で出てくる「ね」の例文

「ね」があるところだけを大分方言に変えてもかまいません

A:「君は、相変わらず頑固だね。」 B: 「あいにく生まれつきそうなんだ。」

Your answer

A:「これ、おいしいね。」 B:「よかった」

Your answer

A:「Bが遅刻するとは、珍しいね。」 B:「もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ」

Your answer

A:「もう少し慎重に考えて態度を決めるつもりです。」B:「それは賢明だね。僕もそれがいいと思う。」

Your answer

A：「その仕事、命をかけてやり遂げます。」B:「大げさだね。もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ。」

Your answer

A：「その仕事、命をかけてやり遂げます。」B:「大げさだね。もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ。」

Your answer

A：「今日は暑いね。」B：「そうだね。」

Your answer

A：「今日のパーティー楽しいね。」B：「そうだね。」

Your answer

A：「何かわかりましたか？」B：「犯人はここには立ち寄らなかったみたいだね。」

Your answer

A:「本当に田中さんは怒って帰ってしまったの？」B：「まぁ、そうなんだろうね。」

Your answer

A：「そろそろ仕事に戻りなさい。」B:「嫌だね。」

Your answer

A：「ねえ、田中さんどこにいるか知らない？」B：「知らないね。」

Your answer

BACK NEXT

Never submit passwords through Google Forms.

大分方言に対する標準語の終助詞「ね」の変化

会話の中で出てくる「ね」の例文

「ね」があるところだけを大分方言に変えてもかまいません

A：「今何時？」B：「ええと、３時２０分だね。」

Your answer

A：「名簿か何かに山本さんの連絡先が残っている？」B：「あ、出てるね。たぶんこれで連絡できると思う。」

Your answer

A：「そのとき、誰かに会わなかった？」B：「そうだね。」

Your answer

A：「佐藤さん知ってるよね。」B：「ええ、大学時代の友人だよ。彼がどうかした？」

Your answer

A：「君、３日前の夜７時に駅前の喫茶店で山本さんと会っていたね。」B：「そうだけど、何か問題がある？」

Your answer

A：「佐藤さんは一人っ子だそうだね。」B：「ええ、そうだったはず。」

Your answer

A：「B、会社、辞めるんだってね。」B：「もう耳に入りまし

A：「B、会社、辞めるんだってね。」B：「もう耳に入りましたか。家業を継ぐことになったんです。」

Your answer

A：「鈴木は病院に行くって言って、帰ったよ。」B：「じゃあ、そんなにひどいけがじゃないんだね。」A：「ええ。一緒に行こうかと言ったら、大丈夫だと言ってたから。」

Your answer

A:「ああ、そうか。この問題、そんなに難しく考える必要はないわけだね。」B:「そういうこと。」

Your answer

A：「あのとき、Bは佐藤さんとその話をしたんだね。」B：「そうだね。」

Your answer

それでね、この間ね、みんなに会ったときね、00さんの話が出てね。最近00さんのことを聞かないけど、今どうしているんだろうって言ってたよ。

Your answer

昨日ね、田中さんにばったり会ったんだけどね、どうもいつもの元気がないんだよ。

Your answer

ここにご飯置いとくね。

Your answer

野菜を買っておくね。

Your answer

ここにご飯置いとくね。

Your answer

野菜を買っておくね。

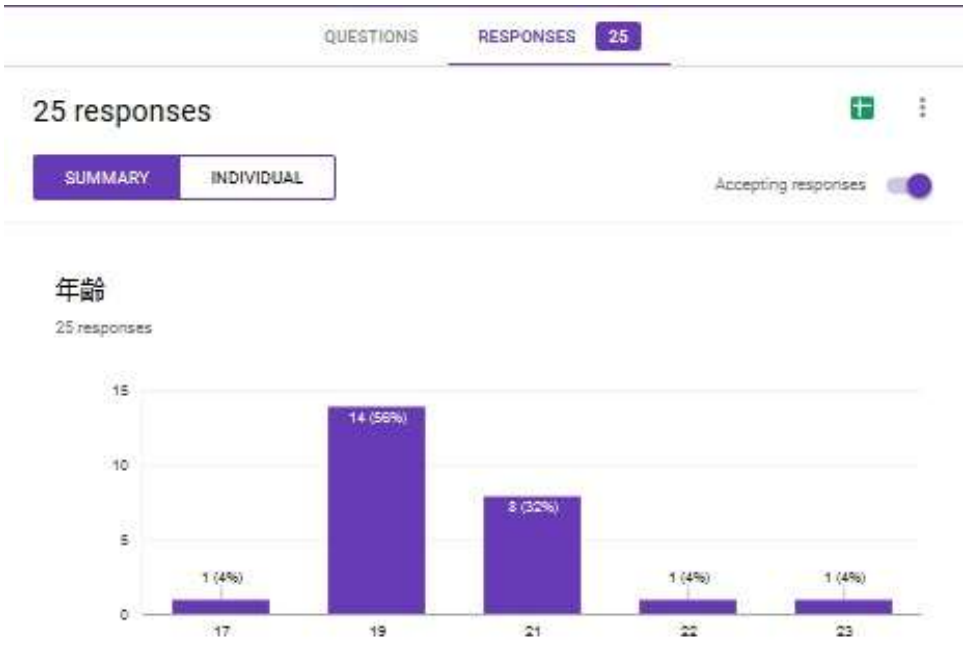
Your answer

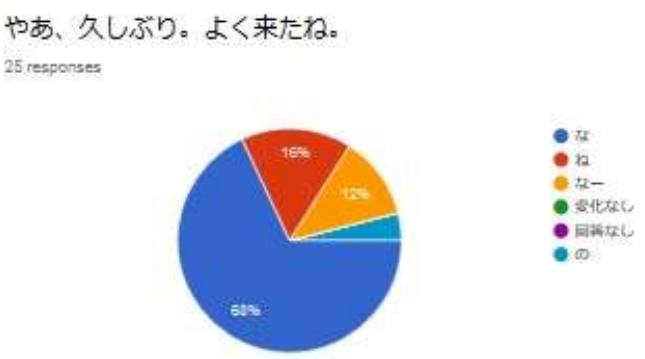
アンケートはここまで終わります。ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

BACK SUBMIT

Never submit passwords through Google Forms.

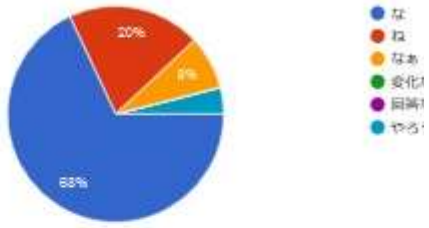
アンケート（男性の調査結果）





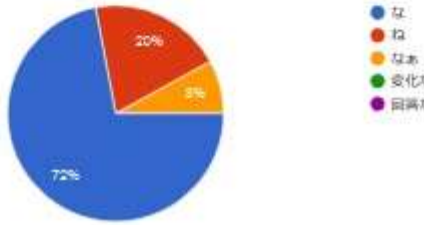
田中はきっと自信があるんだろうね。

25 responses



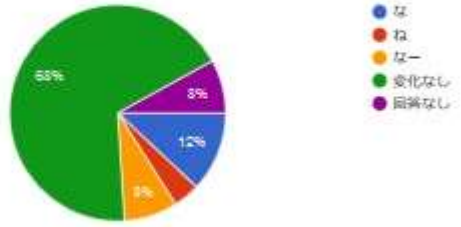
佐藤さんが言う通りかもしれないね。

25 responses



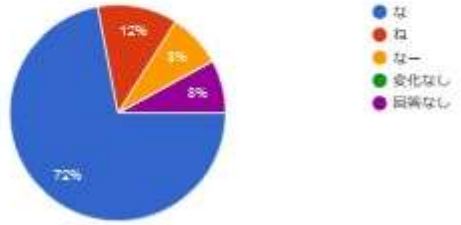
すぐもどってくるから、ここで待ってて。

25 responses



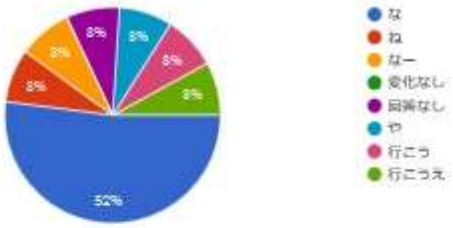
明日は絶対に来てね。

25 responses



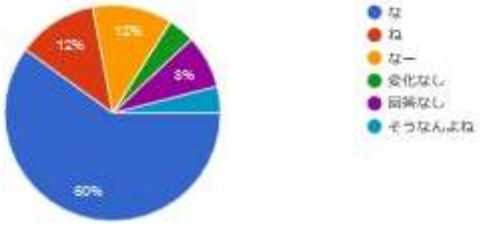
今度の日曜日に一緒に映画でも見に行こうね。

25 responses



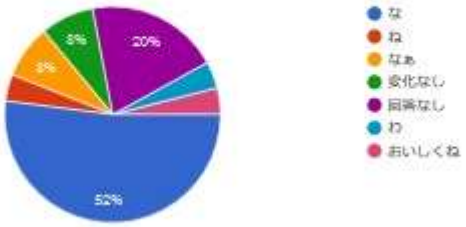
A:「君は、相変わらず頑固だね。」 B: 「あいにく生まれつきそうなんだ。」

25 responses



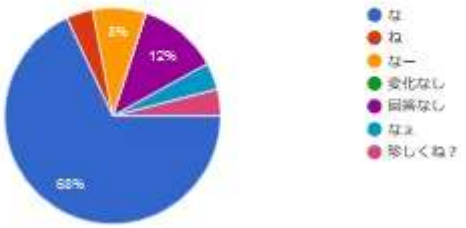
A:「これ、おいしいね。」 B:「よかった」

25 responses



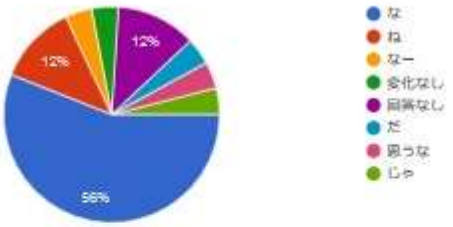
A:「Bが遅刻するとは、珍しいね。」 B:「もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ」

25 responses



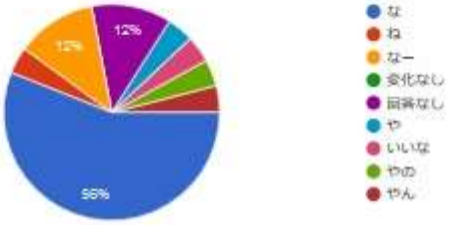
A:「もう少し慎重に考えて態度を決めるつもりです。」B:「それは賢明だね。僕もそれがいいと思う。」

25 responses



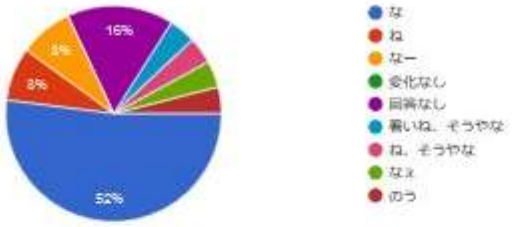
A：「その仕事、命をかけてやり遂げます。」B:「大げさだね。もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ。」

25 responses



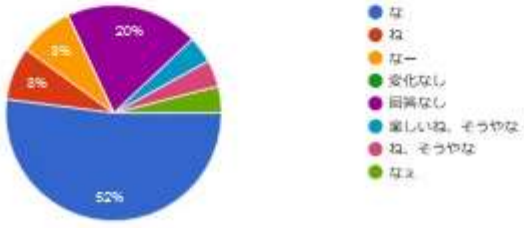
A：「今日は暑いね。」B：「そうだね。」

25 responses



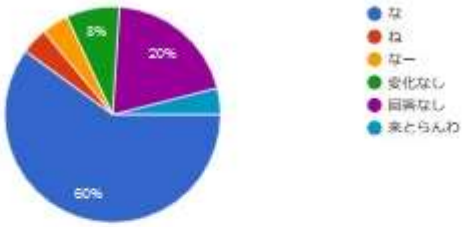
A：「今日のパーティー楽しいね。」B：「そうだね。」

25 responses



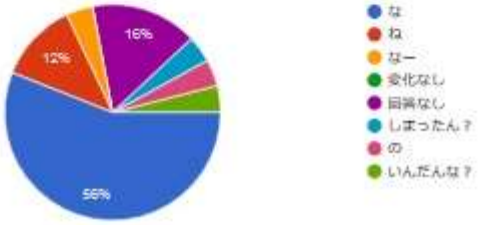
A：「何かわかりましたか？」B：「犯人はここには立ち寄らなかったみたいだね。」

25 responses



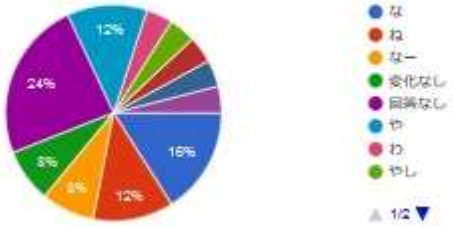
A:「本当に田中さんは怒って帰ってしまったの？」B：「まぁ、そうなんだろうね。」

25 responses



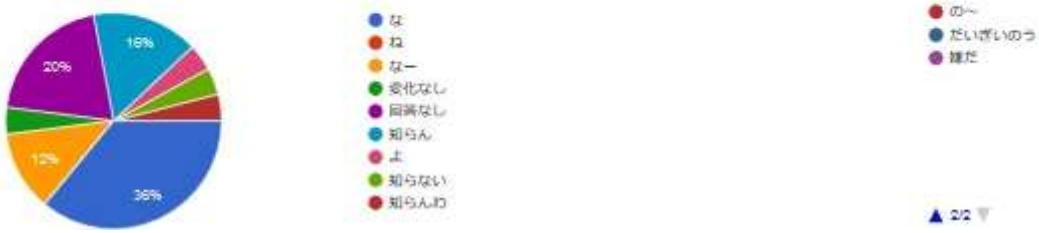
A：「そろそろ仕事に戻りなさい。」B:「嫌だね。」

25 responses



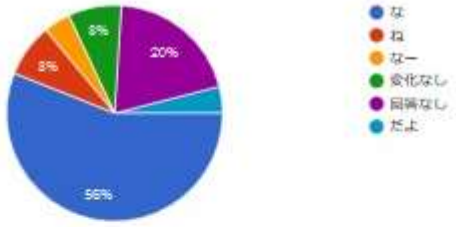
A：「ねえ、田中さんどこにいるか知らない？」B：「知らないね。」

25 responses



A：「今何時？」B：「ええと、３時２０分だね。」

25 responses



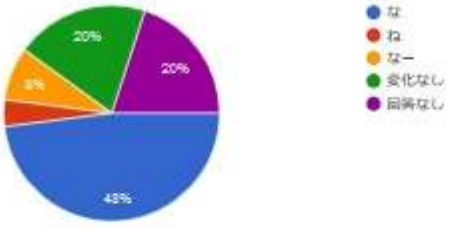
A：「名簿か何かに山本さんの連絡先が残っている？」B：「あ、出てるね。たぶんこれで連絡できると思う。」

25 responses



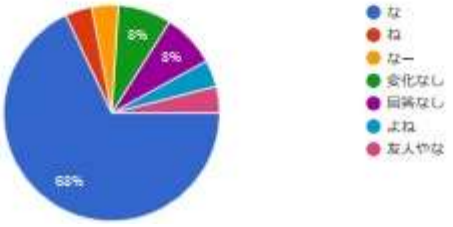
A：「そのとき、誰かに会わなかった？」B：「そうだね。」

25 responses



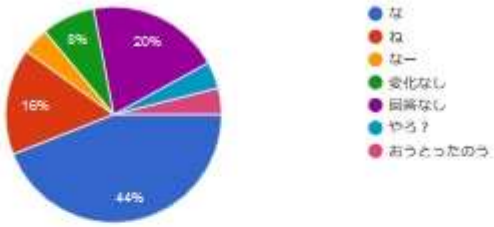
A：「佐藤さん知ってるよね。」B：「ええ、大学時代の友人だよ。彼がどうかした？」

25 responses



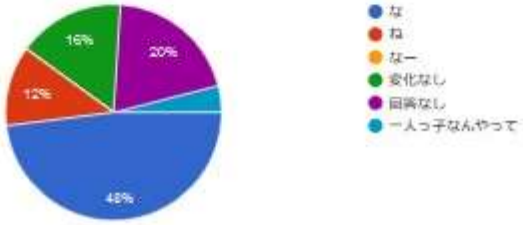
A：「君、３日前の夜７時に駅前の喫茶店で山本さんと会っていたね。」B：「そうだけど、何か問題がある？」

25 responses



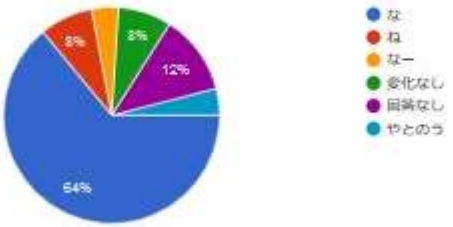
A：「佐藤さんは一人っ子だそうだね。」B：「ええ、そうだったはず。」

25 responses



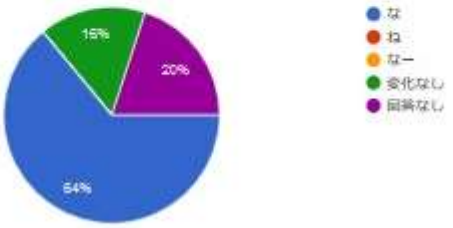
A：「B、会社、辞めるんだってね。」B：「もう耳に入りましたか。家業を継ぐことになったんです。」

25 responses



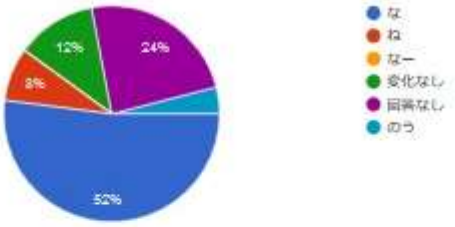
A：「鈴木は病院に行くって言って、帰ったよ。」B：「じゃあ、そんなにひどいけがじゃないんだね。」A：「ええ。一緒に行こうかと言ったら、大丈夫だと言ってたから。」

25 responses



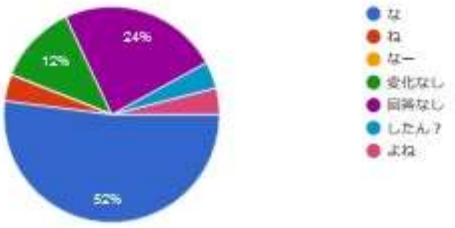
A:「ああ、そうか。この問題、そんなに難しく考える必要はないわけだね。」B:「そういうこと。」

25 responses



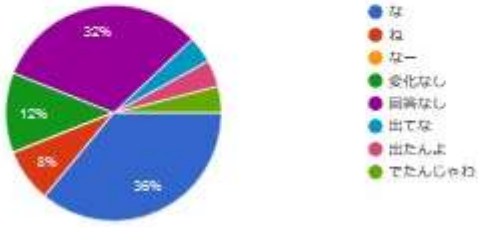
A：「あのとき、Bは佐藤さんとその話をしたんだね。」B：「そうだね。」

25 responses



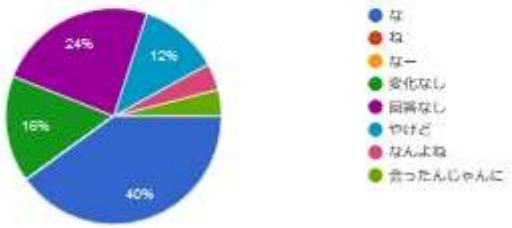
それでね、この間ね、みんなに会ったときね、00さんの話が出てね。最近00さんのことを聞かないけど、今どうしているんだろうって言ってたよ。

25 responses



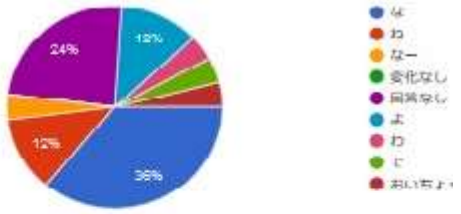
昨日ね、田中さんにばったり会ったんだけどね、どうもいつもの元気がないんだよ。

25 responses



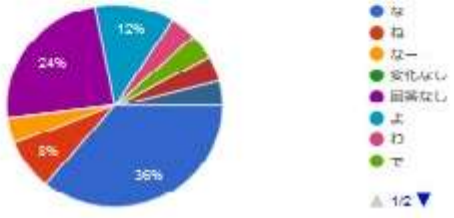
ここにご飯置いとくね。

20 responses



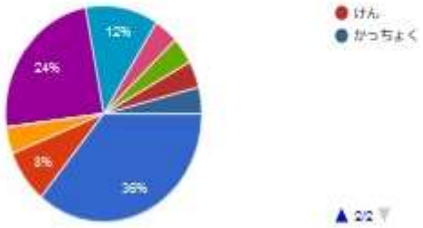
野菜を買っておくね。

25 responses

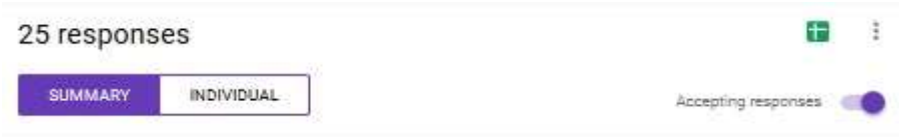


野菜を買っておくね。

25 responses

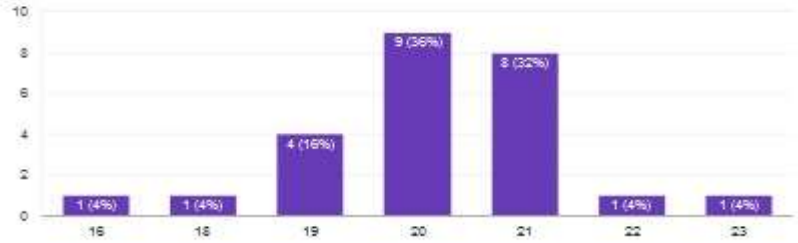


アンケート（女性の調査結果）



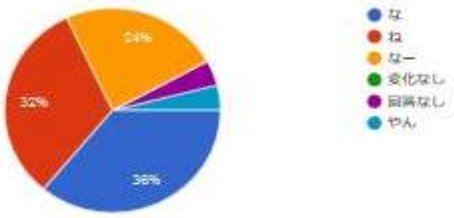
年齢

25 responses



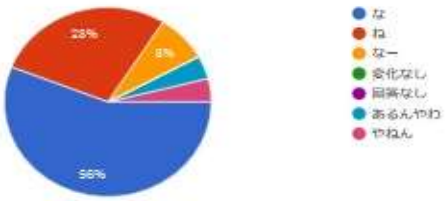
やあ、久しぶり。よく来たね。

25 responses



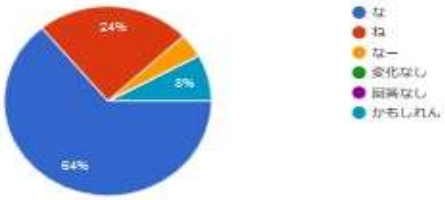
田中はきっと自信があるんだろうね。

25 responses



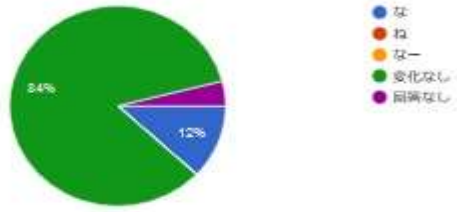
佐藤さんが言う通りかもしれないね。

25 responses



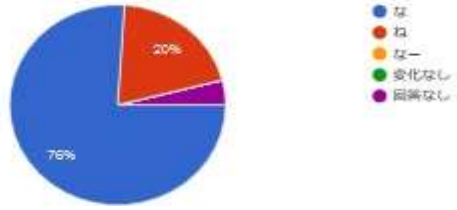
すぐもどってくるから、ここで待ってて。

25 responses



明日は絶対に来てね。

25 responses



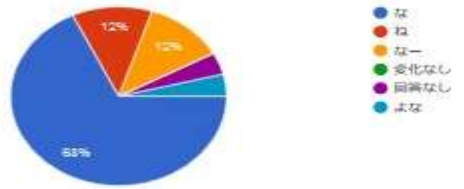
今度の日曜日に一緒に映画でも見に行こうね。

25 responses



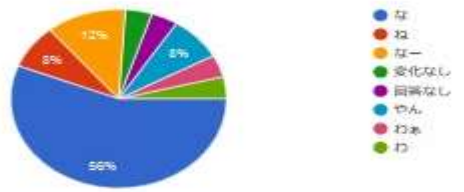
A:「君は、相変わらず頑固だね。」 B: 「あいにく生まれつきそうなんだ。」

25 responses



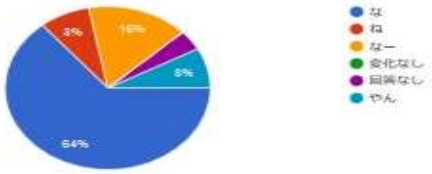
A:「これ、おいしいね。」 B:「よかった」

25 responses



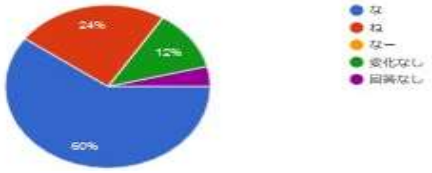
A:「Bが遅刻するとは、珍しいね。」 B:「もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ」

25 responses



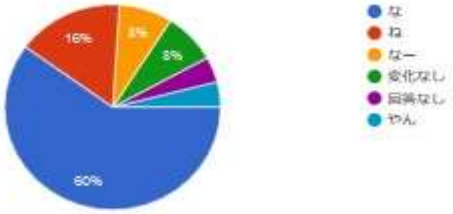
A:「もう少し慎重に考えて態度を決めるつもりです。」B:「それは賢明だね。僕もそれがいいと思う。」

25 responses



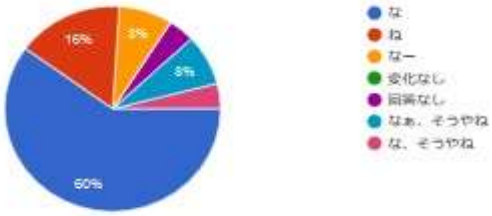
A：「その仕事、命をかけてやり遂げます。」B:「大げさだね。もう少し気楽に考えて、いい仕事をしてくれたらいいよ。」

25 responses



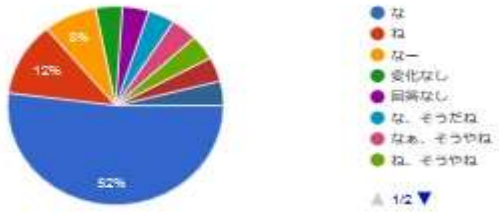
A：「今日は暑いね。」B：「そうだね。」

25 responses



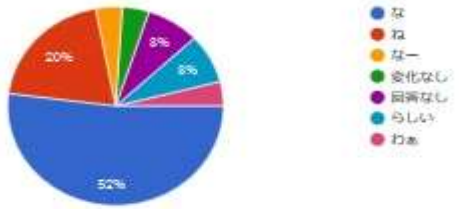
A：「今日のパーティー楽しいね。」B：「そうだね。」

25 responses



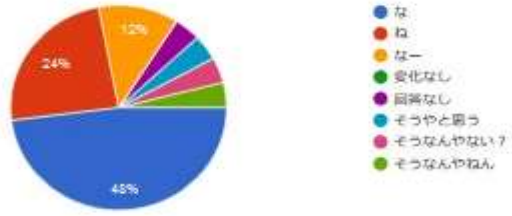
A：「何かわかりましたか？」B：「犯人はここには立ち寄らなかったみたいだね。」

25 responses



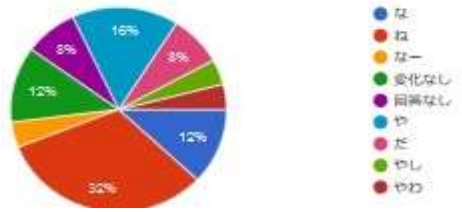
A:「本当に田中さんは怒って帰ってしまったの？」B：「まぁ、そうなんだろうね。」

25 responses



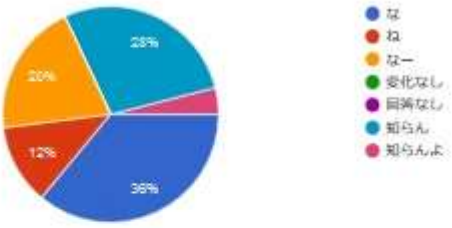
A：「そろそろ仕事に戻りなさい。」B:「嫌だね。」

25 responses



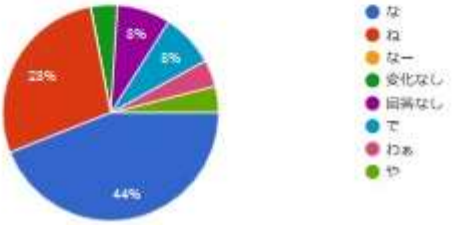
A：「ねえ、田中さんどこにいるか知らない？」B：「知らないね。」

25 responses



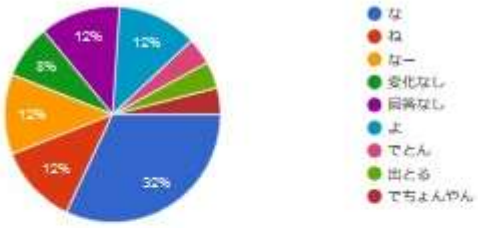
A：「今何時？」B：「ええと、３時２０分だね。」

25 responses



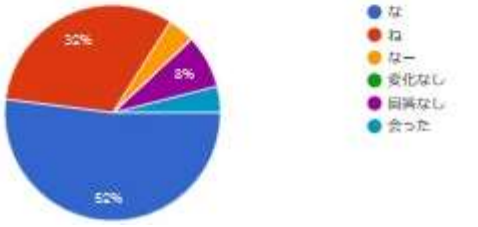
A：「名簿か何かに山本さんの連絡先が残っている？」B：「あ、出てるね。たぶんこれで連絡できると思う。」

25 responses



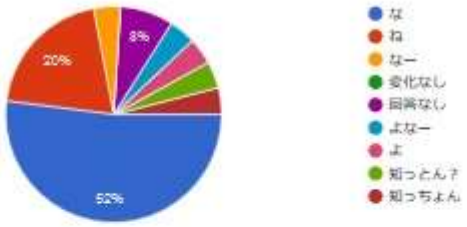
A：「そのとき、誰かに会わなかった？」B：「そうだね。」

25 responses



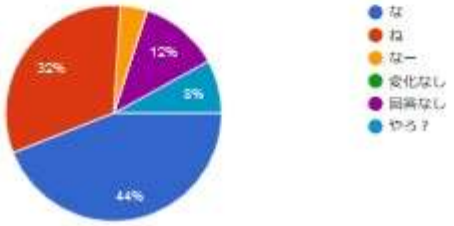
A：「佐藤さん知ってるよね。」B：「ええ、大学時代の友人だよ。彼がどうかした？」

25 responses



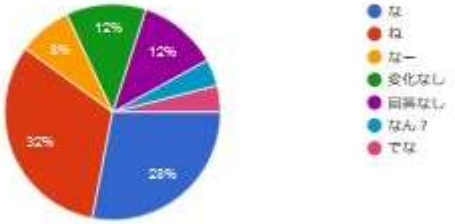
A：「君、３日前の夜７時に駅前の喫茶店で山本さんと会っていたね。」B：「そうだけど、何か問題がある？」

25 responses



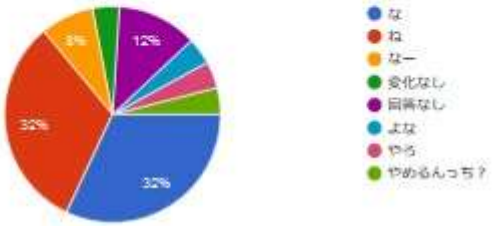
A：「佐藤さんは一人っ子だそうだね。」B：「ええ、そうだったはず。」

25 responses



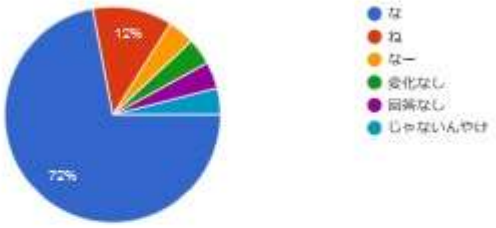
A：「B、会社、辞めるんだってね。」B：「もう耳に入りましたか。家業を継ぐことになったんです。」

25 responses



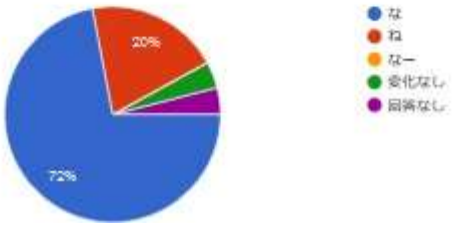
A：「鈴木は病院に行くって言って、帰ったよ。」B：「じゃあ、そんなにひどいけがじゃないんだね。」A：「ええ。一緒に行こうかと言ったら、大丈夫だと言ってたから。」

25 responses



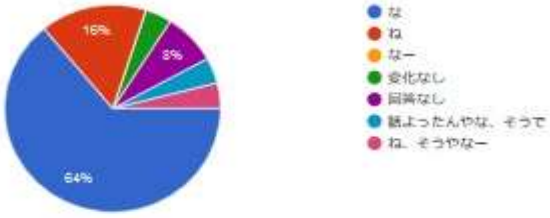
A:「ああ、そうか。この問題、そんなに難しく考える必要はないわけだね。」B:「そういうこと。」

25 responses



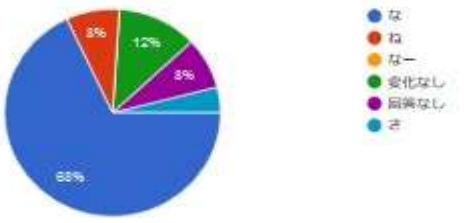
A：「あのとき、Bは佐藤さんとその話をしたんだね。」B：「そうだね。」

25 responses



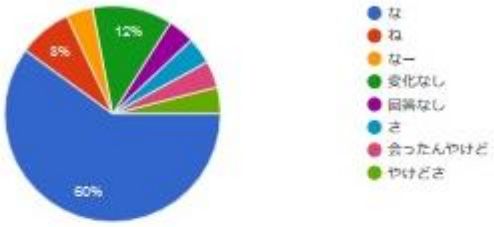
それでね、この間ね、みんなに会ったときね、00さんの話が出てね。最近00さんのことを聞かないけど、今どうしているんだろうって言ってたよ。

25 responses



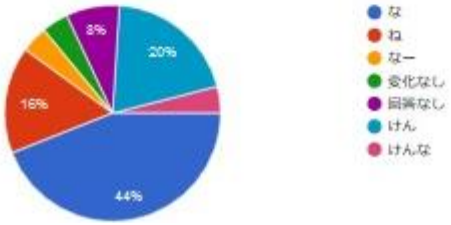
昨日ね、田中さんにばったり会ったんだけどね、どうもいつもの元気がないんだよ。

25 responses



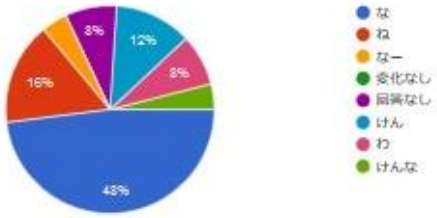
ここにご飯置いとくね。

25 responses



野菜を買っておくね。

25 responses



報　　告

III. 海外派遣留学

平成 28～30 年度大分大学海外派遣留学プログラムの実施報告

長池　一美

1. はじめに

近年、文部科学省をはじめ国は率先して日本人学生のグローバル化を推進している。海外留学を卒業条件の一つとする大学や学科も増加しつつある。本学においても派遣留学制度の拡大・充実を目的とし、様々な取り組みを行っている。本稿は全学組織である国際教育推進センターによる派遣留学に関する業務の実施報告を主な目的とし、またその成果の検証と今後の課題についても記述する。

2. 国際交流協定大学

本学が学生交流協定を結んだ大学は表 1 の通り、平成 30 年度時点で 74 大学であった。

表 1　平成 30 年度国際交流協定大学（学生交流）

アメリカ合衆国	サンフランシスコ州立大学、テキサス大学オースチン校、ノースキャロライナ大学シャーロット校、サンディエゴ州立大学、アーカンソー大学フォートスミス校、アイオワ州立大学
英国	バーススパ大学、ハートフォードシャー大学、セントラル・ランカシャー大学、マンチェスター
中華人民共和国	江漢大学、遼寧師範大学、河北師範大学、華中科技大学、深圳大学、香港大学、河北医科大学、南陽理工学院、対外経済貿易大学、中南財経政法大学、武漢大学、内蒙古民族大学、黒龍江大学、北京林業大学、香港中文大学、内蒙古大学、陝西師範大学
大韓民国	韓国交通大学校、西京大学校、嶺南大学校、ソウル女子大学校、高麗大学校、梨花女子大学校、順天大学校、培材大学校、嘉泉大学校、江南大学校、釜山大学校、江陵原州大学校、光州大学校、大邱大学校、順天郷大学校
オランダ	ティルブルグ大学、NHL 大学、HU ユトレヒト大学
ドイツ	パダボーン大学
スウェーデン	メーラダーレン大学
ノルウェー	オスロ大学
ハンガリー	カーロリ・ガシュパール・カルビン派大学、ブタペスト・メトロポリタン大学
フィンランド	TAMK 大学
イタリア	パヴィア大学
ロシア	ピロゴフ名称ロシア国立医学研究大学
ベトナム	ハノイ医科大学、ホーチミン医科薬科大学、ベトナム国立大学ハノイ校経済大学
タイ	チェンマイ大学、コンケン大学、チュラロンコン大学
台湾	東海大学、高雄医学大学、開南大学
インドネシア	バンドン工科大学、マラナタ・クリスチャン大学、アイルランガ大

	学
オーストラリア	西オーストラリア大学、ウーロンゴング大学
フランス	レンヌ第二大学、オルレアン大学、ル・マン大学
シンガポール	南洋ポリテクニック
フィリピン	サントトーマス大学、アテネオ・デ・マニラ大学
ポーランド	西ポメラニア工科大学

（計　74 大学）

本学は多様な地域や言語圏にある大学と学生交流を継続している。アジア圏のみならずヨーロッパ地域における学生交流は、同規模の他の国立大学と比較しても活発であるといえるだろう。課題としてはアフリカ地域や南米諸国、その他本学の国際化における重点地域での協定校の開拓があげられる。平成 28～30 年度はアメリカ合衆国のアイオワ州立大学、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学、ポーランドの西ポメラニア工科大学、ハンガリーのブタペスト・メトロポリタン大学、台湾の開南大学、ロシアのピロゴフ名称ロシア国立医学研究大学、韓国の順天郷大学校、インドネシアのアイルランガ大学の 8 大学と新たに協定を結び、学生交流大学は 74 大学となった。

3. 派遣地域と派遣学生数

表には平成 23 年度から 30 年度までの派遣留学生数と派遣地域の一覧である。

表 2　地域別派遣者数

	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
アメリカ合衆国	5	1	6	8	12	5	4
英国	2	4	7	1	4	1	1
中華人民共和国	4	1	1	0	3	0	1
大韓民国	7	10	4	8	8	7	7
ドイツ	4	5	5	5	5	5	4
オランダ	5	4	7	5	6	4	5
ハンガリー	0	0	1	0	3	2	3
タイ	0	0	0	2	0	0	0
シンガポール	1	4	0	2	2	1	2
オーストラリア	0	0	0	0	0	0	0
フランス	2	0	2	1	0	1	1
台湾	0	1	1	3	1	5	4
インドネシア	0	1	0	0	1	0	0
ベトナム	0	1	2	1	1	0	1
イタリア	0	0	0	1	0	0	0
フィンランド	0	0	0	1	1	1	2
スウェーデン	0	0	0	0	1	2	2
計	30	32	36	38	49	34	37

平成 28 年度の派遣留学総数は過去最大の 49 名となった。派遣学生数の増加の最大の要因はアメリカへの派遣が 12 名あったことである。25 年度はアメリカへの派遣が 1 名とここ数年では最低の数字となったが、26 年度は 6 名、27 年度は 8 名、28 年度は 12 名を派遣することができた。しかしながら、29 年度と 30 年度は協定大学が課する語学能

力の要件が厳しくなったために、アメリカへの派遣数は 5 名／4 名と減少した。アメリカへの留学を希望する学生は依然として多いため、アメリカでの協定大学拡大に力を入れている。その結果として、平成 29 年度は新たにアイオワ州立大学と協定を締結することができ、その他の大学とも協定の締結を進めている。本学の学生のニーズ（語学力を含める）にあった協定校との持続的な関係を築くことが必要であるため、協定校の訪問・調査等を慎重に行いながら、協定が締結できるように全力を尽くしている。また、ハンガリーへの派遣学生数の増加（H28 3 名／H29 2 名／H30 3 名）は特記すべき点である。本学のハンガリーの協定校はカーロリ・ガシュパール・カルビン派大学だけであったが、新たにブタペスト・メトロポリタン大学との協定を締結した。これによって、さらにハンガリーへの派遣留学生数の増加を期待したい。また、新たにフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学と協定を締結した。フィリピンは西洋と東洋の文化的なコンタクトポイントであり、準英語圏にあたるため、本学の学生にぜひ多文化・多言語の現状を学んでもらいたい。英国への派遣留学数の減少（H26 7 名／H27 1 名／H28 4 名／H29 1 名／H30 1 名）は、協定大学が求める IELTS の要件を満たさない学生が多かったためであり、今後 IELTS 受験への対応を検討する必要がある。韓国については、25 年度の派遣数 10 名から 26 年度は 4 名減少したが、27 年度は 8 名と増加し、28 年度 8 名、29 年度 7 名、30 年度 7 名と十分な派遣数であると言える。中国への派遣数は 28 年度に 3 名であったが、29 年度は再度 0 名、30 年度 1 名であった。説明会や学生への個別面談を通して、中国留学への促進を図る必要がある。しかしながら、台湾への派遣が平成 29 年度は 5 名と過去最大数であったことは評価できる。本学の国際化の重点地域である東南アジアへの派遣数（シンガポール 3 名＜H28 2 名／H29 1 名／H30 2 名＞、インドネシア 1 名＜H28 1 名＞、ベトナム 1 名＜H28 1 名／H30 1 名）が伸びたことは、本学の国際交流指針に則った活動の成果であると思われる。なお、欧州に関しても初めてスウェーデンへ学生を派遣することができ、より多くの国・地域へ派遣留学が拡大してきていると言える。平成 28 年度、平成 29 年度、平成 30 年度は JASSO の海外留学支援制度（協定派遣）より「大分大学交換留学（派遣）」が採択を受け、最大 8 名の学生に奨学金を授与することができた。またその他に、大学全体の派遣留学支援（学長裁量経費により一定数の学生が奨学金を授与されている）、学部独自の海外奨学金制度（本学の経済学部では「久保奨学金」により海外へ留学する学生への経済的な支援を行っている）によって大分大学派遣留学するほとんどの学生が一定の経済的支援を受けられる体制にあることは特筆するべき点である。

また例年通り本学では協定校（主にアジア圏）との間で、春・夏の休暇時に実施される語学・文化研修に本学の学生が授業料不徴収で参加できるプログラムを提供している。また 28 年度からは新たにフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学の超短期語学留学プログラム（H28 6 名/H29 11 名／H30 9 名）も加わり、全体としての 参加者数は平成 28 年度が 43 名、平成 29 年度が 59 名、平成 30 年度が 42 名と、平成 27 年度の 26 名と比較しても倍近くの増加の成果を上げている（表 3 参照）。平成 27 年度は韓国のプログラム参加者が 4 名であったことが検討事項とされたが、平成 29 年には 8 名と倍増している。しかしながら、平成 30 年度は再度同様の問題に直面した。中国語圏のプログラムへの参加人数も年度によって参加人数が減少にある現状についても、今後の検討が必要になると思われる。中韓、英国の超短期語学留学プログラムが 28，29 年度に続けて JASSO の海外留学支援制度（超短期）に採択され、また新たに平成 30 年度からフィリピン研修のプログラムも JASSO の採択を受けたことはプログラムが十分な成果を挙げていることを証明している。しかしながら、採択人数に比べて、奨学金受給の要件を満たしている参加学生が少ないことに関しては、今後、説明会や個人面談等を増やし、学

生の参加を後押しすることが必要になると思われる。本学は所属学部によって派遣留学へ一学期間以上参加することがカリキュラム上困難な学生が多い。それらの学生のためにも、卒業カリキュラムへ影響を及ぼさない超短期留学プログラムの充実を展開する必要がある。

表 3　超短期派遣プログラム参加者数

	超短期派遣人数
平 20 年度	38
平 21 年度	12
平 22 年度	15
平 23 年度	23
平 24 年度	15
平 25 年度	21
平 26 年度	25
平 27 年度	26
平 28 年度	43
平 29 年度	59
平 30 年度	42

（注：協定大学が実施している授業料徴収のプログラムに参加している学生数も含む）

	H28 年度超短期派遣人数	H29 年度超短期派遣人数	H30 年度超短期派遣人数
セントラル・ランカシャー大学（英国）	7	18	4
ライプツィヒ大学（ドイツ）	6	4	3
江漢大学（中国）	3	2	6
開南大学（台湾）	2	1	0
東海大学（台湾）	5	3	0
ソウル女子大学（韓国）	3	8	2
培材大学（韓国）	0	0	1
アテネオ・デ・マニラ大学（フィリピン）	6	11	9
ミニトビタテ	11（カンボジア）	12（ミャンマー）	17（ベトナム）
計	43	59	42

4.　派遣留学説明会

本センターでは派遣留学説明会を年に複数回行っている。25 年度からは新入生の間で早期から本学の留学制度に関心がもてるよう各学部の新入生ガイダンスにて 10 分程度に要旨をまとめた説明会を行っており、平成 28 年度、29 年度、30 年度も同様の説明会を行った。

また派遣留学制度に関する概要や、募集方法、選考基準等についての情報を提供する全体説明会を 28 年度、29 年度、30 年度は 7 月と 10 月に行った。前年度まではヨーロッパ圏とドイツを分けて説明会を行っていたが、26 年度から、ヨーロッパ圏にドイツを組み入れ、派遣希望学生の増加が顕著である英国を独立させ、説明会を行った。英国独自の説明会を実施した背景には、英国留学における査証取得の要件がたびたび変更されるため、学生に混乱がないようにという配慮も挙げられる。

また例年通り全体説明会のみならず、地域や言語圏別で協定校の詳細な情報を提供するセッションも行った。これらのセッションは、留学体験者による実体験を基にしたプレゼンテーションを交えて行われた。地域・言語圏別説明会の参加者数は以下の通りであった。

表 4　派遣留学説明会参加者数

日時	説明会	参加人数
H28 年 7 月 21 日（水）	全体説明会	21
H28 年 10 月 6 日（木）	全体説明会	20
H28 年 10 月 20 日（木）	全体説明会	37
H28 年 10 月 21 日（金）	ヨーロッパ圏（英国を除く）	34
H28 年 10 月 24 日（月）	韓国	17
H28 年 10 月 25 日（火）	中国，東南アジア	36
H28 年 10 月 26 日（水）	英国	27
H28 年 10 月 27 日（木）	アメリカ，その他	43

※医学部学生からの個別問合せ　　2 名

日時	説明会	参加人数
H29 年 7 月 20 日（水）	全体説明会	4
H29 年 10 月 5 日（木）	全体説明会	54
H29 年 10 月 19 日（木）	全体説明会	13
H29 年 10 月 20 日（金）	ヨーロッパ圏（英国を除く）	27
H29 年 10 月 23 日（月）	韓国	13
H29 年 10 月 24 日（火）	中国，東南アジア	23
H29 年 10 月 25 日（水）	英国	16
H29 年 10 月 26 日（木）	アメリカ，その他	34

※医学部学生からの個別問合せ　　0 名

日時	説明会	参加人数
H30 年 7 月 18 日（水）	全体説明会	16
H30 年 10 月 5 日（金）	全体説明会	37
H30 年 10 月 18 日（木）	全体説明会	11
H30 年 10 月 19 日（金）	ヨーロッパ圏（英国を除く）	13
H30 年 10 月 22 日（月）	韓国	30
H30 年 10 月 23 日（火）	中国，東南アジア	4
H30 年 10 月 24 日（水）	英国	12
H30 年 10 月 25 日（木）	アメリカ，その他	16

※医学部学生からの個別問合せ　　0 名

5. 危機管理研修等

本学の派遣留学制度を利用し留学している学生の多くが現地で充実した生活を送ることが出来ている。留学を実りあるものにするために必要とされるのは、明確な学習計画のみならず、精神面そして生活環境面に関する十分な準備と対策である。本センターは危機管理を中心とした留学の心得について学生に指導している。異文化理解能力の重要さを指導し、心身のトラブルを事前に予防する知識などを講演会やセミナーの開催や配布資料を通じて提供している 。平成 28 年度、29 年度、30 年度には JI 傷害火災保険から外部講師をお招きし、「派遣留学準備の危機管理セミナーと保険の加入について」をタイトルに、年 2 回（前期＆後期）講演会を実施していただいた。また本学の医学部部門教授である西園晃理事（研究・社会連携・国際担当）を講師とし「海外留学・語学研修に関する危機管理講演会」を実施した。講演会では主に感染症などの危険性などを中心に身体的なトラ

ブルへの予防や対応について学んだ。

また本学の派遣留学制度を利用し留学する学生には傷害保険への加入が義務づけられている。現地で予期せぬ事態が起こった場合のさまざまな対処法についても指導している。近年海外で邦人が巻き込まれる事故やトラブルが増加していることを考慮し、平成 28 年度からは全派遣留学生に本学が指定した海外保険への加入を必須とした。派遣留学生全員が同じ海外保険に加入することにより、保険会社との連携を取りながら、万が一の事故やトラブルに迅速に対応することが可能になる。

6. インターネットからの情報発信

本センターでは学生の留学体験をインターネットを通して学内外へ配信している。学生らによる現地からのブログエントリーで構成されている『大分から世界へ : 大分大学派遣留学生奮闘記』(http://oitauniversity.seesaa.net/) は多くのアクセス数を誇っている。グーグルサイトで「大分」と「留学」のキーワードで検索すると同ブログサイトがトップリストに表示されることからもその人気度が伺われる。同ブログは本センター教員によりメンテナンスされているが、基本的には学生が自由に現地での学習並びに生活環境について画像等を交えながらレポートする型となっている。定期的なレポートのアップロードを義務化していることで、学生と本センター教員との間のコミュニケーション・ツールとしても機能している。

またこのブログサイトは大学において留学を目標とする高校生らの間でも多くアクセスされているようである。事実、派遣留学制度学内選考の面接において大分大学への進学を決心した一つの理由にこのブログで得た情報を挙げる学生も多い。今後も学生や学外のオーディエンスにアクセスし易い情報のネット配信の充実を図る必要があるだろう。

7. TOEFL、その他の語学要件

本学では TOEFL-ITP（団体版）試験を年 2 回実施してきた。平成 29 年度からは試験実施数を 2 回から 3 回に増加した。これは、少しでも多くの学生が協定校が課する語学要件をクリアできるような機会を提供することを目的としている。本学においては派遣留学制度へ応募した学生の英語力を英語面接並びに同試験のスコアをもとに判断している。ここ数年は多くの学生が同試験を受験するようになってきたものの、スコアの平均は伸び悩んでいる実情もある。本センターでは留学を目標とする学生を対象に英語関連科目（国際理解教育科目 :「留学英語 I」「留学英語 II」「アカデミック・イングリッシュ I（リーディング&ライティング)」「アカデミック・イングリッシュ II（スピーキング)」等）を提供しているが、今後はそれに代わる、あるいは追加するかたちでの語学力向上のための抜本的なカリキュラム変更が必要となるだろう。

また、本プログラムでは 26 年度から派遣留学生に留学前と留学後の語学検定等の受験を必須とすることにした。英語圏、また準英語圏の学生には留学前と留学後の TOEFL-ITP 受験を必須とし、その他の地域の派遣留学生には現地で学ぶ言語（例　中国語、韓国語、ドイツ語、イタリア語）の受験を必須とした。これは、プログラム参加によって学生がどのような成果を上げているのか測定するためである。

8. 今後の課題と展望

本稿で見てきた通り、本学における派遣留学制度を利用し実際に留学する学生数は総じて増加傾向にある。同時に、学生の間での語学力の向上が頭打ちとなっている状況も懸念される。語学力が不十分でも留学できる環境を早急に整備することが本当に

学生のためになるだろうか。「おんぶに抱っこ」式の留学を展開しても、本学が目指すところのグローバル人材の育成にはつながらないであろう。学生がより主体性を発揮し、自発的にテイラーメイドする留学が可能となるよう、今後も派遣留学制度の展開を図っていきたい。また、前述したように 28 年度、29 年度、30 年度は JASSO の海外留学支援制度（協定派遣）より「大分大学交換留学（派遣）」が採択を受け、最大 8 名の学生に奨学金を授与することができた。短期語学留学プログラムの JASSO 採択についても前述した通りである。奨学金の採択を受けることにより留学を大学生活の計画に取り入れる学生数が増加することが見込まれる。派遣留学生は留学前に全員が『派遣留学学習計画書』へ「専門分野に関する学習計画・達成目標」、「語学に関する学習計画・達成目標」、「国際交流、地域交流等に関する計画・達成目標」を設定することになっているが、プログラムをより充実させ、学生が事前に設定した目標を達成できるような体制を整えて行きたい。

2018 年度フィリピン短期英語研修プログラムの実施状況と課題・展望

南里敬三

1. プログラム実施概要

2017 年度に始まったフィリピン短期英語研修プログラム（11 名参加）は、2018 年度は 9 名の参加（うち 8 名が JASSO の奨学金受給者）となった。今回の 9 名の参加者は、前年同様、準英語圏フィリピンにあるアテネオ・デ・マニラ大学の語学習得センター（以下「語学センター」）が開講する英語集中プログラムに参加した。実施期間は 2019 年 18 日から同年 3 月 21 日までの 32 日間。

アテネオ･デ･マニラ大学はすべての授業が英語で開講されているフィリピンのトップ大学で、英語教育には定評があり、アジアを中心に多くの留学生が英語集中プログラムに参加している。「読む」「聞く」「話す」「書く」の 4 技能をバランスよく身に付けさせる授業の提供で、参加学生の満足度が高いことでも知られている。参加学生はレベル分けテストの結果によって自分のレベルにあったクラスに振り分けられ、32 日間（120 時間以上の授業）の英語集中プログラムを受講した。プログラム最終日には英語力を判定する試験（以下「最終テスト」）が行われ、実際にどれほど英語力が伸びたか詳細なレポートが作成された。

2. 留学成果

参加者 9 名のコース初日に行われたプレースメントテストとコース修了時に行われたほぼ同内容のテストと比較すると、Reading & Writing では得票点が平均で 31.3%点伸びており、Oral も同様に 25.4%も伸びていた。この数値が実際に何を意味するかを、帰国後の聞き取り調査で確認したところ、次のような回答が返って来た。

① 本学留学中の留学生とコミュニケーションが英語で取れるようになった。

② 英語でスピーチができるようになった。



③ 食事をなどリラックスした空間で英語が使えるようになり、時にジョークが言えるようになった。
④ フィリピン現地の人と英語で話せるようになった。
⑤ 英語で話すことに抵抗がなくなった。

このプログラム参加者に本プログラムを 5 点満点で評価してもらったところ一人（4 点）を除いて全員が 5 点満点の評価であった。参加者が最も感銘を受けていたのは授業の質の高さであった。特にオーラルパフォーマンスに重点を置き、話せる英語、ディスカッションできる英語を習ったことで、ほぼ全員が英語で話す自信が付いたと言える。

また、参加者全員が語学研修と合わせて現地の人と交流を行っていたことも目を引いた。アテネオ・デ・マニラ大学の学生と一緒に食事をしたり、日本文化研究サークルのメンバーとの交流会に参加したりして、勉学の合間も充実した時間を過ごしていたようだ。

そして、交換留学へと進んだ本プログラム参加者がいることも特筆すべきことだ。2018 年度のプログラム参加所 1 名が現在ヨーロッパに留学中であり、2017 年及び 2018 年度参加者それぞれ 1 名が 2020 年にやはりヨーロッパ留学に挑戦する予定である。

3. 課題と展望

フィリピンでの英語研修は、授業料並びに生活費がヨーロッパの語学研修と比べるとかなり安く、本学の学生にとってそれほど負担なく参加できる海外留学であると考えられる。また、本学での派遣留学希望者の大半は欧米圏への留学を希望している。そこで必要なのが英語力で、それが本学の派遣留学のネックともなっている。今回のフィリピン短期英語研修プログラムは 3 回目だが、帰国した参加者が一様に口にするのが、英語で話すことが怖くなくなった、である。数はまだ少ないが、フィリピンでの英語研修が本学の学生の英語力の底上げに貢献していることは間違いない。半年または一年の交換留学希望者が毎年 40 名から 50 名という数であることを考えると、フィリピン短期語学研修プログラムの参加者は少ない気がする。

デフレ不況が長引き、学生が十分な経済的支援を受けられなくなってきている状況にあって、もしかしたら、正規の交換留学ではなく、5 週間程度の語学留学をメインに据えたカリキュラムを視野に入れて派遣留学を考える時なのかもしれない。例えば、2019 年時点でロンドンで一か月語学学校に通うとすると渡航費、授業料、その他諸々経費で 50 万円から 100 万円必要になる。デフレが更に深刻化すれば、学生の負担はさらに増える。本プログラムのような短期語学研修を 4 年に渡って参加させるというスパンの長い留学プログラムという在り方も検討すべきではないだろうか。

報　　告

IV. 留学生支援

修学・生活支援関連報告

金森　由美

1　生活関連指導・説明会･行事等

実施された主な生活関連指導・説明会・行事等は表１の通りである。特に対象者を指定していないものについては、全外国人留学生が対象である。

表１　生活関連指導・説明会･行事等

月	指導・説明会・行事等
4	・前期短期留学生対象生活オリエンテーション ・前期正規生および研究生対象生活オリエンテーション ・前期国際交流会館入居者対象オリエンテーション ・新留学生および渡日時支援チューター研修旅行
5	・国際交流会館消防訓練
6	・後期国際交流会館入居者選考
7	・前期帰国予定留学生対象ガイダンス ・後期渡日時支援チューター選考 ・大分市主催「ななせの火群まつり」への留学生参加の促進、引率等 ・大分七夕まつり「おおいた市民おどりの祭典」への留学生参加の促進
9	・後期渡日時支援チューターオリエンテーション
10	・後期短期留学生および日研生対象生活オリエンテーション ・後期正規生および研究生対象生活オリエンテーション ・後期医学部正規生および研究生対象生活オリエンテーション ・後期国際交流会館入居者対象オリエンテーション ・新留学生および渡日時支援チューター研修旅行
11	・国際交流会館消防訓練
1	・後期帰国予定留学生対象ガイダンス ・来年度前期国際交流会館入居者選考 ・来年度前期渡日時支援チューター選考
2	・来年度国際交流会館の会館チューター選考・決定
3	・新渡日時支援チューターオリエンテーション ・新会館チューターオリエンテーション

上記指導、説明会及び行事等は総て国際教育推進センター（GAIA）及び国際交流課と各行事の関係団体等の協力・連携の下に実施された。

２　修学・生活相談／指導

本学で受け入れている外国人留学生及び本学から交流協定校への短期派遣留学生の修学・生活上の相談・指導は、各留学生の指導教員及びGAIA専任教員が主な担当者である。また、生活上の相談については国際交流課職員も対応にあたっている。正規生・研究生の指導教員は各学部所属教員であるが、外国人短期交換留学生の大半及び日本語・日本事情研修生（日研生）についてはGAIA専任教員全員が指導教員として相談・指導を担当している。留学生の相談は、主に人間関係、学習関係、アルバイトを含む生活関係等、個人的なものが殆どである。

全留学生対象の修学・生活相談／指導は、GAIA 教員全員が各々週１時間乃至２時間半の日程に従い、対応した。留学生の希望日時が相談日程に合わなかった場合は、日程と異なる日時の予約で対応した。

挾間キャンパスにおける医学部外国人留学生対象の修学・生活相談時間は、毎週月曜日の日本語補講後の昼休みに設定されている。これは当日日本語補講を担当する教員の兼務である。日本語補講はGAIAの全専任教員５名が交替で担当し、修学・生活相談も同様である。今年度も従来通りの態勢をとっていたが、実際の相談は殆どなかった。医学部の外国人留学生はほぼ全員が20代後半以上で、大学院生か研究生である。母国では各々病院等に勤務している社会人も多く、個人的な問題や悩み等については各自対処法を既に心得ていると考えられる。

短期交換留学生及び派遣留学関係の相談には各派遣地域担当の GAIA 教員が対応している。また、緊急の際は旦野原・挾間両キャンパスとも適宜対応している。今年度も従来通りの態勢で対応したが、特に問題はなかった。

外国人短期交換留学生及び日研生は、毎月最低１回は各々の指導教員と面談し、学習面や生活面での指導を受けることになっており、今年度も従来通りの態勢で対応した。

渡日時支援は留学生が大分に来る前から始まる。まずメールを通して大学の様子や大分の町を紹介したり留学生からの質問に答えたりする。これによって新規渡日の留学生は留学生活を始めるにあたっての不安をいくらか解消できているようだ。そして新学期が始まる頃、チューターは留学生の大分到着の日時を確認して大分駅まで迎えに行き、宿舎に案内する。無事宿舎に入り生活に必要な準備を整え市役所での手続き等を終えたら、大学で行われるガイダンスや指導教員による履修指導に付き添ったりして履修登録の手伝いをする。最後に新学期開始後第３週目あたりの土曜日にチューターと留学生との親睦を深める目的で大分県内の日帰り研修旅行を「大分大学外国人留学生友の会」の支援を受けて実施している。留学生にとっては大分の魅力に直に触れる良い機会でもある。

学習支援は「日本語学習支援チューター」として主に日本語の支援を行っているが、専門教育についても要望があれば実施する。ただし、専門に関する支援は各学部が行う。

３　まとめ

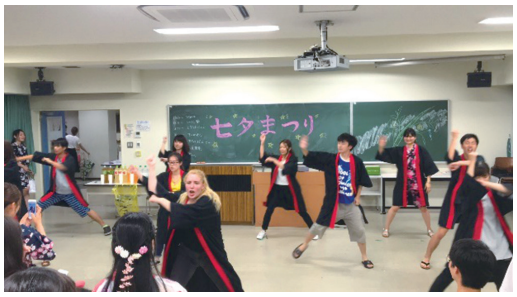
学内外の方々の理解・協力・支援の下、GAIA は上記のような本学留学生の留学生活の充実の為、様々な修学・生活支援関連の業務を遂行できた。今後も国際交流課を始めとする学内諸部局・部署及び地域社会の理解と協力を得、また連携することにより、本学留学生の留学生活がより充実したものとなるよう、更なる修学・生活支援の方策の検討を行っていく。

国際交流ボランティア会の活動

金森由美

国際交流ボランティア会という名称で国際交流に関心のある学生のメーリングリストを作成し、様々な情報をメールで流している。中でも特に積極的に留学生との関わりを求める学生たちによって構成されている国際交流ボランティア会執行部 Global Crew（通称ＧＣ）は例年通り、前期と後期にそれぞれ歓迎会と送別会を企画・運営した。その他のイベントとしては、前期にバーベキューパーティ、七夕祭り、後期に大学祭の一環として行われる大学開放イベントへの参加、さらに 12 月には地域住民と協力して国際文化祭を実施した。

今回の七夕祭りは大雨のため屋内での実施を余儀なくされたが、留学生によるソーラン節などが披露され、活気あふれるものとなった。





また 2018 年度も「大分大学活き[2]プロジェクト・分大 Switch On」（学生が実施するプロジェクトに対して大学が審査し活動資金をサポートするもの）に応募し採択された。プロジェクト名は「**MT プロジェクト in2018 ～六郷満山を満喫しよう～**」で、企画の概要および趣旨・目的・特色を以下に紹介する。

１．企画の概要

日本人学生と留学生が一緒に国東半島六郷満山をトレッキングするという企画を考えている。事前に国東半島に関する文化や歴史を学んだ上で、実際に自分の足で歩き、国東の豊かな自然を楽しみつつ、六郷満山の特徴を実感し、それを母国の後輩たちをはじめ、多くの人に伝えてもらう。トレッキングは国東ロングトレイルのコースを考えている。参加者は留学生と Global Crew のメンバー、そしてサポートスタッフとして普段からトレッキングを行っているワンダーフォーゲル部員を予定している。

２．企画の趣旨・目的・特色

大分には豊かな自然と独特の文化や歴史があり、それを留学生に伝え、さらに多くの人々にも知ってほしいと思った。また、留学生たちから大分の山に登ってみたいと言われたことがある。そこで私たち Global Crew のメンバーは国東半島六郷満山でのトレッキングを企画・運営することにした。今回の企画の目的は大きく３つある。

１つ目は、私が代表を務めるワンダーフォーゲル部と協力し、留学生に登山やトレッキングを行うことのできる機会を提供することだ。２つ目に研修旅行で国東や歴史資料館を訪れたことのある留学生たちもいるようだが、実体験を通して彼らに六郷満山に関する知識を深めてもらうことだ。最後に、今年は六郷満山開山 1300 年であり、その記念行事として峰入り行の一般参加なども行われている。その節目となる年に大分に住む学生の一人として、国東の歴史や文化に関する情報発信に貢献することだ。

以上のような大きなイベントの他にも、韓国語に興味のある学生たちが「ハンサモ」という韓国人留学生を中心とした集まりを毎週開いており、ここには、日本人学生だけではなく、中国人留学生なども参加する。今年は中国語の勉強をしたいという日本人学生からの要望に応え、中国語の学習会も開くことになった。現在、その名称を募集中である。

さらに、国際交流ボランティア会の企画ではないが、犬飼町の「わかあゆ国際交流会」からの提案で香港中文大学の学生たちとの交流も実施した。昨年に続き２回目ということで、前回参加した学生もおり、自発的に歌やダンスを取り入れて、楽しい時間を過ごせたようだ。





研　　究

Internationalizing Teacher Education: Sustainable Curriculum Reform

Kaori I. Burkart
Global Education and Intercultural Advancement Center
Oita University, Japan

Abstract

In a globalizing society, rapidly diversifying educational environments highlight the urgency of internationalizing curriculum reform that reflects changing student needs and societal expectations. The purpose of this article is to call for curriculum internationalization in teacher education to more effectively foster positive and sustainable learning environments. Internationalization efforts are discussed at multiple organizational levels and study abroad myths related to teacher education programs are examined.

Keywords: internationalization, teacher education, higher education, campus culture, study abroad.

Internationalizing Teacher Education: Sustainable Curriculum Reform

Globalization is considered a product of the increased traffic and free movement of people, information, and markets beyond national borders and physical distance. It has significantly influenced lives and relationships around the world—a "flat world" (Agnello, White, & Fryer, 2006, p. 318). Diverse cultures influence one another at the individual level, making relationships more interconnected and complex. The relevance of globalization touches all aspects of people's lives (Merryfield, 2000). Within school environments, student and community populations have become significantly more diverse. Educating and preparing students for a global society is now extremely challenging (Apple, 2011).

In June 2010, at the Association of International Educators (NAFSA) conference, Ken Zeichner (2010) discussed the importance of internationalizing teacher education programs in the U.S. In a keynote speech, he highlighted the growing focus on campus internationalization in U.S. higher education and raised concerns about the slow pace of internationalization in teacher education programs specifically. Individual field experts and nonprofit organizations (e.g., the Longview Foundation, NAFSA, the American Council on Education, and the Asia Society) have repeatedly called for action on issues related to internationalization of teacher education programs (Zhao, 2010). Practical implementation of teacher education program internationalization is rarely seen, and what efforts exist have not resulted in American postsecondary education environments achieving effective internationalization (Svensson & Wihlborg, 2010). American students' global awareness and skill development are extremely important in the face of a rapidly globalizing workforce, with teachers playing a crucial role in building necessary foundations for the future (Darling-Hammond & Richardson, 2009). The purpose of this review is to call attention to curriculum internationalization in the field of teacher education, which requires stronger teacher

preparation to foster positive learning environments. Internationalization efforts at multiple organizational levels are discussed, and study abroad myths related to teacher education programs are examined.

World Level

In increasingly diversifying educational environments, the importance of teacher roles has intensified because of internationalization (Acedo, 2012). International agencies such as UNESCO, UNICEF, and the Organization for Economic Cooperation and Development (OECD) have established guidelines and standards related to teaching and learning (Paine & Zeichner, 2012). For example, the International Labor Organization and UNESCO (1966) identified teaching professionals as purveyors of human rights. In this sense teachers' work and responsibilities are "strongly global or cosmopolitan in nature in relation to the rights of children and as part of that, the articulation of inclusive education" (Harper & Dunkerly, 2009, p. 61). In other words, teachers need a global mindset rather than one confined to only a local school district.

To promote discussion of the recruitment and development of world-class teachers, the first International Summit on the Teaching Profession was held in New York in 2011. One of the first of its kind, it was organized by several education-focused organizations including the U.S. Department of Education and the OECD (USDE, 2011a). Twenty-three countries (Belgium, Canada, Denmark, Estonia, Finland, Germany, Hong Kong, Hungary, Iceland, Indonesia, Japan, the Netherlands, New Zealand, Norway, China, Poland, the South Korea, Singapore, Slovenia, Sweden, Switzerland, the U.K., and the U.S.) participated in the summit. The following year, the summit was organized again to further explore topics with an emphasis on high-quality teaching as an essential driver in the twenty-first century, and representatives from the same twenty-three countries met to discuss potential improvements in teacher education. The Netherlands hosted the summit in 2013 followed by New Zealand, Canada, and Berlin. The 2017 summit will be held in the U.K. with the theme of developing a robust teaching profession in complex modern learning environments. Dialogues for internationalizing teaching professions have now just begun their first steps.

U.S. National Level

At the national level, the development of robust policies regarding teacher preparation for the global age is of particular concern. Arne Duncan, U.S. Secretary of Education, has made a clear statement in *Our Future, Our Teachers* (USDE, 2011b) that teachers are one of the most important factors influencing learning and achievement and that making improvements and reforms in teacher education is essential to providing every student with an excellent education and thus guiding the future of the country. Duncan (USDE, 2011b) also points out that nearly 1.6 million teachers will retire within the next 10 years, and that such a large number of replacements will be both "an enormous challenge and an extraordinary opportunity" (p. 1). His remarks highlight the fact that insufficient training and preparation is a major challenge facing the teaching workforce. Some of this is rooted in the homogeneous demographics of teaching professionals when compared to increasingly diverse classroom realities.

Although there is a growing focus on internationalization in the U.S. postsecondary higher education, concerns persist regarding slow development and impractical implementation (Zeichner, 2010). The International and Foreign Language Education (IFLE) office within the USDE Office of Postsecondary Education (2013) is responsible for promoting foreign language and international education. It oversees several international education programs under Title VI of the Higher

Education Act of 1965, such as American Overseas Research Centers, International Research and Studies, and Undergraduate International Studies and Foreign Language Programs to name a few.

In fiscal year 2011 the IFLE initiated special focus programs supporting multilateral collaborations at the postsecondary level. The specific programs are as follows: the U.S. – Brazil Higher Education Consortia Program; the European Union – U.S. Atlantis Program; the Program for North American Mobility in Higher education; and the U.S. – Russia Program: Improving Research and Educational Activities in Higher Education. These programs aim to promote multi-institutional collaboration; student exchange, faculty cooperation and exchange; sharing of common curricula; mutual recognition of credits, acquisition of host country language; and apprenticeship and other work activities. The IFLE also administers the U.S. Fulbright program to promote intercultural exchange. None of these programs has specific emphasis on teacher or preservice teacher populations or relates to policies on internationalizing teacher education. Development of robust national policies regarding teacher preparation for the global age remains a challenge.

Intra-State Level

Even without robust policies for U.S. higher education, campus internationalization is expected to move forward at individual universities and colleges. Since teacher education programs often work closely with local communities, priorities within those programs tend to be driven by localized issues and thus lack global perspectives and approaches (Cushner, 2012a). In addition, pressure due to accountability and standardization requirements has pushed preservice teachers toward knowledge-based training, which is typically systematic and often superficial (Zeichner, 2010) with little to no emphasis on working in multicultural environments. Individual teacher education programs therefore have a weak framework upon which to provide adequate preparation, training, and education for preservice teachers in multicultural and global contexts. Formal academic coursework in multicultural and global contexts is often only found outside of teacher education programs in the form of general degree requirements. Without a pragmatic approach, such courses are often not only superficial and idealistic but also lack realistic and specific standards (Zeichner, 2010).

The State University System of Florida (SUSF) Board of Governors (2005), for example, proposed a strategic plan, adopted in June 2005 and effective until 2013. The proposal did not have a strong emphasis on campus internationalization but instead left related issues to individual institutions. Among the ten public universities in the SUSF, a majority mention at least one of the terms *diversity*, *international*, or *global* in their mission statements, but only two institutions actually provide either a detailed section documenting global competence in strategic planning (University of Florida, n.d.) or mention an international focus in their mission statement (University of Central Florida, n.d.). It appears that individual institutions have significantly different attitudes towards campus internationalization.

Although all Florida higher education institutions require some cross-cultural, multicultural, and global learning within their general education curricula, detailed course selections and requirement hours are at the discretion of individual institutions (Florida Department of Education, 2013). The majority require three to six semester-hours of these types of courses within the first few semesters. Some institutions have specific courses counting explicitly toward international perspectives as distinct from multiculturalism and diversity-related courses (University of Florida, n.d.; Florida Atlantic University, n.d.; Florida International University, n.d.). The others have no such distinctions (Florida State University, n.d.; University

of Central Florida, n.d.; University of South Florida, n.d.; Florida Agricultural and Mechanical University, n.d.; Florida Gulf Coast University, n.d.; University of North Florida, n.d.; University of West Florida, n.d.). Thus, from the state to the local level, approaches within higher education appear to vary significantly depending on unique institutional missions and culture, politics, and local demand (Coryell, Durodoye, Wright, Pate, & Nguyen, 2012).

Institutional culture in postsecondary institutions is often seen as a driver of variation in the process and implementation of campus internationalization, which often influences governance and determines power structures and responsibilities in academic and non-academic units (Agnew, 2012). Sporn (1996) argues that institutions with strong cultures are more likely to be successful in adapting to external environmental changes compared to those with weaker cultures. Universities with more externally oriented cultures are also more capable of adapting to environmental changes (e.g., campus internationalization) than those with internally oriented ones (Bartell, 2003).

Individual Higher Education Institutional Level

Even within individual institutions, attitudes toward campus internationalization vary significantly. Institutional leadership can have a strong effect on campus culture (Sporn, 1996). Therefore, involvement of senior administrators (e.g., presidents, provosts, deans) in campus internationalization can become an important driver when present but a significant obstacle if absent. This has important implications for campus internationalization (Childress, 2009) as these elements affect individual institutions' ability and mobility related to campus internationalization (Deardorff, Pyasarchik, & Yun, 2009).

Financial constraints or lack of budget support, for example, can create challenges and obstacles for campus internationalization initiatives. Availability and disparity of funding resources across academic disciplines and institutional units plays a significant role in implementation of new campus internationalization policies (Coryell et al., 2012). This type of discrepancy appears more often in the social sciences, education, humanities, and public administration than in physical sciences, technology, and fields that employ mathematics and universal languages (Bartell, 2003). A longitudinal higher education budget comparison by Newfield (2009) found that fields within natural science, engineering, and technology generated nearly 50% more funding than humanities, arts, and social science, which highlights the effects of financial constraints. The unique demands of localized educational policy tend to cause teacher education to be particularly disconnected and often financially challenged (Childress, 2009). In general, the fewer the resources available, the lower the degree of internationalization level achieved. Also, the greater the focus on local matters like teacher education, the more difficult internationalization implementation becomes. This typically result in an apathetic approach to international activities and weak intensities of implementation, motives, and approaches for internationalization (Bennett & Kane, 2011).

Although campus internationalization is a challenge, postsecondary institutions have a responsibility to examine and improve student acquisition of global competence. Campus internationalization is a growing trend in higher education; practical implementations such as "policy frameworks supporting international research, inter-institutional agreements, curricular reform, student and faculty mobility, and internationalization-at-home" are left untouched (Agnew, 2012, p. 197), in particular in area of teacher education. To move forward in equipping students with global leadership skills, it is important that institutions continue discussing campus internationalization and commit to improving strategic planning across disciplines. In particular,

international offices (e.g., offices of international students and study abroad offices) should play central and leading roles.

Study Abroad Myths

A positive correlation between study abroad experiences and intercultural perspective development is not a recent discovery. Study abroad experiences are one of several ways of providing unique opportunities to experience other cultures. Bhawuk and Brislin (1992) found that intercultural sensitivity was positively influenced via interactions with people from other cultures and experiences visiting other countries. Even short-term study abroad experiences can be significant in changing worldviews (Gullekson, Tucker, Coombs, & Wright, 2011). Successful and effective study abroad experiences will not only help participants gain intercultural skills and competence through genuine linguistic and cultural challenges and interactions but also promote self-efficacy and a sense of agency that are positively linked to intercultural competency (Covert, 2014). For example, international teaching experiences promote not only preservice teachers' awareness of their own privilege and bias but also how their cultural background impacts their ability to understand students from different cultural backgrounds (Walters, Garii, & Walters, 2009).

Teachers can develop critical thinking skills and intercultural sensitivity during their time abroad that helps them overcome their often narrow cultural perspectives and negative stereotypes of multicultural contexts. Moreover, teachers with good critical thinking skills and wider cultural perspectives are less likely to be ethnocentric and are typically more global minded, flexible, conscious of multicultural issues, high in self-efficacy, professionally motivated, and confident (Sample, 2013; Walters et al., 2009). Study abroad programs are thus considered effective in altering cultural worldviews, improving intercultural communication skills, and fostering global citizenship (Tarrant, Rubin, & Stoner, 2014). Nonetheless, access to such programs is unequal; study abroad is not truly available for everyone (Beelen, 2007).

According to Association of International Educators statistics (IIE, 2016) about 15% of U.S. students earning Bachelor's degrees (excluding international students) in the 2014-2015 Academic Year studied abroad during their degree program. Over the last ten years the overall number of students participating in study abroad has increased by over 50%, over 4% per year on average. In the field of Education, however, participation rates have steadily fallen over the last 10 years, from 4.1% in 2005 to 3.5% in 2015. This occurred during a period of increases in study abroad participation in many other disciplines—the top fields for study abroad participation have both markedly higher participation rates and strong growth over the last decade. For example, 23.9% of students in Science Technology Engineering and Mathematics studied abroad in the 2014-2015 school year, growing from a 16.4% participation rate in the 2004-2005 academic year; 20.1% of students in Business did the same, up from 17.5% ten years previous.

Low participation rates may be driven by logistical and financial challenges. For example, when planning to work locally after graduation, preservice teachers' practicum and internship programs are typically impossible to complete overseas (Cushner, 2012b). Teaching is by nature closely related to local communities where student teaching takes place (Walters et al., 2009). Moreover, study abroad participation often requires foreign language ability, which reduces the number of candidates because many education majors are not required to take foreign languages (Wright & Clarke, 2010). Students who are interested in study abroad often need to balance the benefits of study abroad with the cost of living abroad, extra credit hours, a possible delay in graduation and potentially additional student loan debt (Gullekson et al., 2011). However, teachers

who do have the experience of international study or teaching abroad are generally more sophisticated in adapting to cultural difference and tend to demonstrate more effective educational strategies and management skills in multicultural classroom environments (Bennett, 1993). Despite these positive effects, few preservice teachers participate in study or teaching abroad.

It is therefore a significant challenge for teacher education programs to provide preservice teachers with learning opportunities connected to their past experiences that also integrate new insights; the goal should be to increase their effectiveness throughout their teaching careers (Cushner, 2012a). In addition to such opportunities, preservice teachers need encouragement to explore outside of their comfort zones, to widen their worldview (Bennett, 1993). The ability to experience different worldviews is part of developing self-efficacy and constructing new knowledge that encourages reflection on life experiences. Such processes can become "a basis for recognizing the value of cross-cultural experience and for more broadly integrating a global perspective throughout the process of teacher education" (Kissock & Richardson, 2010, p. 92). The issues addressed here are important to meaningful curriculum transformation in teacher education programs.

Ultimately, keeping a clear and commonly understood vision of campus internationalization in mind, teacher education program leaders need to consider how to enhance curriculum internationalization that actually influences overall learning and development. For future research, following up with active study abroad teacher education programs on their internationalization efforts could be a valuable source of examples for many other teacher education programs. Case studies examining transformative teacher education curriculum reform efforts along with the study abroad efforts and effects can serve as starting points for dialogues on the promotion of internationalization. Jones and Killick (2013) argued that successful curriculum internationalization initiatives are typically not "top-down" decisions made by upper administrators but often "bottom-up" in nature. Such prompts are often driven by an academic unit, discipline, or a small number of scholars to ensure their students develop global perspectives. Teacher education programs need to take conscious actions to move internationalization forward.

Conclusion

Globalization is a broad term encompassing social phenomena related to advancement and innovation in the human world, and internationalization is a phenomenon that reflects the process of coping with globalization (Knight, 2012; Teichler, 2004). In educational environments, the importance of internationalization has been recognized in a set of integrated multidimensional processes, purposes, and functions. Despite continued calls for teacher education reform, disparities persist between societal need for internationalization and implementation of sustainable reform in current educational environments (Goodwin, 2010). In particular, teacher education programs face inconsistencies in and obstacles to improving teacher effectiveness within rapidly globalizing learning environments.

In line with UNICEF and UNESCO documents, the body of research indicates that teacher preparation and professional development must be refined to improve educational cosmopolitanism (Merry & De Ruyter, 2011). Although a large number of postsecondary institutions recognize the importance of campus internationalization and support it with funding, such awareness is "weak and tentative" (Kissock & Richardson, 2010, p. 92) with teacher education curricula persistently lacking integration of global perspectives. In other words, progress in teacher education programs lacks both focus in this area and internationalizing teacher education curriculum has thus been slow to progress (Kirby & Crawford, 2012). Diversity requirements

related to general education may superficially imitate some opportunities and experiences, but when compared to actual study and teaching abroad experiences these processes are likely insufficient in the face of increasingly diversifying classroom environments (Alfaro & Quezada, 2010). Gaps and inconsistencies between policy and practice across organizational levels are evident; U.S. higher education needs to function as a bridge connecting global and local perspectives (Olson & Peacock, 2012).

In particular, U.S. teacher education programs need conscious and rigorous educational reform and a transformation of teacher education and professional development. This reform requires communication of the importance of campus internationalization and clear and more commonly understood vision. A continuation of dialogue about internationalizing both teacher education and campuses as a whole is extremely important in rapidly globalizing educational environments all over the world. Teaching professionals from various levels and cultural backgrounds can share their ideas and experiences to help promote more effective and sustainable teacher education programs (Pipere, Veisson, & Salite, 2015; Vartiainen & Enkenberg, 2013). That is, as key stakeholders, teachers need to take the initiative on reform (Gholami & Qurbanzada, 2016; Miskolci, Armstrong, & Spandagou, 2016). “Bottom-up” initiatives like this are often the most successful at effecting curriculum internationalization reform (Jones & Killick, 2013). The integration of global perspectives into teacher education programs is increasingly necessary in sustainable learning environments and should not be ignored in the field of teacher education.

References

Acedo, C. (2012). Internationalization for teacher education. *Prospects, 42*(1), 1-3.

Agnello, M F., White, D. R., & Fryer, W. (2006). Toward twenty-first global citizenship: A teacher education curriculum. *Social Studies Research and Practice, 1*(3), 312-326.

Agnew, M. (2012). Strategic planning: An examination of the role of disciplines in sustaining internationalization of the university. *Journal of Studies in International Education, 17*(2), 183-202.

Alfaro, C., & Quezada, R. L. (2010). International teacher professional development: Teacher reflections of authentic teaching and learning experiences. *Teaching Education, 21*(1), 47-59.

Bartell, M. (2003). Internationalization of universities: A university culture-based framework. *Higher Education, 45,* 43-70.

Beelen, J. (Ed.). (2007). *Implementing internationalization at home* (EAIE Professional Development Series for International Educators, Number 2). Amsterdam, Netherlands, EAIE.

Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience* (2nd ed., pp. 21-71). Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Bennett, R., & Kane, S. (2011). Internationalization of U.K. university business schools: A survey of current practice. *Journal of Studies in International Education, 15*(4), 351-373.

Bhawuk, D. P.S., & Brislin, R. (1992). The measurement of intercultural sensitivity using the concepts of individualism and collectivism. *International Journal of Intercultural Relations, 16*(4), 413-436.

Biraimah, K. L., & Agreement, L. J. (2013). The longitudinal effects of study abroad programs on teachers’ content knowledge and perspectives: Fulbright-Hays group projects abroad

in Botswana and Southeast Asia. *Journal of Studies in International Education, 17*(4), 433-454.
Childress, L. K. (2009). Internationalization plans for higher education institutions. *Journal of Studies in International Education, 13*(3), 289-309.
Coryell, J. E., Durodoye, B. A., Wright, R. R., Pate, P. E., & Nguyen, S. (2012). Case studies of internationalization in adult and higher education: Inside the processes of four universities in the United States and the United Kingdom. *Journal of Studies in International Education, 16*(1), 75-98.
Covert, H. H. (2014). Stories of personal agency: Undergraduate students' perceptions of developing intercultural competence during a semester abroad in Chile. *Journal of Studies in International Education, 18*(2), 162-179.
Cushner, K. (2012a). Intercultural competence for teaching and learning. In B. D. Shaklee & S. Baily (Eds.), *Internationalizing teacher education in the United States* (pp. 41-58). Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers.
Cushner, K. (2012b). Planting seeds for peace: Are they growing in the right direction? *International Journal of Intercultural Relations, 36*(2), 161-168.
Darling-Hammond, L., & Richardson, N. (2009). Teacher learning: What matters? *Educational Leadership, 66*(5), 46-53.
Deardorff, D., Pysarchik, D. T., & Yun, Z. (2009). Towards effective international learning assessment: Principles, design and implementation. *European Association for International Education Occasional Paper, 22*, 23-37.
Florida Agricultural & Mechanical University. (n.d.). *Academic affairs: College preparatory program*. Retrieved November 28, 2016 from http://www.famu.edu/index.cfm?catalog&AcademicAffairs
Florida Atlantic University. (n.d.). *Degree Requirements. Retrieved* November 28, 2016 from http://www.fau.edu/academic/registrar/FAUcatalog/degreerequirements.php
Florida Department of Education (2013). *General education core course options.* Retrieved December 13, 2013 from http://www.fldoe.org/articulation/hb7135gep.asp
Florida Gulf Coast University. (n.d.). *General education requirements*. Retrieved November 29, 2016 from http://www.fgcu.edu/Catalog/genedreq.asp
Florida International University. (n.d.). *University core curriculum.* Retrieved November 29, 2016 from http://undergrad.fiu.edu/advising/university-core-curriculum.html
Florida State University. (n.d.). *Undergraduate degree requirements.* Retrieved November 28, 2016 from http://registrar.fsu.edu/bulletin/undergraduate/information/undergraduate_degree/
Gholami, J., & Qurbanzada, I. (2016). Key stakeholders' attitudes towards teacher education programs in TEFL: A case study of Farhangian University in Iran. *Journal of Teacher Education for Sustainability, 18*(2), 5-20.
Goodwin, A. L. (2010). Globalization and the preparation of quality teachers: Rethinking knowledge domains for teaching. *Teaching Education, 21*(1), 19-32.
Green, M. F., Lunn, D. T., & Burris, B. (2008). *Mapping internationalization on U.S. campuses: 2008 Edition.* Washington, DC: American Council on Education.
Greenwood, J., Alam, S., & Kabir, A. (2014). Educational change and international trade in teacher development: Achieving local goals within/despite a transitional context. *Journal of Studies in International Education, 18*(4), 345-361.

Gullekson, N. L., Tucker, M. L., Coombs, G., Jr., & Wright, S. B. (2011). Examining intercultural growth for business students in short-term study abroad programs: Too good to be true? *Journal of Teaching in International Business, 22*(2), 91-106.

Harper, H., & Dunkerly, J. (2009). Educating the World: Teachers and their work as defined by the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). *Current Issues in Comparative Education, 12*(1), 56-65.

Institute of International Education. (2016). *Fields of Study of U.S. Study Abroad Students, 2000/01-2010/11: Open Doors Report in International Educational Exchange.* Retrieved from http://www.iie.org/opendoors

Jones, E., & Killick, D. (2013). Graduate attributes and the internationalized curriculum: Embedding a global outlook in disciplinary learning outcomes. *Journal of Studies in International Education, 17*(2), 165-182.

Kirby, M. M., & Crawford, E. O. (2012). The preparation of globally competent teachers: A comparison of American and Australian education policies and perspectives. *Global Partners in Education Journal, 2*(1), 12-24.

Kissock, C., & Richardson, P. (2010). Calling for action within the teaching profession: It is time to internationalize teacher education. *Teaching Education, 21*(1), 89-101.

Knight, J. (2012). Five truths about internationalization. *International Higher Education, 69*, 1-4.

Merry, M. S., & De Ruyter, D. J. (2011). The relevance of cosmopolitanism for moral education. *Journal of Moral Education, 40*(1), 1-18.

Merryfield, M. M. (2000). Why aren't teachers being prepared to teach for diversity, equity, and global interconnectedness? A study of lived experiences in the making of multicultural and global educators. *Teaching and Teacher Education, 16*(4), 429-443.

Miskolci, J., Armstrong, D., & Spandagou, I. (2016). Teachers perceptions of the relationship between inclusive education and distributed leadership in two primary schools in Slovakia and New South Wales (Australia). *Journal of Teacher Education for Sustainability, 18*(2), 53-65.

NAFSA: Association of International Educators. (2016). *Study Abroad Participation by State Academic Year 2014-2015.* Retrieved from http://www.nafsa.org/_/File/_/study_abroad_state_demographics.pdf

National Center for Education Statistics. (2011). *Bachelor's degrees conferred by degree-granting institutions, by field of study: Table 286.* Retrieved from http://nces.ed.gov/programs/digest/d11/tables/dt11_286.asp

Newfield, C. (2009). Ending the budget wars: Funding the humanities during a crisis in higher education. *Profession*, 270-284.

Olson, C., & Peacock, J. (2012). Globalism and interculturalism: where global and local meet. In D. K. Deardorff, H. De Wit, J. Heyl, & T. Adams (Eds.), *The sage handbook of international higher education* (pp. 61-80). Thousand Oaks, CA: Sage.

Paine, L., & Zeichner, K. (2012). The local and the global in reforming teacher and teacher education. *Comparative Education Review, 56*(4), 569-583.

Pipere, A., Veisson, M., & Salite, I. (2015). Developing research in teacher education for sustainability: UN DESD via the Journal of Teacher Education for Sustainability. *Journal of Teacher Education for Sustainability, 17*(2), 5-43.

Sample, S. G. (2013). Developing intercultural learners through the international curriculum. *Journal of Studies in International Education, 17*(5), 554-572.

Sporn, B. (1996). Managing university culture: An analysis of the relationship between institutional culture and management approaches. *Higher Education, 32*(1), 41-61.
State University System of Florida, Board of Governors (2005). *Strategic plan.* Retrieved from http://www.flbog.edu/about/strategicplan/
Svensson, L., & Wihlborg, M. (2010). Internationalising the content of higher education: The need for a curriculum perspective. *Higher Education, 60*(6), 595-613.
Tarrant, M. A., Rubin, D. L., & Stoner, L. (2014). The added value of study abroad: Fostering a global citizenry. *Journal of Studies in International Education, 18*(2), 141-161.
Teichler, U. (2004). The changing debate on internationalization of higher education. *Higher Education, 48*(1), 5-26.
United States Department of Education (2011a). *Initiatives: 2011 International summit on teaching profession.* Retrieved January 29, 2013 from the U.S. Department of Education website: http://www2.ed.gov/about/inits/ed/internationaled/teaching-summit-2011.html
United States Department of Education (2011b). *Our future, our teachers: The Obama administration's plan for teacher education reform and improvement*. Retrieved from http://www.ed.gov/teaching/documents/our-future-our-teachers.pdf
United States Department of Education, Office of Postsecondary Education. (2013). *About OPE – international and foreign language education.* Retrieved from https://www2.ed.gov/about/offices/list/ope/iegps/index.html
University of Central Florida. (n.d.). *Undergraduate catalog.* Retrieved November 29, 2016 from http://catalog.sdes.ucf.edu/
University of Florida. (n.d.). *UF Undergraduate Catalog 2016-17: General education.* Retrieved November 29, 2016 from https://catalog.ufl.edu/ugrad/current/advising/info/general-education-program.aspx
University of North Florida. (n.d.). *The UNF general education program requirements.* Retrieved November 29, 2016 from http://www.unf.edu/catalog/degrees/gened/unf_general_education_requirements/
University of South Florida. (n.d.). *FKL core curriculum for students*. Retrieved November 29, 2016 from http://www.usf.edu/undergrad/fkl/fkl-requirements.aspx
University of West Florida (n.d.). *Degree requirements*. Retrieved November 29, 2016 from http://catalog.uwf.edu/undergraduate/degreerequirements/
Vartiainen, H., & Enkenberg, J. (2013). Reflections of design-oriented pedagogy for sustainable learning: An international perspective. *Journal of Teacher Education for Sustainability, 15*(1), 57-72.
Walters, L. M., Garii, B., & Walters, T. (2009). Learning globally, teaching locally: Incorporating international learning into pre-service teacher training. *Intercultural Education, 20*(4), 151-158.
Wright, N. D., & Clarke, I., III. (2010). Preparing marketing students for a global and multicultural work environment: The value of a semester-long study abroad program. *Marketing Education Review, 20*(2), 149-161.
Zeichner, K. (2010, June). *Preparing globally competent teachers: A U. S. perspective*. Keynote address presented at the 2010 Colloquium on the Internationalization of Teacher Education, Kansas City, MO. Retrieved: from http://www.nafsa.org/_/File/_/zeichner_colloquium_paper.pdf
Zhao, Y. (2010). Preparing globally competent teachers: A new imperative for teacher education. *Journal of Teacher Education, 61*(5), 422-431.

ネットから見たファッション誌が売れない理由
GFL 誌はそれをどう克服したか[1]

南里敬三

> 要は読者が、モデルの写った写真を観て、どれだけ「かっこいい！」と思ってくれるか、です。そのためには、誰もがよく目にするシーンやありふれたシーンでは、ダメなのです。イマジネーションを喚起する際には、「リアリティ」は不要です。「憧れ」が必要なのです。（…）外国人の彫りが深く、スタイルの良い外国人モデルのように、なれるわけがありません。それでも日本人読者は彼らに憧れ、少しでもあんな風になれればいいな、と願います。そこからイマジネーションが始まるのです。
>
> *Them Magazine*（2016）

論旨

本稿は、インターネット（以下「ネット」）上で言われている女性ファッション誌が売れない原因（三つの押し付け）を取り上げ、テクスト分析と女子大生及び女子短大生 14 名に対して行ったアンケート・インタビュー（以下「AnI」）の結果を通して、20 代初頭の女性読者に支持されるファッション誌は憧れの世界の提供を行いレイアウト・デザインをミニマル化している雑誌ではないかと示唆する。分析対象のデータは赤文字 4 誌（*CanCam*、*JJ*、*ViVi*、*Ray*）と *GISELe*、*Fudge*、*Larme* の 2017 年 3 月号のアパレル記事。テクスト分析に当たっては、テクスト中の絵情報量を計ることでテクスト構造を検出する方法を採用する。（絵情報とは言語コードで解読ができない情報を指す。事実上写真。）本稿では言語情報だけで構成されるテクストの分析、及び、言語情報が編集紙面上に占める位置の分析は行わない。

1. 初めに

1.1. 読まれてはいる

女性ファッション誌が売れない。嘗て月 80 万部発行したことがある *CanCam* も（村井 2015）今や 11 万部強で、*Ray* に至っては凡そ 8 万部である（2018 年第一四半期現在）（グラフ 1 参照）。この赤文字誌の発行部数の推移が示唆するように、20 代女性をターゲット層に含む女性誌の殆どは発行部数が右肩下がりである。例外は 3 誌。*GISELe* と *Fudge* の 2 誌が右肩上がりで（グラフ 2 参照）、*Larme* 一誌が 2016 年、2017 年と発行部数が 18 万部となっている（日本雑誌協会 2016、2017）[2]。（以下これら 3 誌をまとめて「GFL 誌」と呼ぶ。）表 1 には 7 誌の 2016 年第二四半期から 2017 年の第一四半期までの 1 年間の発行部数の増減、並びに、2015

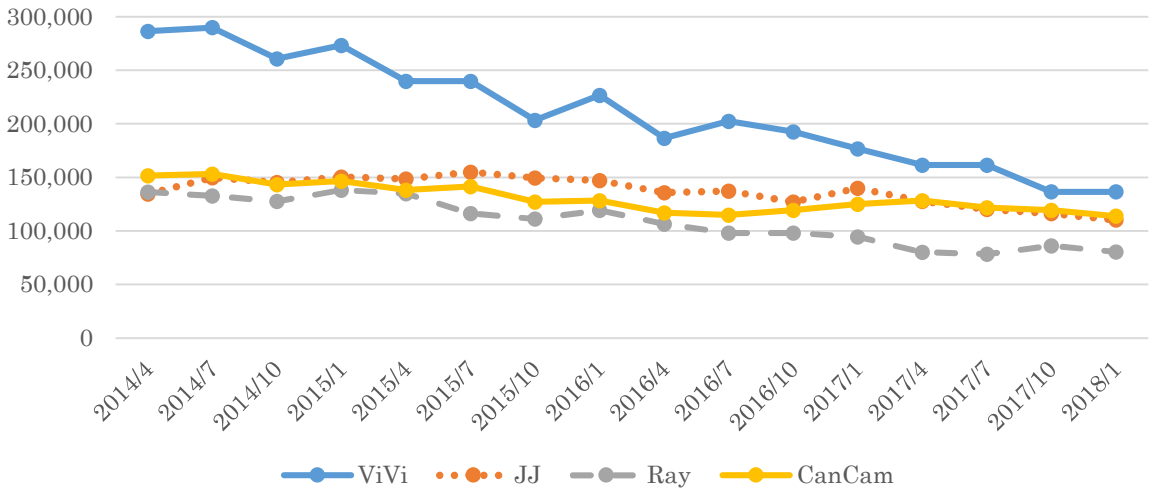
---

[1] 本稿は 2018 年度ファッションビジネス学会全国大会で発表させていただいたものに加筆訂正したものである。

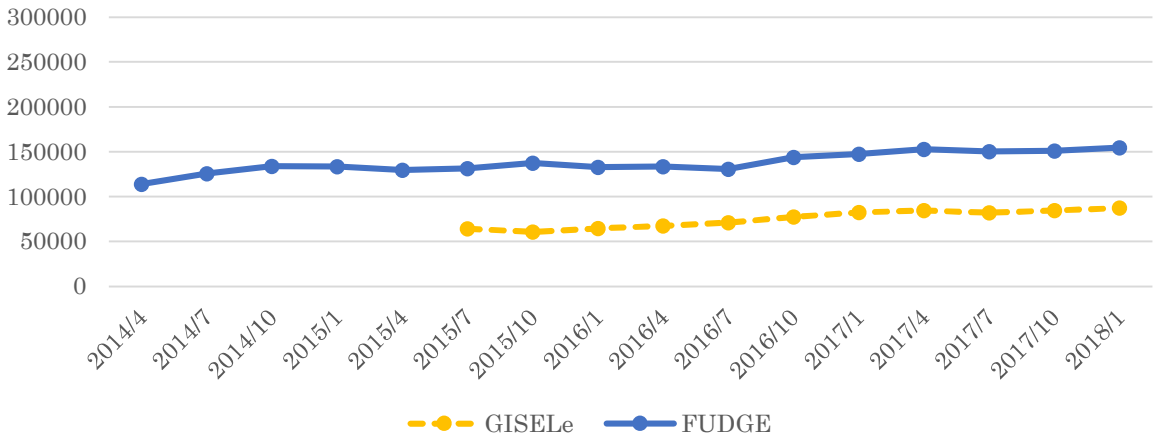
[2] グラフ 1 と 2 は日本雑誌協会のホームページに公開されている数値を基に筆者が作成したもの。但し Larme については同協会が発行している『Magazine Data』 2017 及び 2018 で公表されている数値を用いた。

年第二四半期から 2017 年の第一四半期までの 2 年間の発行部数の増減がまとめてある。*Ray* と *ViVi* は発行部数の落ち込みが激しく、*CanCam*、*JJ* は過去 1 年間について言えば持ち直してはいるものの過去二年でみると発行部数は落ちており、*GISELe* と *Fudge* は高い伸びを示している。（2017 年第一四半期を起点としたのは本稿で分析されるファッション誌がすべて 2017 年の第一四半期に出版されているからである。）

グラフ１．赤文字誌の発行部数推移



グラフ2. *Fudge*と*GISELe*の発行部数



周知のことと思うが、ファッション誌が売れなくなってきている背景にはネットの影響力がある。なにせ、ネット上の情報は基本無料だからだ。しかしながら、ファッション誌が読まれなくなったわけではなさそうなのである。2018 年 4 月 12 日 Google に「ファッション情報、アンケート調査」で検索をかけてみたところ、検索結果の第 1 頁に 4 つのアンケート調

査結果が出て来た[3]。これらの調査は 2016 年 6 月から 2018 年の 2 月までの間に行われたもので、いずれの調査もファッション情報はどこから得ているかという質問が用意されている。その回答結果をまとめたのが表 2 である。ファッション誌がファッション情報の情報源だという回答が一位または二位を占めているという結果が出ているのである。ファッション誌は購入者は減っているが、まだ相当数の読者がいることが示唆されていると言えよう。

表 1. 7 誌の過去 1 年及び 2 年の発行部数の増減

雑誌名	2015/2ndQ	2016/2ndQ	2017/1stQ	過去 2 年増減	過去 1 年増減
Ray	134,917	106,667	94,567	-29.9	-11.3
ViVi	240,000	186,667	176,667	-26.4	-5.4
*Larme**	n/a	180,000	180,000	n/a	0.0
JJ	148,767	136,000	139,900	-6.0	2.9
CanCam	138,334	117,000	125,000	-9.6	6.8
Fudge	133,600	133,600	147,500	10.4	10.4
GISELe	73,167	67,633	82,500	12.8	22.0

表 2. ファッション情報をどこから得ているか（複数回答可）

調査主体（情報公開日）	Belle Maison 生活スタイル研究所 (2016.6.15)	Research+ (2017.1.7)	Marketing Research Camp (2017.2.2)	Bwrite (2018.2.28)
第 1 位	ファッション雑誌 (29.5)	Web サイト (24.3)	店頭(40.6)	店頭(40.2)
第 2 位	通販カタログ(26.3)	雑誌(19.8)	紙媒体ファッション誌(37.5)	雑誌(38.2)
第 3 位	百貨店、駅ビル、ショッピングセンター(26.2)	TV 番組(12.5)	家族・友人・知人 (35.3)	テレビ(25.6)
第 4 位	街を歩く人のファッション(25.2)	人から聞く(11.8)	テレビ(33.5)	Instagram (25.0)
第 5 位	友人・店員に聞く (15.9)	SNS(3.8)	企業や有名人のアカウント（Instagram, LINE など）(31.2)	通販サイト(18.0)
第 6 位	Instagram（8.0)	アプリ(3.3)	キュレーションサービス (24.6)	店舗スタッフ・美容師(17.6)
第 7 位	アプリ（4.8)	その他(1.3)	ブランドメーカーの HP (23.7)	サーチエンジン (15.2)

[3] 実はもう一つアンケート調査が検索されており、この調査では雑誌が全く言及されていない。EC との関連でのアンケート調査ということで「雑誌」がアンケートの選択肢から外されていた可能性が高いと思われたので本稿の議論から除外した。また、表 2 に言及されているアンケート調査の中に 20 代女性または女性に対するアンケート結果（小計）を出しているものがあるが、その場合その小計を表に提示している。Reserach+のアンケート結果は合計が 100%ならないことも追記しておく。

出典	Belle Maison 生活スタイル研究所(2016)	Research+(2017)	Market Research Camp (2017)	BWRITE(2018)

1.2. ファッション誌の二つの視点

では、どうしてファッション誌は買われないのだろうか。この問いに関するネット上の「評論家」と「消費者」との間の意見の違いがとても面白い。評論家の立場を取る人たちは「ネットの影響でファッション誌が買われなくなった」と考えているのに対して、消費者の立場を取るネットユーザーは「雑誌が面白くないから雑誌を買わなくなった」と主張している人が多いのである。

評論家の意見

Google で「ファッション誌（または、女性ファッション誌)、売れない、理由」のキーワードで検索してみると[4]、検索結果の最初の三頁中で女性ファッション誌が売れない原因に言及していたサイト数は 18（ブログ記事またはファッション情報サイトに掲載されている記事）であった[5]。それぞれのサイトには、評論家の立場から女性ファッション誌が売れない理由が一つ又はそれ以上述べられていた。売れない理由の延べ数は 35、異なり数は 9。この 9 つの理由は大まかに 4 グループに分類でき、それぞれのグループの発生頻度を百分率に換算して売れない理由のランキングを算出すると下の通りになる。

［1］Google 検索結果

① ネットからファッション情報が得られる　60.0%
② 記事内容に問題がある　34.3%
③ 雑誌は高い　2.9%
④ その他　2.9%

「ネットからファション情報が得られる」のでファッション誌はいらなくなっているという理由が 6 割、「記事内容に問題がある」ことがファッション誌がいらなくなっている理由だとするのが 3 割強となっている。これら評論家はネットによる影響力は大きく、それに対してファッション誌は非力であるとの見解を持っているように思われる。

消費者の意見

評論家ではなく消費者の視点に立っていると思われるネットユーザーの意見を聞いてみよう。日本最大の女性専門の掲示板サイト「ガールズちゃんねる」（以下「ガルちゃん」）で意見を拾ってみた[6]。このサイトに 2016 年 10 月「雑誌を買わなくなった人！」というトピックが

[4] 調査は PC を使って 2018 年 6 月 7 日に行った。
[5] 但し、更新年が 2014 年以前のものは除外した。
[6] このトピックにコメントを寄せた投稿者の年齢だが 25 歳辺りから 30 代初頭までが主流ではないかと思われる。根拠は学生時代との対比としてコメント、主婦となっての生活の変化、及び、

立ちそこに延べ 167 名のネットユーザーが延べ 217 の理由を寄せている。理由の異なり数は 89。その理由を Google 検索で採用した分類法と矛盾しないように 8 グループに分け百分率でランキングをつけたものを下に提示する。ここでは「記事内容に問題がある」がトップ（42.6%）で、「ネットでファッション情報が得られる」は 11.6%にとどまっている。

［2］ガルちゃんのコメント集計結果

① 記事内容に問題がある　42.6%
② 雑誌を買う以外にファッション情報を得ることができる　28.7%
（「ネットでファッション情報が得られる 11.6%」を含む）
③ 生活の変化で読まなくなった　6.9%
④ 雑誌はかさばる　6.0%
⑤ 雑誌は高い　5.6%
⑥ 付録の質が良くない　4.2%
⑦ 自責型理由[7]　1.9%
⑧ その他　1.4%

すでに述べたように、これら消費者は記事内容に問題があるからファッション誌は人気がなくなってきていると考える傾向が強い。この考えで行けば、ネットからファッション情報が得られるからというのはある種の言い訳に聞こえてくる。となれば、記事内容を変えることである程度は読者を増やすことができそうだということになる。事実、*GISELe* は 2015 年から、そして、*Fudge* は 2013 年から発行部数を伸ばし、*Larme* は、既に見たように、2016 年 2017 年と発行部は横ばいである。この 3 誌は記事内容が良いと読者に思われているために読者の確保に成功していると想定して話を進めていく。

1. 3. 三つの押し付けとレイアウトのミニマル化

それでは大半（或いは、GFL 誌以外）の女性ファッション誌の内容のどこに問題があるのだろうか。Google 検索の「記事内容に問題がある」の内訳とガルちゃんの「記事内容に問題がある」の内訳を見てみよう。

［3］Google 検索の「記事内容に問題がある」の内訳

① 記事内容は編集者・広告側によるブランドの押し付け　14.3%
② どの雑誌も似通ったファッションを掲載している　11.4%
③ 同じ企画の繰り返し　5.7%
④ モデルの押し付け　2.9%

蛯原友里時代のファッション誌への言及が散見されるからである。

7 自分の容姿に問題があるのでファッション誌を買っても参考にならないとする回答を指す。

［4］ガルちゃんの「記事内容に問題がある」の内訳

① 記事内容は編集者・広告側によるブランドの押し付け 11.6%
② 記事内容がつまらない（理由の提示なし） 9.3%
③ モデルの押し付け 6.9%
④ 記事内容が不快 6.9%
⑤ 記事内容が同一・類似 5.1%
⑥ ファッション以外の興味のない記事が多い 0.9%
⑦ その他 3.8%

まず、［3］の四つの理由は三つの「押し付け」との解釈ができる。①は広告側の要望を取り入れての編集者から読者へのブランド品の押し付け。②は①と等価のように思えるが、次の③ともかかわる問題である。③はファッションアイテム紹介の切り口が同じような企画の記事になっているという、企画の押し付け。（よって②は同じ企画の押し付け、と解釈する。）最後の④は読者受けしないであろうモデルの押し付け、である。

同様の押し付けがガルちゃんの「記事内容に問題がある」の内訳にも見られる。まず、［4］の④と⑥は絵情報に関わらないものなので除外する[8]。また、②はファッション誌掲載の情報がつまらないとするも具体的な問題点の指摘をしていないコメントなので、これも考察対象から外す。その上で説明すると、①は「ブランドの押し付け」、③は「モデルの押し付け」、⑤「企画の押し付け」になる。

憧れの世界の提示/本稿での戦略

さてここで、一つの疑問を提示し本稿の戦略を明らかにしよう。その疑問とは次の通り。GFL 誌は前節の三つの押し付けをしていないのだろうか。どのような雑誌も自己の判断でブランドアイテム及びモデルを選定し、文章を作成し、読者に記事を提供するわけなので、すべての雑誌は編集側の読者に対する情報の押し付けであるのは間違いない。ではなぜ GFL 誌だけ読者離れを引起していないのか。本稿ではその答を GFL 誌による憧れの世界の提示であるとしてこの謎解きをしようと思う。

本稿冒頭で紹介した *Them Magazine*（2016）は、同誌がどうして「白人モデル」を使い続けるのかの答えとして、ファッション誌には憧れの提示が必要で、白人モデルは正に日本人読者にとっては憧れの対象であるからと述べている。こういった白人モデルは現実的あるいは模倣可能である必要はなく（つまり、日本人読者が真似できなくてもよく）リアリティはファッション誌には必要ないと言い切っている。モデルは憧れの世界の住人でありさえすればよい、そうあることで読者を満足させられるというわけだ。本稿ではこの仮説を採用し、GFL 誌はこの仮説を採用しているがゆえに三つの押し付けの克服が可能なのだと考える。

よって、本稿は次のような戦略を採用する。

---

[8] ④はファッション誌特有のコピー（例えば「秋はこっくりカラーをマスト買い！」）が耳障りであるとか、記事のテーマ（例えば「二の腕のぷよぷよの隠し方」）がストレスになるといった言語テクストの内容の問題である。⑥は記事内容に興味がないとの不満を述べたものである。

本稿ではまず、GFL 誌が憧れの世界の提示を行っていると仮定する。この仮定が正しければ、その世界の住人たるモデルが際立つような記事構成を GFL 誌は行っていることだろう。なんとなれば、読者はもっぱらモデル（そして、彼女らが纏うコーデ）を介してその背後にある世界を感じ取ると考えられるからである。モデルが際立つような記事構成とは（雑誌の）見開二頁あるいは左右の一頁上の絵情報の配置において、そして、その様に工夫された頁の連続の中に実現するものであろう。つまり、モデルを際立たせている記事の構造（つまりテクスト構造）にその工夫が現れることになるはずだ。そして、その構造は視覚的にとらえることのできる形をなしているはずなので、何らかの方法で検出ができるはずである（事実本稿はそのテクスト構造の検出に成功していると思われる）。そこでその工夫、及び、そこに登場しているモデルに対して 20 代初頭の女性（AnI の被験者）が肯定的評価をし、かつ、彼女らの評価が *Them Magazine*（2016）の憧れの世界の性質（モデルは憧れであってリアリティを必要としない）と合致するなら、GFL 誌による憧れの世界の提示は仮定の話ではなく、現実の話であるということになるだろう。更に、GFL 誌が提示する憧れの世界に対して 20 代初頭の女性（AnI の被験者）が盲目的追従をしている可能性が高いことが判明すれば、憧れの世界の提示によって GFL 誌は三つの押し付けの克服に成功しているという結論が見いだせることになるだろう。これが本稿の戦略である。そして、実際にこの通りになっているわけなのである。

もう一点付け加えたい。それはモデルを際立たせた結果紙面構成がミニマルデザインとなっていることである。レイアウトのミニマル化は現在の趨勢になっているかの世は高い。（レイアウトのミニマル化については§1.3.4 以下徐々に話していくことにする。）

以上のことを踏まえ、以下に GFL 誌が企画・ブランドの押し付けをどの様に克服していると考えられるのか、ポイントをまとめておく。

1.3.1. 企画の押し付け

本稿ではパレルアイテムをプロモートする記事（つまり、「アパレル記事」）を分析するのだが、7 誌のアパレル記事はどれも同じ構造を採用している。この構造を本稿では「基本構造」と呼ぶが、どのような企画を組もうとも、それはこの基本構造のバリエーションでしかない。その意味では 7 誌全部企画の押し付けを行っているわけである。しかしながら、基本構造のバリエーションではあるが、*GISELe* 及び *Fudge* のテクスト構造は、憧れの中核となるモデルが際立つような構造に変換されており、これが結果的には企画の押し付けを押し付けと読者に感じさせない結果を生み出しているのではないかと考えられるのである。*Larme* についてはテクスト構造は赤文字誌と似ている。が、モデルの強烈なイメージが企画の押し付けの克服を可能にしていると考えられる。基本構造は§3.1 で、*GISELe* と *Fudge* のモデルを際立たせるテクスト構造については§3.2 で述べることとする。*Larme* のモデルの特異体質性は§3.5 で述べることにする。

1.3.2. ブランドの押し付け

ブランドの押し付けは具体的には 3 種類あると考えてみた。「数の押し付け」「価格の押し

付け」「デザインの押し付け」の三つである。数の押し付けとはブランドアイテムを多く記事中に詰め込む行為を言う。GFL 誌は提示するブランドアイテムの数を少なくし数の押し付けという批判が起こらないようにしていると考えられる。詳しくは§3.3 で述べることにする。

二番目の価格の押し付けについて言えば、GFL 誌はこれを明確に行っている。これは *GISELe*、*Fudge* が掲載しているアパレルアイテムの平均価格が 7 誌中最も高いことから言えることである。（因みに *Larme* のアパレルアイテム平均価格は *Ray*、*ViVi*、*CanCam* より高く *JJ* より安い設定になっている。）ファッションアイテムの価格が高くても *GISELe*、*Fudge* を読む女子学生は、憧れの世界を求めてこの二誌を読むと考えられ、その時、ファッションアイテムの価格は気にならないということが AnI 調査で示唆される形となっている。価格の押し付けに関しては§3.4 で詳しく述べることにする。最後のデザインの押し付けだが、これについては§3.6 で SNS の影響力という観点から簡単に言及するにとどめたい。

1.3.3. 憧れの世界の提供

南（2015）[9]は現在の日本ファッション業界において万人受けするアイドルは存在しておらず、よって、特定のアイドルをファッションモデルとしてファッション誌に登場させても、それは読者を減らす結果に終わるだけだと示唆している。勿論、2005 年辺りの蛯原友里のようなモデルは二度と出てこないだろう。が、しかし、ファッションモデルのいないファッション誌はおよそ考えられない。後に見るように、*GISELe*、*Fudge* のモデルはすべてコーカソイドモデルであり、*Them Magazine*（2016）のいう白人モデル、すなわち、憧れの対象となり得るもので、事実そうなっていることが AnI 結果から読み取れる。そして、更に、*Larme* のモデルと比較する時、憧れの世界の存在がはっきりと見えてくる。それは、没固有性と非日常性を有するモデルが住む世界。固有名詞（モデルの名前）で認識されず、また、読者に代わって日常を演じることもない（非日常的）モデルたちが住む憧れの世界であり、20 代初頭の女性を惹きつける存在だと思われるのである。詳しくは§3.5 で話そう。

1.3.4. レイアウトのミニマル化

レイアウトのミニマル化について一言しておく。先に *GISELe*、*Fudge* も基本構造を採用していると述べたが、このモデルを際立たせるテクスト構造は一頁当たりに掲載される絵情報量の少なさが特徴だ。実はこの絵情報量の少なさだが、*CanCam* について言えば、一頁当たりの絵情報掲載量は 1990 年代後半がピークでそれ以降漸次減少している（南里と平岡 2017）。2006 年以降 2017 年までの他の赤文字 3 誌について言うと、*JJ* も（*CanCam* と同様）一頁当たりの絵情報掲載量が絶えず減少傾向にあるのに対して、*ViVi* と *Ray* は 2013 年辺りから情報量が増えてきていると南里と平岡（2017）は報告している。既に見たように情報満載の *ViVi* と *Ray* は発行部数の落ち込みが激しいわけだが、この背景には一頁当たりの情報量の減少を今の 20 代初頭の女性が強く支持している状況があるのかもしれない。彼女らがレイアウトのミニマル化[10]を望んでいる可能性は高い。このミニマル化については情報量の少なさという観点

[9] 南（2015）は Google 検索でヒットした「評論家」の一人である。
[10] レイアウトのミニマル化の例は§3.1 の「記事ユニット」との関連で紹介する。

からまた取り上げることになろう。

2. データと分析方法・手順

2.1. データ

本稿で分析するのは、先述の通り、赤文字 4 誌と GFL3 誌の合計 7 誌であるが、分析に次のような条件を設ける。(1) 7 誌は 2017 年 3 月号しか分析しない。(2) 分析対象の記事は、トップス、ボトムス、アウターを紹介した記事と女性モデル・女性タレントの紹介記事に限定する。(上記二種類の記事を本稿ではアパレル記事と呼ぶことにする。) (3) 但し、アパレル記事のように見えても、その記事のタイトルがアパレルアイテム紹介以外のジャンルのタイトルとなっている場合は分析対象から除外する。(4) 言語情報のみで構成される所謂「テクスト」の分析は行わない。また (5) 言語情報の編集紙面上の位置の分析も行わない。

尚、これ以降女性モデルを「モデル」と記述していく。

2.2. 分析手順

本稿のテクスト分析の基準となるのは一頁当たりの絵情報量である。まずはテクスト分析に用いる絵情報分類法を解説し、その分類法でテクスト構造を同定 (或いは検出) する方法の説明を行う。テクスト分析のセクションにおいては、このテクスト構造分析を通して、7 誌が同じ記事構造 (「基本構造」) を採用していることを指摘し、§1.3 で概説した「企画の押し付け」「ブランドの押し付け」を GFL 誌がどのように克服しているのかを赤文字誌 (特に *Ray* と *ViVi*) と対比しながら見ていくことにする。

2.3. 分析方法

テクストについて

本稿でいうテクスト分析は従来言われているテクスト分析と多少異なるので、その説明からしておく。言語情報が (写真、イラストなどの) 絵情報と共存する「テクスト」の分析を行う研究分野にマルチモーダルテクスト分析というのがある。この分野では「テクスト」には絵情報は含まれない。更に、絵情報は語彙文法的 (lexico-grammatical) に解釈されはするが、語彙文法から離れて画像そのものとしては分析されないのである (Batman 2014)。よって、編集紙面上における言語情報と絵情報の視覚的配置の分析が行えない状況が発生しているのである。これは恐らくは、絵情報と言語情報両者によって創られる総体に言及する概念が欠落しているからだろう。ファッション誌で言えば、編集紙面上のモデルの写真 (絵情報) とそのモデルがまとったコーデの説明 (言語情報) の両者によって構成されているレイアウトを指す言葉・概念がないのである。この絵情報及び言語情報からなる総体こそが「テクスト」と呼ばれるべきものであるにも関わらず。本稿では、この「総体」を「テクスト」と呼ぶことにする。(言語情報のみから成るテクストに言及する場合「言語テクスト」という表現を用いることにする。) 確認のため本稿でのテクストの定義を明記しておこう。

［5］テクストとは絵情報及び言語情報から成る総体を指す。

2.3.1. 絵情報量による頁の分類

言語テクストが線状構造を取るように、編集紙面上に配置された絵情報（即ちレイアウト）の連結も線状構造のような形をとる。違いは後者の場合、（ファッション誌の）見開き二頁から次の見開き二頁、更に次の見開き二頁へというように、連続の基点となるものが面であることだ。言語テクスト構造が線状構造というなら、このようなテクスト構造は面連結構造というべきものだろう。この連結構造（以下「テクスト構造」と呼ぶ）のそれぞれの面にどのような絵情報（本稿の場合写真）がどれくらいの量で掲載されているのか、それを調べることによってアパレル記事のテクスト構造が検出できるわけだ。以下、写真の種類と分類方法、絵情報量の計量方法、そして、テクスト構造の検出方法について説明する。

4 種類の写真

データ中に用いられている写真は大まかに、「人写真」、「物写真」、「情景写真」、「その他」の写真の 4 種に分けることができる。人写真とは（コーデをまとった）モデルの写真で、モデルの顔が写っているもの（少なくとも鼻と口が確認できるもの）であり、物写真とはファッションアイテムだけを写している写真である。モデルがファッションアイテムをまとっていることが明らかでも、モデルの顔が確認できないもの（モデルの鼻及び口の確認ができないもの）は物写真として分類した。情景写真は二種類ある。一つは特定のモデルのプロモートに用いられる印象的状況写真である。モデルのスナップ写真が何枚か掲載されている頁に室内のインテリアのみを写した写真が掲載されることがあるが、これが印象的情景写真の例である。もう一種類は通常の情景写真である。何かの催し物が行われた際の会場の様子や、人気のセレクトショップの紹介でそのショップを写した写真がその例である。そして、これら以外のすべての写真が「その他」の写真となる。

人写真分類

人写真は更に「人裁ち落とし写真」、「人角枠写真」、「人縁取り写真」、「人切り抜き写真」の 4 種に分類される[11]。人裁ち落とし写真（人裁）とは写真の少なくとも二辺が裁ち落とし（即ち、写真の縁が頁の縁と同じであるもの）で、その二辺が対応する頁の縁の長さの 2/3 以上あるもの。(2/3 に満たない場合は角枠写真とした。）人角枠写真（人角）とは写真の枠が頁上にあることが確認又は推定できる写真。丸枠（楕円枠も含む）の写真もこの角枠写真に分類する。人縁取り写真（人フ）とは切り抜き写真だが、切り抜いた人のアウトラインに沿ってマージンがとられているもの。人切り抜き写真（人キ）とはマージンがない切り抜き写真。人写真以外の写真はこのような分類方法は採用しない。

テクスト構造を判定する 7 種類の写真と主・従情報

テクスト構造分析では 7 種類の写真の識別が行われる。アパレル記事を構成する頁には、四種類の人写真（人裁、人角、人フ、人キ）と物写真、情景写真、その他の写真の 7 種類のう

[11] 但し、3 ミリ四方より小さいヒト写真は「その他」の写真に分類する。

ち、一種類か又はそれ以上の種類の写真が掲載される。二種類以上掲載される場合、異なる種類の写真が同じ大きさでその頁に掲載されることはない。どれか一種類の写真が大きく掲載されている。その大きい種類の写真を主情報、それ以外の小さい種類の写真を従情報と呼ぶことにする。テクスト構造を検出するに当たっては主情報のみを考慮することとする。

絵情報の計量方法

人写真の場合当該頁に何枚の写真があるかを数え、物写真の場合は写真の枚数に関係なくいくつ物（ファッションアイテム）が掲載されているかを数え、当該頁の情報量とする。両者が当該頁に掲載されている場合、枚数と物の数の合計をその頁の総情報量とする。

絵情報量に基づく頁の分類

アパレル記事を構成する頁をそこに掲載されている絵情報の量に基づき 5 種類に分類した。人写真で説明すると、次のような説明になる。一枚の写真が見開き二頁を占有している「単二頁」、一枚の写真が一頁を占有している「単一頁」、二枚から五枚の写真が掲載されている「二五頁」、六枚から九枚の写真が掲載されている「目録頁」、10 枚以上の写真が掲載されている「一覧頁」の 5 種類である。

2.4. アンケート・インタビュー（AnI）について

テクスト分析を通して見出せる説明がどれほど妥当性があるのかを確かめる目的で 14 名の女子学生（香蘭女子短期大学の学生 9 名、大分大学の学部生 5 名）に対して 2018 年 7 月から 11 月にかけてアンケート並びにインタビューを行った[12]。短大生 9 人は一グループ 3 名で合計 3 回 AnI（一回 90 分）を行い、大分大学の学生の場合は一人ずつで 5 回行った。アンケートはファッション情報の情報源に関するアンケートで、それを受けてインタビューを行った。インタビューではアンケートの回答に対する確認の質問と本稿でテクスト分析を行う赤文字 4 誌と GFL 誌に関わる質問を行った。ただ、一言断っておきたいことがある。このインタビューは、インターネットの時代にあって 20 代初頭の女性が紙媒体の雑誌に何を期待しており、かつ、それはなぜなのかを明らかにすることを目的に、できるだけ自由会話の形式をとった。よって、被験者全員に完全に同じ質問をするということはできなかったことを付け加えておきたい。

3. テクスト分析

GFL 誌の最大の特徴は、憧れの世界の提供であると仮定したが、この仮定はインタビューでその妥当性が強く示唆される結果となっている。そして、この憧れの提供がレイアウトのミニマル化と相まって読者の惹きつけに成功していると考えることも妥当性があることがインタビューで示唆されている。このセクションでは、前節で述べたように、GFL 誌が、三つ

[12] 短大生 9 人はいずれもファッション関連学部の所属で、1 年生が 4 名で 2 年生が 5 名。大分大学の学生はいずれも経済学部又は教育学部所属の 3 年生。14 名中、最年少は 19 歳で最年長は 23 歳。

の押し付け（企画の押し付け、数の押し付け、価格の押し付け）をどのように克服しているのかを探りながら、GFL 誌が提供している憧れの世界がどのような性質を持つものなのかを明らかにしていく。

3.1. GFL 誌による企画の押し付けの克服

基本構造

一見異なって見える７誌だが、この７誌のアパレル記事複合はすべて同じテクスト構造を採用している。まず、アパレル記事がどのようカタチになっているのかから説明する。アパレル記事は記事構成の最小単位「記事ユニット[13]」から構成されている。一つの記事ユニットは、通常１枚の写真（絵情報、人写真又は物写真)、商品詳細（言語情報)、コンセプト提示（言語情報）から構成されている。コンセプト提示はアパレルアイテムの購入を促すメッセージのこと。商品詳細とは写真に写っているファッションアイテムの簡単な属性説明、そのアイテムのカテゴリー名（例えば「ニット」や「デニムパンツ」)、価格、そのアイテムが売られている商店名などから成る。この記事ユニットがいくつか集まって記事が構成され、その記事がいくつか連結されて記事複合が形成される。

さて、その記事複合のそれぞれの頁を§2.3.1 で説明した方法で分類してみると、記事複合全体を通して［6］のような流れが創られていることがわかる。これがアパレル記事の基本構造である。

［6］単二頁＞単一頁＞ニ五頁＞目録頁＞一覧頁

記事複合の先頭頁には、通常大きな写真が掲載されており（単二頁または単一頁)、その後、ニ五頁、目録頁、一覧頁へと進んでいくわけだが、この順で目録頁そして、一覧頁へ直進的に進むわけでは必ずしもなく、単一頁や二五頁へ後戻りし、そこからまた目録・一覧頁へと進んでいくなどして、記事複合内でいくつか波を作りながら進んでいく。企画の押し付けについてだが、どのような企画であろうともこの基本構造を採用しているわけである。その意味では GFL 誌も企画の押し付けを行っていることになる。これはすでに述べた通りである。

この基本構造の目的だが、ファッションアイテムの効果的な導入ということができるだろう。通常単二頁、単一頁である記事（複合）冒頭頁でファッション購入の呼びかけを行い代表的なコーデ一例を提示、その後、徐々に頁当たりの情報量を増しながら、最終的には多くのファッションアイテムが提示できる目録・一覧頁へと読者を誘導するのがこの基本構造の目的であると考えられる。

---

[13] （§1.3.4.を受けて）ミニマル化されたレイアウトの典型例は、モデルのカウボーイショットが裁ち落とし写真として掲載されている単一頁、モデルは中央３分の１のコラムに配置され、モデル左右３分の１のネガティブスペースに文字情報がモデルを挟んで三角形、または、斜線を形成するように配置されているレイアウトだろう。文字情報が三角形を形成する場合はモデルを挟んでどちらか一方に文字情報が大きさを変えて二か所、反対側に一か所配置されており、斜線を形成する場合は、モデルの左右に一か所ずつ文字情報が掲載されているレイアウトとなる。

テクスト構造の視覚化

テクスト構造をよく理解するために分析結果を視覚化しておこう。図 1 を参照されたい。これは *CanCam*2017 年 3 月号 p.17 以降に掲載されているアパレル記事複合の初めの部分である。左から二番目のコラムから順に、整理番号、頁数、単二頁、単一頁、二語頁、目録頁、一覧頁、主情報の種類、情報量の順となっており、当該頁が単二から一覧のどの頁に該当するかを黒の塗りつぶしで示してある。このように当該箇所を塗り潰していくことで記事複合全体を通して創り出される波が検出できることになるが、これがテクスト構造と本稿で呼んでいるものである。

図 1. テクスト構造分析図

CanCam2017	整理	頁	単二	単一	ニ五	目録	一覧	主	量
	1	9				■		物	9
	2	11		■				人角	1
	3	12		■				物	1
	4	13		■				人裁	1
	5	14		■				物	5
	6	15		■				人裁	1
	7	22	■					人裁	0.5
	8	23	■					人裁	0.5
	9	24		■				人裁	1
	10	25		■				人裁	1
	11	26	■					人裁	0.5
	12	27	■					人裁	0.5
	13	28			■			人角	2

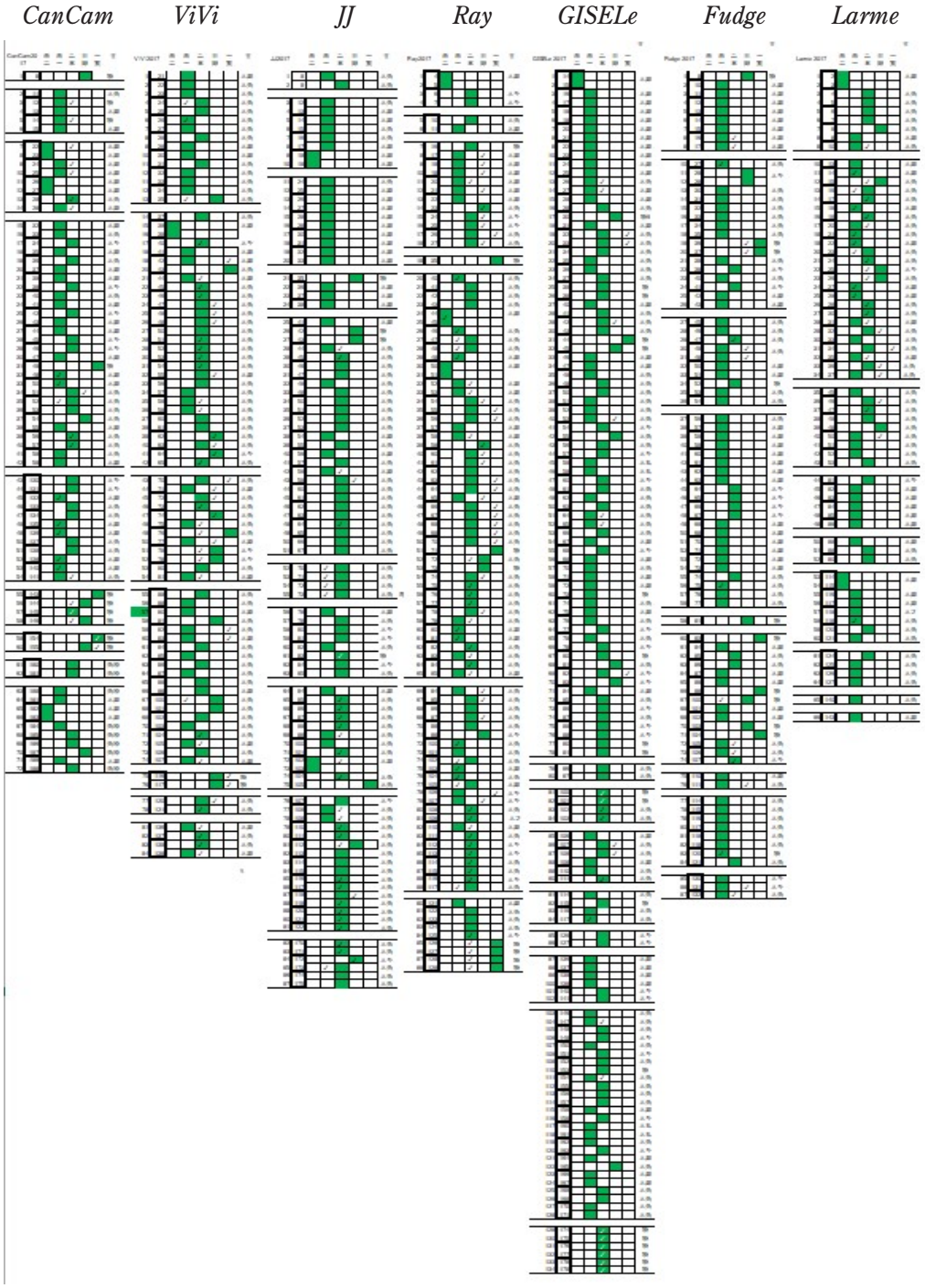
７誌による基本構造共有の確認

では、この手法を用いて、７誌のアパレル記事複合を視覚化して比較してみよう。図 2 を参照願いたい。ここに掲載されているのが 7 誌のテクスト構造である。基本的に記事複合の先頭部分は典型的に単二頁または単一頁で、ページ数が増えていくにつれてニ五頁から目録頁、一覧頁へと向かってきながら、何回か単二頁又は単一頁に戻り、記事複合内に波（或いはサイクル）を創り出していることが確認できるだろう。波形は雑誌ごとに異なる。が、しかし、繰り返しになるが、7 誌はいずれも基本構造［6］を採用しているである。

3.2. GFL 誌の企画の押し付けの克服

GFL も企画の押し付けを行っているのなら、どうして読者獲得に成功しているのだろうか。本稿の答えは既述の通り GFL 誌による憧れの世界の採用というものだが、憧れの世界の提示に成功しているかどうかは具体的には、モデルが際立つようなテクスト構造をしているかにかかってくるだろう。GFL 誌において、*GISELe* と *Fudge* はモデルの大写しで目立たせること

図 2．7 誌のテクスト構造



で、*Larme* はモデルを均質化することでモデルの際立たせに成功していると考えられる。ここでは、*GISELe* と *Fudge* のモデルの際立たせについて主に紹介し、*Larme* のモデルの均質化については§3.5 で詳述しようと思う。

そこで、*GISELe* と *Fudge* のモデルの際立たせだが、単一頁の多用、その連続使用、同一モデルの連続登場、そして、一頁一モデルの原則の採用によって行われている。以下、この 4 つのテクニックを順に説明する。

単一頁の多用

GFL 誌が採用しているテクスト構造上の大きな特徴は単一頁の多用だ。7 誌において単一頁がアパレル記事複合全頁のどれくらいを占めているか見てみると、*Fudge* が 67.7%、*Larme* が 53.0%、*CanCam* が 47.1%、*GISELe* が 46.3%、以下、*ViVi* 35.6%、*JJ* 34.0%、*Ray* 29.6%となっている。読者を惹きつけている GFL 誌は大きな人写真を多用するところに特徴があり、読者離れが最も激しい *Ray* が大きな写真の使用頻度が最低であるのは興味深いところだ。(因みに、*ViVi* も単一頁の使用頻度は低い方であることも注意されたし。)

単一頁の連続使用

図 2 をもう一度参照されたい。7 誌それぞれの分析図中の左から 4 番目のコラムが単一頁だ。これを見てまず目に留まるのが *Fudge* 及び *GISELe* の単一頁の連続使用である。(但し、*Larme* は単一頁の連続使用は行わず、赤文字誌と同じように一頁中に小さい写真を詰め込むレイアウト法を採用している。)

同一モデルの連続登場

では、*Fudge* 及び *GISELe* において、なぜ単一頁が連続使用されているのか。それは同じモデルを大写しで連続で登場させるためであろう。*Fudge* について例えば、Adel Khasanova というモデルが p.10 から p.17 まで 8 頁連続で登場、その後、Vera Ignatius というモデルが p.30 から p.35 まで登場、その後に続く一覧頁(pp.36-37)にも登場し、更に p.38 から p.41 まで単一頁とニ五頁が交互に続くがそこにも登場している。*GISELe* においては、Alisa というモデルが pp.14-15 の単二頁に登場、その後、pp.16-26 の単一頁(8 頁連続)で登場。この後 *Fudge* にも登場していた Adel が pp.24-28(5 頁連続)で登場。Adel はその後、pp.70-76 と 7 頁連続単一頁で登場している。(*CanCam* も単一頁を多用はしているが、同じモデルを連続登場させてはいない。)

一頁一モデルの原則

さらに、*GISELe*、*Fudge* について言えば、上記に示唆されているように、一頁一モデルの原則があることにも言及しておきたい。分析対象の 7 誌のアパレル記事複合の一頁当たりに登場するモデルの異なり数を調べてみると、以下の結果を得ることができる。*GISELE* 0.90 名、*Fudge* 1 名、*JJ* 1.24 名、*CanCam* 1.42 名、*ViVi* 1.49 名、*Ray* 1.50 名、*Larme* 1.77 名である。既に見たように *GISELe*、*Fudge* は連続する単一頁に同一モデルを掲載することでモデルを際立たせている。更に付け加えると、この両誌は同じ頁及び同じ見開き二頁内において異なるモデルを登場させ対決させることは行わない。(同じ頁に複数の異なるモデルが登場するのは赤文字誌では全く珍しくない。)

モデルを目立たせるこの工夫自体がどのように AnI 被験者に気に入られたのかを判定することは難しい。なぜなら、被験者は(そして普通のファッション誌読者もそうだろうが)レイアウト全体から来る雰囲気を感じ取っているとも考えられるからである。しかしながら、

それでも、このモデルを目立たせる工夫が功を奏していると思わせる AnI 結果はある。その一つが、情報量の少なさに対する被験者の肯定的評価だ。モデルを目立たせるために単一頁が多用されているということは編集紙面上の絵情報を極限まで減らすことを意味する。後に述べるようにこの少ない情報量を AnI 被験者の多くが肯定的に受け止めているのである。一頁上の絵情報量の減少は、被写体即ちモデル（絵情報内容）の拡大・強調を意味する。それを含めての肯定的評価であるとすれば、このモデルを際立たせる工夫は基本構造のバリエーションであることから企画の押し付けを読者に受け入れさせたと考えることが可能だろう。*GISELe・Fudge* のモデル際立たせは企画の押し付けの克服の成功を意味することになるといってよいだろう。

さて、単一頁の多用、一頁一モデルの原則が 20 代初頭の女子に好まれるとするなら、*Larme* がどうして読者を惹きつけているのかという疑問が起こってくる。7 誌中最多の一頁平均 1.77 名のモデルを登場させる *Larme* は *GISELe*、*Fudge* の対極に位置するように見えるからである。これについては§3.5 で述べることにする。

3.3. GFL 誌は数の押し付けを行わない

表 3 を参照されたい。これは一頁当たりの情報掲載量（一頁上にある人写真の枚数とその頁に掲載されている物［ファッションアイテム］の数の合計）に雑誌の読者の平均年齢[14]と先の雑誌の発行部数の増減を加えたものである。発行部数の落ち込みの激しい *Ray*、*ViVi* は一頁当たりの情報量がかなり多いのに対して、読者の支持受けている *GISELe* と *Fudge* の絵情報量がかなり少ないのが分かる。（*Larme* は *JJ*、*CanCam* と共に中央値集団を形成している。）*GISELe* と *Fudge* は数の押し付けについては最も抑制的であることがわかる。（*Larme* も *Ray* 及び *ViVi* に比べれば抑制的であると言える。）

表 3. 7 誌の一頁当たりの情報掲載量の比較

雑誌名	一頁当たりの情報量	ネット推定の読者平均年齢	過去 2 年増減	過去 1 年増減
Fudge	2.95	25.9	10.4	10.4
GISELe	3.46	29.7	12.8	22.0
JJ	3.86	24.8	-6.0	2.9
Larme	3.95	21.3	n/a	0
CanCam	4.15	22.8	-9.6	6.8
ViVi	6.55	21.2	-26.4	-5.4
Ray	7.59	21.8	-29.9	-11.3

[14] 雑誌読者の平均年齢は 2018 年 4 月 28 日 Google 検索で得た結果である。雑誌名（例えば「*GISELe*」）と「読者層」の二つのキーワードを検索し、検索結果の最初の三頁にリストされたサイトから読者層の年齢に関する記述を抜き出し平均を取ったものが読者の推定平均年齢である。

では 7 誌の絵情報量は AnI の被験者にはどう評価されているのだろうか。被験者 14 名中 11 名に 7 誌のアパレル記事に掲載されている情報量について尋ねてみた。そして、その回答を「多すぎ」「多い」「多少多い」「普通」「多少少ない」「少ない」「少なすぎ」にわけ、それぞれに 3、2、1、0、-1、-2、-3 ポイントを与え 7 誌がそれぞれ何ポイント獲得するか調べてみた。また、この 11 名の被験者には 7 誌それぞれの情報量についてもコメントしてもらい、そのコメントを肯定的評価（例えば「見やすい」「ちょうどよい」）と否定的評価（例えば「多すぎる」「ごちゃごちゃしている」）に分け、前者に 1 ポイント、後者に-1 ポイント与え 7 誌それぞれがどれくらい得点するかも調べてみた。これらの結果をまとめたのが表 4 である。被験者による情報量の主観的測定値は表 3 の情報量と（*Larme* の順位を除いて）一致する。この表から指摘できるのは情報量が多い（表 4 の「量測定」のコラムがプラスの値になっている）場合、*ViVi* を除いて評価がマイナスになっている点だ。情報量が多いと感じられるとそのレイアウトは否定的コメントを受け、情報量が少ないと感じられるとは肯定的コメントを受けると言える。ミニマルなレイアウトが被験者に好まれている格好になっている。

表 4. 情報量の測定と評価

	情報量に対する主観的測定								
	多すぎ	多い	多少多い	普通	多少少ない	少ない	少なすぎ	量測定	肯定的評価-否定的評価
Fudge	0	0	0	8	0	3	0	-6	5
GISELe	0	0	0	8	1	2	0	-5	7
CanCam	0	0	0	8	2	1	0	-4	5
JJ	0	0	0	10	0	1	0	-2	8
Larme	1	2	1	6	1	0	0	7	-2
ViVi	0	4	1	6	0	0	0	9	6
Ray	2	5	1	3	0	0	0	17	-3

謎が二つ残る。一つは *Larme* が読者から支持を受けている理由は絵情報量とはさほど関係がないのかもしれないという点。（勿論、*Larme* の絵情報量は Ray や *ViVi* ほど多くないので、その意味では絵情報量も読者からの支持獲得と関係があるのは当然なのだが。）もう一つは *ViVi* が絵情報量が多いながらも被験者から支持されている点である。*Larme* に関してはモデルのメイクとコーデのユニークさが読者獲得の大きな要因のように思われる。これに関しては、§3.5 で詳しく述べることにする。

ViVi に関して、被験者による主観的絵情報量の測定では、*ViVi* の絵情報量は *Ray* より *Larme* のそれに近いと判定される（表 4）が、実際に絵情報量を測定してみると、*ViVi* は *Larme* よりは Ray に近いという結果が出てくる（表 3）。どうして *ViVi* の絵情報量をさほど多いと感じなかったのか。そこで、なぜ *ViVi* の絵情報量を高評価したのかを被験者に聞いてみたところ、2 名の被験者から次のような意見が出された。目録・一覧頁において、*Ray* は物写真でアパレルアイテムを紹介するのが主なのに対して、*ViVi* はモデルの纏うコーデを通してアパレルア

イテムを紹介するのが主であるので絵情報が一頁にかなり詰まっていても見やすさを感じるから、という意見であった。ただ、そうなると新たな疑問が出てくる。レイアウトが見やすいのならどうして *ViVi* の人気は失速しているのだろうか。これについては§3.6 で考察する。

3.4. GFL 誌による価格の押し付けの現状

価格の押し付けという視点から見ると、GFL 誌は明確に押し付けを行っている。表 5 は 7 誌のアパレル記事複合内で紹介されているアパレルアイテム中、ニット（半袖より長い袖のプルオーバー型のもののみ)、シャツ（半袖より袖が長い袖のもの)、ブラウス（半袖より袖が長い袖のもの)、デニムジーンズの価格の平均値と、その平均値でニット（K）とデニムジーンズ（D）のコーデをした場合いくらになるかをまとめ、価格の高い順に 7 誌を並べたものである[15]。

表 5. 7 誌のファッションアイテム価格比較

	ニット	シャツ	ブラウス	デニムパンツ	K+D
Fudge	21413	25525	17000	22387	43800
GISELe	18814	21616	17445	22099	40913
JJ	11013	21850	11420	21646	32659
Larme	8856	11178	12917	12408	21264
CanCam	8627	10400	8690	12538	21165
ViVi	6664	9025	9089	13196	19860
Ray	6851	7057	8608	6745	13596

読者の確保に成功していると思われる GFL 誌のアパレルアイテム価格が、発行部数が激減している *ViVi* や *Ray* のそれより高くなっているのが分かるだろう。アパレルアイテムの価格の高さにも拘わらず、GFL 誌は読者の拡大、あるいは、現状の確保に成功していることになる。そこで、14 名の被験者に、7 誌のうち、現在買っている、もしくは、買いたい雑誌があるかと聞いてみたところ、次のような結果が得られた。

［7］7 誌中現在買っている、又は、買いたい雑誌は

① *GISELe* 6 名
② *Fudge* 3 名
③ *CanCam* 2 名
④ *ViVi*, *Larme*, *JJ* 1 名

GISELe、*Fudge* をどうして買いたいのかその理由をインタビューで聞いてみると、両誌と

[15] モデルがニット（または、シャツかラウス）の上にジャケットやアウターを着ていて、そのニット（または、シャツかラウス）が半袖よりも袖が長いかどうか確認できない場合はそのニット（または、シャツかラウス）はこの統計処理から除外している。

も「外国人モデルだから格好よく見える」が 3 名で、以下、*GISELe* では「扱っているスタイルがカジュアルだから」が 2 名、「なんとなく」が 1 名となっている。（被験者が言う「外国人」とは勿論コーカソイドモデル、「白人」のことである。）そこで、被験者に *GISELe*、*Fudge* に出ているモデルが好きかと聞いてみたところ、（14 名のうちの）11 名中 7 名が好きだと回答した。理由は「かわいい」（4 名）、「格好いい」（3 名）、「シンプルなファッションが似合うから」（3 名）、「モデルの顔が綺麗」などがあり、更にその 11 名に *GISELe*、*Fudge* の外国人モデルの印象について尋ねたところ、7 名が「外国人」には日本人にはない特性があることを指摘している。いずれも肯定的な特性で、外国人は「髪型・顔がカッコいい」又は「綺麗」（3 名）、「シンプルな服が着こなせる」（2 名）、日本人とは「異なる体形をしている」（1 名）、「何をしても様になる」（1 名）、「自然に振る舞っているように見える」（1 名）、「外国人モデルが出ていると雑誌が高そうに見える」（1 名）とコーカソイドモデルは別格扱いされていることがわかるのである。

では、日本人と体形（或いは形状）の異なるコーカソイドモデルがまとったコーデの情報がファッションアイテム購入に役に立つのだろうか。7 名の被験者中 6 名は役に立つとは思っていなかったのだが、それでも *GISELe*、*Fudge* が好きな気持ちは変わらないわけだ。要は憧れの世界（或いはモデル）が手に入ればそれでいいようだ。事実 2 名が、購入後 *Fudge* はとっておいて暇なときに読むのが目的だと答えている。*GISELe*、*Fudge* が憧れを提供している限りはそこに掲載されるアパレルアイテムの価格は雑誌購入の際問題とならないということになる。

3.5. GFL 誌によるモデルの押し付けの克服/憧れの世界の提供

それでは GFL 誌が提示している憧れの世界とはどのようなものなのか。キーワードは二つ。一つは *Them Magazine*（2016）の言う「リアリティは不要である」という台詞。もう一つは、GFL 誌のモデルに共通する集合性である。集合性は没固有性と非日常性よりなり、後者の性質は「リアリティは不要である」との立場と軌を一にするものである。まずは没固有性から見ていこう。

没固有性

没固有性とは、モデル一人一人が名前を持つ固有の人物として認識されていない状態を指す。赤文字誌には専属モデルがいる。専属モデルはそれぞれ固有名詞（名前）で認識され、記事内でも彼女らの名前が言及されることは普通に行われる。赤文字誌ではそれぞれが固有性を有するモデルであるわけだ。ところが、*GISELe*、*Fudge* ではこのような記事内でのモデルの名前への言及は通常行われない。（勿論、アパレル記事の先頭頁で表示されるクレジット内には名前は書かれているが。）憧れの対象であることが意図されているモデルが固有名詞で呼ばれないのである。言い換えると、固有名詞で呼ばれるほど明確にユニークな個人として認識される「人」ではないと言える。この視点に立ってみて象徴的であったのが被験者一人の *GISELe*、*Fudge* のモデルの特徴を述べた言葉であった。彼女は *GISELe*、*Fudge* のモデルはきれいだが、「ただ白いだけ」の印象しかないモデルだと言ったのである。「白い」だけの印象

で固有性がない、それが GISELe、Fudge が演出している世界なのではないだろか。

実はこの没固有性が *Larme* のモデルにも見いだせるのである。

Larme は赤文字誌の様に複数の専属モデルを持っており、時折記事の中でモデルは名前を呼ばれることがある。が、注目すべきは彼女らのガーリーメイクとその衣装である。チークを濃いめ（のピンクか朱色）にして地の白を強調、眉山なしの平行眉、目の周辺はブラウンで強調、こういったメイクを施したモデルが「フワフワ」「ヒラヒラ」（被験者の表現）のガーリー服（その多くがロリータ系）を纏うのである。こうすると、モデル間の判別が難しくなると考えられる。実際、被験者 14 名中 11 名に対して *Larme* の pp.2-8 に登場している 3 名のモデルの識別ができるかどうか尋ねたところ、5 名が識別ができないと答え、1 名が識別はできるが非常に似通って見えると回答したのである。つまり、11 名中 6 名（55%）の被験者がモデル間の識別が不可能か又は非常に難しいと答えたことになる。この 11 名にはそれ以外の頁に登場するモデル間の識別についても訪ねたが、その 6 名は同様にモデル間の識別が出来ないか、かなり難しい頁がかなりあると回答している。*Larme* はメイクとコーデでモデルの固有性を消していると言ってよいだろう。そう考えると、*Larme* が一頁に 7 誌中最多の 1.77 名ものモデルを登場させることがどうしてできるのか、その理由が見えてくる。モデルに固有性がないから多少多めにモデルを登場させても大きな問題は生じないからではないだろうか。彼女らは一人一人固有のモデルであるというより、女の子の「絵本」（*Larme* p.81）、或いは、「おとぎの国」（*Larme* pp.3-9）の均質的住人と言うべきだろう。

非日常性

GFL 誌のモデルはリアルな存在ではない。なので、GFL 誌のモデルが、読者が経験するような日常を言演じないのは当然のこととなる。*CanCam* の十八番の一つに、日ごろ起こりそうな出来事をドラマ仕立てにしてモデルが演じることでアパレルアイテムをプロモートする企画がある。例えば、*CanCam* の pp.48-59 の 30 日着回しコーデ企画、「毎日"ピンク„の一か月コーディネート」がその例だ。OL2 年生に扮したモデル佐野ひな子が 30 日に渡る OL 奮闘の日々を演じる。例えば「2 月 1 日」に佐野は下記の出来事を演じている（と言っても一枚の写真があるだけなのだが）。

［8］　ノー残業 Day の日は同期飲みが定番。「え、あのふたり…つきあってたの—!?」まさかのオフィスラブに衝撃！　う〜ん、恋の話にお酒がすすむっ♪　（p.53）

また、*Ray* の pp.45-51 及び pp.72-85 では「新しい服が運ぶ新しい春の恋」と題して 4 人のモデルが恋愛劇を演じている。例えばその一人白石麻衣は、恋に破れた女性がまた新たな恋人を見つけるというドラマを演じている（pp.44-49）。

GFL 誌はこのようなドラマをモデルに演じさせることは決してない。*Them Magazine*（2016）は「リアリティは不要である」と言ったが、その文言を多少修正すると、GFL 誌にあっては「リアリティはあってはならない」と言い換えすべきだろう。

モデルが日常を演じることがないことによってモデルの住む世界は読者のそれとは切り離されることになる。リアリティーがない世界であればこそ、読者にとっては憧れの世界になるのだろう。*Them Magazine*（2016）の提案はGFL誌に採用されているとみて間違いないと考えらる。

3.6. SNSの影響力/デザインの押し付けの反動

絵情報の掲載量は多いが見やすいと高評価を受けている *ViVi* だが、*Ray* と同様発行部数を激減させている。そこにはデザインの押し付けの反動が表れているかもしれない。

AnIで2名の被験者から面白い意見が出されたので紹介しておこう。この2名のうち1名はかつて *ViVi* の読者であった。そこで、その被験者に *ViVi* の購入をやめた理由を聞いてみたところ、インスタグラムで *ViVi* 専属モデルをフォローしているからだという。それでなぜ *ViVi* を買わなくなったのかと聞いてみると、インスタグラムではモデルの私服姿が見られそちらの方がモデルに似合っていて参考になるからと答えたのである。裏を返せば、*ViVi* が紹介しているコーデは参考にならないということだ。と少なくともインスタグラムでモデルの私服姿を見た被験者はそう思ったわけである。彼女にとってみれば *ViVi* が掲載しているコーデは編集・広告側からの押し付けと解釈され、それゆえ、*ViVi* の購読をやめたという訳だ。まとめると、SNSでモデルと読者が直接つながり、ファッション誌掲載のコーデが編集・広告側からの押し付けであると読者に感じられるようになった結果、読者がファッション誌を買わなくなったということだが、これは先に言及した2名の被験者のもう一人の発言内容でもあった。

さて、この様にSNSの使用がきっかけでファッション誌のコーデ選択の評価が厳しくなってきている状況にあって、*ViVi* は媒体資料で、*ViVi* のモデル（読者モデルを含む）が使うSNSのフォロワーが150万人いるとの説明の後、こう書いているのである。

［9］ 読者層が多様であるという点が *ViVi* 読者の一番の特徴です！全ての読者に共通しているのが、とにかくSNSが命だということ。SNSへのpostを考えて何を着るかだったり、メイクをどうしようかということを日々考えている *ViVi* の読者は圧倒的にデジタルシフトが進んでいる読者です。インスタグラムを筆頭にSNSの伸長率が高いです。（講談社第二事業局2018）

SNSの影響力は強い。それには同意する。が、SNSはもろ刃の刃である。その使用を誤るとファッション誌上のコーデは広告・編集側のデザインの押し付けだと解釈されかねないのである。先の被験者のなぜに *ViVi* 購入をやめたのかの発言を思い返す時、デザインの押し付けを行ったと読者に認識されたがために *ViVi* の発行部数が激減したのではないか、という可能性は低くないかもしれない。

4. 結論

本稿はネットの意見に耳を傾けつつ、GFL誌が憧れの世界の提示を行っているとの仮説に

基づいて、この三誌が、三つの押し付け（「企画の押し付け」、ブランドアイテムの「数の押し付け」、同「価格の押し付け」）をどの様に克服しているかをテクスト分析と女子大生・女子短大生に対して行ったアンケート・インタビューの結果を交えて考察してみた。

GISELe、*Fudge* のモデルが 20 代初頭の読者に支持されていることは、AnI 結果からうかがい知ることができる。*GISELe*、*Fudge* のモデルはコーカソイドモデルであって、その故にこのモデルたちを介してのコーデ提案は日本人読者にファッションアイテム購入に際しての有益な情報とはなりえるものではない。そうと知りつつも日本人読者が両誌を買ってしまうのは憧れの世界の入手が目的であるからだと論じた。没固有的で非日常的なモデルの世界にある種の癒しを求めての購入だと思われる。

憧れの世界の住人を際立たせる工夫を GFL 誌は行っていると本稿は判定した。*GISELe* と *Fudge* は単一頁の連続使用で同一モデルを紹介するという工夫を用い、*Larme* はガーリーメイクとフワフワコーデでモデルの均質化を図るという工夫を用いていることを指摘した。*GISELe*、*Fudge* のモデルの際立たせは更にレイアウトのミニマル化という時代の波にも合致して強く 20 代初頭の女性に支持されている可能性が高いことも示唆した。

Larme の評価に関しては AnI 被験者からはポジティブな意見は聞かれなかった。この点において本稿は一般的推論を働かせるしかなかったのも事実であるが、ガーリーファッションで押し通す *Larme* はニッチ化に成功している稀有な例なのだろう。このあたりの研究はまた稿を改めて行いたい。

憧れの世界の提示、そして、その世界の主人公であるモデルを際立たせる工夫は、モデルが纏うコーデが高価であったとしても、ファッション誌を読者に買わせる効果は十分あると考えられる。但し、その際、導入するファッションアイテムの数は（今の趨勢に従い）控えめにするのが原則だと思われる。更に、GFL 誌三誌とも基本構造を用いている点から、この三誌がファッションアイテムの購入の呼びかけから始め多くのファッションアイテムの紹介へと読者を誘導している事実は疑いようがないのである。しかし、この基本構造の使用が押し付けと感じられないのは究極的には憧れのモデルの存在（とモデルに対する読者の希求）、及び、モデルを受け入れやすくしたミニマルレイアウトのなせる業なのだと言ってもよいのではないだろうか。

かくして GFL 誌は、企画の押し付け、数の押し付け、価格の押し付けを克服したのだろうと推察する。

これからの紙媒体

さて、紙媒体ファッション誌のこれからの可能性について思うところを書いてみる。（ただ、何らかの解答を提示するわけではないことは断っておくが。）

憧れの提示とミニマルレイアウトで 20 代初頭の女性を惹きつけることが可能であるとの本稿の示唆だが、ほかの雑誌もこれに追従すればよいのかと言えばそういうわけには当然いかない。*GISELe* と *Fudge* で参考になるのは勿論モデルを際立たせ方だとは思うが、コーカソイドのモデルを使用するとなると、*GISELe*、*Fudge* とは違った世界の提示が必要となろう。*GISELe* はスリムカワイイ系及びクール系のモデル 5 名ほどを登場させるコーカソイドの（キ

レカジ系）世界、*Fudge* はヨーロッパならどこにでもいそうな赤毛雀斑のコーカソイド女子の世界を提示している。これ以外にどの様なコーカソイドの世界提示が可能なのだろうか。*Fudge* と似た雑誌で *Cluél* という雑誌があるが、競合関係にある雑誌を出してもどちらかの発行部数が減るだけだろう。非白人系外国人の登用もあるかもしれないが、日本人の持つ「外国人＝白人」という期待を裏切る雑誌の成功は難しいかもしれない。

単一頁を連続させるテクスト構造に、例えば、日本人モデルを採用するという選択肢はあるだろうか。嘗てそれを行った雑誌があった。その名を *Vikka* と言ったが、結局休刊の憂き目を見ている。（*Vikka* は日本人モデルを用いた *Fudge* といってもよいライフスタイル誌であった。）日本人モデルは *Fudge* や *GISELe* の様に単一頁の連続に耐えるだけのルックスを備えていないのかもしれない。（少なくとも日本人読者はそう思っていることだろう。）

同一モデルの単一頁連続登場でうまくいかないことを知ってか、*Larme* は一頁当たり 1.77 名のモデルを登場させた。結果的に成功を収めた *Larme* であるが、そこには均質な日本人モデルの集団がいたわけだ、ガーリーな。これを本稿ではニッチ化の成功例ではないかとしたが、同様の例に『小悪魔 ageha』のキャバ嬢的の世界の提示も挙げられるのかもしれない。*Larme* のようなテクスト構造を使用するのなら、マージナライズされたそれなり数の支持者が必要なのかもしれない。

レイアウトのミニマル化の観点からも一言述べる。20 代初頭の女子がミニマルデザインを好んでいるとする仮説が正しいのであれば、20 代の女性をセグメント化しそれに基づいてファッション誌を発行する必要はなくなるだろう。表 3 を参照されたい。この表には 20 代女性読者が情報量と単価でセグメント化されている状況が浮き彫りにされている。この表で見る限り、一頁当たりの情報量の増大はアパレルアイテムの単価の上昇と反比例し、単価の上昇は読者の平均年齢の上昇と正比例の関係にあり、この正・反比例の縦軸がセグメント化されそれぞれのセグメントに特定の雑誌が張り付いている訳なのである。もし、20 代初頭において情報量が少なくファッションアイテムの単価が高いファッション誌が当然のこととして受け入れられているとしたら、正・反比例の縦軸のセグメント化は無用の長物となってしまうことだろう。そうした時、何らかのコンセプトで *Ray* から *Fudge* までの価格帯をカバーする雑誌が出てきてもおかしくないかもしれない。（その時の憧れの世界がどんなものか想像はつかないが。）ただ気をつけねばならないのは闇雲にレイアウトをミニマル化すると、スマホ上の情報提示画面との違いがなくなり兼ねないという点だ。そうなればスマホの即時性の前に紙媒体ファッション誌は惨敗するだろう。

雑誌を手に取って読むとは心地よいものだ。これがなくなることはないと思う。が、今以上の編集上の工夫が求められているのも事実である。

やり残しの仕事

今回のレイアウトの分析はまさに手探りの状況であった。何をどこから始めてよいのかわからないという状態から出発した。なので、本稿は全体としてパッチワークの印象があることだろう。それは否定しない。本稿はとにかくどこからか始める必要があるとの考えに立って執筆したものである。よってやり残し（或いはやりかけ）の仕事は無数にある。アパレル

記事に使われている編集紙面の色、テクスチャーの分析。本稿ではほんのわずかしか触れなかったブランドのデザインの問題。更には本稿では触れなかったファッショントレンド。トレンドを見誤るとどのようにいいレイアウトができたとしても読者をひきつけることはできない。更に、アンケートのやり方の問題。本稿では、実際にファッション誌に使われているレイアウト・デザインについてピンポイントで被験者に聞くことができなかったことは率直に認めたい。ただ、これはファッション誌を実際に分析してみるまでは何を 20 代初頭の女性に聞くべきかわからない状況にあり、また、分析で見出したもの（雑誌編集上の工夫）がその編集紙面上でどのような働きをしているのかも思考実験を繰り返して漸く見え始めたという状況だったので、ピンポイントな質問はこの研究のかなり遅い段階においても無理であったと思われる次第である。ただ、本稿を作成するにあたっていろいろ学ばせていただいたので、次稿においてはもっとピンポイントな質問を被験者に行うことができると確信している。また、その時は被験者の数も多くなっていることだろう。

本稿の真の狙い

最後に、本稿の真の狙いに関して一言する。ファッション誌のレイアウトに関する先行研究は山本（2008）以外見当たらない。テクスト研究というと絵情報と言語情報を分け、それを異なる二つの記号論システムだととらえ、その両者の対応関係をみるのが主流のようだ。だが、それではいつまでたってもレイアウト全体を分析することはできない。言語情報の可視的存在が全く無視されている現状は従来のテクスト分析の限界を吐露するものであると言える。勿論本稿においても言語情報の編集紙面上の位置については分析することはできなかった。当然のことながら、いつかはこの言語情報のレイアウトにおける位置（そしてその機能）も分析しなければならないことは言うまでもないことだ。

が、その前に、編集紙面上の絵情報量を分析する方法をまずは確立させたかったというのが本稿の真の狙いであった。本稿は筆者が 2014 年から取り掛かったプロジェクトの第一歩である。絵情報量の分析の次は、記事を構成する各々の頁にテクスト構成要素（言語テクストはその一部）がどのようなバランスで配置されるのかの分析が来ることになるだろう。本稿はとりあえず、言語情報も絵情報も両方含んだ総体としてのテクストの分析の基礎を紹介したつもりである。その際細心の注意を払ったことは、誰がやっても同じ結果が出る方法の開発であった。そこれを本稿では行ったわけである。ただ、今本稿を見直すに、舌足らずで説明がもどかしいところが散見される。これはひとえに私のレイアウト理解がまだ明確な領域に至っていないことを露呈するものでもある。至らないところはあるが本プロジェクトの最終目標、人の心を打つレイアウト・構図とは何なのかの解明、へ向かって前進して行きたいと思う。

謝辞

本稿の冒頭頁の脚注にも述べたように、本稿の初稿は 2018 年度ファッションビジネス学会で発表したものである。当日会場にてコメントしてくださった方々にまずは感謝いたします。

また、インタビュー・アンケート調査をするに当たり、9 名の学生の日程調整をして下さっ

た香蘭女子短期大学の坂元美貴子先生及び香蘭女子短期大学のスタッフの方々にもお礼を申し上げると共に、実際にアンケート・インタビュー調査に応じてくれた 9 名の香蘭女子短大の被験者、並びに、大分大学の 5 名の被験者にも感謝いたします。

参考文献

Bateman, J.A.（2014）*Text and image: a critical introduction to the visual/verbal divide*. London and New York: Routledge.

講談社第二事業局（2018）「*ViVi*2018 年度メディアシート」 http://ad.kodansha.net/mag/010/profile.pdf.

南充浩（2015）「なぜ、ファッション雑誌は売れなくなったのか」https://www.fashionsnap.com/article/2015-08-05/magazine/.

村井愛子（2015）「80 万部が 11 万部になった『*CanCam*』。売れない雑誌の共通点とは？」 http://toriaezutori.com/marketing/658.html.

南里と平岡（2017）「ファッション雑誌のレイアウトの可能性」ファッションビジネス学会口頭発表、東京：文化学園大学、2017 年 11 月 25 日開催.

日本雑誌協会（2016）*Magazine Data 2017*. 東京：日本雑誌協会.

日本雑誌協会（2017）*Magazine Data 2018*. 東京：日本雑誌協会.

大里浩二監修（2016）『グラフィックデザイン基礎講座』東京：玄光社.

坂本伸二監修（2015）『デザイン入門教室』東京：SB クリエイティブ.

Them Magazine（2016）「ファッション雑誌講座第 1 回『なぜ日本人モデルではないのか？』」 http://themmagazine.net/blog/208.

山本麻子（2008）「女性ファッション誌におけるレイアウト・デザインについて：『赤文字雑誌』がファッションに及ぼす影響」『デザイン学研究特集号』16 巻（2008）1 号、pp.14021.

分析のためのデータ

CanCam 2017 年 3 月号小学館.

Fudge 2017 年 3 月号三栄書房.

GISELe 2017 年 3 月号主婦の友社.

JJ 2017 年 3 月号光文社.

Larme 2017 年 3 月号徳間書店.

Ray 2017 年 3 月号主婦の友社.

ViVi 2017 年 3 月号講談社.

アンケート調査資料

Belle Maison（2016）「Women smile report」http://www.b-desse.jp/report/1223/.

Bwrite（2018）「20 代後半女性では、ネットもリアルも大切な情報源。 ミレニアル世代調査：情報収集編」https://bwrite.biz/archives/16658.

Marketing Camp（2017）「ファッション情報、SNS では Instagram が 1 位に、ジャストシステ

ム調査」https://eczine.jp/news/detail/4212.
Research+（2017）「ファッションに関する調査」http://www.research-plus.net/html/investigation/report/index104.html.

ネット上の消費者側の資料

ガールズちゃんねる(2016)「雑誌を買わなくなった人!」https://girlschannel.net/ topics/924553//.

研究ノート：絵情報ドミナント型テクストの分析法

南里敬三

１．目的

① 絵情報ドミナント型テクスト（例えばファッション誌のファッション記事）の分析において、バランスが分析できるテクスト分析法の確立を目指すが、その第一段階として、日本型ファッション誌における面連続構造（工藤 2017）の解明から、それぞれの頁のレイアウト・バランスの分的へつながる道筋を提案する。

② システミック言語学の枠内でのテクスト分析の基本は「語彙文法」であり、絵情報もこの語彙文法に翻訳されるのを旨とする（例えば、Bateman 2014）。絵情報を言語情報に置き換えないという立場からテクスト生成論を構築する道筋も示唆する。

２．用語の定義

① テクストは言語情報と絵情報から成る。絵情報とは言語コードでの解読ができないものを言う。

３．Multi-modal text 分析における問題点

① Multimodal text 分析でのアプローチ

i. Gunter & Leeuwen (2006)の見解：絵情報もテクスト構成要素として認識している。

ii. Bateman（2014）で紹介されているテクスト分析家の見解：テクストは、言語情報のテクストと言語情報でないイメージとから成る。

a. Bateman（2014）で紹介されているスタンスはロラン・バルト（『モードの体系』）と同じ。ソシュールの伝統からくる分析は基本言語学。その限界が露呈されている格好だ。

② Bateman 系の Multimodal 分析の問題点

i. 言語の見かけが無視される

a. 編集紙面上の文字のサイズ・位置（言語情報の絵情報的性質）が無視される。よって、レイアウト（テクスト構成要素の配置）によって意図されていただろう印象的効果・機能（例えば、安定性）にアプローチが出来なくなっている。これは理論の構造上の問題である。絵情報がテクスト構成要素とはみなされず、image と呼ばれテクスト（言語情報）の補完としか見なされておらず、テクスト構成要素を俯瞰できる論理的場所が存在しないことに起因する。

４．レイアウト分析に関して

① 究極的には視覚的心地よさは何によってもたらされるのかの研究となる。

i. テクストには、テクスト全体（雑誌の場合は見開き二頁の）が醸し出す「視覚的心地よさ」（大里 2015: 50）の表出という機能がある。（これに加えて面連続構造にお

けるレイアウト・バランスの変化も考える必要がある。これは後述。）

ii. このような「心地よさ」はテクスト構成要素が創り出す対称性・非対称性バランスというカタチで具現される。

a. ここでは、雑誌編集の基礎は見開き二頁における非対称性バランスであるとする（Hand & Middleditch 2013: 123, 工藤 2017）。

iii. 「心地よさ」は当該テクストの目的に応じて変化する。それは「美しさ」だったり「華やかさ」だったり、「調和」、「安定感」、「権威性」や「不安定感」、「現代的感覚」だったりする（内藤他 2015:15-17;坂本 2015:52-53; Samara 2017:60）。

a. 心地よさとテクスト構成要素の配置の関係は恣意的ではないと考える。

② グラフィックデザインや雑誌編集の分野では「見かけの良さ」が印象的に用いられている。心地よさには二種類ある「絶対的心地よさ」と「相対的心地よさ」である。

i. 印象的すぎる絶対的心地よさ

a. 編集誌面（通常四角形）上に視覚的心地よさを醸し出される地点（ホットスポット）が存在するとする仮説が存在するが、ここで言われるのが「絶対的心地よさ」である。

（1） 黄金分割 : 縦 1 、横 1.618 の長方形を基本の誌面として、そこから正方形を切り取っていくことで見出すことのできる、ホットスポットが存在するが、変種紙面上の何がそのホットスポットに来ると見えが良くなるのか検証が必要（Hand & Middleditch 2013:84; 坂本 2015:62-63）。

（2） 同様の絶対的見かけの良さに、白銀分割（坂本 2015:62-63）、三分割法 Hand & Middleditch 2013: 84）、アルンハイムの構造的スケルトン（Arnheim 2001）がある。

（3） Multi-modal テクスト分析においてもホットスポット型のモデルが提案されている（Gunter & Leeuwen 2006:197）。Gunter & Leeuwenm のモデル Multi-modal は Halliday の文法（Halliday & Matthiessen 2014）との親和性が強く、その妥当性は精査されねばならない。

b. 「相対的視覚的心地よさ」はテクスト構成要素の配置によってうみだされるもので、対称性バランスと非対称性バランスがある。対称性バランスは対称軸・点を介して相対する平面上に在るテクスト形成要素間の幾何学的関係が等価であることを指すが、非対称性バランスとは一体何を意味しているのか。相対する面上のテクスト構成要素の位置関係が等価でないのにバランスがとれているとはどう意味なのか（内藤他 2015:78-79 ; 坂本 2015:24, 52）。

（1） その他の心地よさ創造のリソース

① グループ化（グループ間の至近性）

② 寄せ（アラインメント）

③ ベクトル（及び、余白の位置）

③ 面連続構造分析の必要性（工藤 2017）

i. 当該頁のバランスはその前及び後の頁のバランスによって決まると考えられる。見開き二頁を一つの面と捉えて先行または後続する面のレイアウトとの関連を考えてレイアウトが伝達する機能を考える必要がある。

a. 絵情報の連続も視覚的ナラティブを形成している可能性がある。

5．提案

① 頁レイアウトと写真の構図の接点

i. ファッション誌等ででレイアウトの面連続構造を見る時、レイアウトタイプがランダムに選択されていないことが分かる。

a. 単二頁＞単一頁＞ニ五頁＞目録頁＞一覧頁のようは進展がファッション誌には存在する。

ii. ファッション誌の記事冒頭の単二頁・単位一頁では、ポートレイト型写真が用いられ、その際、ワイドショットからクローズアップまでオプションの幅は広い。

a. ヒト写真は構図（ショットタイプ）が確立されている（Dise 2000-2020; 池内と福井 2012;秦他 2014）。ワイドショット、フルショット、3/4 ショット（或いは二―ショット）など。

iii. これに対して、ニ五頁、目録頁、一覧頁と進みむにつれて、写真一枚のサイズは小さくなり、モデルの写真であれば直立のフルショットに殆ど限定される。

iv. 面連続構造のパターンが分かっていれば、当該頁が記事中のどこに位置するかでレイアウトは大かた予測が付くことになる。

6．データ

① 赤文字 4 誌と GISELe、Fudge、Larme、Tulle、Vogue、Elle を分析

7．分析

① 面連結構造分析

② レイアウト分析

i. 分離型（非対称性バランス）：写真と文字が誌面上に棲み分け。

ii. 直線交差型（対称性・非対称性バランス）：被写体（誌面中央に配置）をまたいで文字情報が挿入されているもの。

iii. 放射型（放射対称性バランス）：誌面上のある地点を中心にして、放射状に外に広がるレイアウト。

iv. 複写型（対称性バランス）：特定のパターンを複写してペーストしたもの

v. その他

③ バランスの分類

i. 面連即構造の中でバランスが意味するものが何かを考察する

８．結語

① 絵言語テクスト分析方法確立のロードマップ

i. 今後の展開：配色をレイアウト研究にどのように入れていくか。

ii. ショットタイプとシルエットの関係の分析への道

a. モデル紹介を重要な機能の 1 つとするファッション誌は時としてコーデのシルエットが全く分からないモデル写真を提示しているケースが赤文字誌に多いが、これがもたらす意味を考察。

b. ファッション誌の物理的制約とファッション提案の親和性の議論。

② 絵情報には感覚的且つ感情的流れを表出する役目があり、これは、例えばシステミック言語学で想定されている ideational、interpersonal、textual のカテゴリー（Halliday & Matthiessen 2014）のどれにも収まらないものである可能性が高い。テクスト生産者（話し手か書き手）の自我（セルフ）を想定し、そのマインドの深い部分に感覚・感情層の想定をするテクスト生成モデルが必要ではないかと示唆することになるだろう。

参考文献

Arnheim, R.（2001）Arts and Visual Perception: a Psychology of the Creative Eye. University of California Press.

池内秀人、福井麻衣子（2012）『写真構図のルールブック』東京：マイナビ.

工藤雅人（2017）「『広告』を飼いならす：1950 年代の『装苑』における誌面構成と『広告』の関係に焦点を当てて」『文化学園大学・文化学園退学短期大学部紀要』48（2017-01），pp.23-24.

大里浩二（監修）（2016）『グラフィックデザイン基礎講座』東京：玄光社.

Kress, G. & van Leeuwen, T. (2006) *Reading Images: the Grammar of Visual Design*, 2nd Edition. Lindon & New York; Routledge.

坂本伸二（2015）『特別講義デザイン入門教室』東京：BS クリエイティブ.

Samara, T.（2017）*Making and Breaking the Grid*. Beverly: Rockport.

Dise, J.（2000-2020） 'Filmmaking 101: Camera Shot Types.' Retrieved from https://www.bhphotovideo.com/explora/video/tips-and-solutions/filmmaking- 101-camera-shot-types.

内藤タカヒコ, 山崎澄子, ヤマダジュンヤ, 内村光一（2015）『プロとして恥ずかしくない新デザインの大原則』東京：MdN.

Halliday, M.A.K., Matthiessen, M.I.M.（2014）*Halliday's Introduction to Functional Grammar*. London & New York: Routledge.

Hand. D. & MIddleditch, S. (2013) *Design for Media: a handbook for students and professionals in journalism, PR and advertising*. Harlow & London: Person.

秦達夫、鹿野貴司、小澤太一、萩原和幸、住吉志穂、福田健太郎（2014）『写真がうまくなりたいなら覚えるべき 50 の掟』東京：玄光社.

Bateman, J.A. (2014) Text and Image: a critical introduction to the visual/verbal divide. Lindon & New York; Routledge.

OTF の試み

南里敬三

2009 年 12 月に小さなテクスト言語学を始め、2018 年にその学会 Oita Text Forum にピリオドを打った。足掛け 10 年に渡るアカデミックな活動であったが、この間、テクスト言語学が置かれている環境は激変した。この過去 10 年を簡単に振り返ってみたい。

きっかけ

日本と中国のテクスト研究者 4 名と Oita Text Forum（以下 OTF）を結成したのは 2009 年の 8 月の事であった。発端は第 36 回体系機能言語学世界大会が開催された精華大学（在北京）での私から旧知の Wendy Bowcher 教授への呼びかけ（2009 年 7 月）であった。私はシドニー大学で体系機能言語学（以下「システミック言語学」と呼ぶ）を学び、そのフレームワークを用いテクスト分析を行ってきたのだが、社会学的観点からのみのテクスト生成のプロセス解明を目指すシステミック言語学に疑問を感じていた。認知学的なアプローチを取り込まなければシステミック言語学の更なる発展はないし、認知学的なアプローチを取り込むことで新たなテクスト生成理論が出てくるのではないかと思っていた。

小さな研究会の設立へ

そこで、中国の中山大学で言語学を教えていた Bowcher 教授に、今後システミック言語学のどの辺りがホットな話題になっていくかを聞いてみた所、返って来た答えは状況のコンテクスト（context of situation）の解釈だろうというものであった。テクストが生み出される状況のコンテクストがどの様にテクストの内容に影響を及ぼすのか、その論理的詰めがシステミック言語学では今後大きな課題になっていくだろう、との考えを述べてくれたのである。私がシステミック言語学に論理的限界を感じていたもの正にこの領域であった。システミック言語学への批判によくあるのはこういったものだ。テクスト生成が行われる状況の中（正確にはテクスト生成時のセッティング）より得られる情報はテクスト生成者の記憶システムに蓄えられない限りテクストの中に織り込まれることはないといった批判だ。至極当然の批判に聞こえる。が、システミック言語学においては記憶の領域をすっ飛ばしていきなり状況からの情報がテクストの中に入り込んでくると事実上論じているのである。状況のコンテクストから得られる情報は心理学的情報ではなく、人の行動等に表される社会学的情報だというのが根拠らしいのだが、かなり意味不明である。

いずれにせよ、状況のコンテクストの定義がどのようにシステミック言語学者によって整備されていくのか注目に値することは間違いない。これ OTF の設立の原動力となったのである。

OTF の誕生

以前から私は大分でテクスト言語学の研究会を立ち上げてみたいとも思っていたので、その意見を Bowcher 教授にぶつけてみた。システミック言語学だけではなく、認知系の言語学者も入れてテクスト生成の過程をオープンに話し合う場を作ってはどうだろうか、と言ってみたわけだ。Bowcher 教授は意外にも即座に賛同してくださったのである。

思い立ったが吉日。早速 2009 年内にテクスト研究のワークショップやろうということになり、日にちを 2009 年 12 月 20 日に設定し、Call for Presentations を早く出すことで意見が一致した。中国から大分に戻り、第一回 OTF ワークショップ開催に向け準備を始めたが、これと並行して、Bowcher 教授、明星大学の John Ingulsrud 教授、愛知学院大学の佐々木真教授、APU の James Blackwell 准教授及び私から成る執行部会を立ち上げ、2009 年 8 月末に Call for Presentations を出すことができた。第一回目の OTF ワークショップには 7 名の発表者が集まり、小さいながらも外国から 3 名の発表者を得て、無事終了することができた。爾来、足掛け 10 年に渡りワークショップを開催し続けることができたのは幸運だったように思える。(表 1 参を照されたし。)

OTF の実践

社会学系と認知学系のテクスト研究者が顔を合わせるとどうなるのか。その意味で最も記憶に残るのは 2011 年のワークショップだった。社会学系と認知学系が火花を散らすことになったのである。議論はどこまで行ってもかみ合わず、気まずい空気が会場に流れる。予期していたことではあった。が、そこから何か新しいものが生まれてくれればと私は期待していた。しかしながら、それはあり得ない期待というものであった。ただ、この年カナダから研究者が 5 名ほどこの大分に来てくれたのは一縷の光だった。ボノボが言語をどのように習得しているのかについての実践的発表だった。

OTF は大分地域に根差した活動も視野に入れていた。その点で記憶に残るのは 2013 年豊後高田市の真玉庁舎で行った第 5 回 OTF である。この時もカナダから研究者が来てくれ盛り上げてくれたが、ハイライトは豊後高田市の真玉神社で 320 年に渡って開催されていた（そして今も続いているのだが）奉納連歌会への OTF 参加者の参加である。奉納連歌会保存会の方に 36 句（長句と短句）のペア作っていただき、その内 24 句を選び、その句を 24 名の OTF 参加者（私を含む）に振り分けた。24 句はローマ字書きにし、英語の逐語訳と意訳をそえて 23 名（私を除く）の OTF 参加者にメール添付で送り、OTF 開催時までに読みの練習をしてくるように伝えた。この連歌会は 10 月中旬に行われていたのだが、OTF のために 12 月 1 日に特別に奉納連歌を真玉神社本殿で開催してくださったのである。24 名の研究者（4 名を除いてすべて外国籍）は法被をまとい、真玉神社で見事に連歌を読み上げた。保存会会長の言葉が今でも心に残る。奉納連歌会 320 年の歴史で外国人の参加を見たのはこれが初めて。感慨深いものがある、とおっしゃっていた。

先述の通り、OTF ワークショップは 2018 年 3 月をもって終了したが、これは、社会学的アプローチと認知学的アプローチの歩み寄りは難しく、両アプローチの交流からテクスト言語学の新たな展開は望めないと判断したことによる。しかしながら、10 年かかったものの両アプローチの間の溝を埋めることは論理的に不可能であることが確かめられた事は、ある意味有意義だったというべきかもしれない。で、その上で思うのだが、お互い歩み寄る必要はないのかもしれない。今西錦司が嘗て、自らの進化論をして、日本国内に棲み分けが出来ればそれでよいと言った言葉が思い出される次第である。それがテクスト言語学会の生態系なのだろう。お互いうまい具合に住み分けていけばいいことなのだろう。

これから

これからのテクスト研究は画像も含んだテクストの研究へと進むべきだろうと考えている。言語情報のみにより構成されるテクスト分析は従来のテクスト言語学で十分に行われてきた。また、絵情報（言語コードにより解体ができない情報）だけからなるテクスト分析は絵画研究や写真の構図研究の分野で行われてきたことである。が、絵情報と言語情報とで形成されるテクスト研究（例えばファッション誌の研究）の先行研究は少ない。否、事実上ないと言って差し支えない。絵情報ドミナントのテクストはどのようにして作られるのか。そこには、バランスや安定性と言った、殆ど解明されていない視覚的現象が多く存在する。そのようなものがどういった力学に基づいて構成されているのか解明する、それがポスト OTF の行先ではないかと思っている。

表 1. OTF の歩み

	開催日（会場）	発表者数（発表論文数）	発表者所属大学の国名
第 1 回 OTF	2009 年 12 月 20 日（コンパルホール）	7 名（7）	日本、中国、カナダ、フランス
第 2 回 OTF	2010 年 12 月 5 日（コンパルホール）	7 名（6）	日本、中国
第 3 回 OTF	2011 年 12 月 4 日（大分大学旦野原キャンパス）	17 名（12）	日本、中国、アメリカ、カナダ
第 4 回 OTF	2012 年 12 月 2 日（APU）	5 名（4）	日本、中国、ポーランド
第 5 回 OTF	2013 年 11 月 30 日、12 月 1 日（豊後高田市真玉庁舎）	15 名（10）	日本、中国、カナダ
第 6 回 OTF	2014 年 11 月 29 日、30 日（別府市鉄輪御幸公民館、永福寺）	6 名（6）	日本、台湾
第 7 回 OTF	2015 年 11 月 28 日、29 日（大分大学旦野原キャンパス）	10 名（10）	日本、中国、パキスタン
第 8 回 OTF	2017 年 3 月 4 日、5 日（大分大学旦野原キャンパス）	9 名（8）	日本、パキスタン
第 9 回 OTF	2018 年 3 月 3 日（大分大学旦野原キャンパス）	7 名（5）	日本、中国

学生自身が組み立てる海外研修プログラム「ミニトビタテ」を企画して —その意義と成果—

坂井美恵子

1. はじめに

ビジネスの現場はもちろんのこと、社会の多様な場面でグローバル化が加速する現代社会において、大学教育の現場でもグローバル人材の養成が大きな課題となっており、多くの大学がそれに取り組んでいる。本学においても国際交流推進戦略で「学生の海外派遣を推進しグローバル人材育成に努める」としており、国際教育推進センターが担う役割も大きい。本センターの海外派遣への取り組みとして、協定校への派遣留学や短期語学研修を実施しており、2016 年度には派遣留学の学生数が過去最高の 50 名となった。また、海外の協定校で行われる短期語学研修はこれまで韓国、台湾、イギリスのみであったが、2015 年から中国とドイツ、2016 年には新たにフィリピンの大学が加わり、それぞれ２～４週間の文化体験を含む語学研修が行われており、2016 年度の参加者数の合計は 37 名となり、これも過去最高となった。

しかしながら、これらのプログラムだけでは海外に行きたいと思っている学生すべてにその機会を提供するには不十分である。派遣留学は費用や語学力、また留年といった壁に直面して断念する学生も多い。語学を学ぶことよりも、ボランティア等の形でやりがいや達成感のある活動を求める学生もいる。そこで、筆者は 2015 年度から学生主導による実践型の海外研修を行う新しいプログラム「ミニトビタテ海外研修」を企画し、新しい海外体験の機会を提供することにした。本稿では 2015 年度と 2016 年度の実施報告を行い、参加学生と参加の動機について述べるとともに、帰国後に実施したアンケート調査と報告を分析し、学生の評価から見えてくる本プログラムの成果と意義について考察する。

2. ミニトビタテ海外研修プログラムの目的と概要

文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業やグローバル人材育成推進事業では、派遣学生数、留学経験者の数値目標を設定し、既に多くの大学が派遣留学や語学研修だけでなく、それ以外の海外研修プログラムを実施している（岡本他 2007、松田 2012、小林 2013 等）。それらは予め教員や組織もしくは旅行社等により計画が立てられており、学生はその活動を行うために参加する他者主導型のプログラムも多い。しかし筆者が立ち上げた研修は、単に出来上がったプログラムに学生が参加するのではなく、学生たち自身が研修計画を練り実行する学生主導型のものである。計画段階から学生が主体的に関わるというプロセスを踏むことにより、自ら考え行動できるような体験の機会を提供し、リーダーシップ力を養い、将来グローバルに活躍できる力を育成することを目標に掲げた。この研修のヒントとなったプログラムは、「官民協働海外留学支援制度－トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム（以下、トビタテとする）」である。これは文部科学省が民間企業と共同で 2014 年から始めた海

外留学支援制度で、応募者が自身の目標に沿った留学計画を立て、申請するものである。留学計画には必ずインターンシップやボランティア等の実践活動を行うことが条件となっており、採用されれば奨学金が支給される。直近の第 7 期派遣留学生選考結果は申請者 1989 人、合格者数 608 人であった（文部科学省 2017）。本学の学生のこれまでのトビタテへの応募者総数は、全国コース 38 名、うち合格者数は６名、大分県地域人材コースの応募者数は 25 名、合格者数は 14 名であり、特に競争率が高い全国コースは本学の学生にとって大変ハードルが高い。そこで、トビタテへの興味の喚起、ひいては合格者増も視野に入れ、新しいプログラムを「ミニトビタテ海外研修」と名付け、計画を学生自身が立てるという過程を踏襲した。研修期間は現地５泊で学生が参加しやすい期間を設定した。また、本学の派遣留学生支援制度（短期研修型）に申請し、旅費の一部に学長裁量経費での奨学金支援を受けることができた。

研修実施国は 2015 年度の第一回目がベトナム、2017 年度の第二回目がカンボジアである。これらの国々は近年経済成長が著しく、急速な発展を遂げており、中国に次ぐ生産拠点としてグローバル化を進める企業が多く進出しており、日本にとって連携が欠かせない国であることから、訪問先に選んだ。また、東南アジアは渡航費や滞在費が安く費用が抑えられ、学生の参加が促しやすいこともメリットとして挙げられる。

3. プログラムの事前・事後活動

訪問国と研修実施日は予め決めておき、説明会を開催し募集を行った。参加者決定後、毎週１回から２回ミーティングを実施し、参加学生の話し合いにより訪問先等の研修内容を詰めていった。また、リーダー、書記、会計のほか、宿泊やフライト、保険、ビザ、Wi-Fi レンタル等、それぞれの学生が担当する役割を決め、必要な手配を進めていった。ミーティングはリーダーの学生が執り行い、教員はオブザーバーとして必要な助言を行うに留めた。2015 年度は出発までに８回、2016 年度は 12 回のミーティングを行った。

準備期間と事後活動のおおまかなスケジュールは表１のとおりである。各学生が担当する役割を果たすこと以外に、本プログラムの重要課題は、訪問したい企業や団体を選び、訪問の約束を取ることであった。すべての学生にアポイントを取るための手紙（メール）を送ることを課したのだが、これが準備期間において学生にとって最も難しい課題であった。専攻に関連した企業を選び訪問の理由を書いたメールを送ると、すぐに訪問を承諾していただいた企業もあったが、多くの学生にとっては、訪問先を探し、訪問理由を考え、手紙を送ることには困難が伴ったようだ。訪問依頼のメールに対する返事が来ないこともしばしばあった。断りのメールを受け取ったり、返事がない場合、再度手紙を送ることや、別の訪問先を探して手紙を送ることに躊躇する学生もおり、すべての訪問先が最終的に確定するのは出発直前という状態であった。

訪問先が決まれば、訪問先の事業内容や質問事項についての勉強会を行った。また、準備として、最初の年はベトナム人留学生に自国の歴史や言葉について教えてもらったが、単に説明を聞くだけでは学生たちの記憶に残りにくく、二回目は歴史や経済状況などについて自分たちで調べ、発表する形に変えた。

表１　事前・事後活動のスケジュール（2016 年度）

10 月下旬	説明会の開催と募集 参加学生の決定
11 月	メンバー顔合わせ、役割分担 宿泊先・フライトの決定、予約 希望訪問先探し
12 月	訪問先の業務内容の調査 訪問先の選定 訪問依頼文書の作成、送付 危機管理説明会①（病気のリスクと予防接種） 危機管理説明会②（事件・事故のリスクと保険加入）
１月 ～２月	訪問先についての発表 訪問時の質問事項のブレーンストーミング 訪問国の歴史、経済、文化、社会、地理、言葉などについて調べて発表
２月下旬	研修実施
３月	訪問先へのお礼状の作成と送付 反省会と成果報告会の実施 報告（研修体験ブログ記事）の提出 アンケート回答

次に、訪問先を含めたプログラムの実施内容を紹介する。

4.　プログラムの実施内容

2015 年度第一回目のベトナムでの研修内容を表２に、2016 年度第二回目のカンボジアでの研修内容を表３に示す。訪問先では工場見学や事業内容の説明の後、学生の質問に答えてもらった。訪問の了承を取ることには苦労したが、訪問を受け入れてくれた訪問先は学生を歓迎してくれた。訪問了承の返事に、「大学１年生がこのような（依頼の）手紙が書けることに感心した」、「弊社を選んでくれてうれしく思う」等と書かれていたり、訪問時に現地社員の方々との交流ができるように配慮してくださったり、各学生の名前の入った大きな横断幕を社屋の正面玄関の上部に掲げてくださったりといった、手厚いもてなしを受けた。

一回目のベトナムでは製造業の工場見学が３社あり、どのような製品を作っているか製造工程を詳しく見せてもらい、ベトナムに進出した理由やメリット、立ち上げ時の苦労話なども聞くことができた。参加者たちがアポイントを取った訪問先以外に、ベトナム国家大学ハノイ工科大学を訪問し、英語で自己紹介と本学の紹介プレゼンテーションを行った後、各研究室で研究内容について説明を受けた。その他、日本語学校訪問、ベトナムに留学中の本学の派遣学生との交流や、経済学部の教員の紹介で実現した労働省人材育成部門の訪問など、多彩な内容のプログラムを実現することができた。

表２　第一回研修実施内容（2015 年度ベトナム）

２月２７日	大分―ハノイ移動
２月２８日	・ベトナム国家大学ハノイ経済大学留学中の本学の学生との交流 （留学生活やベトナム社会・文化についての情報収集）
２月２９日	・あけぼの化成株式会社訪問 （第一工場・第二工場見学、事業内容の説明） ・VJ Partner 訪問 （コンサルタント事業内容説明、起業についてのセミナー）
３月　１日	・ベトナム国家大学ハノイ工科大学訪問 （各参加者の英語での自己紹介、研究室訪問、キャンパス見学） ・労働省人材育成部門訪問 （人材育成と資格試験等についての英語での説明（通訳有））
３月　２日	・株式会社ニチアスハイフォン訪問 （工場見学、事業内容の説明、社員との交流） ・Rorze Robotech 訪問 （工場見学、事業内容の説明）
３月　３日	・Akira 日本語学校訪問 （授業見学と参加、各参加者の自己紹介、大分大学の紹介、学生との交流） ・株式会社富士通訪問 （事業内容についての説明）
３月　４日	帰国

表３　第二回研修実施内容（2016 年度カンボジア）

２月２１日	大分―プノンペン移動 ・カンボジアで活躍する方々との会食 （カンボジアでの仕事についての情報収集）
２月２２日	・MATES Global Communications Co.,Ltd.訪問 （広告事業、国際人としての心構えについての説明） ・LASTMILE WORKS Co., Ltd.訪問 （事業内容の説明、VR 体験、社員との交流）
２月２３日	・SpaciaNet 訪問 （民泊事業についての説明）

	・株式会社愛亀訪問 （JICA での支援事業説明、道路補修材製作工場見学、道路補修体験、社員との交流） ・元トビタテ生との交流 （トビタテやカンボジアでの仕事についての情報収集）
２月２４日	・A 班 ISSHIN Co., Ltd.訪問 （レスキュー事業の説明） ・B 班 WCD 車いす工房,国際 NGO 難民を助ける会（AAR JAPAN）訪問 （障碍者支援の実情と課題についてのレクチャー（英語）、AAR JAPAN のボランティア活動の説明（日本語）、車椅子制作工程の見学） ・プノンペンーシェムリアップ移動
２月２５日	・Angkor Cookies 訪問 （事業内容、女性の雇用、人材育成等についての説明） ・NPO 法人ま心、たくみ日本語学校訪問 （小学校の授業と日本語の授業見学、子供たちとの交流）
２月２６日	シェムリアップ出発
２月２７日	帰国

二回目のカンボジアでは、製造業のアポイントは取れなかったが、日本人が立ち上げた会社をいくつか訪問することができた。民泊代行会社や VR 制作会社など、時代の最先端を行くビジネスをカンボジアで立ち上げた若い経営者の方々の話を聞くことができた。また、JICA 案件でインフラ整備をしている会社や、国際 NGO 団体 AAR JAPAN、小学校等、１回目とは異なる所を訪れることができたことも成果であった。その他、トビタテ地域人材コース（大分県）に採択された県内の大学の卒業生がカンボジアの会社で仕事をしており、カンボジアで活躍する方々との会食をセッティングしてくれたり、訪問できる日本人起業家を紹介してくれたりした。そのおかげで多彩な方々とお会いすることができた。学生の努力はもちろんのことだが、両回とも様々な方面からのサポートがあって成り立った研修であった。

帰国後は成果報告会を実施し、各学生が研修の学びについて発表を行った後、ウェブ上のブログに訪問記をアップした[1]。

5. 参加学生について

次に、参加学生の属性と参加の動機について述べる。参加の動機は、プログラムについての振り返りのため、帰国後行ったアンケート調査から得られたものである。また、分析のために帰国後提出したブログの訪問記の記述も使用した。

表４　参加者数と内訳（人）

		第一回	第二回
合計		8	11
学部	教育福祉科学部	1	1
	経済学部	1	7
	工学部	6	3
学年	１年生	2	3
	２年生	0	8
	３年生	3	0
	４年生	3	0
その他特徴	海外初渡航者	3	3
	派遣留学経験者	1	0
	トビタテ（地域人材）経験者	2	1

5 - 1　参加学生の属性と特徴

参加者数は一回目が８人、二回目が 11 人であった（内訳は表４参照のこと）。参加者の特徴として、海外初渡航者もいれば、派遣留学やトビタテ地域人材コース等で海外滞在の経験がある学生もいた。トビタテ経験者はトビタテ留学終了後、海外体験の魅力を伝え、留学者数を増やすことに貢献するエヴァンジェリスト活動をすることが期待されており、その活動の一貫として参加をしていた。

5 - 2　参加の動機

アンケート調査において、参加の動機を選択肢から複数回答可で選択した結果を図１にまとめた。回答者数は第一回７人、第二回 10 人、合計 17 人であった。ベトナム・カンボジア両国とも、「研修実施国に行きたかったから」という回答が一番多く、「海外」、「東南アジア」と、特に国を特定しなくても興味を持ち参加した学生も多かった。このことから、海外に行きたい学生の要望に応える研修であったことが窺える。また、奨学金が出ることも参加を決めた大きな要因の一つであることが分かった。「その他」には、「何か自分でアクションを起こしたかった」という回答があった。報告のブログ記事にも、「大学に入学してのんびりと毎日を過ごしていて、何か刺激が欲しい、何かに挑戦したい、と思っていた時にたまたまポスターが目に止まり、参加を決めた」という記述もあった。海外に興味はあるが、なかなか実行に移せないという学生にとって、大学主催の研修の存在意義は大きいと思われる。

また、一回目のベトナムと二回目のカンボジアの回答を比較したところ、あまり大きな差は見られないが、工学部の学生の参加が多かった一回目の方が、企業訪問に関する興味がより多くあり、実際に製造業の会社に積極的にアプローチし、アポイントが取れたことに繋がっている。

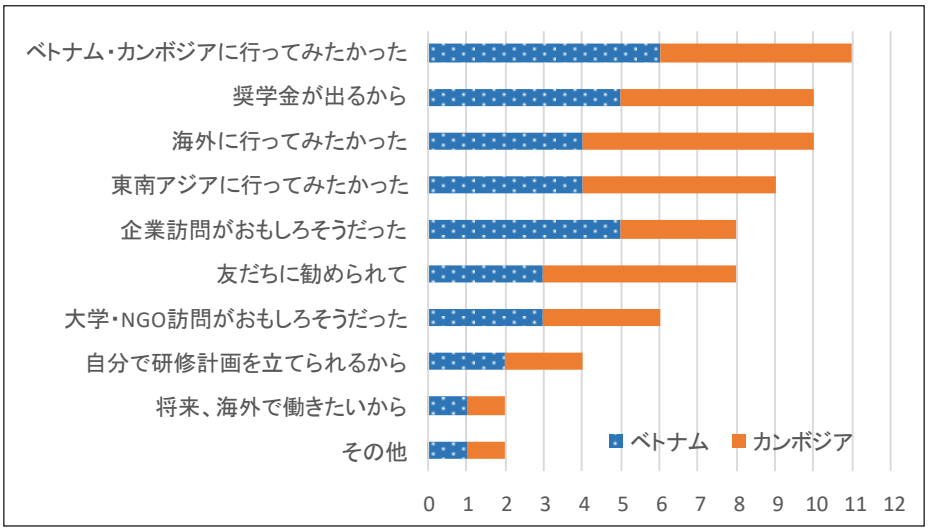


図１　参加の動機（単位：人）

6.　学生によるプログラム評価

次に、学生が本プログラムをどのように評価し、どのような意義を見出しているのかを探るために、前述のアンケート調査を分析する。アンケート調査では、全体に対する満足度や評価のほか、プログラムの方針や訪問先についてどう思っているかを調べた。また、特に印象に残ったことと、自分自身の変化・今後の展望についても自由記述で回答を得た。

6 - 1　全体の評価

まず、「参加してよかったか」と「プログラムを評価するか」という質問に対して、５件法で回答した結果を図２と図３に示す。「参加してよかったか」については、両年とも「大変よかった」が 100%であった。また、「プログラムに対する評価」について両年の結果を合わせたところ、「高く評価する」が 82%で、残り 18%が「評価する」となり、参加者全員から高い評価を得られた。

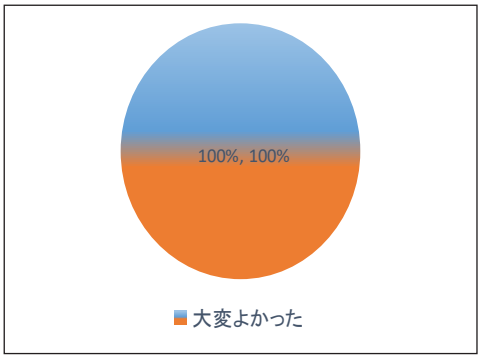


図２　参加してよかったか

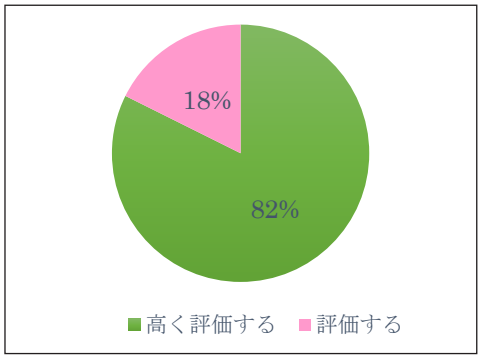


図３　評価する

6 - 2　研修計画を自分たちで立てることに対する評価

次に、「自分たちで訪問先を決めるやり方をどう思ったか」について、同じく５件法で回答した両年の合計を図４に示す。「よかった」と回答した学生が 88%、「まあまあよかった」が 12%であった。自由記述に書かれた理由を分析した結果、以下の四点に分類できた。具体的な記述とともに以下に示す。

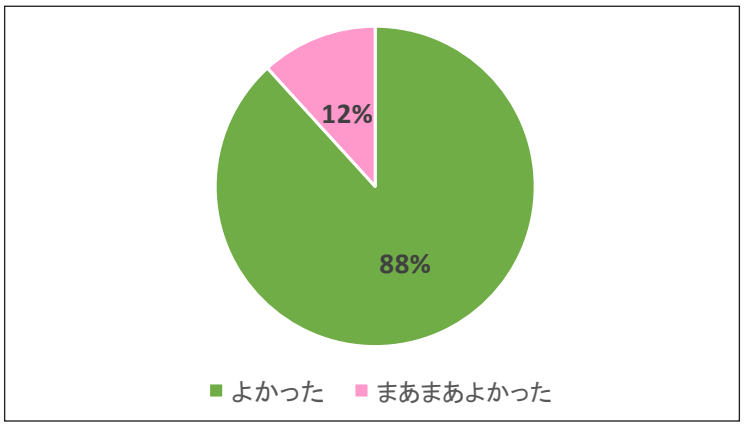


図４　やり方に対する評価

(1) 就職活動、社会に出た時に役立つ

・企業へのメールの書き方を今のうちに経験することは、就職活動をする際にも役に立つと思うから。

・先方とのメールのやり取りの中で、ビジネスマナーなどが学べたから。

(2) 研修に対する意欲の喚起

・自らアポを取る事は、その研修に自主性が存在する証だと思う。その企業から何を学ぶか、受け身では得られないものが沢山あった。

・海外で働く人に会うのは刺激的で、やはり自分が興味を持つ分野や、「こんな話を聞いてみたい」と思えるような何かしら訪問する理由を持てる会社・団体にアポを取ることに意味があると思った。関心が持てる内容であるかどうかというだけで得られるものは全然違う。

(3) 研修先に対する理解やありがたみが深まる

・誰か他の人がアポイントを取るより、（自分が取ると）企業の情報をより詳しく知ることができるので、実際見学に行った時に理解が深まり、学ぶ楽しさが増すから。

・アポイントがすべてとれるわけではないという現状、だからこそのアポイントを受けてくれた企業へのありがたさを強く実感することができました。

・企業に対して真剣になれなければできないことだと思います。貴重な経験でした。

(4) 自分への自信

・１年生のうちから企業と連絡を取るという経験は全国的にもあまりないと思います。

それに、企業は１年生を相手にはしないだろうと思っていましたので、アポが取れるかとても不安でした。しかし、実際にメールなどを出してみると企業側も快く賛同していただけました。これにより、自分でもアポがとれるんだという大きな自信になりました。この自信を３年後か５年後の就活に活かせるのではないかと思っているからです。

すべての学生がアポイントを取れたわけではなく、断られたり、返事がなかったりしたケースもあるが、それを含めて学生にとっては就職活動につながる良い経験になったようである。このように学生主導でアポイントを取るという方法は、主体的に本プログラムに関わる姿勢が見られ、アポイントが取れた学生にとっては特に大きな自信につながったようである。

6 - 3　各訪問先に対する評価

次に、各訪問先についてどう思ったかを「とてもよかった」から「あまりよくなかった」までの４件法で聞いたところ、平均値（4.0 点満点）の上位は表５のとおりとなった。

ベトナムでは製造業二社の工場訪問が上位に入った。両社とも学生たちの訪問を大変喜んでくださり、社員食堂での昼食やおみやげまで頂いたりといった手厚いおもてなしを受けた。３位は日本人が起業したコンサルタント会社訪問で、ベトナムで起業するに至った経験談などが学生の興味を引いたようである。

カンボジアでは１位の会社は全員が「とてもよかった」と評価した会社で、日本人経営者が業務内容だけでなく生き方についてまで熱い思いを語ってくださり、一つ一つの言葉が学生たちの心に深く刻まれた。自由記述での特に印象に残ったことにも、この経営者の話の内容を多くの学生が挙げていた。次いで、現地の子供たちと触れ合うことのできた学校訪問や、カンボジアの復興のために尽力されている国際 NGO 団体が支援している車椅子工房訪問の評価が高く、内戦の影響や貧困などカンボジアの実情を知ることができたことが、評価が高い理由であろう。

表５　訪問先の評価

	第１回ベトナム		第２回カンボジア	
	訪問先	平均値	訪問先	平均値
１位	あけぼの化成	3.9	MATES	4.0
２位	ニチアス	3.8	小学校・日本語学校	3.9
３位	VJ Partner	3.7	AAR JAPAN	3.8

6 - 4　研修からの学び

どのようなことが特に印象に残っているか、また研修に参加して自分自身にどのような変化があり、この経験を今後にどうつなげていきたいかについて、自由記述で書かれた回答を分析し、筆者がそれをカテゴリに分類してまとめた（表６、表７参照）。記述の一部を抜粋し、回答が複数あったものを上部に挙げている。

表６　印象に残ったこと

カテゴリ	自由記述からの抜粋
訪問先で会った方のお話の内容	・様々な人の話を聞けたこと。 ・MATES の柳内社長の言葉一つ一つが心に残っています。生きて行くこと、お金を生み出すこと、働くこと、勉強することがイコールで結ばれているということ。海外に訪れる時が柔軟な人間になるチャンスであること。 ・カンボジアで働く日本人がカンボジアのために一生懸命働いているということ。 ・自ら率先して働きかける行動力。どの方々も受け身ではなく、自分から進んで様々な事業にチャレンジされている姿勢に強く感銘を受けました。有言実行という言葉が当てはまる方々が多い。 ・海外で働いている人たちの行動力に衝撃を受けた。ほんの小さなキッカケから海外に飛び出し、活躍している姿はとてもかっこよく思えた。
日本語学校、小学校で学ぶ生徒や子どもから学んだこと	・子どもたちの学ぶ姿勢。 ・短くなるまで使いならされた鉛筆をみて、物に溢れた日本のあり方は見直されるべきではないかと痛感させられました。 ・現地の人との学習意欲の差。生活のために勉強の努力を惜しまない。何事にも一生懸命である。 ・日本と違い、子供たちにチャンスが少ない。
現地の人々との交流	・現地の人のやさしさに感動した。 ・ベトナムの人のグローバルな性格と、どんな仕事にも真面目に取り組んでいたこと。 ・カンボジアの人の温かさに触れ、いろいろな方に良くしていただいた。 ・人と人の距離が近く、どんな人とでも仲良くなれる。
社会	・ベトナムは思いのほかインフラが進んでおらず、伸び悩んでいる印象を持った。そこに日本企業が出向いて事業を起こし、ベトナムの人を雇用していてボーダーレスな世界になったんだなと感じた。 ・交通状況の悪さ。日本では当たり前のように守られている交通マナーが通用しない。目を疑うような交通違反。 ・ベトナムと日本の生活のギャップ。経済が発展していない。

	・カンボジアは東南アジア最貧国ということを、街を歩いていて強く感じた。 ・片足を失ってたり、地べたに座り込んでお金を求めてたりと、垣間見られた現状に心が痛みました。どうすることもできなかった自分が歯がゆかったし、カンボジアで働く人々はああいった現状を一刻も早く解決すべく日々奮闘しているのだなと感じました。 ・柳内社長が「生きるために生きる」と仰ったように、現地の人々は日々の生活のために勉強の努力を惜しまないということ。 ・ポルポト政権のこと。トゥールスレン収容所とキリングフィールドは行くべき場所だ。
日本のありがたみ	・今ある環境は当たり前ではない。感謝の気持ちを忘れず生活していきたい。 ・日本に生まれたということが如何に色々な機会に恵まれているかということが自分の中に強く刻まれた。 ・日本は恵まれすぎている。当たり前の毎日を当たり前だと思わず過ごすことを気づかされた。

表７　自分自身の変化・今後の展望

海外勤務･海外への興味	・海外で働いている人の意見を聞けたことで、海外勤務をより身近に感じることができた。 ・もっと世界を知りたいと思った。大学の中に閉じこもっていることをもったいないと感じた。
英語力	・英語をもっと学びたいと感じた。 ・英語力が今後の社会で必須となってくるスキルだと感じました。大学紹介を英語でする機会がありましたが、自分の英語力のなさにすごく悔しい思いをしました。
チャレンジ精神	・取り敢えずやってみようという気持ちが大切だと思いました。 ･何事も自分の目で見て感じていかなければわからないことだらけだと思いました。 ・この研修に参加したように、興味のあることには積極的に参加しようと強く思いました。思っているだけでなく行動することで、本当に沢山のことを経験することができ、自分のためになっていると実感しました。今後も失敗を恐れず色々な挑戦をしたいです。

	・誰かが行動に移すまで待ち続けるのでなく、どんどん自分から進んでアクションを起こす事が大切だと実感しました。そういった面では悔しさの残った研修でしたが、今後、何事にも積極的に自ら行動へと移していくことで、この研修に参加して良かったと思えるように、日々頑張っていきたいと感じました。
仕事	・外国人と関わる仕事をしたいです。 ・この経験を日本を内側から変えていくということに活かしていきたい。
その他	・いままで自分が日本で生活していて、１つ１つのものに対する有り難みを全然感じていなかったことを反省している。 いまある環境は当たり前ではないということを、意識しながら、感謝の気持ちを忘れず生活していきたい。 ・東南アジアのすばらしさを発信していきたい。むしろ私達のほうが学ぶべきことがある。 ・自分に自信が持てるようになった。今後も自分の将来に繋がる積極的な行動をとりたい。

大学訪問で英語での自己紹介や、労働省訪問での英語での説明と質疑応答など、英語を使う機会の多かったベトナムでは、英語力に関する記述が目立った。一方、東南アジア最貧国と言われているカンボジアでは、貧しさから受けた衝撃に関する記述が多い。最後に参加学生の感想を引用したい。

> 目に見えるもの全てが新鮮で、日本に留まっていては絶対に体験できない貴重な時間でした。まだまだ貧しい国であるカンボジアでは、物乞いをしている子どもたちも沢山見かけたり、自分が生きていくことに本当に貪欲な人が多い印象でした。
> 日々、日本に暮らしていては理解することのできない、現地の人々にとっては当たり前のことが、自分にとってはものすごく衝撃的なものばかりでした。

薮田（2016）は、グローバル人材教育に必要なのは、オープンな心、他人への敬意、興味関心といった態度を持ったグローバルマインドの育成であると言う。研修で受けた衝撃を今後の人生にどのように活かすか、参加者各人が取り組むべき課題であろう。

7. おわりに

以上、海外研修プログラム「ミニトビタテ」の概要と学生の評価を見てきた。研修に対する参加者の評価はおしなべて高く、参加者それぞれにとって意義深い研修であったと言える。短い期間ではあるものの充実した内容の研修を実施することができたのではないだろうか。

最後に、参加学生のその後の海外への関わりについて述べたい。研修終了後すぐに行動に移せない学生もいる一方、早速次の行動に移る者もいる。第１回ベトナム参加者のうち、その後派遣留学に行った者１名（ハンガリー）、トビタテ７期（地域人材）に合格した者１名（アメリカでのインターンシップ）であった。２回目カンボジア参加者のうち、派遣留学は２名（オランダ、ハンガリー）、トビタテ７期（全国コース）書類審査のみ合格１名、トビタテ７期（地域人材）合格１名（カンボジア・ネパールでのインターンシップ）、同書類審査のみ合格１名、トビタテ９期（全国コース）書類審査のみ合格が１名である。このように、本研修がきっかけとなってトビタテへの挑戦を含め別の形での留学につながるという実績を上げることができている。

学生にとって一番の課題であった訪問先探しとアポイント取りが、本研修の成功の是非を決めると言っても過言ではない。それほど現地で会った方々との出会いは大きいものであった。経営者の方々が話してくださった内容は大変深い内容であった。知名度の高い大手企業はアポイントが取れず、すべての訪問先が決まるまで時間はかかったが、最終的には現地で空き時間がほとんどないほどスケジュールが埋まった。逆に訪問先が多くなり、二グループに分かれて訪問したり、訪問先の調査の発表や質問事項を作成する時間が不足してしまったことは反省点でもある。

次回は準備期間においても参加者同士が話し合う時間を多く取り、協働作業を通じて研修の質を高め、プログラムのさらなる充実を図りたいと考えている。今後も多くの学生が本研修に参加することで、まずは日本を出て、自分の目で異なる文化や社会を見て多様性を理解し、将来の活躍につなげてほしいと思う。

謝辞

本研修の実施にあたり、本学の関係者及び、現地にて学生の訪問を受け入れてくださった企業・団体・学校等の皆様のご協力がなければ、本研修は実現しえなかったものであります。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

注

１．　大分から世界へ：分大生留学奮闘記　http://oitauniversity.seesaa.net/

引用文献

市川顕、山本竜大、中村圭（2015）「JATIS2013-14 に基づく大学間国際交流の意義と課題」『産研論集』、42 号、pp.45-57

岡本亜紀、岡宏美、杉本幸恵、岡本直行（2007）「学生ができる海外貢献－カンボジア研修報告－」『新見公立短期大学紀要』、第 28 巻、pp.183-189

小林文生 (2013)「短期海外研修による教育的効果の再検討 : 学生の報告書の多面的な分析を通して」『人文・自然研究』、7、pp.162-185

松田康子（2012）「短期海外研修の成果と意義 －学生の報告書とアンケート調査の結果から

ー」『名古屋文理大学』、第 12 号、pp.11-16
文部科学省（2017）「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～第 7 期派遣留学生選考結果」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/tobitate/__icsFiles/afieldfile/2017/07/12/1387047_001_1.pdf（2017 年 10 月 10 日閲覧）
薮田由己子（2016）「グローバル人材とグローバルマインド育成に関する一考察」『清泉女学院短期大学研究紀要』、第 34 号、pp.53-62

資　　料

平成 30 年度年度国際教育推進センター関連行事

前期

4 月 5 日	短期留学生オリエンテーション、短期交換留学生開講式、プレイスメント・テスト
4 月 6 日	短期交換留学生生活オリエンテーション
4 月 11 日	健康診断、新留学生のためのオリエンテーション（短期交換留学生以外）
4 月 11 日	宿舎入居オリエンテーション
4 月 13 日	新留学生歓迎会
4 月 14 日	チューターとの研修旅行
5 月 21 日	消防訓練
6 月 1 日	狂言ワークショップ
7 月 4 日	帰国予定留学生対象ガイダンス
7 月 6 日	七夕祭り
7 月 13 日	帰国留学生送別会
7 月 27 日	J-Cat

後期

9 月 27 日	短期留学生オリエンテーション、短期交換留学生開講式、プレイスメント・テスト
9 月 28 日	短期交換留学生生活オリエンテーション、健康診断
10 月 3 日	新留学生のためのオリエンテーション（短期交換留学生以外）
10 月 4 日	宿舎入居オリエンテーション
10 月 5 日	新留学生歓迎会
10 月 13 日	チューターとの研修旅行
10 月 27 日	留学生による日本語スピーチコンテスト
11 月 5 日	消防訓練
11 月 21 日	日本文化研修：伝統の糀をしる講習会
12 月 9 日	国際文化祭
12 月 14 日	GAIA セミナー
1 月 9 日	帰国予定留学生対象ガイダンス
1 月 25 日	帰国留学生送別会
2 月 1 日	J-Cat

国際交流協定校等

2019.2.26現在

国・地域（数）		大 学 名	内　容	協定 締結年月日	協定 改定年月日	協定 有効期限
アジア	中国（16）	江漢大学	学術交流・学生交流（5人）	1989.11.24	2010. 8.31	2020. 8.30
		河北医科大学（医学部との学部間協定）	学術交流・学生交流（2人）	1992. 1.26	2016. 4. 5	2021. 4. 4
		遼寧師範大学	学生交流（5人）	1996. 3.26	2000. 4. 3	2020. 4. 2
		香港大学	学術交流・学生交流（5人）	1999. 6.24	2000. 3.28	2020. 3.27
		河北師範大学	学術交流・学生交流（5人）	2000. 7.17		2020. 7.16
		華中科技大学	学術交流・学生交流（5人）	2002. 3.12		2022. 3.11
		深せん大学	学術交流・学生交流（5人）	2003. 3.27		2023. 3.26
		対外経済貿易大学	学術交流・学生交流（5人）	2006. 4.21		2021. 4.20
		中南財経政法大学	学術交流・学生交流（5人）	2006. 8.31		2021. 8.30
		武漢大学	学術交流・学生交流（3人）	2009.10.30		2019.10.29
		内蒙古民族大学	学術交流・学生交流（3人）	2014.10.30	2016.1.25	2021.1.24
		黒龍江大学	学術交流・学生交流（3人）	2014.11. 5		2019.11. 4
		北京林業大学	学術交流・学生交流（3人）	2014.12.23		2019.12.22
		香港中文大学	学術交流・学生交流	2016. 1.18		2021. 1.17
		内蒙古大学	学術交流・学生交流（3人）	2016. 1.25		2021. 1.24
		陝西師範大学	学術交流・学生交流（3人）	2016. 2.26		2021. 2.25
	モンゴル（2）	モンゴル国立医科学大学（医学部との学部間協定）	学術交流	2015. 4.29		2020. 4.28
		第3国家中央病院（医学部との学部間協定）	学術交流	2015. 5. 6		2020. 5. 5
	韓国（15）	韓国交通大学校	学術交流・学生交流（5人）	1996. 3.12	2000. 3.28	2020. 3.27
		西京大学校	学術交流・学生交流（5人）	1997. 2.28	2000. 4. 3	2020. 4. 2
		嶺南大学校	学術交流・学生交流（5人）	1998. 6.21	2003. 9. 8	2023. 9. 7
		ソウル女子大学校	学生交流（5人）	2003.12. 5	2004. 9.16	2019. 9.15
		高麗大学校	学術交流・学生交流（5人）	2004. 2.20		2023. 2.19
		梨花女子大学校	学術交流・学生交流（5人）	2004. 8. 3		2019. 8. 2
		順天大学校	学術交流・学生交流（5人）	2005. 8.19		2020. 8.18
		培材大学校	学術交流・学生交流（5人）	2006. 6. 7		2021. 6. 6
		嘉泉大学校	学術交流・学生交流（5人）	2006. 6. 8		2021. 6. 7
		江南大学校	学術交流・学生交流（5人）	2007. 2.23		2022. 2.22
		釜山大学校	学術交流・学生交流（5人）	2007. 4. 5		2022. 4. 4
		江陵原州大学校	学術交流・学生交流（5人）	2007. 8. 9		2022. 8. 8
		光州大学校	学術交流・学生交流（5人）	2008. 3.14		2023. 3.13
		大邱大学校	学術交流・学生交流（3人）	2012.11.20		2022.11.19
		順天郷大学校	学術交流	2017. 1.23	2018.11.29	2023.11.28
	台湾（4）	東海大学	学生交流（5人）	2003. 2.20	2006. 2.24	2021. 2.23
		高雄医学大学（医学部との学部間協定）	学術交流・学生交流	2010. 4.27		2020. 4.26
		国立台湾大学（医学部との学部間協定）	学術交流	2011.10.17		2021.10.16
		開南大学	学術交流・学生交流（3人）	2016. 5.23		2021. 5.22
	インドネシア（4）	バンドン工科大学	学術交流・学生交流（3人）	2003. 8.12		2023. 8.11
		アイルランガ大学	学術交流・学生交流（5人）	2019.2.26		2024.2.25
		アイルランガ大学熱帯病研究所（医学部との学部間協定）	学術交流	2013. 4.17	2018. 3.23	2023. 4.16
		マラナタ・クリスチャン大学	学術交流・学生交流（5人）	2011. 9.28		2021. 9.27
	タイ（5）	チェンマイ大学	学術交流・学生交流（5人）	2002. 8.15	2005. 8. 5	2020. 8. 4
		コンケン大学	学術交流・学生交流（5人）	2006. 3. 8		2021. 3. 7
		チュラロンコン大学（医学部との学部間協定）	学術交流・学生交流	2009.11.10	2015. 8.25	2020. 8.24
		ラチャウィティ病院	学術交流	2015. 1. 7		2020. 1. 6
		マヒドン大学	学術交流	2015. 8.24		2020. 8.23
	マレーシア（1）	マレーシア国立サバ大学	学術交流・学生交流（5人）	2018.7.13		2023.7.12
	フィリピン（4）	サン・ラザロ病院	学術交流・学生実習	2006. 9.25		2021. 9.24
		セントルークス病院	学術交流・学生実習	2007. 9.25		2022. 9.24
		サントトーマス大学（医学部との学部間協定）	学術交流・学生交流	2013. 9.13		2023. 9.12
		アテネオ・デ・マニラ大学	学術交流・学生交流（2人）	2017.10. 5		2022.10. 4
	ベトナム（8）	ハノイ医科大学	学術交流・学生交流	2008.10.23		2023.10.22
		ホーチミン医科薬科大学	学術交流・学生交流	2008.10.24		2023.10.23
		チョーライ病院	学術交流	2008.10.24		2023.10.23
		ベトナム国家大学ハノイ校経済学部（旧ベトナム国立大学ハノイ校経済大学）	学術交流・学生交流（5人）	2009. 7.20		2019. 7.19
		108病院	学術交流	2009.11.16		2019.11.15
		ホーチミン市リハビリテーションセンター（福祉健康科学部との協定）	学術交流・学生交流	2017. 8.22		2022. 8.21
		バクマイ病院	学術交流	2018.9.29		2023.9.28
		セントポール病院	学術交流	2018.11.6		2023.11.5
	シンガポール（1）	南洋ポリテクニック	学術交流・学生交流（2人）	2011. 5.13		2021. 5.12
	ネパール（1）	カトマンズ大学医学部（医学部との学部間協定）	学術交流・学生交流（5人）	2018. 2. 8		2023. 2. 7
中東	サウジアラビア（1）	アルファイサル大学	学術交流	2018. 8. 4		2023. 8. 3
アフリカ	ケニア（1）	ケニア医学研究所	学術交流	2018.11.8		2023.11.7
オセアニア	オーストラリア（2）	西オーストラリア大学	学術交流・学生交流（5人）	2006. 7. 4		2021. 7. 3
		ウーロンゴング大学	学術交流・学生交流（1人）	2010. 4.21	2015.12.18	2020.12.17
北米	アメリカ合衆国（6）	サンフランシスコ州立大学	学生交流（4人）	1972.11.27	1996. 1.12	2021. 1.11
		テキサス大学オースチン校	学術交流・学生交流（5人）	1990. 8. 9	2014. 2.26	2024. 2.25
		ノースキャロライナ大学シャーロット校	学生交流（5人）	2003.12.16	2004. 7.21	2020. 7.20
		サンディエゴ州立大学	学術交流・学生交流（5人）	2006. 8.25		2021. 8.24
		アーカンソー大学フォートスミス校	学生交流（5人）	2007. 5.22		2022. 5.21
		アイオワ州立大学	学生交流（5人）	2017.10. 3		2022.10. 2
中南米	ドミニカ共和国（2）	サントドミンゴ自治大学	学術交流	1989.12.14		2019.12.13
		ルイス・エドワルド・アイバール病院（医学部との学部間協定）	学術交流	1996.12.13		2021.12.12
ヨーロッパ	オランダ（3）	ティルブルグ大学	学生交流（5人）	1990. 9.18	2006. 7. 3	2023. 7. 2
		NHL大学	学術交流・学生交流（5人）	2009. 1. 6		2024. 1. 5
		HUユトレヒト大学	学術交流・学生交流（2人）	2011. 3.17		2020. 3.16
	イギリス（4）	バーススパ大学	学生交流（3人）	1997. 4. 7	2000. 4.17	2020. 4.16
		ハートフォードシャー大学	学術交流・学生交流（5人）	2009. 5.23		2024. 5.22
		セントラル・ランカシャー大学	学術交流・学生交流（3人）	2012. 4.27	2016. 2. 8	2021. 2. 7
		マンチェスター大学	学生交流（4人）	2014. 4.24		2024. 4.23
	ドイツ（1）	パダボーン大学	学術交流・学生交流（7人）	1997. 9. 9	2017.7.20	2022.7.20
	スウェーデン（1）	メーラダーレン大学	学術交流・学生交流（5人）	2006. 9. 5		2021. 9. 4
	ハンガリー（2）	カーロリ・ガーシュパール・カルビン派大学	学術交流・学生交流（5人）	2007.11. 6		2022.11. 5
		ブダペスト・メトロポリタン大学	学術交流・学生交流（2人）	2017.10. 5		2022.10. 4
	ポーランド（1）	西ポメラニア工科大学	学術交流・学生交流（5人）	2017. 8.17		2022. 8.16
	フィンランド（1）	TAMK大学	学術交流・学生交流（5人）	2009. 3.23		2024. 3.22
	イタリア（1）	パヴィア大学	学術交流・学生交流（5人）	2010. 3.30		2020. 3.29
	フランス（3）	レンヌ第2大学	学術交流・学生交流（2人）	2010. 4.15		2020. 4.14
		オルレアン大学	学術交流・学生交流（2人）	2011. 7. 1		2021. 6.30
		ル・マン大学	学術交流・学生交流（2人）	2011.11. 2		2021.11. 1
	ロシア連邦（3）	I.M.セチェノフ名称モスクワ国立第一医科大学	学術交流	2016.11.30		2021.11.29
		ピラゴフ名称ロシア国立医学研究大学	学術交流・学生交流	2017. 3.10		2022. 3. 9
		オムスク国立医科大学	学術交流	2017.10.16		2022.10.15

計　　26カ国 93校

※緑は学術交流のみ

その他（Letter of Intent）

国・地域（数）		大 学 名	内　容	協定 締結年月日	協定 改定年月日	協定 有効期限
アジア	ミャンマー（1）	ヤンゴン第一医科大学	学術交流	2018. 3.19		2023. 3.18

平成 30 年国際教育推進センター開講授業科目一覧

(1) 短期交換プログラム（IPOU）科目

授業科目名	学期	単位	学部	担当教員
The Politics and Economics of EU	前期	2	経済学部	DAY Stephen
The Politics and Economics of Globalization	後期	2	経済学部	DAY Stephen
Introduction to Japanese Management	後期	2	経済学部	宮下清
Introducation to the International Political Economy	後期	2	経済学部	柴田茂紀
Ethnographic Study on Rural Japan	後期	2	経済学部	久保田 亮
Contrastive Analysis of Semantic Structures betweeen English and Japanese within the framework of Cognitive Linguistics	後期	2	教育学部	橋本　美喜男
Introduction of Mechanical and Energy Engineering	後期	2	理工学部	後藤　真宏
Introduction to Japanese History, Culture and Society	前・後期	2	国際教育研究センター	長池一美
Intercultural Communication	前・後期	2	国際教育研究センター	長池一美
Japanese Popular Culture C : Anime and Film Studies	前期	2	国際教育研究センター	長池一美
Japanese Popular Culture D : Manga Studies	後期	2	国際教育研究センター	長池一美
Independent Research Project I	前期	2	国際教育研究センター	長池一美
Independent Research Project II	後期	2	国際教育研究センター	長池一美
Project Planning, Volunteering and Internship 2	前期	2	国際教育研究センター	南里敬三 長池一美
Project Planning, Volunteering and Internship in Oita 3	後期	2	国際教育研究センター	南里敬三 長池一美
Japanese Grammar and Discourse	前・後期	2	国際教育研究センター	南里敬三
Sustainability and Glocal Development	前期	2	国際教育研究センター	ブルカート香織
Sustainability and Glocal Development	後期	2	国際教育研究センター	ブルカート香織

(2) 日本語・日本事情科目

授業科目	時間	単位	学部	担当
日本語１文法	前・後期	2	国際教育研究センター	ブルカート 香織
日本語１会話	前・後期	2	国際教育研究センター	ブルカート 香織
日本語１総合	前・後期	2	国際教育研究センター	ブルカート 香織
日本語１読解	前・後期	2	国際教育研究センター	長　池　一　美
日本語２文法	前・後期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三
日本語２会話	前・後期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三
日本語２総合	前・後期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三
日本語２読解	前・後期	2	国際教育研究センター	百　合　玲　子
日本語３文法	前・後期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
日本語３会話	前・後期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
日本語３読解I	後期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
日本語３読解II	前期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
日本語３作文I	後期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
日本語３作文II	前期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
日本語４文法I	後期	2	非常勤講師	大 坪 美 奈 子
日本語４文法II	前期	2	非常勤講師	大　坪　美奈子
日本語４スピーキング	前・後期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
日本語４読解I	後期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語４読解II	前期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語４作文I	後期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語４作文II	前期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語４応用I	後期	2	非常勤講師	大 坪 美 奈 子
日本語４応用II	前期	2	非常勤講師	大　坪　美奈子
日本語５スピーキング	前・後期	2	非常勤講師	大　坪　美奈子
日本語５読解・作文I	後期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
日本語５読解・作文II	前期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
日本語５文法I	後期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語５文法II	前期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語６読解・作文II	前期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
日本語特講５：レポート作成	後期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
日本語特講１１：ポピュラーカルチャー(１)	前期	2	国際教育研究センター	長　池　一　美
日本語特講１２：ポピュラー・カルチャー	後期	2	国際教育研究センター	長　池　一　美
狂言で大分を学ぶ	前期	2	国際教育研究センター	南里・金森　他
国際理解教育：サステナビリティ	前期	2	国際教育研究センター	ブルカート 香織
日本語文法分析	前期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
大分事情	前期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
ソーシャルネットワークと大分からの発信I	後期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三
ソーシャルネットワークと大分からの発信II	前期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三
表現技術	後期	2	国際教育研究センター	金　森　由　美
国際理解教育：サステナビリティ	後期	2	国際教育研究センター	ブルカート香織
日本語学I	後期	2	国際教育研究センター	坂　井　美恵子
ビジネスジャパニーズ演習１	後期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
ビジネスジャパニーズ演習２	後期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
ビジネスジャパニーズ演習３	前期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
ビジネスジャパニーズ演習４	前期	2	非常勤講師	佐々木　美　江
医学部学生補講（会話）	前・後期		国際教育研究センター	GAIA 教員
日本研究I（日研生対象）	後期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三
日本研究II（日研生対象）	前期	2	国際教育研究センター	南　里　敬　三

2018年度国際教育推進センター提供授業（専任教員提供分）

【科目名】	日本語１　文法（前期・後期）
【担当者】	ブルカート 香織
【総括】	日本語基本文法及び言語機能の習得をねらいとし、ひらがな、カタカナの習得をはじめ、自己紹介、依頼、好き・嫌い、理由、欲求等の言語機能を使うのに必要な文法の習得を到達目標とした。語彙と文法の講義ではゲームやアクティビティを用いて基礎を学び、ワークブックで基本の練習をし、創作的宿題を通して言語技能の向上を図った。講義で用いられた配布物や板書はMoodle（クラスウェブサイト）に掲載し、各課終了後に行った小テストで学生の理解度を確認した。今年度は中国、韓国、インドネシア、オランダ、ドイツ、イタリア、フィンランド、フランスから、全部で13名の留学生が受講した。

【科目名】	日本語１　コミュニケーション（前期・後期）
【担当者】	ブルカート 香織
【総括】	限られた状況で適切な挨拶と簡単な会話ができるようになることをねらいとし、自己紹介、依頼、好き・嫌い、理由、欲求等を限られた語彙で表現できるよう、講義時間内にはreal-life situationを基盤とした口頭練習で基礎会話力を培った。ワークブックの聴解練習や実践会話を通した宿題で基本の習得を図った。講義で用いられた配布物や板書はMoodle（クラスウェブサイト）に掲載し、各課終了後に行った小テストで学生の理解度を確認した。今年度は中国、韓国、インドネシア、オランダ、ドイツ、イタリア、フィンランド、フランスから、全部で13名の留学生が受講した。

【科目名】	日本語１　総合（前期・後期）
【担当者】	ブルカート 香織
【総括】	日本語基礎文法・言語機能の導入後、日常生活で総合的に活用することをねらいとし、基礎的な言語機能、限られた語彙や文法表現を用いて、日常場面で自己紹介、依頼、好き・嫌い、理由、欲求等を表現できる応用力を培った。日本語１で学習した文法・言語機能を活用し、様々なタスク活動練習を行い、語彙・文法・会話練習を総括的に復習し基礎日本語の習得を図った。講義で用いられた配布物や板書はMoodle（クラスウェブサイト）に掲載し、各課終了後に行った小テストで学生の理解度を確認した。今年度は中国、韓国、インドネシア、オランダ、ドイツ、イタリア、フィンランド、フランスから、全部で13名の留学生が受講した。

【科目名】	日本語１：読解（前期・後期）
【担当者】	長池一美
【総括】	このコースではひらがなとカタカナを習得させ、毎週学習する新出漢字（計 145）の習得とそれを使った基礎的文書の読解力をみにつけることができた。

【科目名】	日本語２　文法・(前期・後期)
【担当者】	南里敬三
【総括】	日常の体験を時系列的に説明できるようになるとともに、若干の主観的表現を学び、過去、現在の出来事にコメントが出来るようになることを目指した。また、聞き手との社会関係を配慮した表現を授与動詞の使用を通して学ぶとともに、一文中での二つの出来事の前後関係の明示方法および、意志形を使った予定の報告の仕方、受け身、使役表現を使った出来事の説明の説明方法、敬語を使った丁寧な話し方などのも学び、初級レベルの文法習得を完了した。

【科目名】	日本語２　コミュニケーション（前期・後期）
【担当者】	南里敬三
【総括】	日常の体験を時系列的に順を追って説明できるようになるとともに、若干の主観的表現を学び、過去、現在の出来事にコメントが出来るようになり、聞き手との社会関係を配慮した表現が選択できるようにもなった。自分のスケジュールの説明、不可抗力で発生した出来事の報告、誰かに何かをしてあげた、又は、してもらったことの報告などを取り交ぜて会話が対話形式で最低 8 分間できるようにもなる、また、その際、敬語の基本的使用ができるようにもなった。

【科目名】	日本語２　総合（前期・後期）
【担当者】	南里敬三
【総括】	日常の体験を時系列的に順を追って説明できるようになるとともに、若干の主観的表現を学び、過去、現在の出来事にコメントが出来るようになり、聞き手との社会関係を配慮した表現が選択できるようになった。また、自分のスケジュール、不可抗力で発生した出来事、誰かに何かをしてあげた、又は、してもらったことのなどのトピックをテーマにした会話文が読めて理解できるようにもなり、自分の将来の計画について 660 字程度の作文が辞書なしで書けるようにもなった。

【科目名】	日本語３　文法／会話　（前期・後期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	このコースは、初級レベルで学習した基本的な文法を、話題や場面に応じて適切に運用できるようになること、また、日常会話を支障なく行うために必要となる文型や語彙を習得することを目的とし、日本語３文法と日本語３会話を各学期週１回ずつ開講し、両科目合わせて受講することを条件としている。授業では以下のトピックで必要とされる文型を学び、コミュニケーション能力習得のため、会話や聴解を含むさまざまな練習を行った。 1. 友人や家族の紹介 2. 性格 3. 自国の紹介 4. 旅行の計画 5. 異文化体験 6. 日本の生活習慣や印象 7. 将来の希望 8. 30 年後の世界　など

【科目名】	日本語４ スピーキング　（前期・後期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	この授業は、大学生活をおくる上で必要となる一般的な話題について、正確かつ活発に会話ができるよう、実践的なコミュニケーション能力の習得を目標とした。「助言をする・助言を求める」、「許可を求める・断る」、「提案する」などの場面で必要とされる語彙や表現を学び、ペアワークなどを通して中級レベルの話す力を上級レベルに向上させることを目指して練習を行った。また、文レベルの会話から段落レベルの話ができ、詳しい説明を自発的に行なえるよう、日本で見つけた珍しい物の説明、ポーズと状況の説明等を個別もしくはグループによる発表形式で行った。また、グループプロジェクトとして大分のお勧めの所を紹介する動画制作を行った。発表後、個別にフィードバックを与えたほか、各自がビデオで自分の発表を見て、自己フィードバックも行った。さらに、フォーマルな場面とインフォーマルな場面で言葉が使い分けられるような練習や、自然なスピードで話される様々な場面の聴解力の向上を目的とした聴解練習も行った。

【科目名】	日本語４　読解Ⅰ
【担当者】	金森由美
【総括】	新聞の基本的な構成や地元紙大分合同新聞を紹介し導入とした。毎週の授業でトピックを決め、大学生の生活実態や就職活動といった身近な話題から働き方改革や民泊やキャッシュレス化など現在日本で注目されている最新の記事を集めて読んでいった。学生自身が記事を探してきて、授業で報告するという課題も行った。中国、韓国、ハンガリー、タイ、インドネシア、イタリアの留学生が受講し、受講者数は 20 名で、そのうち 3 名が学部生だった。

【科目名】	日本語４　読解Ⅱ
【担当者】	金森由美
【総括】	『THE GREAT JAPANESE ３０の物語―人物で学ぶ日本語―』を教科書として使い、歴史・経営・芸術・文学・漫画／アニメ・スポーツ・政治・学者といった幅広い分野から選ばれた人物の紹介と日本についての様々な知識の獲得を目指した。授業では最初に復習を兼ねて前回のテキストに出ていた漢字の小テストを行った後、テキストに沿って単語や内容理解を確認し最後に要約をさせた。また取り扱った人物に関し新聞やインターネットから得た追加資料も配布した。さらに課題として好きな漢字についての熟語の解説とテキストと関連した話題についての意見を毎週提出させた。中国、韓国、ハンガリー、マレイシアの留学生が受講し、受講者数は 18 名で、そのうち 3 名が学部生だった。

【科目名】	日本語４　作文Ⅰ
【担当者】	金森由美
【総括】	改まった場での自己紹介の原稿を作成したり、メールを書く状況、例えば友人を映画に誘うとかホームステイのお礼を伝えるとか指導教員に指導を依頼するとか、そういった様々な状況に応じて語彙やアウトラインを意識しつつメールを書く練習をしたりした。コースの後半ではレポートの文体の基本を導入し、意見を主張する際の典型的な論理構成と接続詞の使い分け、さらにグラフの説明のしかたを示し、データを用いた短いレポートを書かせた。中国、韓国、ベトナム、インドネシア、タイ、ハンガリー、イタリアの留学生が受講し、受講者数は 16 名で、そのうち 1 名が学部生だった。

【科目名】	日本語５　読解・作文Ⅰ　（後期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	このコースは、上級レベルの学習者を対象に、レポートや学術論文などを読むために必要な文法知識と、文章の論理構造に関する知識を学びながら、論文を独力で読んでいくための基礎的読解力を身につけることを目的とした。読み物は 1200 字程度から 2000 字程度の長さへと段階的に進み、文章の構成に関する知識や文法、語彙を学習し、大意把握や必要な情報を読み取る練習を行なった。また、作文の基礎知識（作文用紙の使い方、書き言葉の使い方を含む）や段落の構成を学んだ上で、説明文を書く練習を行い、ピアレビューと教師からのフィードバックに基づき書き直しを行い、完成度を高めた。それと同時に、論説文とは異なった分野の語彙や表現の習得のため短編小説と、話題になった時事問題を扱った新聞記事の読解と要約の練習も行なった。

【科目名】	日本語５　読解・作文Ⅰ　（後期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	このコースは、上級レベルの学習者を対象に、レポートや学術論文などを読むために必要な文法知識と、文章の論理構造に関する知識を学びながら、論文を独力で読んでいくための基礎的読解力を身につけることを目的とした。読み物は 1200 字程度から 2000 字程度の長さへと段階的に進み、文章の構成に関する知識や文法、語彙を学習し、大意把握や必要な情報を読み取る練習を行なった。また、作文の基礎知識（作文用紙の使い方、書き言葉の使い方を含む）や段落の構成を学んだ上で、説明文を書く練習を行い、ピアレビューと教師からのフィードバックに基づき書き直しを行い、完成度を高めた。それと同時に、論説文とは異なった分野の語彙や表現の習得のため短編小説と、話題になった時事問題を扱った新聞記事の読解と要約の練習も行なった。

【科目名】	日本語５　読解・作文 II　（前期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	このコースは、日本語５読解・作文Ｉでは扱わなかった分野の論説文を読むことにより、専門の論文を読むための読解力の基礎を充実させることを目標とした。具体的には 1200 字程度から 2000 字程度の長さの論説文を段階的に読み、論文を読むための基礎となる文章の構成に関する知識や文法、語彙を学習した。また、文章の論理構造について学び、大意を把握したり、必要な情報を読み取る練習も行なった。それと同時に段落の構成について学び、要約文や意見文を書く練習を行い、ピアレビューと教師からのフィードバックに基づき書き直しを行い、完成度を高めた。さらに、日本語５読解・作文Ｉとは異なった現代作家の短編小説を読み、読解力の向上を目指した。

【科目名】	日本語５　文法Ｉ
【担当者】	金森由美
【総括】	学習者が散発的に習得してきた中・上級表現文型の中で特に文法的な機能語を体系的に整理し、選択問題や短文完成練習を通して一つ一つの文型の使い方や意味をより正確に理解し、適切に運用する力をつけることを目標とする。主に時間的前後や条件など複文を構成するもの、心情や強制などを表す文末表現を中心に 72 の文型を学習した。今年度の受講者は 42 名で、そのうち 5 名が工学部の学部留学生だった。

【科目名】	日本語５　文法Ⅱ
【担当者】	金森由美
【総括】	上級レベルの文型と語彙の習得を目指した。文型に関しては文法的な機能語を体系的に整理し、主に関連や基準などの複合助詞、難易や意志などを表す文末表現を中心に 72 の文型を学習した。授業では各文型について解説した後、文章内での文型の使い方を確認する問題、能力試験と同様の選択問題や並べ替え問題、さらに短文作成練習を通して一つ一つの使い方や意味をより正確に理解し、適切に運用する力をつけることを目標とした。特に教師からの一方的な解説授業にならないよう、短文作成に当たっては受講者全員に板書させ、相互に添削させた。一方、語彙に関しては、能力試験と同様の問題に加え、コロケーションの重要性を指摘し、研究成果の自作教材を使用して解説と練習を行った。中国、韓国、マレイシア、イギリスの留学生が受講し、受講者数は 41 名で、そのうち 2 名が学部生だった。

【科目名】	日本語６　読解・作文 II　（前期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	この授業では、上級レベルの学習者を対象に大学の講義を受講できるよう文章構造を学び、情報を読み取る能力、読み取った情報について要約文や意見文を書く能力だけでなく、的確な表現で情報や意見を発信する能力や自分の伝えたい内容をまとまりのある文章で表現する能力の習得を目標とした。日本語や言語に関係した論文を読み、文章構成の鍵となる表現技術を学んだ上で、分析、説明や意見を述べる練習を行なった。また、小説を題材として、深く読み込むために発表とグループディスカッションを行うと同時に、各学生が Moodle 上に意見を発表し、クラスメートの意見を読んだ上でクラスディスカッションを行った。プロジェクトとして、各自が読んだ本について紹介するビブリオバトルを行った。

【科目名】	日本語文法分析
【担当者】	金森由美
【総括】	外国語として日本語を教えるとき、何が問題になるだろうかという問いを立て、まずは認知言語学の基本的な概念の導入を行い、言語そのものへの関心を喚起した。その後、コロケーションやオノマトペ、基本文型や「ら抜き言葉・さ入れ言葉」等といった文法の問題、語用論から異文化コミュニケーションへと視野を広げていった。模擬授業も 2 回実施した。1 回目は日本語学習者向けの教科書を一冊選び、その中の一つの課を教えるための指導案作成という課題を与えた。2 回目はＰＰＴによる自主教材を作成させた。受講者数は 47 名で、留学生 26 名と日本人学生 21 名だった。

【科目名】	大分事情
【担当者】	金森由美
【総括】	大分の特色を学び、より積極的に大分に関わっていこうとする姿勢を培うことを目標とした。授業では、いくつかのキーワードに基づいた問いを投げかけ、文献・新聞・雑誌・テレビ等からの資料を与えて答えさせていった。さらに 2 回の研修旅行を通じて、現在の大分を実際に目にし、深く知り、より身近に感じられるようにした。最終的には、大分について基本的な知識を得た上で 10 分程度の発表ができるようになることを目指し、2 回のプレゼンテーションをさせた。１回目は大分の魅力について、２回目は歴史・地理・文化・経済などの観点から大分を活性化させるための提言をさせた。受講者は 36 名で、留学生 29 名と日本人学生 7 名だった。

【科目名】	日本語特講 11：ポピュラー･カルチャー（1）（前期）
【担当者】	長池一美
【総括】	このコースでは日本のアニメと映画がどのように現代日本社会の特徴と問題を扱っているかについて考察した。そのうえで、日本社会、ならびに海外における日本のポピュラー･カルチャーの受容について議論を行った。また、アカデミックな日本語の習得も授業開講の目的の一つとしているので、授業学生は日本語での諸論文執筆、プレゼンテーションなどを通して、アカデミックな日本語を習得することができた。

【科目名】	日本語特講 12：ポピュラー･カルチャー（2）（後期）
【担当者】	長池一美
【総括】	このコースでは日本のマンガがどのように現代日本社会の特徴と問題を扱っているかについて考察した。そのうえで、日本社会、ならびに海外における日本のポピュラー･カルチャーの受容について議論を行った。また、アカデミックな日本語の習得も授業開講の目的の一つとしているので、授業学生は日本語での諸論文執筆、プレゼンテーションなどを通して、アカデミックな日本語を習得することができた。

【科目名】	Japanese Popular Culture C: Anime and Film Studies（前期）
【担当者】	長池一美
【総括】	このコースでは日本のアニメと映画がどのように現代日本社会の特徴と問題を扱っているかについて考察した。そのうえで、日本社会、ならびに海外における日本のポピュラー･カルチャーの受容について議論を行った。この授業では約 10 の国や地域出身の留学生が受講したため、多文化主義という観点から、日本のポピュラー・カルチャーについて学ぶことができた。

【科目名】	Japanese Popular Culture D: Manga Studies（後期）
【担当者】	長池一美
【総括】	このコースでは日本のマンガがどのように現代日本社会の特徴と問題を扱っているかについて考察した。そのうえで、日本社会、ならびに海外における日本のポピュラー･カルチャーの受容について議論を行った。この授業では約 10 の国や地域出身の留学生が受講したため、多文化主義という観点から、日本のポピュラー・カルチャーについて学ぶことができた。

【科目名】	Introduction to Japanese History, Culture and Society（前期・後期）
【担当者】	長池一美
【総括】	この講義では、日本の歴史および文化についての基礎的な事項について学習し、さらに現代社会のいくつかのトピックについて討議し、日本という国・社会、および日本人についての理解を深めることを目的とした。 1） 基礎的な日本の歴史に精通する。 2） 日本の文化（特に古典文化）についての知識を得る。 3） 現代日本社会のありかたについて学ぶ。 本学での留学前に日本事情についての知識があまりない学生を対象とした授業であるが、この授業で学習することで、日本の歴史、社会、文化の基礎的な知識を習得した。

【科目名】	Intercultural Communication（前期・後期）
【担当者】	長池一美
【総括】	この授業の前半では異文化コミュニケーションの概念を理解し、日本人と留学生の異文化交流という視点から日本人の深層心理構造と社会の形成について学習した。後半では、異文化理解に付随する諸問題（オリエンタリズム、ディアスポラ、カルチャーショック、など）について多文化理解、グローバライゼーションの視点から学習した。この授業では約20名の日本人学生が履修・聴講していたため、日本人学生と留学生との知的交流が実現した。

【科目名】	日本語特講５（レポート作成）
【担当者】	金森由美
【総括】	大学で必要とされるレポートを書く技術を向上させ、感想文やエッセイとは異なる論理的な文章が書けるようになることを目標とする。まずレポートに特徴的な語彙や文型を学び、問題提起等に見られる論の展開を分析し習得する。序論・本論・結論といった構成を段階的に学び、最後に５千字以上のレポートを仕上げる。学期末に提出されたレポートは、神社が日本社会に与えている影響や民話に登場する動物を分析したり、現在問題となりつつあるオーバーツーリズムやキャッシュレス化など観光産業のあり方を問うといった社会的なテーマを扱っているものもあった。中国、韓国、ハンガリーの留学生が受講し、受講者数は27名だった。

【科目名】	表現技術
【担当者】	金森由美
【総括】	最初の授業でグループに分かれ、授業への提案を考え発表した。その結果、発表スタイルの改善を望む声が多かったため、グループでの国や地域の紹介や、個人での今一番伝えたいことについてのスピーチなどを行い、発表者へのコメントをクラス全員が記入して発表後すぐに渡すという形式を採用した。これにより、限られた時間でもフィードバックが即座に受け取れるという効果が得られた。受講者は 26 名で、留学生 14 名と日本人学生 12 名だった。

【科目名】	狂言で大分を学ぶ（前期）
【担当者】	南里敬三、金森由美
【総括】	日本の伝統芸能である狂言の基本をマスターし、大分地域を題材とするシナリオを作成しそれを実際に能の舞台で演じることで、伝統的日本と現代の大分を深く理解できるようになった。狂言の歴史が語れるようにもなった。狂言の発声・動作の基礎を理解し他上で、実際に能楽堂の舞台で小舞、謡、創作狂言などを演じることも行った。創作狂言は大分の特産のカボス、椎茸、及び、大分のアイコンともいうべき温泉などを題材にしたもので、参加者たちはこの授業を通して大分の特産物及び地域文化を深く知ることができたようだった。

【科目名】	日本語学Ⅰ　（後期）
【担当者】	坂井美恵子
【総括】	この科目は上級レベルの留学生と日本人学生を対象にし、教養教育科目の中の国際理解教育科目として開講しているものである。日本語学の各分野について、基本的なしくみを理解し、自ら分析できる力を養い、日本語に対する知識と興味を深めることを目的とした。扱った内容は、形態論、ラ抜き言葉、文法化、音声、連濁、アクセント、語の短縮、方言、語彙、コーパスと言語研究などである。授業にはできるだけグループディスカッションを取り入れ、学生自らが主体的に日本語について考えられるようにした。また、興味のあるトピックについて、日本人と留学生が協力し合いながらリサーチを行い、グループ発表を行った。 受講者は昨年度の 39 名から 51 名と大幅に増加した。短期交換留学生 27 名のほかに、学部留学生 1 名（理工）と大学院生 1 名（経）、日本人学生 19 名の受講者がいた。日本人学生は受入れ可能数より多くの学生が登録したため、抽選となった。また、地域の方向けの公開授業としたことで日本人 3 名の受講者も加わった。

【科目名】	ソーシャルネットワークと大分からの発信 II（前期）
【担当者】	南里敬三
【総括】	この科目は大分のストリートの魅力をブログとホームページを通じて発信し、インターネット上における効果的な情報発信力を身に着けることを目的とするが、それと同時にグループワークができる人材養成も念頭においた科目でもある。具体的なコースの目的は次の通り。（1）ネチケットを学び、守る。（2）ブログ記事・ホームページ記事の特徴を知る。（3）柴北川流域の特徴を知る。（4）里山と過疎の関係を知る。授業はグループワークを基本として進めていく。2017 年は豊後大野市の長谷地区に例年通りお邪魔し、地域の歴史的建造物、神社を見て回り、それをベースにワークショップ形式で長谷地域を盛り上げる方法を学生に考えされ PPT プレゼンをさせた。そのあと、柴北川を愛する会の代表の渡辺さんに川をきれいにする必要性についてレクチャーをしていただき、蛍を鑑賞して研修旅行を終えることができた。

【科目名】	ソーシャルネットワークと大分からの発信 I（後期）
【担当者】	南里敬三
【総括】	この科目は大分のストリートの魅力をブログとホームページを通じて発信し、インターネット上における効果的な情報発信力を身に着けることを目的とするが、それと同時にグループワークができる人材養成も念頭においた科目でもある。具体的なコースの目的は次の通り。（1）ネチケットを学び、守る。（2）ブログ記事・ホームページ記事の特徴を知る。（3）別府、由布院、市街地のストリートの特徴を知る。（4）別府の地域お越しのノウハウを学ぶ。（5）大分のストリートをホームページで紹介する。授業はグループワークを基本として進めていく。この授業では二回研修旅行に行った。第一回目は別府探索。午前中別府市内の観光スポットを中心に見て回り、午後はホテルニューツルタで鶴田社長の街おこしレクチャーを拝聴した後、ワークショップ形式で別府を盛り上げる方法を学生に考えさせ、PPTでプレゼンをさせた。二回目の研修旅行は由布院を観察。その後、草庵秋桜の取締役社長太田慎太郎氏のレクチャーを拝聴し研修旅行を終えた。

【科目名】	Project Planning, Volunteering and Internship 2（Spring Semester）
【担当者】	Keizo Nanri, Kazumi Nagaike
【総括】	This course aims to explore the possibility to revitalize local economy by food innovation and urban agriculture through field trips. By the end of the course, students are expected to have a good understanding of how depopulation has deteriorated the rural economy in Japan and to develop insights into how this economic issue can be resolved with urban agriculture and food innovation.

【科目名】	Project Planning, Volunteering and Internship 3（Autumn Semester）
【担当者】	Keizo Nanri, Kazumi Nagaike
【総括】	This course aims to explore the possibility to revitalize local economy by crafts and craft production through field trips. By the end of the course, students are expected to have a good understanding of how depopulation has deteriorated the rural economy in Japan and to develop insights into how this economic issue can be resolved with crafts and craft production.

【科目名】	国際理解教育：サステナビリティ（前期・後期）
【担当者】	ブルカート 香織
【総括】	このクラスは本学正規生徒と留学生とが一緒に学ぶための融合クラスである。国際教育の視点から、人々の生活や環境に関連する身近なテーマを通じて世界の持続可能な開発問題を考えた。各テーマを４週間(lecture, in-class activity, research project, presentation)で完結されるオムニバス形式を取った。持続可能な未来の創造と発展を支援する姿勢を通して、学生自身の価値観をと向き合うことで、自ら考え行動する Critical Thinking Skills を養うよう、講義中にアクティブラーニングを導入した。テーマに関する基本的情報や知識を得た後、講義外の時間にインタビュー、フィールドワーク、見学資料収集など各自クリエイティブな方法で各テーマに沿った研究・調査を行い、クラスで発表した。履修生日本人正規生 14 名、アメリカ人１名、韓国人２名、ベトナム人１名、中国人３名の合計 21 名が受講した。

【科目名】	Sustainability and Glocal Development (Spring & Fall)
【担当者】	Kaori I. Burkart
【総括】	This course was to explore key global sustainable development issues and acquire knowledge, attitudes, and values essential to creating a sustainable future through familiar themes related to our immediate surroundings. The course was designed to motivate and empower students to reconsider their own behaviors and make collaborative decisions to support sustainable development in a democratic context. Students will practice critical thinking skills through planned in and outside of class learning activities. A total number of students was 15 and two were Japanese students. Others were exchange students representing Germany, China, England, Taiwan, and France.

国際教育推進センター教員・国際交流課職員名簿
(2016・2017・2018 年度)

センター長・教授	下田 憲雄

専任教員

センター次長・教授	長池 一美
教授	南里 敬三
教授（H30.1～）	坂井 美恵子
准教授	ブルカート 香織（H29.3～）
講師	金森 由美

国際交流課（2018年度末現在）

課長	欠員
副課長	岩瀬 辰彦
国際教育・交流係長	廣田 友美子
国際教育・交流係	和智 麻実
国際教育・交流係	松山 優湖
留学生係長	安部 さゆり
留学生係	江藤　幸代
留学生係	織部 可奈子
国際交流会館	阿部　祥子

大分大学国際教育推進センター紀要
第1号
2016・2017・2018年度
（平成28・29・30年度）

発行 2020年3月
発行者 大分大学国際教育推進センター
〒870-1192
大分県大分市旦野原700番地
電話 097-554-7444, 7131
FAX 097-554-7437
http://www.gaia.oita-u.ac.jp